
真紅の王冠

恵子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真紅の王冠

【Nコード】

N8283V

【作者名】

恵子

【あらすじ】

リート国の最下層の階級である3級兵士に生まれたユージは16歳。同じ年の王女リディアとひそかに会うような仲になっていたが…主人公ユージの成長を描くスペクトル異世界ファンタジー。

1話 別離

ユージは自分の部屋の窓から見える王宮を見ていた。

打ち上げ花火が何本もあがる。きらきらと光り、落ちて消えていく。

今日は、アイカ国王女リディアの16歳の誕生日だった。

祝いの花火があがるたびに、ユージの心の中は沈んでいった。

今頃、リディアはきらびやかな宮殿で、楽しく過ごしているんだろうな…

今年は、隣国から数名の王族の王子が招待されていると聞いていた。おそらく、リディアの将来の夫となり、この国の王となる候補者なのだろう。ユージの頭に、リディアが立派な衣装を身につけた凛々しい他国の王子と、愛らしい笑顔を振りまきながら話す姿が浮かんだ。そして、ふと自分の薄汚れボロボロの服装を見やる。

ユージはため息をついた。

どうして、俺は3級兵士にしかすぎないのだろう…

いつかこの日が来るとは思っていた。それが少しでも先になればいいと思っていた。けれども、その日は目の前にやってきたのだとユージは悟った。

王女リディアの誕生日から1週間たった夜、ユージは家をひそかに抜け出し、王宮の隣にある森へ向かっていた。満月がユージの行く道を照らす。

その森は王宮の庭園へと続いていた。

森の中に入ると中はかなり深く、ほとんど何も見えなくなる。だが、ユージは迷わず先へと進む。小さいころ庭園を探検して回った経験のあるユージには、自分の庭も同然だった。

暗闇の中にかすかに人の姿が見えた。警備兵だ。

ユージは、すっと身をかがめると、草むらへ入りそのまま四つん

這いになって進む。やがて、草むらが終わりユージはの中から用心深くあたりを見渡す。誰もいないのを確認すると立ち上がり、手足についた泥をはたいた。そして再び立って歩き出す。

森が終わり庭園が見えてきた。そこには立派な東屋がうつすらと見える。ユージはその東屋に向かってどんどん歩く。東屋にかなり近づいた時、一人の少女が立ち上がった。月明かりに照らされた彼女のうれしそうな顔が見える。ユージは彼女のそばに立つと、ひざを少し落とす。そして、彼女の手をとり甲にキスをした。

「誕生日おめでとう。リディア。」

「ありがとう。」

リディアがくったくのない笑顔を見せた。

「この間の誕生日、ものすごく盛大だったね。家からも花火がいくつも見えたよ。」

ユージは硬い表情だった。リディアはそんなユージの表情に気がつかず無邪気に答える。

「そうなの。ホント、父上ったら大袈裟なんだから。」

「隣国の王子も何人か来ていたと噂に聞いたけど」

「ええ。みんな、自分の自慢話ばかり。退屈だったわ。だから、気分がすぐれないと嘘をついて、途中で退席しちゃったの。」

リディアは、ペロリと舌を出して笑った。王女であるリディアがこんな事するのは自分にだけだった。ユージの表情が思わず緩む。「今年は本当につまらない誕生日だったわ。今日が早くこないかな、ってそれだけ考えてた。」

ユージはリディアが誕生日パーティを楽しんでいた訳ではなかったことに安堵した。そして、はっとする。

「いけない、ここままりディアと話を続けていては決心が鈍ってしまっ……」

そう思った瞬間、リディアが言った。

「誕生日プレゼント、くれないの？」

リディアが、目を閉じ左の頬を少し前に差出していた。

お金のないユージは、リディアの頬にキスをすることが、恒例のプレゼントとなっていた。ユージはためらいながらリディアに顔を近づける。いつものように頬にキスをするつもりだった。だが、気がついたら、そっとリディアの口にキスをしていた。

リディアは驚いた顔をしてユージを見る。

「…ご、ごめん。」

リディアは首を振ると、ユージに抱きつきキスを返してきた。

ユージはもう自分を押さえることができなかった。自分もリディアの背中に手をまわし、夢中でキスをした。

どれくらいそうしていただろうか。キスをやめ、お互いの顔をみつめた。

リディアが幸せそうな顔でユージの胸に顔をうずめる。

「ユージ。愛してるわ…」

ユージはあまりの嬉しさに泣きそうになった。そして、リディアを再び優しく抱きしめる。

「…リディア…俺も愛している…君が小さい頃からずっと。」

リディアが笑顔で顔をあげた。ユージの胸に激痛が走る。

…ダメだ。これ以上はダメだ。

ユージはゆっくりリディアから離れた。

「…だから…もう二度と会わない。…今日が最後だ。俺のことは…もう忘れてくれ。」

リディアは目を大きく見開く。

「どうして？イヤよ！」

リディアの目にみるみるうちに涙が溜まっていく。

ユージはリディアと会っている時とても幸せだった。だが、その幸せと同じくらい苦しさも常に感じていた。自分とリディアは絶対一緒にはなれない。このままでいられるはずがない。ずっとずっと悩んできた。なのに、そのことをリディアは考えていなかったとい

うのか？そうでなければ、どうしてなどと言うものか。

…しょせん、リディアは王女なんだ。俺のこの苦しみを理解することもなく、俺に愛をささやき、そして、それがさらに俺を苦しめることすら想像できない。

ユージはリディアに対して、急に怒りが込み上げてきた。

「…君だつて、わかつているだろう！君はこの国の王女だ！いずれ、夫をもらいこの国の王妃となる！そして、その夫には俺は決してなれない！そうだろう！」

怒りのままにリディアにそう言い放った。

「でも…私が愛しているのは、ユージだわ。」

リディアは、涙を流しながら、かすれた声で言った。

ユージはリディアから目をそらした。

「…そのことはうれしい。でも、どうにもならない…。どうか、お幸せに…」

リディアにきびすを返し走ってその場から去った。

「ユージ！待つて！」

リディアが泣きながら追いかけてくるのがわかった。だが、ユージはそのまま走り続ける。するとリディアの悲鳴が聞こえた。思わずユージは立ち止まって振り返った。リディアが何かに躓いたのか倒れていた。リディアが倒れたままユージを見上げて右手を伸ばす。

「…ユージいかないで！」

ユージは駆け寄って助け起こし、もう一度リディアを抱きしめ、そのままどこかへさらってしまいたい、そんな衝動にかられる。

…無理だな。どうやって彼女を養うんだ。

こぶしを握りしめ、その気持ちをぐつとこらえた。そして、前に向き直り森の中へと再び走り始めた。

リディアは倒れたまま、走り去るユージを見ているしかでなかった。ユージの姿が見えなくなると、そのまま地面に伏せてリディアは大声を出して一人で泣いた。

2話 拘束

その頃、宮殿ではベッドにも部屋にもいないリディアに、大騒ぎになっていた。

リディアは普段なら、誰にも見つからないように最新の注意をはらって部屋に戻るのだが、この日は泣いてひどい顔のまま、ふらふらと部屋に向かった。宮殿の騒ぎにすら気がつかなかった。

部屋に入ろうとしたとき、誰かが自分を呼びとめた。

「リディア――！」

その声の方をリディアは見た。父サルトだった。その後ろには女中たちと、父の側近がいる。リディアはしまった！と思ったが、もう遅かった。サルトがものすごい形相でリディアに近づいてくる。

「どこへ行っていた！」

「――」

普段なら、うまく機転をきかすことができたかもしれない。だが、ユージとの別れ、そして、父の剣幕の前に、リディアは何も言う事が出来なかった。

「その泥はなんだ……」

そう言われて、あわてて自分の服を見た。泥だらけだった。倒れたときについたのだと、このときはじめて気がついた。王宮で泥がつくような場所は限られている。すぐにサルトはリディアがどこへ行っていたかを悟った。

「……お前、庭園へ行っていたな。」

リディアは何も言えず下を向く。

「……一人であんなところへ行くまい。誰と会っていた？」

リディアは下を向いて黙ったままだった。

「……もしか、あの3級兵士の息子ではあるまいな！」

はっとしてサルトを見上げる。

「そうなんだな？」

リディアは違うと叫ぼうとしたが声が出なかった。

「今日だけではあるまい！私が禁じてからも、ずっと会っていたのだな！」

これほど怖い父を見たのは初めてだった。

「至急、3級兵士のユーマの息子、ユージを探し出せ。」

サルトが側近に向かって命令する。側近がお辞儀をして立ち去ろうとした。

「ち、父上！私たちは、さきほど、二度と会わないと約束し、別れてまいりました！ですから、どうか、どうかユージをお許しください！」

サルトが、ゆっくり振り向く。

「やはり、あの者と会っていたのだな。」

サルトは、冷たく低い声で答えた。リディアは再びしまったと思った。父の誘導にひっかかって、ユージと会っていたと自分から言ってしまった。

「あの者には、以前、お前には会うなと厳しく命じたはずだ。それを承知で会っていたというなら、不敬罪と取られても仕方あるまい。見つけたら、牢屋に放り込んでおけ！」

不敬罪。それはこの国では死刑を意味した。

「父上！本当にもう二度と会いませぬ！ですから、どうかお許しを！」

「一度約束を破ったものの言うことが信用できるはずがなろう！リディアを着替えさせたら、すぐに寝かせよ。部屋から出ぬよう見張りもつけるように。」

そう女中と側近に告げると、サルトはその場を立ち去った。

ユージは森を抜けた後、家に帰る気にもなれず、目的もなくあたりを歩いていった。

ユージはリディアが自分をどう思っているか、ずっと知りたいと思っていた。しかし、知ったところで何も変わりはない。だから、

知らないほうがいいのだ、と自分に言い聞かせていた。

だが、今日、ユージはリディアの気持ちを知ってしまった。リディアが自分を愛していると言ってくれたとき、どれだけうれしかったか。

ユージも男だ。何度もしリディアを抱く夢を見た。夢は夢だ。何も残らない。しかし、現実はず違った。忘れようとしても、リディアを抱きしめた感触が体から消えない。リディアがすぐそばにいるような、そんな錯覚さえした。それがよけいにユージを苦しめた。

ユージは今日、庭園に行ったことを後悔した。二度と会わないと覚悟したのなら、行かなければよかったのだ。

深夜の2時をまわったころ、ようやくユージは家へ向かった。家の近くまで来た時、あたりが騒がしいのに気がついた。家の前に何人かの人がいる。近衛隊だった。がかがり火を持って家の前に立っていた。近所の人が家の様子をこっそりと見ている。玄関の扉の前では、母が父に抱きついて泣いていた。

その光景を見たとき、ユージには何が起こったのかを悟った。

ユージは、しばらく立ち止まってその様子を見ていたが、やがて覚悟を決めてゆっくり家へ向かう。

近衛隊がユージに気がついた。

「3級兵士のユーマの息子、ユージだな。」

「はい。」

ユージは冷静にそう答えた。

「王族に不敬の罪を働いたとして、お前を逮捕する。」

近衛隊がユージの手首を縄で縛った。ユージは抵抗せず、近衛隊のなすがままに従った。

母のキリーが泣きながら父ユーマとともにユージのところへやってきた。

「ユージ！お前…不敬罪だなんて…本当なのかい？」

「父さん。母さん。すみません。今まで育ててくれてありがとう

「ごさいました。親不孝なこの息子のことは、もう忘れてください。」
キリーは泣き崩れた。

…母さん。ごめん。

ユージは馬に乗せられると、近衛隊もみな馬にまたがった。

5歳下の弟のタツが泣きながらそばにやってきた。

「兄さん！！！」

「タツ。ごめんな。これからはお前が父さんと母さんを守っていくんだ。頼んだぞ。」

ユージはタツに笑顔を見せる。

「イヤだ！兄さん！行かないで！」

ユージを連れて近衛隊が出発した。タツが追いかけてようとしたが、兵の一人に制される。

キリーとユーマとタツは泣きながら家の前に立ちつくし、いつまでもユージを見ていた。

やがて、王宮へ到着するとユージは地下の牢屋へ入れられた。

「明日の朝一番で処刑される。それまでここで待機せよ。」

近衛隊が牢屋からさっていった。ユージは寝転がって、ぼんやりと天井を見る。

小さい頃リディアと何も考えずに、遊びまわった日々が思い出された。宝石のように光り輝いていた。

…どうして、あのままでいられなかったんだろう。

ユージの目から涙がこぼれる。

ユージはリディアとの身分の違いに気がついてから、ずっとずっとと苦しかった。自分が他の女性を愛せるとは思えなかった。リディアのような女の子が他にいるはずがない。一生彼女を愛し続け、その苦しみを持ち続けるのだ。死ねばその苦しみから永久に開放される。

…俺はもう楽になりたい。

リディアや両親やタツが悲しむのだけが唯一の心残りだったが、

ユージは静かにその時を待った。

3話 追放

「さきほど、あの者が捕まり、牢屋に入れられたという知らせを受けました。」

王の側近であるスオウが、サルトの寝室に報告に来ていた。

「そうか。で、どんな様子だ？」

「何も抵抗せずおとなしく従ったそうです。牢屋でも静かにしているとのこと。」

「…リディアはどうしている？もう寝たのか？」

「それが…ベッドに座ったまま動かないと…」

サルトはリディアが気になり、リディアの部屋へ向かった。中に入るとリディアはベッドに腰かけ無表情に前を見ながらただ静かに泣いていた。

「あの者が、牢屋に入れられたそうだ。」

リディアは、ぴくりとも動かなかった。

「あの者は捕えられた時、何も抵抗しなかったそうだ。見つければ自分には死が待っていると分かっていたようだな。お前は、そこまですべて考えていたのか？会っているということが見つければ、自分があの者を死においやると。そして、あの者の家族や友人を悲しませることになると。」

父の話を聞いて、リディアはふと時々ユージが見せた暗い表情を思い出した。

「さあ、もう寝なさい。あの者は明日の朝、処刑する。もう忘れるのだ。」

リディアはそのまま動かなかった。サルトはため息をついた。

「…あの者はお前のために、命をかけた。お前はどんなのだ？あの者のために何でもするか？それを受け入れるのなら、命だけは助けてやってもよい。」

リディアはようやく父の顔を見た。

「先日の誕生会に来ていた王子の中から一人選び、結婚すると約束するなら、国外追放にしてやろう。」

「父上のおっしゃる事は信用できません。国外追放と偽って、人気がないところに連れ出し、殺すおつもりなのでしょう。」

娘に自分の考えを言い当てられ、サルトは少したじろいだ。

「国境まで私が指名する者に見送らせ、その者達に、無事見送ったことを、私に直接報告をさせるのなら承知いたします。」

リディアの要求はサルトを驚かせた。

リディアにこのような知恵が働くとは。確かに自分の信用のける者を護衛につかせれば国境まで無事に行けるだろう。国境を出れば手出しはできない。

サルトは娘の思わぬ要求に応じる気になった。

「誰を指名するのだ。」

「1級兵士のイアン、デミー、それとダレンです。」

サルトはドアの外にいる側近のスオウに声をかけた。

「今の話を聞いていたか。」

「はい。」

「明日の朝一番に、その3名に通達を出し、用意ができしだい出発させる。ユージには十分な旅支度を与るように。」

「承知いたしました。」

スオウがその場を離れた。

「これでよいか。」

「はい。」

「では、もう寝るのだ。」

リディアは静かに布団の中に入る。その姿にサルトは一安心し、部屋をさろうとした。すると、リディアが小さな声で言った。

「父上…ありがとうございます…。」

サルトは娘の言葉に驚いた。

愛してもいない男と結婚されられるというのに、その父にありがとうと言うのか。あの者が生きていることが、そんなにうれしいと

いうのか。それほどあの者を愛していたのか。…だが、リディアはまだ16歳だ。きつとすぐにあのような下級兵士の事などに忘れるだろう。

サルトは何も言わずそのまま部屋を立ち去った。

ユージは一睡もせず朝を迎えた。

誰かがやってくる気配に気が付き体を起こした。近衛隊だった。彼らが牢屋の扉を開けユージに出るように促す。ユージは牢屋から出た。そのまま彼らに連れられ、王宮の中を歩く。あたりはまだ薄暗く誰も人はいなかった。やがて、王宮の裏門に辿り着く。

そこには荷物が積まれた馬4頭と、近衛隊、自分と同じ年くらいの兵士らしき若者3名が立っていた。その3名の姿をよく見てユージは驚いた。イアン、デミー、それにダレンだ。

…どうして彼らがここにいるのだ？まさか、彼らが俺の処刑人なのか？

ユージは10歳で兵士訓練学校へ入れられた。イアン、デミー、ダレンの3人はその時の仲間だ。その年の新入生で10歳だったのは4人だけだった。そのせいかすぐに4人は仲良くなった。彼らは1級兵士訓練生だったが、階級関係なくユージに接してくれた。ユージはそれがとてもうれしかった。学校を卒業してからは、時々会う程度だったが、ユージにとって一番大事な友人たちだった。

近衛隊の一人が、紙を広げ読み始める。

「3級兵士のユーマの息子ユージ。本日をもってお前は国外追放の身となった。すみやかにこの国から退去せよ。3日が過ぎてもこの国にいた場合は処刑される。国境までは、1級兵士のイアン、デミー、ダレンを見張りとしてつけることとする。」

…国外追放だって？

近衛隊は続いてイアン、デミー、ダレンの3人に向かって告げる。「3級兵士のユーマの息子、ユージを国境まで送りとどけ、国から

離れるのを見届けた後、早急に王宮へ戻り、リディア殿下へその旨直接報告せよ。」

ユージは思わず涙が出そうになった。

…あんな風に置き去りにしていったというのに、それでも俺を助けてくれるのか…

イアン、デミー、ダレンが近衛隊に敬礼をし、馬にまたがった。

ユージは手首を縛られていたため、一人では馬に乗れず、近衛隊に手伝われて乗る。

「では出発せよ。」

イアンが先頭に立ち、ユージ、ダレン、デミーの順で王宮の裏門を出る。

しばらくすると、イアンが振り向いた。

「ユージ、一体何があったんだ？朝、突然起こされ、王宮に来るように言われて来てみればこれだ。お前が国外追放だなんて…一体何をしたんだ？」

ユージは何も言わなかった。いや、何も言えなかったのだ。一言でも声を発したら、大声で叫んで泣いてしまいそうだった。

「…このままいくと北に行く事になるけどいいのか？」

ユージが黙ってうつむいているだけだったので、イアンはため息をつくと、前に向き直る。そして、そのまま4人とも無言で北へ進んだ。

1時間もすると、はずれの丘にやってきた。

ユージは後ろを振り返る。王宮が遠くに小さく見えた。そして、さらに遠くなる。風が吹き、ユージの黒い髪を頬をなでていく。それが、ユージにはリディアから別れの言葉のように感じた。

しばらくすると、ユージは、前に向き直りそのまま二度と振り返ることはなかった。

4話 旅立ち

4人は昼ごろ、昼食をとるために休憩を取った以外は、ひたすら無言で国境へ向かった。夕方には、もう少しで国境に出るところまでたどり着き、イアンが馬を止める。

「このあたりで一泊しよう。」

3人が馬から降り、ユージを馬から下ろす。そして、馬を近くの木につなぐと、黙々と野営の準備に取り掛かった。ユージはその場に立って、ただ彼らが無表情に見ていた。集められた枝に火がつく。すっかりあたりが暗くなった頃、食事の用意ができ、ユージは彼らに呼ばれ火のそばの用意された席に座った。さきほどデミーが捕まえたウサギ4匹が棒にくくりつけられ、ちょうどよい具合に焼けている。なんともいえないよい匂いと、おいしそうに焼ける音がした。ダレンがユージの縄をナイフで切る。そして、パンと水を差し出す。ユージは自分の手首をゆくりとさすった後、それを受け取り、無言で食べ始めた。3人はそんなユージにため息をつくと、火見ながらを黙ってパンを食べ始めた。

「俺が小さい頃、母さんと一緒によく王宮の庭園に行っていたって事は話したよな。」

ユージが突然話始めたので、3人は驚いてユージを見た。じっと火を見つめているだけだった。

「王宮の庭園つてさ、広くて、冬以外はいつも花がいっぱいで、いいにおいがして、俺は大好きだった。毎日探検して遊んでた。」

ユージはパンを一口ほおばり、飲み込んだ。

「俺さ、そこで、いつもリディア姫と内緒で遊んでたんだ。毎日のように。リディア姫さ、いつも女中の目をしのんではよく庭にやってこられててさ。10歳の時、それが見つかって、会うのを禁じられた。まあ、当然だな。かたや王女様、かたや庭師と3級兵士の息子。リート国では息子は父のあとを継ぐんだから、その息子も

3級兵士にしかねない。たとえ友達だとしても、どう考えても、釣り合わないよな。」

ユージ大きなため息をつく。

「…そして俺は無理やり、10歳で兵士訓練学校に入れられた。3級兵士の息子が10歳で学校に入るとはまずない。たいてい12歳から14歳だ。お前らも、どうして10歳で入学したのか不思議がっていたよな。お前らと一緒にいたおかげで、3級兵士訓練生のトップをとれたし、誰もが俺が優秀だから10歳で入学したのだと思ってくれた。…けど、本当の理由はそういうことだ。」

そういうと、ユージはしばらく黙ったまま火を見つめた。焚き火がパチパチと音を立て、4人の顔をゆらゆらと照らす。遠くで犬の遠吠えが聞こえた。

「…学校にはいつて半年もたったある日の満月の夜、母さんから一通の手紙をもらったんだ。」

「手紙？」

イアンだ。

「そう。手紙だ。…リディアからだった。」

3人は、ユージが王女のことをリディアと呼び捨てで呼んだことに驚いて目を見開く。

「母は殿下に泣いて頼まれたと。だから内緒だよ。これっきりだからね。」と言った。俺はすぐ自分の部屋に行つて、手紙を読んだ。そこには、こう書かれていた。」

ユージどうしてますか？会いたいです。今日の夜10時に庭園の東屋でまっています。誰にも内緒で来て下さい。

「俺は単純に喜んだ。俺もリディアに会いたかった。夜になるとこつそり家を出て王宮の庭園に向かった。小さい時から庭園で遊んでいた俺には、忍び込むことくらい朝飯前だった。俺達二人は久し振りの再会を喜びあった。…それ以来、満月の日に隠れて会っていた

んだ。」

ダレンは思わず言った。

「それで見つかったのか…。」

「二人でいるところを見られてはいない。」

今度はデミーが訪ねた。

「では、どうしてバレたんだ？」

「ウサギ、こげそうだぞ。」

ユージがウサギを手にとった。3人はあわててウサギを取る。ユージがウサギを食べ始めたので、3人も食べ始めた。

「…昨日…いつものようにリディアと会ってたんだ。リディアに誕生日のお祝いを言って…」

ひと呼吸を置いてユージは言った。

「俺たちはキスをし、抱きしめあった。」

3人は驚いて、ウサギを食べるのをやめた。そこまで二人が親密な仲だとは思っていなかったからだ。

「その直後、俺はリディアに別れを告げた。昨日行く前からそのつもりだった。もう限界だと思っていたからな…そしてその場から去った。リディアは泣きながら俺を追いかけてきた。そして転んで倒れてながらも俺の名前を呼んだ。そんなリディアを俺は置き去りにした…たぶん、その後、部屋に戻る時に見つかったんだと思う。森は前日の雨でぬれたままだった。転んだ時に服に泥もついたんだろ。だから、リディアはサルト様に言い逃れができなかったんだと思う。…俺が家に戻ると近衛隊が待っていた。…そして、俺は不敬罪で捕まった。」

「不敬罪だと？」

3人は大声で同時に言った。

「そうだ。確かに、そう言われた。牢屋に入れられる時、今日の朝一番で処刑されると言われた。」

「ではどうして、国外追放に変わったんだ？」

イアンが言った。

「たぶん、リディアが…サルト様と取引をしたんだ。…俺の命と引き換えに、他国の王子と結婚することを承知したんだろう…リディアはお前たちが俺の親友だと知っていたからな。だから、お前たちを俺の護衛につけさせたんだ。サルト様が俺を人知れず殺してしまわないように。」

3人は何も言えなかった。いや、本当は、ユージに何か言いたかったが言葉が見つからなかった。

「俺はどうして3級兵士なんだろう、なんて不幸なんだろう、と長い間思っていた。けれども、これほどリディアを愛し、これほどリディアに愛された俺は、やっぱり幸せだったんだな…」

ユージはうさを食べ終ったのか、骨のついた棒をばいっと、焚き火の中に投げ入れた。

「俺、昨日寝てないんだ。明日の朝も早いんだろう？もう、寝るよ。」

ユージは荷物から寝袋を取り出し、その中にもぐる。

「俺たちは交代で番をしてるから、安心して寝てろ。」

「うん。ありがとう。イアン。」

ユージはそう言うと言を閉じた。疲労こんぱいだったがユージはなかなか眠れなかった。3人も交代で横になったが、朝がくれば二度とユージとは会えないのだと思うと、ほとんど眠れなかった。

あたりが明るくなると彼らは起きて、朝食を食べた。日が昇る前には出発して国境へ向う。その間、彼らは、兵士訓練学校の時の思い出話をした。ずっとこうして話していたかったが、楽しい時間はあっという間に過ぎてしまう。2時間ほどすると国境へ着いた。

ユージは荷物の中から、剣を取り出し腰にやり、弓矢を左肩に背負った。

「3人とも、本当にありがとう。最後に会って話せてうれしかった。父さんも母さんもたぶん何も知らされていないだろうから、俺が国外追放に変わったと伝えて欲しい。」

「分かった。」

イアンが返事する。

「それから……リディアにもありがとくと、そして、君に助けてもらった命は大事にすると伝えてくれ。」

イアンはうなずいた。

「……お前、大丈夫か？」

これから先のユージの身の上を心配し、デミーが聞いた。

「大丈夫さ。俺は、ウサギを射るのに、昨日のお前みたいにあんなに手間取らないからな。」

すると4人は大笑いした。ユージは弓矢の達人だったから、もしユージがウサギを狩っていたら一瞬で片付いていたに違いなかったからだ。

ユージは、もう一度3人を順番にじっくり見た。

「……じゃあ、俺行くよ。みんな元気で！」

ユージは笑って元気に手を振ると、馬に乗り北へ向かって走っていった。

イアン、ダレン、デミーの3人はその姿が見えなくなり、馬が出す砂煙も見えなくなるまで、ユージを見送った。

5話 出会い

3人は帰りはほとんど休みをとらず、無言で馬を駆けひたすら走った。それでも、王宮へ戻った時には、夜中の11時を過ぎていた。王宮の宮殿につくと、一人の痩せた男が彼らを出迎えた。

「1級兵士イアン、ダレン、デミーか。3人ともご苦労だった。私は王の側近のスオウだ。リディア殿下がお前たちの帰りを首を長くしてまっておられる。今から案内する。」

3人はスオウの後ろについて、宮殿の中を進んだ。信じられないくらい広く、きれいで豪華だった。あまり豪華さに3人は圧倒されながら歩いていった。しばらくすると、スオウが立ち止まる。

「こちらの部屋にて殿下がお待ちだ。」

スオウが部屋の扉をあけ、3人に中に入るように促す。3人は緊張して部屋の中へはいった。扉が閉められる。

奥に自分たちと変わらない年の長い金髪をした美しい女性がいた。目の覚めるような綺麗な青いドレスを着ている。リート国でもっとも高い薬の葉でめられた服だ。それは、その女性が王族である証拠だった。

3人はその女性の前へ進み、手前で膝をつけ頭を下げた。

「イアン、ダレン、デミーですね。リディアです。」

「1級兵士、イアンと申します。左がダレン、右がデミーです。」

「3人ともどうか顔をおあげください。」

3人はリディアを見あげる。リディアが順番に彼らをじっとみる。

「ユージは無事に国外へ行くことができたのですね。」

「はい。無事、北の山へ向かって去って行くのを見届けました。」

イアンが答えた。

「3人とも御苦労さまでした。さぞかしお疲れでしょう。明日から3日間の有給を与えます。隊長にはすでに連絡しております。さあ、早く自宅に戻ってゆっくり休みなさい。」

「あの…」

「何でしょう？イアン。」

「…ユージが、殿下にありがとうございます、と。そして、殿下に助けてもらった命は大事にすると、そう伝えてくれと…。」

リディアは、驚いた顔を見せた。

「…どうやって彼は、私が彼を助けたと知ったのでしょうか…」

「いえ…知ったのではなく…殿下が自分を救うために…その…政略結婚をうけたのではないかと…そして、我々を見張りにつけたのは、王から自分を守るためではないかと…そう推測していました。」

リディアはさらに驚いた。

…他の人と結婚するのに、ありがとうございますってくれるの？

目に涙が溜まる。

「…私は彼を不幸にすることしかできませんでした…」

「いえ。それは違います！あいつは、…いえ、ユージは殿下を愛し、殿下に愛された自分は幸せだったと言っておりました！」

イアンが声を張って言った。

その途端、リディアの目から後から後から涙があふれ頬を伝っていく。

「…彼がそう思っていたことを知ることが出来てよかった…イアン、ダレン、デミー、本当にありがとうございます…もう、お帰りなさい。」

3人はリディアにそろって頭を下げると扉へ向かった。扉のノブにイアンが手をかけた時、リディアが言う。

「その扉を開けてこの部屋を出たら、この2日間に見聞きしたことはすべて忘れるのです。いいですか。」

「はい。」

3人は部屋を出た。そこにはスオウが怖い顔をして立っていた。

3人は来た時と同じようにスオウの後ろについて歩き、宮殿から出る。さつき乗ってきた馬とは違う馬がそこに待機していた。

「馬がかなり疲れていたようだったので、新しい馬に代えておいた。後日、馬を取りに来るがいい。」

スオウがそれぞれ3人に小袋を手渡す。中を見なくても何かがあった。金だ。重さからするとかなりの金額だ。

「これは殿下からの特別の謝礼だ。ありがたく頂戴するように。」

3人はそれを懐に入れ荷物を背負い、馬にまたがった。すると、スオウが声をひそめ、するどい口調でこう言った。

「殿下が最後に言われたこと、命が惜しくば必ず守るように。」

3人は心臓が凍りついた。

…この金は口止め料だったのか！

3人はただ頷いた。スオウはそれを見ると、すぐに建物へはいつて行った。3人は静かに馬をけった。馬が歩き出した。王宮を抜け、森の横の道を行く。3人は森を眺めた。その奥にある庭園で楽しそうに過ごす二人の姿が思い浮かんだ。

3人はどうすることもしてやれなかった自分たちの力のなさに、歯がゆくて仕方がなかった。

ユージは遠くに雪をかぶった美しい山々を目指していた。あの山の麓にはアイカ国があった。アイカ国はこのあたりでもっとも大きな領有地を持ち、歴史も古く、絶大な力を保つ国として知られていた。

途中、荒野の真ん中で野宿し、次の日もひたすら北をユージは目指す。

日がふたたび傾きだしたころ、そろそろ、野宿をする場所を見つけないければ、とユージは思う。小さな森を越えると川が流れていた。ユージは水筒を取り出し水を入れ、その水を飲む。雪解け水なんだろうか。とても冷くておいしかった。馬も水をおいしそうに飲んでいた。

「…？」

ユージは何か聞こえたような気がして、あたりを注意深く見渡す。また、聞こえた。はっとした。悲鳴だ。

ユージはあわてて水筒をしまい、馬にまたがると声がした上流へ

向かった。すぐに何人かの男たちが対岸で騒いでいるのが見えた。男たちの向こうには熊がいる。かなり巨大な熊だ。一人が血を流して倒れていた。

ユージは川の様子をじつくりと観察する。

：川幅は広いが、それほど深くはなさそうだ。

ユージは急いで川を渡るとすぐさま馬から下り、馬を木にくくりつけ、荷物からある容器を取り出す。蓋をあけ3本の矢を手に取り、容器の中の液体にその先端をつける。いったん、矢を地面に置くと蓋を閉め、急いで容器を荷物にしまい、再び矢を手にする。

そして、弓を構えながら、熊に向かって走る。

「伏せろ！」

ユージは大声で叫んだ。男たちがユージの声に振り向いた。ユージは弓を大きく引いた。その姿を見て男たちはすぐに身をかがめた。ユージは矢を放った。矢がまっすぐに熊の胸にささる。痛みはなかったようで反応はなかったが、熊がユージに気がついた。ユージに突進してくる。ユージはものすごいスピードで2本の矢を続けて熊に放つ。二つの矢が熊の両目に刺さる。熊は立ち上がり叫び声をあげた。そしてそのまま苦しそうしていたが、やがてその場に倒れ、動かなくなった。

男たちは、あつという間の出来事に呆然としていた。が、怪我人のうめき声に気が付き、すぐ手当を始めた。ユージは熊に近づくと矢を抜いた。そして川でその先を洗い、矢を数回振って水を飛ばすと、矢を筒に戻した。男たちのそばへ近づき様子を見た。よくみると男たちはユージと同じ年くらいの少年ばかりだった。一人がユージに気がついて立ち上がった。

「どうもありがとうございます。」

そういつて頭を下げた金髪の少年も腕に傷を負っていた。

「何名の方がやられたのですか？大丈夫でしょうか。」

「1名です。かなり重症です…すぐに帰りきちんとした治療を受けなければなりません。」

応急手当をしている様子を見てユージは言った。

「傷薬と痛みどめを持っております。お分けしましょう。」

金髪の少年は怪我した少年の様子を見てしばらく考えていた。

「……ぜひ、お譲りいただきたい。」

ユージは駆け足で馬に戻り荷物から薬を取り出し、金髪の少年の所へ戻った。

「この粉末を傷口にふりかけください。こちらが痛み止めです。30分ほどで効いてきます。」

「ありがとうございます。」

金髪の少年は紙に包まれた薬を受け取ると、すぐに怪我人を治療している少年に渡した。彼がユージの薬をふりかけ包帯を巻き、怪我人が痛み止めを飲むのを確かめてから金髪の少年は言った。

「……あの熊は死んだのですか？」

「いえ。死んではおりません。私の放った矢の先にしびれ薬をしこんでいましたので、体中がしびれて動けないだけです。すぐに動けるようになり、目を射たれた痛みで暴れまわるでしょうから、すぐにこの場を放れた方がいいでしょう。……殺してやった方がいいのかもしれません、私のこの剣ではそれは無理ですから。」

それは彼らが持っていた剣もだった。

「……あなたは、どこかに向かわれる途中ですか？」

ユージは首を横に振った。

「この辺りで野宿できる場所を探していたところです。私のことはもう結構ですから、はやく彼を連れて帰ってあげてください。」

そういうとユージは馬の所へ戻ろうとした。

「助けてくださったお礼がしたい！ここから馬で2時間ほどかかりますが、ぜひ、私どもと一緒にお願いします。一晩の寝床と食事を用意しましょう。」

ユージはどうしたものかと思った。

体はかなり疲れている。この3日間、ほとんど寝ていないのだから当たり前だ。さすがに今日は熟睡してしまいそうだ。寝ている

ところを熊に襲われたひとりたまりもない。彼らはみたところアイカ国の者らしい。彼らと一緒に行きアイカ国の様子を見るのもいいかもしれない…

「それは大変ありがたい。ご一緒させていただきます。」

二人がやりとりをしている間に、怪我人の治療は終わり、みなそれぞれ馬にのりすぐ出発できる体制になっていた。

「では、ついて来てください。」

金髪の少年が馬にまたがると、すぐ彼らは歩き始めた。ユージもすぐに馬に乗り彼らにつづく。金髪の少年が一番後ろにいたので、その隣にユージはついた。すると金髪の少年が言った。

「私はカイといいます。」

「私はユージです。あなたのお怪我は大丈夫なのですか？」

「ああ、私は熊から逃げようとしてこけたときに腕をすりむいただけですから。他の怪我をしてるヤツも同じですよ。ですので大丈夫です。」

「あなた方はアイカ国の方ですか？国境はもう超えているのですか？…すみません。私は今日このあたりにきたもので、何もわかっていません。」

「そうです。我々はアイカ国のものです。国境ならさきほどの川がそうでした。あの川からこちら、そしてあの山の頂上までが我々の国です。」

ユージは後ろを振り返り川を見た。そうか、あれが国境だったのか、と思った。

そして、前に向き直り、改めて目の前にそびえたつ山々を見た。山ははるか向こうにあった。

…あの山まで全部がアイカ国のものだというのか。なんて広大な国なんだ。

「私はリート国から来ました。」

…どう自分のことを話せばいいんだろう…

ユージは少し考え込む。

「ちょっといろいろな国を見てみたくなりましてね。アイカ国は豊かな国と聞いていたので、まずこちらに立ち寄ろうと思ったのです。」

「そうですか。それなら、町でしばらく滞在されるといいですよ。アイカ国のどこへ行くのかゆっくり決められるといいでしょう。」

カイがニコリと笑ったので、ユージも思わず笑顔を返す。

…なんだが、人のよさそうな人と出会ってよかったな。

ユージはほっとしながら、ユージは彼らと共に、その村へと向かった。

6話 ネイルの館

怪我人に気を使ってゆっくり走ったため、彼らの町へは3時間ほどかかり、その頃には、あたりはもう真っ暗になっていた。

町のはずれは農家が多かったが、中心部に行くにしたがつて、きちんとした街並みになっていく。ユージは国境付近の町だから、きつと小さな町に違いはないと思っていたのでユージはとても驚いた。リート国では、国境付近にこんなに立派な町はなかったからだ。

…さすが大国アイカ国だな…

各家庭からの温かな光が漏れる。今まで荒野で野宿してきたユージは、その灯りにほっとした。そのうちに塀が長く続く家があらわれる。

…こんなはずれの町にもえらい身分の人が住んでるんだな…

やがて、その壁が途切れ大きな門が現れた。門まで来るとカイが、一人に何かを話かける。その青年はカイに黙って頷くと、そのまま道を馬でかけていった。みんなはその門の中へ入ろうとする。

…ここが彼らの家なのか？

ユージはあまりにも大きすぎる家に一抹の不安を感じた。だが、いまさら逃げるわけにもいかなかった。

彼らについて門を抜けると、ユージの想像を超える立派な家が目の前に現れる。この町の豪族の家に違いなかった。カイが馬から降りると、ドアを開けて叫んだ。

「フウが熊にやられました！タン力を！」

すると数名が玄関から出てきた。

「まあ！！これは大変だわ！はやくタン力を持って来て頂戴！お医者様を呼ばないと！」

50歳くらいの女性だった。

「キースに呼びに行かせました。」

すぐにタン力が用意され、みんなで怪我を負っていた若者を馬か

ら下ろしタンカに乗せると家の中へ運んで行く。カイはそのまま玄関前でその女性と何やら話していた。話が終わると、ユージのところに走ってやってきた。

「馬はひとまずその横にある木にでもくくりつけておいてください。こちらで厩舎に連れて行き面倒を見ておきます。」

ユージは言われたとおりに馬を木にくくりつけると、荷物を下ろそうとした。すると大きな男が一人やってきてユージの荷物をひよい、と持ち上げる。

「あ、どうもすみません。」

カイとその大男がどんどん歩いていくのでユージはその後をただついていくだけだ。

玄関に來ると、さきほどの女性がニコニコしながらユージに話かけてきた。

「この家の主の妻、マーサーです。何やらみなを助けていただいたそうで、ありがとうございます。今主人は出かけておりますの。だいたいの事情はカイから聞きました。客室に今からご案内いたしますね。」

「ユージと申します。突然こんな夜遅くにすみません。」

ユージは緊張して体を硬くしながら深く頭を下げる。

「いえいえ、気になさらないでね。」

「すみません。私はあの重傷の友人についていたので、こちらで失礼します。」

カイがユージに頭を下げた後、すぐに家の中へはいって行く。

「ユージさんでしたね。さ、ご案内いたしますわ。」

マーサーと大男の後をついて中に入ると、すぐ左に階段があった。その階段を上り2階の手前から二番目の部屋へとおされた。部屋はかなり広く、大きなベッドにテーブル、ソファまでがあった。大男がどしりを部屋の中にある壁の横にある机に置く。

「ずいぶんお汚れですね。ここには自慢の露天風呂がございますのよ。入られます?」

ユージは自分の姿を改めて見てみた。泥だらけだった。

「…そうさせていただきます。」

「でしたら、彼に案内させますわ。」

マーサーは大男をちらりを見る。大男が頷いた。

「新しい服もタオルもご用意いたしますから、そのままどうぞ。」

「あの…服は自分のがありますから。」

「ここにはいろいろなお客様が来られて、その方々にも同じようにしているの。ですから、お気になさらないでくださいな。」

「そうですか…では、お言葉に甘えさせていただきます。」

ユージは弓矢と剣を荷物が置かれた机に置いた。本当は両方とも持っていきたかったが、旅人を装ったように見せるためには、置いていく方がよいと思った。部屋を出るとマーサーとはさきほどの階段を足早に下りて行った。

「風呂はこちらです。」

「あ、は、はい。」

大男が廊下の奥の方へ向かった。ユージはおどおどついていく。廊下の奥には扉があり、そこから外へ出た。すぐにしめった生暖かい風が体をつつむ。よく見ると木々の隙間に風呂が見えた。20人くらいが入れそうだった。階段を下りていくと風呂のそばに小屋があった。

「そちらが着替え室となっております。お風呂に入っておられる間に、お部屋の方にお食事をご用意しておきます。食べられた後の食器はそのままお部屋に置いておいて結構です。明日の朝取りに伺います。では、ごゆっくりどうぞ。」

大男はそういうと、階段の下にあったドアから家の中へはいっていった。

ユージは小さな小屋に入ると服を脱ぎ温泉へ恐る恐るつかる。温泉は話に聞いていただけで、入るのは初めてだった。体の芯まで温まり、傷ついた自分の心まで癒されるような気がした。空を見上げると、月が見えた。満月から少し欠けた月だ。

…まだ、あれから4日しかたっていないのか…

風呂から上がり、小屋に入るとタオルと真新しい服が知らない間に用意されていた。そこには手紙が添えてあった。

―服はこちらで洗濯をしてお返しします。―

タオルで体を拭き服を着た。洗いたてでとても気持ちよかった。

部屋に戻ると、あたたかいパンと暖かなスープ、そして新鮮な果物と、冷たい水が部屋の真ん中の机に置かれていた。ユージが風呂から上がる時間を見計らって用意されていたかのようなだった。

ユージは机に近づいて料理を覗き込む。

…うわあ。スープにこんなにいっぱい肉や野菜が入ってる。

ユージは急にお腹が鳴った。あわてて席につくと、スープを一口飲んだ。あまりの美味さに目を丸くする。その後は、無我夢中であつという間に全部平らげた。全部食べると急に眠たくなってきた。立ち上がって、ベッドにバサツとつぶせに倒れる。信じられないくらい柔らかかった。ふとんを干した、いいにおいがする。

ユージはこんなもてなしを人から受けたのは初めてだった。なんだか自分がとても身分の高い人間になった気がした。

…リディアも毎日こんな生活なのかな…毎日おいしいものを食べ、こんなふわふわのベッドで眠る…

ユージはふと目を覚ました。とても気持ちよかった。なんとなくぼうつと部屋の中を見わたす。昨日の夜食べた食事の食器が机の上からなくなっている。

…今、何時なんだろう。

部屋にあった時計を見る。2時だった。ユージは目をむいて飛び起きる。あわてて部屋から出て1階に下りた。うろろろしていると人の気配のする部屋があった。

そつとドアを開けて覗き込む。そこは台所らしかった。4人の女の人が食器を洗ったり、野菜の皮をむいたりしていた。

「あの…すみません…」

すると、一斉にみんなが振り向いた。

「あら、おはよう…じゃ、もうないわね。よほど疲れてらしたのね。」

「マーサーがクスクス笑いながら言った。

「はあ…そうみたいです。どうもすみませんでした。」

「ユージは恥ずかしくて、頭を下げて言った。

「ふふ。お腹すいているわよね？すぐにお昼ごはんを用意するわ。」

「はい。こんな時間に本当にすみません。」

「隣の部屋が食堂ですの。そちらにすぐお持ちしますわ。」

「あ、はい。」

ユージは隣の部屋へ行った。とても広い部屋に、立派な机がならべられていた。部屋には誰もいなく、時計の力チコチ動く音だけが部屋に響く。ユージはすぐに台所の方へ戻った。

「あら？どうなさったの？」

「すみません…あちらの部屋はなんだか立派すぎて落ち着かないというか…それに一人で食べるのも寂しいし…お邪魔じゃなかったらこちらで食べてもいいでしょうか？」

「ふふふ。邪魔などどこか大歓迎ですよ。そちらにお座りなさい。」

ユージは大きな調理台らしき机に並べられている、背もたれのない丸い椅子に座った。マーサーがパンに何かをはさんでいる。

「あの…それは何と言う食べ物なんですか？」

「これはね、サンディと言って、パンに好きなものを挟むだけの料理なの。簡単でおいしいからアイカ国のお昼はたいていこれなの。」

本当にすぐに出来上がり、マーサーが皿に乗せてユージの前においた。ユージはナイフとフォークが机の上にないか探したが、どこにもなかった。マーサーも出す気配がない。

「…これは、このまま手で食べていいんでしょうか？」

「あら。ごめんなさい。そうよね。初めてなら分からないわよね。」

そう、そのまま手で持ってバクつかぶりついて食べて頂戴。」

「わかりました。」

ユージはサンディを手にとり、思いきりほおばった。あまりの美味さにまたユージは目を丸くする。

「おいしいです！昨日の食事もこんなおいしいパンやスープは初めてだと思いました、これも、ものすごくおいしいです！」

「ふふふ。お世辞はいいのよ。」

「お世辞じゃないです！本当です！温泉も最高だったし、ベッドもふわふわで、こんなおいしい食べ物が出てきて…俺は天国に来てるんじゃないですよ…？」

マーサーはそのユージの言葉を聞いて大笑いした。

「まあまあ、大丈夫よ、あなたも私もちゃんと生きてますから、ここは天国じゃありません。」

「そ、そうですね…すみません。変なことを言ってしまった。」

ユージは急に恥ずかしくなつて顔が熱くなる。

「ふふふ。私、ちよつと失礼するわね。すぐに戻りますけど。主人があなたが起きてきたら、教えるようにと言われているものですから、ゆっくりお食くださいね。足りなかったら、彼女たちにもう一つ作ってもらつて頂戴。」

「はい。」

マーサーは食堂から出て行つた。

ユージはサンディをまた食べ始めた。そして、ふと思い出す。

「あの…昨日熊に襲われて重傷だった人の具合はどうなんでしょうか？」

すると一人が手を止めて、ユージを見るとにこりと笑い答えた。

「ユージ様にいただいた薬のおかげで、大事はいたらないそうです。」

ユージは飲みかけていたお茶を吹き出しそうになった。

ユージ様？

「さ、様は結構です。ユージと呼び捨てにしてください。」

「でも、私たちはこの家のお客様に呼び捨てはできませんわ。ではユージさん、と呼ばせていただきます。それでよろしいでしょう？」

か？」

「は、はい。」

ユージはなんだか急に緊張し、残りのサンディは味が分からなくなってしまうた。

「もう一つ召し上がられます？」

「い、いえ。これひとつで十分です。」

そうこうしているうちに、マーサーが戻ってきた。

「もう、お食事はお済み？これから主人の所へご案内してもよろしいかしら？お礼をしたいと申してますの。」

「はい。お昼、ごちそうさまでした。本当においしかったです。」

ユージは立ち上がると、食器を流し場に持っていこうとした。

「あら、ユージさんはお客さんなのでから、そのままにしておいてくださいな。私たちでやっておきますわ。」

さきほどユージと話した女中が言った。

「あ…そうですか。…では、すみませんが、よろしくお願いします。」

「

ユージは彼女に頭を下げると、マーサーについて、食堂を出る。

玄関の手前の部屋に向かった。応接室らしい。そこへ通されると、マーサーの主人らしい男性とカイがいた。

部屋に入ると男性が笑って立ちあがって手を差し伸べてきた。ユージも手を出し握手する。

「この館の主のネイルです。昨日はこのカイをはじめ、みなを助けていただき、ありがとうございます。ユージ殿の傷薬は止血の作用もあるようですね。あれだけの傷を負いながら、ほとんど出血がなく医者が驚いていました。」

「いえ。あんな場面に遭遇したんですから…当然のことをしただけです。」

「まあ、お掛けください。」

ユージはソファに腰かけた。これがまた埋まりそうなほど柔らか

かった。ネイルとカイも腰掛ける。するとネイルがにこやかに言った。

「ユージ殿はリート国からやってきた旅人ということですが、薬屋の息子なのですか？ リート国が薬の国とはいえ、傷薬や痛みどめだけでなく、はたまた熊をしびれさせる薬など、普通の者が持てるものではないと思いませんか。あの国の薬は恐ろしく高価ですから。」

ユージは氷ついた。

…そういう事だったのか！

あのフウという怪我人に薬を分けようとした時、カイはかすかに悩んでいるようだった。熊をしびれさせるような薬を持つ得体のしれぬ若者の薬を受け取っていいのかどうか考えていたのだ。しかし、あのフウの様子を見て受け取ることにしたんだろう。あの薬をつけなければ、町まで持ったかわからないような怪我だった。

…カイが俺をこの家に招待したのは、礼のためなんかじゃない。リート国のスパイかもしれない得体の知れない俺を捕まえて、何の目的でこの国にきたのか聞きだすためだったんだ。

ユージの顔がどんどんこわばっていた。そんなユージの様子にネイルから笑みが消える。

「単刀直入に申す。そなた一体何者だ。あのように突然出くわした場面に、冷静に矢にしびれ薬をつけ、自分に突進してくる熊の両目に外すこともなく矢を射る。…リート国の兵士は薬をうまく扱うと聞いておる。そなた、リート国の兵士であろう。」

あの薬はリート国の兵士が訓練や実戦の時に常に持たされるものだ。あの荷物の中にそれを発見したときは驚いたが、これから先どんな目に合うか分からなかったから、ユージはただ単純に喜んだ。…それが逆にこんな風に自分の身を危ぶませることになるとは…せめてしびれ薬を使っていなければ…

しかし、あんな巨大な熊を相手にしびれ薬を使わず倒すことは、弓矢の達人であったユージにも不可能だった。かといって、あの場面をユージはみすごすことはとうてい出来なかった。一晩の御礼を

断っていたとしても、後から兵士にとらえられただろう。

ユージは本当のことを話すしかないと思った。大きく深呼吸をする。

「…はい。確かに、私はリート国の3級兵士でした。ですが…3日前、私は国外追放の身となりましたから、今はリート国のものでも、兵士でもありません。」

「国外追放とは…一体、おぬし何をしたのだ。」

「…身分の高い女性と…」

ユージは思わず、ネイルから目をそらす。

「…恋仲になったためです。」

ネイルはしばらく黙ったままうつむくユージを見ていた。

「なるほどな…。」

「ネイル様。そのような事が犯罪になるのですか？しかも国外追放とは…罪が重すぎやしませんか？とても信じられません。」

ユージはその言葉に驚いてカイを見た。

「カイ、お前はまだまだ勉強不足だな。ほとんどの国は王族や貴族と、一般国民とは結婚することは出来ぬ。彼らは国民を人と思っておらぬからな。大事な娘や息子を家畜と結婚させるわけにはいかぬだろう。だから彼らは階級のある者同士だけで結婚するのだ。王子や王女が他国の王子や王女と結婚するのも、そういう理由だ。もつとも、それは自身の子供を人質として送ることで、国同士の争いを止めるという目的もある。ユージ殿はまだ国外追放でマシとも言えよう。一方的に身分のあるものが、身分のないものを好きになり、自分の思い通りにならぬからと、わけのわからぬ罪を着せて殺してしまう例など、山ほどある。そうだな、ユージ。」

「は、はい。」

「それで、そなたは、何故この国へまいられた。」

「アイカ国は巨大な国ですし、私のようなものでも何か仕事があるのではないかと…」

「ふむ…そうか。」

ネイルはしばらく黙り込む。

「…カイ。お前はと思う？ ユージ殿の言うことが信じられるか？」
「正直、国外追放になった理由は俺には信じられませんが…。しかし、昨日のような場面で自らの命の危険も顧みず我々を助けてくれたような人間がスパイや犯罪者とも思えません。何より、ユージ殿の誠実な人柄は、昨日と今日の短い時間で伺いしれます。俺はユージ殿を信用します。できれば、ここに留まっていただき、われわれにあの見事な弓矢を教授してもらいたい。」

言葉の最後で、カイはユージを見て笑いながら言った。ユージは思いもよらぬ話の展開に、動揺するばかりだった。それを聞くとネイルも笑って言った。

「私もまったく同じ考えた。マーサーが喜ぶな。さきほど私にユージ殿が起きてきたと教えにきたとき、あのマーサーがうれしそうに早口でユージ殿のことをベタ褒めしておったからな。よし！ ユージ殿。そなた明日からこの館で働くがよい。カイも含め、昨日の若者たちは現在兵士訓練学校に通っておるものたちでな。午前中、学校が終わった後や土日にやってきて、訓練をしたり勉強したりしている。私はそんな場を彼らに提供しておるのだ。彼らがおる間、弓矢を見てもらえぬか。」

ユージはネイルの話が信じられなかった。スパイとして捕らえられて牢獄にいれられるに違いない、そう思っていた。そして、殺されるか奴隷とされるか…どちらかになるに違いないと。ユージの目から涙があふれる。

「…身に余るお話、よ、喜んでお引受けいたします…こんな立派な場所で…働けるなんて、ゆ、夢みたいですよ…あ、ありがとうございます…」

ユージはネイルに深く頭を下げ、涙声でそう言った。

ネイルとカイはそのままユージが泣いているのを黙って見ていたが、しばらくするとカイが話しかけてきた。

「ところで、ユージ殿。あなたは、おいくつですか？見たところ私と変わらないと思うのですが…もう兵士をしていたという話ですから、私より年上なのでしょうね。」

ユージは涙を拭くと顔をあげた。

「私は、16歳です。」

「16？私と同じ年ではないですか！リート国ではそのような年で、みな兵士となるのですか？」

「いえ。全員というわけではございません。…けれども、私の場合は他の者より早く、10歳で訓練学校に入り、12歳で入隊しました。」

「12！それでは、もうその年で兵士として4年も働いておられたというのですか！」

それを聞いていたネイルが急に大笑いした。

「これはこれは！カイ、お前たちはどうやら、最高の講師を手に入れたようだな。」

「はい。ネイル様！」

カイが目を輝かせて答えた。

「いえ。私などそんなすごいものではありません。弓矢は確かに自信がありますが、剣術の方は得意ではありません。」

ユージはあわてて否定した。

「いずれにせよ、カイたちよりは、上のはずだ。とにかく、そのすばらしいという弓矢の腕前を見せてもらうか。まだ、みな訓練しておるはずだ。」

7話 ネイルの館2

ユージはネイルとカイについて、館の奥の広場にやってきた。ここでは、11名の若者がいた。みな白い服を着ている。二人がペアになって、先の黒い棒を剣のように使い試合をしていた。しばらく見ていると何故白い服を着ているのかが分かった。棒の先が黒いのはどうやら炭らしく、服に触れると汚れがついた。つまり、剣ならば切られたということだ。これなら危険もないし、何やら面白そうだ。ユージは、ふと若者の中に1名の女性を見つけて驚いた。

…この国では女性も兵士となるのか…

ユージたちの姿に気がつくと、みな腕をとめこちらを向いた。

「これは、我が国の国技でネーチェという競技だ。まあ、見ても分かるうが、我が国では安全な剣術の練習方法として軍でもこれを採用しておる。…どうだ。ユージ、やってみるか。」

「はい。」

「なら、俺が相手をします！」

カイがそう答え、白い服を着ている服の上から着る。ユージも白い服をもらい着た。二人に棒が渡される。ユージは棒をまじまじと見て数回振ってみた。

「では、よいか？二人とも。」

二人は向かい合った。

「では、はじめ！」

ネイルの合図と共に、カイがユージに振りかかってきた。ユージはなんなくするりとよける。その瞬間、ユージはカイを見ずに後ろに棒を振った。当たった感触がした。振り返るとカイの腹に黒い線が書かれていた。どよめきが起った。

「なんだ、なんだ。全く相手にならんじゃないか。」

「ネイル様、ユージが強すぎるのです！なにが、私なんてすくなくないだ！」

ユージはカイが自分の事を呼び捨てにした事がなんだかうれしかった。

「いや…剣の方は本当に得意じゃないんだ。訓練学校でも同じ年の友人の3人に一度も勝ったことはなかったし…軍でも剣を使うような部署には、ほとんど回されたことはなかった。」

「なら、そいつらが異常に強すぎるんだ！」

カイは、まだブンブン怒っている。

…確かに、それは一理あるかもしれないな。訓練学校には16歳の者もいたのに、それを差し置いて、あの3人は10歳の時から常にトップを争っていたもんな。

ユージはリート国で、よく国境付近に現れる盗賊の退治に駆り出された。それは弓矢の腕前をかわれてのことだと思っていた。実際、実戦でもほとんど剣を使うことはなかった。…でも、ひよつとしたら、剣の腕前も見込まれていたんだろうか？

「では、私が相手になろう。」

ネイルが白い服を着た。まわりがざわついた。ネイルが棒を持ちユージと向かい合う。

今度はユージの方から向かっていった。ネイルが身をかわす。その瞬間、腕が動くのが見えた。ユージは瞬時に後ろに跳びはねる。ネイルの棒が空を切った。ユージがその振り切った腕めがけて振り下ろす。ネイルもすばやくそれを察知し腕をひっこめる。その瞬間ネイルの体制が崩れるのを見た。ユージは左手に棒を持ちかえ、下から棒を振り上げる。やった！とユージは思った。が、棒は空を切った。ほんのわずか、距離が足りなかった。

ネイルが棒を下ろした。

「これは、これは。カイ、確かに、お前たちの出る幕ではないな。かなりの腕前だ。」

ネイルがうれしそうに笑う。

「いえ…そんな…」

ユージは自分の持っている棒を見た。

… ネイル様が強いとはいえ、なかなかうまく扱えないものだな。

「… その方はそれに慣れておらぬから、どうも扱いにくいようだな。」

「

ユージはネイルに自分の考えていたことを指摘されて驚いた。

「誰か、試験用の剣を持ってこい。」

「はい！ 防護服もですね！」

カイが言った。ネイルはしばらくユージを見て考えていたが、
「いらん。」

と言った。カイは驚いた顔をした。いや、カイだけではなかった。
他のみんなも驚いた表情をした。

一人が広場の隅にある小屋に走っていき、すぐに剣を2本もってやつてきた。ネイルはそれを受け取るとユージに一本を手渡した。

「ネーチェは、あくまで遊びだ。試験の時には、これを使って行う。この剣は当たっても怪我にならぬような細工がしておるから安心しろ。」

ユージは剣をよく見た。なるほど刃がまるく加工されていた。じつくり見て、また何度か振ってみる。普通の剣とまったく同じ感触だった。

「では、よいかな。」

「はい。」

ユージとネイルはさきほどと同じように向かい合う。

その瞬間、ユージは得も知れぬ何かを感じた。殺気だった。

… 落ち着け、焦ってはダメだ… これは真剣じゃない。これにやられても死ぬことはないんだ。… とにかく、向こうの出方を見るんだ…
自分から出てはいけない…

あたりは、二人の緊迫した空気に静まり返る。

二人はお互いを見つめながら、輪を描くようにじりじりと歩く。
ふと、ネイルがわずかに左に重心を傾けるのを感じた。

来る！

そう思ったユージは、ネイルが動きだした瞬間に左によけた。ネイルがユージの右側に剣を振る。ネイルが背中を見せようとした。その背中めがけて、ユージは剣を振りあげる。ネイルがそれを感じ地面に伏せる。ユージはが元に伏せたネイルを飛び越ようとした。ネイルがユージめがけて寝ころがりながら剣を上には振り上げる。ユージは飛んだままそれを剣でたたき返す。ユージが地面に足をつけ、ネイルを見ようとしたときには、ネイルはすばやく起き上がり、ユージにむかっていた。ユージは右に転がってよける。そしてまた二人向かい合う。二人はまたじりじりと輪を描く。ネイルの体がまたわずかに動くのが見えた。こんどは左にくる。そう思ったユージは右へくると身をかわした。一瞬ネイルの姿が見えなくなる。ユージが危険を感じ身を伏せようとした瞬間、背中に剣があてられたのを感じた。ユージはそのまま止まった。

…負けた。

剣を下ろし、ネイルの方に向いた。ネイルも剣を下ろした。二人は向い合つと、軽く頭を下げた。

二人の戦いが終わっても、まわりは固まったように静かだった。ユージは息が上がり、肩を上下に動かしながらネイルを見ていた。「カイ、どうやらお前たちは本当に最高の講師を迎えたいらしい。1等兵でもリーダーが出来るほどの腕前だ。…いや、ひよっとしたら近衛隊でも通用するかもしれん。」

ネイルがそういうと全員が目丸くする。

「明日から私はお役御免だな。」

ネイルが笑ってそういうと、大歓声があがった。みんながユージの周りを取り囲む。

「すごかった！」

「本当に講師をしてくれるのかい？」

「こんなの初めて見た。」

カイも隣にやってきて、ユージにいった。

「本当にすごかったぞ！明日から楽しみだ！」

ユージは幸せでいっぱいだった。弓矢では何度もほめられたが、剣でこれほどほめられたことは一度もなかった。

「こら、こら。お前ら。ユージの特技は終わっておらぬぞ！昨日、遠出に出ておらんかったものも、昨日の話は聞いておるだろう。これから弓矢の腕前を見せてもらおうとしよう！」

一斉に拍手がおこった。なんだかユージは恥ずかしかった。

広場の隅には的が何個あった。みなでそちらに移動しユージは弓矢を持たされた。

少し離れてみなが見守る。ユージは的を見た。そして、弓を何度も触ったり、引いたり、弾力性を調べた。矢の方もじっくり、長さ、太さを確かめた。そして矢を持ち、ゆっくりと弓を構える。落ちて着いて一つの的に集中する。

矢はなった。矢は的の左をそれた。

ユージは、ふう、と一息つく、また矢を構えた。そして再び矢を放つ。今度は的の左あたりに当たった。拍手が起きた。だが、ユージは首をかしげて、再び矢を構えた。今度は真ん中にあたった。さらに大きな拍手が起きる。ユージは今度はつづけて3本の矢をすばやく順番に放った。すべて中央に吸い込まれた。

今度は拍手の変わりにどよめきが起こった。カイがユージに向かって走ってきた。みんなもそれについて走ってきた。後からネイルもゆっくりこちらに向かってくる。

「いや、本当にすごいな。」

カイがユージにいった。

「けど、突進してくる熊の目に矢をあてるくらいだからなあ。放り投げた果物に命中させるとか、そういうのはどうだ？」

「うん。もちろんできるよ。でも、この弓矢じゃ無理だ。リート国のものより少し大きいから微妙に感覚が違っていて。それにこの弓矢は左に矢がそれる傾向があるから、やりにくくて。」

カイは驚いた。

…そんなやりにくいと思っていた弓矢であれだけの的にあてることができるのか。

「カイ。お前、家に戻ってユージの部屋から弓矢と、マースーに頼んで何個か果物を貰ってきなさい。」

「わかりました！ネイル様！」

カイはものすごい勢いで家へ走って行った。その間、またユージはみんなに取り囲まれ、質問攻めにあつた。ユージは早くカイが来ないかと思った。

やがて、カイがユージの弓矢とオレンジを持ってくる。ユージはほっとした。

ユージはカイから弓矢を受け取り、矢の筒をいつものように右肩にかけ弓を持つ。

「じゃあ、カイ。投げて。」

カイがオレンジを投げた。ユージはオレンジが上がり再び落ちてくる寸前で軽々と射抜いた。次にカイはオレンジを3つ同時に投げてみた。3つとも同じように次々に射抜かれていった。拍手が沸き起こる。

「じゃ、ひとつのオレンジを投げるからそれに矢を何本も射ることはできるか？」

「うん。できるよ。」

カイは再びオレンジを取り、ひときわ高く空へと投げた。ユージはすぐに矢を何本も放つ。次々に矢が刺さる。3本の矢が刺さり、やがて矢の刺さったオレンジが落ちてきた。3本目が刺さってからまだオレンジと地面との間はあつた。カイが不思議そうに聞いた。

「まだ、いけるんじゃないのか？」

「うーん。オレンジは、3本が限度なんだ。あれ以上やると空中でオレンジが分解するから。メロンだったら、最高7本の矢を刺したことがある。」

またまたカイは驚いた。ふいに空を向いて飛んでいた鳥を指差し

た。

「じゃあ、あの鳥は？」

「それは、ちよつと無理だ。でも…」

ユージは下を見ると、足元にあった石を2　3個手に取った。

「ちよつとみんな離れて。」

みんなあわててユージから離れた。ユージは思い切り石をつぎつぎと鳥めがけて投げた。石はどんどん垂直にあがり、2つ目の石が鈍い音とともに鳥にあたった。鳥がすうっと一直線に落ちてくる。

そして、どさつと地面に落ちた。石もほぼ同時に落ちてきた。ユージは鳥に向かって走って行って、捕まえてみんなのところに戻ってきた。

「実は、石投げも弓矢と同じくらい得意なんだ。この石投げと弓矢の腕前のおかげで、俺はいつも軍では食糧調達係だった。俺がいると食糧に困らないからみんな喜んでた。」

その話を聞いてみんな大爆笑した。カイも腹を抱えて大笑いしていた。

「しかし、どうやって、動いているものを狙うんだ？何かコツがあるのか？」

「コツというか…何となく、次はこうなるんじゃないかって、わかるんだ。」

「観察力がするどいんだな。」

ネイルがみんなの後ろから声をかけた。みんな後ろを振り向いてネイルの方を見た。

「私と剣で戦ったとき、私が動こうと思った瞬間、ユージは動いていた。おそらく私がわずかに体重を移動するのを見ているんだろう。だから、私はわざとユージを誘って彼に背中を見せさせ、私を見せないようにしてとどめをつけたのだ。」

「そうか…そういえば、俺の友人たちにもいつも後ろからやられてました。」

「まあ、お前なら訓練しだいですぐに後ろの気配も察することがで

きるだろうよ。カイのようなヘタクソには後ろが見えていたからな。

「ネイル様、ヘタクソとは……。」

カイが情けない声でいった。

「そのとおりだろう？ 悔しかったら、ユージにせいぜい鍛えてもらうんだな。」

「あつという間にユージを倒せるようになってみせます！」

「それは、信用できんな。」

ネイルとカイのやりとりに、みんな大笑いだった。ユージもつられて笑う。

「さ、もうそろそろ暗くなってきた。みんな早く風呂に入って帰るがよい。さっきも言ったが、このユージは明日からみんなの講師としてこの館で働いてもらうことになった。いろいろ聞きたいこともあるだろうが、ユージはいろいろな事情があつて、我が国にやってきた。なぜやってきたか、その理由を聞かないでやってほしい。」

ユージはそのネイルの心づかいがうれしかった。正直、それを尋ねられるが一番辛かった。

「わかりました！」

みんな元気に返事すると、弓矢や棒を倉庫にしまいに行った。カイもそうしていたので、ユージも一緒に手伝いに行こうとした。するとネイルが声をかけた。

「その鳥を貰おう。さきに家に戻ってマーサーに今日の夕食にしてみよう。」

あわててユージは鳥をネイルに渡した。

「それから、あいつたちはみなこの町のものだが、カイだけは首都ペネからやってきておる。カイの父とは知り合いでな。頼まれて面倒を見ておるのだ。だから、カイはこの館に住んでおる。何か困ったことがあれば、遠慮なくカイに聞くがよい。」

「分かりました。」

「では、また夕食の時にな。」

ネイルはユーヅに笑って手をあげると館に戻って行った。

8話 アイカ国

みんなで温泉に入って騒ぎあい、カイと一緒にみんなを門まで送っていくころには、ユージとカイはすっかり意気投合し仲良くなっていた。

二人が、食堂に行くと、もうすでに料理がテーブルにならんでいた。ユージがさつき石で仕留めた鳥も、丸焼きになってのっており、香ばしい匂いを漂わせていた。

テーブルには、ネイルと昨日ユージの荷物を持った大男が座っていた。マーサーがお茶を持って二人に入れている。

「ユージ。この鳥ありがとう。おかげで今日の夕食が豪華になったわ！さあ、あなたの席はそちらよ。」

ネイルと大男の前に、席が二つあいていた。カイが先にネイルの前に座ったので、ユージはその隣の大男の前に座る。マーサーはみんなのコップにお茶を入れ終わるとネイルの隣に座った。

「さあ、いただきますよう！」

マーサーがユージの落とした鳥をみんなに取り分けはじめ。ユージはスープを飲んだ。昨日とは違うスープで今日はトマト味だった。ユージはあまりの美味しさにまた目を輝かせる。

「これも、すごくおいしいです！」

「ふふふ。ありがとう。この家では誰も私の料理をほめてくれないから、本当にうれしいわ。」

「おいしいですよ！いつもそう思っていたいてます！」

と、カイが言うと、

「マーサー様、私もおいしいと思っていただいております。」

「私もだ。いつも感謝しておる。」

大男とネイルがあわててそう言う。

「はいはい。私に言われて言うんじゃ、信用できないですけどね。」
ユージは思わず笑ってしまった。

すると、目の前の大男と目があつた。大男がユージに笑顔を見せる。

「まだ、私は自己紹介をしてませんでしたね。私は、ネイル様の秘書のセンといいます。」

「そうですか。昨日は荷物を運んでくださってありがとうございます。しました。」

ユージはそういうと、いったん、スプーンを置いた。そして、改めて他の4人に向かって頭を下げる。

「これから、こちらでお世話になりますが、どうぞよろしく願います。」

すると、4人もいったん食事を中断し、ユージに頭を下げた。

「しかし、本当に、ユージは礼儀正しいなあ。ユージとこれから比べられるかと思うと、俺、なんだかやりにくいわ。」

カイが苦笑しながら言った。

「そ、そうか？それは悪かった。でも、俺は普通にしてるだけだからなあ……」

「まあ、それがお前のいい所だからいいんだけどさ。だから、ネイル様はお前を雇おうと思ったわけだし……」

「そうか、そうだったのか。俺のどこを見てカイやネイル様やマーサー様が気に入ったのか不思議だったけど。」

「ところで……ネイル様もセン様も軍人なのですか？」

「私はともかく、どうしてセンまでそうだと思ったのだ？」

「いえ……今セン様の手に剣たこがあるのがチラツと見えたものからです……」

ネイルが一瞬驚いた顔をした後、苦笑する。

「……お前は、本当に観察力があるな……その昔、私はこの国の近衛隊長官、センは副長官を務めておったのだ。」

ユージはネイルがそのような高い身分のものだったのか、と驚いたが納得した部分もあった。

「どうりで……ネイル様と剣で向き合ったとき、本当に怖かったです。」

「

「ははは！さすがだの。お前は私の殺気を感じたという訳だ。」

「はい。殺されるかと思いました。」

「…殺されるって…訓練用の剣なんだからそんな心配ないじゃないか。」

「いや、私はユージを殺すつもりで戦った。最初にユージとネーチエで戦ったとき、これは本気でやらねば、ユージの本当の能力はわからぬと思ったからからな。しかし、ユージとて同じだろう。私を殺すつもりで挑んでいたはずだ。」

「そうなのか？」

目を丸くしてカイが言う。

「うん。だって、殺されなくなったら、相手を殺すしかないだろう？」

あっけらかんとユージがそう答えた。

カイは、ユージのその態度にただただ驚くだけだった。そして、ある事実が気がつく。

…そうか。こいつ、人を殺したことがあるんだ。

アイカ国は有史以来戦争をした事がない。したがって、兵士は誰一人として人を殺した事などないのだ。

…俺がこいつにあつという間に負けたのは、こいつの方が兵士を4年もやっていたからじゃない。こいつが本当の戦闘を経験しているからだ。こんなヤツに俺がかなうはずがない。

「しかし、カイ。お前はよい友人を拾ったようだな。ユージはお前にとって、外からの新しい風だ。この国にいただけでは知りえぬ事をいろいろ知ることが出来よう。」

カイはまじまじとユージを見る。ユージがきょとんとして自分を見ていた。

「

「…そうですね。昨日から何度ユージの行動や言動に驚いたことか。」

「いや、俺はそんなすごい人間じゃないよ…」

ユージは恥ずかしくて目を伏せる。

「また、それか。自分が優秀だと気づいていないところにも驚きだ。俺の前で二度と、自分の卑下する言葉を吐くな。その度に、俺は自分が情けなくなる。」

カイがふくれつつらをしていた。

「ご、ごめん。わかった。気をつけるよ。」

そのまま和気あいあいと食事が進んだ。マーサーがユージのとなりの鳥がおいしいと連発した。それを聞いてユージはちょっとした考えが浮かんだ。

「あの…よかつたら、時々何か狩ってきましようか？ここの待遇はどうもよすぎるので、なんだか申し訳ない気がしますし…それに、動く動物を矢や石で狙うのは常にやっていないと、カンが鈍ってしまいますから。」

「それはいい！俺も一緒に行くぞ！」

カイが目を輝かせる。

「いや…カイ。悪いけど、君が来たらみんな動物が逃げちゃうよ。動物って本当に気をつけてても、こっちに気がついてすぐ逃げちゃうんだ。」

「ちえ。分かったよ。」

カイが肩を小さくした。子供みたいなカイにユージは思わず苦笑する。

「では、センを連れていくがよい。センならお前の邪魔はせぬ。思わぬ大物を仕留めてしまった時のことを考えても、センが適任だろう。それから、私たちはお前を信用しておる。だが、元軍人の身としては、完全に信用することはできないのだ。すまぬが、当分の間私たちの監視下にあると思ってくれたまえ。したがって、お前が一人で外出することを禁ずる。必ず誰かと共にするように。もちろん、敷地内では自由に一人で行動してもよい。」

「はい。わかりました。」

当然のことだった。そうはつきり言ってくれたのはうれしかった。こっそり監視されているより、ずっとすっきりする。

「いつ狩りに行くつもりだ？」

センがユージに尋ねた。

「夜の動物と昼の動物が交差するところが一番いいのです。夕方は無理そうですから、早朝にしようと思います。このあたりは、何時頃に夜が明けるのですか？」

「今は5時ごろだな。」

「森はここからどのくらいかかるのでしょうか。」

「馬で10分もいれば、適当な森がある。」

「そうですね。では、4時半に出発したいと思います。大丈夫でしょうか？」

「大丈夫だ。明日、4時すぎに玄関の扉の前で待ち合わせしよう。」

「はい。」

そう話をしているうちに、全員が食事を食べ終わった。ユージが席を立つ時に、おいしい夕食ありがとうございました、という、みんなが慌ててユージに続いてマースーにお礼を言ったのが、ユージはとてもおかしかった。

夕食の後は、それぞれ自分の部屋へ戻った。カイの部屋は階段から上がってすぐの部屋でユージの隣の部屋だった。

ユージは部屋に入るなり、ベットに寝転がる。また、布団のいい匂いを思い切りかく。

…なんだか、信じられないことになったなあ…当分の間は野宿だと思っていたのに。こんなところでこれから過ごすのか…。

ユージはリディアやイアン、デミー、ダレン、そして自分の家族に教えたかった。きっと、今も自分がどうやって過ごしているか心配しているだろう。

ドアをノックする音が聞こえた。ユージはベットから起き上がって、ドアを開ける。カイだった。手に本をたくさん抱えている。

「おう！ちよっと入っていいか？」

「うん！」

カイはユージの部屋に入ると、机の上にその本を置いた。5 6冊はあった。

「これさ、入隊試験の教科書なんだ。ネイル様が渡しとけて。」

「きよ、教科書？それに入隊試験？」

ユージは目を丸くする。

「なんだ。リート国では入隊試験がないのか？」

「試験って、一体何をするんだ？そういえば、ネイル様はあの剣が試験用だって言ってたな。剣にも試験があるのか？」

「あるさ！リート国ではないのか？」

「ないよ。」

「では、どうやって軍隊に入るんだ？」

「12歳〜14歳の間に訓練学校に入れられて、2年間すごしたのち軍に入る。俺みたいに10歳から入る人もいるけど、普通は近衛隊の息子たちだけなんだ。」

「そうか…」

カイは部屋の端にあった、イスを机の前にもってきて座った。ユージも座った。

「引きだしの中に紙が入っているから、ちよっととって。」

ユージが机の引だしを開けると、紙が沢山入っていた。それを見てユージはびつくりした。

「か、紙がこんなにたくさん！！」

「ああ、そうか。他の国じゃ、紙は高価なものだったな。わが国は紙が特産物だから、割と手に入りやすいんだ。そうか。だから、試験が出来るのかな？紙がなければ、テストもできないし、そっぴや、教科書だって、みんなに配ることもできないな。ま、とにかく取ってくれ。」

ユージは紙をカイに渡した。カイは机の上にあつたペンをとり、紙に図を描きながら説明しだした。

「うちの国じゃ、だいたい14歳くらいから訓練学校に入つて勉強したり、訓練したりする。で、16歳になると軍の入隊試験を受ける資格が与えられるんだ。でも、16歳で受かるやつは少なくて、だいたい17歳から18歳で受かるヤツが多い。入隊の試験は、年に2度ある。次の試験は、11月の終わりだ。試験は実技と筆記試験の二つで行われ、実技は、剣術・弓術・馬術・体力測定の4つからなる。剣術が200点であとは100点満点。だから実技試験は500点満点だ。筆記試験は、歴史・地理・地学・医学・数学。それぞれ100点満点の合計500点満点。総合計1000点で行われる。600点以上で合格だ。もともと、実技は300点以上をとらないと足切りにあう。」

「足切り？」

「ああ。軍隊に入るのに実技が悪かったら話にならないだろう？だから、合格点を設けてるんだ。それを足切りと俺達は言っている。

一般兵は1〜5等に別れていて試験の点数によつてその配属が決まる。5等兵が600点以上、4等兵が630点、3等兵が680点、2等兵720点、1等兵が750点以上だ。」

「そ、そんな風に兵の階級を決めているのか？」

ユージはあまりの驚きに大声を出す。

「そうさ。完全能力制さ。」

「じゃ、何か？努力次第で誰でも上の階級に行けるってことなのか？」

「そうさ。」

ユージが信じられないという顔をした。

「…そっぴや、お前3級兵士だったって言つてたな。どんな身分なんだ？」

ユージの顔が急に曇つた。

「…一番下の…身分だよ。農民とか…召使とか…そんな職業の人た

「ちと同じだ……」

「……そうか。でも、お前はもう、うちの国に来たんだから、もうそんなの関係ない。だから気にするな。だいたい、うちの国には身分なんてものはないから。」

「ええ！……どういう事だ？」

「どういう事って言われても……。とにかく、好きな職業につけるし、当然身分が存在しないから誰とでも結婚できる。」

「ええ！誰とでも？でも、いくらなんでも貴族や王族とは無理だろう？」

「うちの国には、貴族や王族も存在しない。」

「は？……だつてアイカ国にも王様はいるじゃないか！」

「……まあ、全部話を最後まで聞いてくれ。そうしたら分かるから。」
「……分かった。」

「……王族や貴族が存在しないだつて？……もし、俺とリディアがこの国に生まれていたら、俺達は結婚できたのか？……そんな夢みたいな事が、この国では叶うのか？」

カイがまた紙に書き始めたので、ユージはそれに目を落とす。

「でな、一般兵の上に近衛隊があつてな、軍では最高の階級だ。だから、別試験となつて、1等兵でなければ受けられない。」

「そうか！アイカ国では能力があれば、誰でも近衛隊にだつてなれるんだ！すごいな！」

ユージが急に目を輝かせた。

「そうさ！で、まあ、当然だが、その近衛隊中で優秀なものが近衛隊長官や副長官となる。で、この近衛隊長官を経験した者の中でももっとも才能が抜きんでているものが王に認められ、やがて皇太子となり王となる。」

「なんだと！王までそんな風にして決めるだ？……とても信じられない！……だつたら、王の子供たちはどうなるんだ！」

ユージは思わず立ち上がってどなった。

「まあ、落ちつけよ。」

そう言われて、ユージは自分が立っていることに気がつき、座りなおした。

「王の子ども、ただの兵士の息子も、農民の息子も、この国じゃみんな同じ子供さ。もつとも、同じとは言いい切れないな…うちの国の人間は才能があれば誰もが王になれる可能性があるが、唯一王の子供たちだけが、王になることができるから。」

「ええ！それは何故だ！」

「後継ぎ争いで国を分裂するのを防ぐためじゃないかと俺は思っている。他の国ではそんなことはよくある話だと聞いているし。それに、このアイカ国自体がそうやってできた国だからな。」

「後継ぎ争いで？」

「ああ。まあ、このアイカ国だけじゃないよ。1000年以上も前、昔このあたり一帯大きな一つの国だったんだ。すばらしい王の元で、どんな領土をひろめ、その国は繁栄を極めた。王には4人の息子がいた。彼らが大きくなると、王は国を4つの郡にわけ、それぞれの長とした。やがて、誰が王にふさわしいか争うようになり、とうとう戦争が起きる。争いの果てに結局、国を4つに分裂することで合意する。そのあと、それぞれがまた後継ぎ争いをして分裂したり、攻められて滅んだり…そうして、今の国々ができたんだ。リート国だって、そのうちの一つだ。つまり、俺たちはもとはみんな同じ国の人間だ。だから、同じ言葉を話し、同じ文字を書く。山の向こうのソイ・モイ国がさ、言葉も違えば字も違うのはそういう事さ。」

「山の向こうに国があるのか？…そんな事、初めて聞いた。」

「俺だって話に聞いているだけだ。国交もまったくないな。まあ、たまにこっちからも、向こうからも旅人は行ったり来たりはしてるらしいけど。」

「ふーん。そうなのか…一度、そのソイ・モイ国に行ってみたいな。」

「俺も初めて聞いた時、そう思ったけどさ、侵略をしないことが暗黙の了解となってるから…俺は兵士になりたいし、兵士がそんな所

へいつて、もめ事になつたらまずいだろう？だから、無理だと諦めてる。」

「…そうか。じゃ、リート国で兵士だった俺もまずいな。残念だな。いつか国交が結ばれる日が来たらいいのにな。」

「そうだな。」

二人はしばし、山向こうの見たことのない国に思いをはせる。

「ごめん。また話を脱線させてしまったな。続きを話してくれ。」

「…どこまで話たっけな。…そうそう、それで、昔あった大きな国が4つに分けられたうちのひとつがアイカ国だ。一番下の息子がこのアイカ国の最初の王なんだ。彼が今のこの国のしくみを作った。きつと、彼は兄弟同士で争って悲しかったんじゃないかな。だから、二度とそんな事にならないようにと願って、こんなしくみにしたんだと思う。おかげで我が国は分裂する事はなく、その時の領土を保っている。」

「へえ…よく知ってるなあ、お前。」

「こんな事、アイカ国の人間なら誰でも知ってるよ。その教科に全部書いてある。この国じゃ、兵士にならないヤツも筆記試験だけはいたい受けるよ。教養をつけるためと、ある程度の点を取ると国から褒美が出るし、優秀なヤツには、軍の事務の仕事なんかが回ってくるんだ。」

ユージは本をあらためて見た。

「…この中にそんな話が詰まっているのか。リート国では、誰も国がどうやって出来たかなんて知らないし気にもしなかったな。」

「で、話は戻るけど、近衛隊長官が皇太子に選ばれると副長官はその側近になる。当然、皇太子が王となると、王の側近となる。だから、この国の王や側近となるには、ものすごく優秀じゃないとされないんだ。兵士は2年に1度に一度必ず試験を受けなおさねばならない。点数が足りなければ、等級を落とされたり、軍をやめさせられたりする。もちろん、よければ上の等級へ上げれる。」

ユージはその話のため息をついた。

「この国の兵士はなんだか大変そうだなあ…。」

「そんなことないよ。軍には訓練義務があるから、実技の方で点が取りやすくなるんだ。だから、筆記試験の勉強を試験前に少しする程度で結構上の等級にいけたりする。近衛隊はさすがにそんなわけにはいかないけどな。俺は、実にこの試験はうまく出来てると思う。我が国は平和だから暇で緊張感がまったくなく、これがなかったら、我が国の軍の質は落ちて、たちまち他の国に攻められて終わるだ。」

「ふーん。なるほどな。でも、軍が暇だというなら、一体、普段兵士は何をしているんだい？」

「この国の正規軍と呼べるのは、3等以上の兵士なんだ。おもな仕事は警備と警察業務、訓練学校の講師に入隊試験の監督だ。まあ、講師になると毎日学校だから、結構忙しいけどな。警備の中でも国境警備なんかはアイカ国を攻めようなんて国はないから本当に暇で、そこで交代で警備しながら、訓練したり勉強したりしてるだけって聞いている。警察業務にしたって、この国は犯罪がないから仕事はほとんどないし、訓練学校の講師だって、平日の午前中だけ。こんな感じだから、兵士はあまりもうからない。4・5等兵に関しては訓練のみ。だから、女性も多い。」

ユージは今日の訓練に女性が一人いたのを思い出した。

「だから、この国では、農業やったり、商人したりしながら兵士をするヤツがほとんどさ。」

「ええ？兵士が農業や商人？」

「ああ。その方がもうかるし。この国のほとんどの兵士は、みんなでこの国を守るんだ、という使命からやってるんだ。だから、この国は人口が12万人でそのうちの8万人が兵士なんだ。」

「そ、そんなに???」

「そうさ。でも、さっきも言ったけど、正規軍と言えるのはだいたい3万人さ。だから他の国とあんまり変わらないさ。それに、誰も戦争を経験してないから、本当に戦争となった時、どれほどの力に

なるのかは分からない。だから、みんな必死で訓練をしている。」

「…なるほど。」

「それから、もちろん近衛隊はこの国の要だからな。かなりの給料がもらえるよ。近衛隊だけがこの国で忙しい兵士だな。一度近衛隊をすると、その後の生活は一生保障される。しかも近衛隊から離れた後は、そのまま兵士としてのこつても試験を免除されるしな。優秀なものは、皇太子や王のブレーンとなったり、退役してからも、この国の重要な役割を行う業務をすることがおい。だから、ユージ。この国のえらいさんは、みんな元近衛隊だと思っておけ。だから、近衛隊はわれわれアイカ国の男の子にとって、あこがれの職業さ。心あるものは、みなそれを目指す。」

「お前もか？」

「もちろん。」

カイがニコリと答える。

「…でも、王の子供が王になれないのは、やっぱり変な気がするな。その子供がどんなに優秀な人間でも王にはなれないとしたら、それは国にとって大きな損失じゃないか。だいたい、その子供だって、自分より劣った人間が王になったりしたら…それを納得できるかな？」

「だから、俺は、俺より優秀な人間を探して王にさせようと思ってる。」

ユージはぎょつとしてカイを見た。

「お、お前、王子なのか？」

「ああ。」

ユージはあわてて椅子からとびおり、床に伏せ頭をつける。

「も、申し訳ございません。王子様とは申し上げます、無礼な振る舞いを。お許してください。」

カイは椅子を倒すほどいきおいよく立ちあがった。ユージはその勢いに驚いて思わずカイを見上げる。カイがものすごく怖い顔をしていた。

カイは、ユージの腕をつかみ無理やり立たせ、ユージの胸ぐらをつかむと、顔をくつつくほど顔を近づけた。

「お前、2度とそんな態度を俺にするな！今度やったら思いきりぶん殴る！言つたろう！この国では王子も、農民の子も同じだと！」

カイの顔が怒りで真っ赤だった。

「そうか。そうだった。それに、俺たちは友達になつたんだ。友達と思っている人間に、今、俺がしたみたいにふるまわれたら、どんなに悲しいだろう。俺は、カイになんて態度をとってしまったんだ。」「ご、ごめん…2度としないと約束する。」

カイは、ユージをつかんでいた手を思いきり振りおろした。ユージはバランスを崩し倒れそうになるのをこらえる。

「なら、許す。」

まだ、カイは怖い顔をしてユージをにらんでいた。

「ほ、ほんとにごめん。」

「ふん。まあ、いいさ。今のお前の態度で、どれだけリート国が身分差別の厳しい所なのかが、少し分かったからな。」「ま、座れよ。」

カイは倒れた椅子を戻し、座りなおしたので、ユージも椅子に座った。

「そういうわけで、俺だけがこの村の人間じゃないというわけだ。オヤジもオフクロも王宮にいるからな。」

ユージはふとある考えが頭によぎった。ネイルはカイの父の知り合いだと言っていた。そして、昔近衛隊長官をしていたと。それに、セン。昔、近衛隊副長官で現在ネイルの秘書。王の側近には近衛隊副長官になるとカイは言っていた。恐るおそるユージはカイに聞いた。

「ま、まさか…ネイル様は昔、この国の王様だったんじゃない？」

「本当にカンのするどい男だな。そのとおり。前国王だ。マーサー様は前王妃で、センはネイル様の側近だった。」

ユージはさきほどの食卓を思い出した。前国王に前王妃、そしてその側近に、現国王の息子と一緒に食事をしていたというのか。ユ

ージはあまりの恐ろしさに頭が痛くなつてきて、手で頭を押さえた。
「つまり、俺が明日になつて、急にネイル様やマーサ様やセン様に態度を変えると、彼らも気分を悪くする？」

「当たり前だ。それに、センは今ほただの秘書だからと、様と呼ばれるのをいやがる。」

ユージはため息をついた。

「…これからのここでの暮らしで一番大変なのは、どうやら、それらしい…」

カイが突然大笑いした。

「な、なんだよ。何がおかしいんだよ。」

「そんな事が悩み事なんて面白いなあ！」

「…好きなだけ面白がつてくれ…」

カイは笑いをこらえながら右手で本をぽん、と叩いた。

「で、この本だ。」

「お前は、ここで講師となつた。つまり、この国の兵士と同じ待遇というわけだ。だから、これくらい勉強しておけ、つて事だ。」

ユージは本をぱらぱらと見る。地学と医学は少し読んでみて、なるほど思ったが、歴史と地理はひとつも知っていることがない。

…まあ、この国の人間じゃないから当たり前か。けど、さつきカイが教えてくれたような事が書いてあるなら面白そうだ。

だが、数学と書かれている本を開けるなりユージは仰天した。

「な、なんだ！これ！暗号か？」

「暗号じゃないよ。数学だよ。つまり計算だ。」

「け、計算？これのどこが？」

カイが本を開けて指をさしながら、説明した。

「ほら、プラスつてのは、数を足すつて事だ。これは、65と32を足したら、いくつになるか、つて問題だ。」

「お前、わかるのか？」

「もちろん。97だ。」

「ど、どうしてそんな事がすぐわかる！」

「勉強したら誰でもわかるようになるよ。」

「どうしてこんなものが兵士になるのに必要なんだ！100まで数えて、20くらいまでの数が計算できたら十分だろう！」

「何言ってるんだ、お前。普段の生活だって計算できた方が便利だろうが。だいたい、軍はものすごい数の人間や物資を扱うことになるんだ。数学なしには管理できない。」

ユージは青ざめた。

「そ、そんな事、上の人間だけがやっていたらいいじゃないか。」

「この国では、誰もが上の人間になれる可能性がある。だから、誰もがやる必要があるんだ。」

ユージはそれを聞いて、目を丸くした。

「…そうか…そうだな…」

カイは思わずクスリと笑う。

「どうやら、明日からお前に数学の特訓をしなければいけないな。」

「…本当にやらなくちゃいけないのか？」

ユージは顔をしかめた。

「まあ、そりゃ好きにすりゃあいいけどさ。でも、ネイル様はお前をいずれは正式に兵士にしようと思っているんじゃないかな。」

「俺を？この国の人間じゃないのに？」

「この国はこういう自由な国だからな。隣国からやってきて住み着いている人が結構沢山いるんだ。過去には王になったりしているものもある。俺もお前みたいに優秀な兵士はうちの国に欲しい。」

ユージはその言葉がものすごくうれしかった。

「…そりゃ、兵士になれるなら、なりたいけど。俺はそれくらいしかできそうにないし。」

「なら、勉強しろ！ひょっとしたら次の試験を受けられるかもしれない。本当は学校に行かなくてはいけないが…お前は兵士だったんだし、特別処置をしてもらえるだろう。何せネイル様は前国王だ。そんなことを手配させるくらい朝飯前だ。」

カイがニヤリと笑う。ユージは驚いた。

… ネイル様は本当に俺のためにそんなことしてくれるのだろうか？
「けど、俺は監視下にあるんだろう？そんなに早く受けられるかな？」

「たぶん、大丈夫さ。監視下っていうけどさ、俺は世間体を保つためじゃなくて、ネイル様は、お前を自分のところへ置いておきたいだけだと思ってる。」

… そんな風に自分は本当に思われているのだろうか？

ユージはしばらく黙っていたが、しみじみと言った。

「俺、さっき、ネイル様が前王だってわかって、ものすごく怖いところに来たと思ったけど、ものすごくラッキーな場所にきたんだな。」

カイが嘖き出す。

「ものすごく怖いところねえ…。明日ネイル様とマーサー様に教えてやるうつと！」

「そ、そんなの言わなくていい！」

「ははは！まあ、それはともかく。この国に身分が存在しないという意味が分かったか？そうやって王も能力で決めるから、王族が存在するはずがない。1代で終わるんだから。だから、この国の人間はみんな平等な人間だ。あるのは、優秀な人間に対する尊敬の念かな。」

「… そうなのか…。」

ユージはなんて国なんだろうと思った。だから、これだけの巨大な国を維持できているんだろかと思った。

「お前はリート国では、身分で苦労したんだろうが、これからは、お前は自分で自分の人生を切り開いていけるんだ。」

「… そうなんだな。信じられないけど。… 近衛隊になれるならなってみないや。」

「なれるだろ。ネイル様が剣の腕前は近衛隊でも通用するかもしれないって言ってたじゃないか。後は勉強するだけだ。」

… そういえば、そんな事をいつてらしたな…

ユージは勉強さえ頑張れば本当になれるのかと思うと胸が高鳴った。

「…わかった。勉強、頑張ることにする。」

カイがふと時計をみた。

「もう12時すぎてる！すまん。明日朝早いにな。」

「いいや。いろいろ、ありがとう。楽しかったよ。」

「じゃ、明日な。」

カイが笑って手をあげると、ユージの部屋から出て行った。ユージの顔には笑みがまだ残っていた。ユージはその日、興奮してなかなか寝付くことが出来なかった。

9 話 狩り

4時20分にセットした目覚まし時計がなった。

ユージは真つ暗な中、手探りで目覚まし時計を止め、もぞもぞとベッドから出た。服を着替え、弓矢と用意し、薬を入れた袋を腰にくくりつける。

部屋からでて下に降りると、もう、センがいた。

「おはよう。」

「おはようございます。」

「では、行くか。ついてきなさい。」

センについて家を出ると、左手を歩く。奥には厩舎があった。13頭の馬がいた。一番端にユージがのってきた馬がいたので、その馬の元に行き優しくなでた。

「もう、疲れはとれたかい？」

馬はうれしそうにしっぽを振り、顔をユージにこすりつける。

…たった3日しか一緒にいなかったのに、そんなに俺の事が気に入ってくれたのかい？

ユージはこの馬が無性に愛おしくなった。

「何という名前だ？」

センはもう自分の馬にまたがっていた。

「名前は…この馬は自分のものではないから知らないんです。でも、名前があるな。…リイにしよう。お前は今日からリイだ。いいかい？」

リイはまるでユージの言葉が分かるかのように、ユージの顔をなめた。

「うわぁ…やめろよ。でも、分かった。名前気に入ってくれたんだね。じゃ、リイ。これからよろしくな。」

センが言っていたように10分で森についた。そのころにはあた

りは少し明るくなっていた。

「さあ、あとはお前の好きにするとよい。私は遠くからお前を見ているだけにしよう。」

「わかりました。」

ユージはゆっくり森の入り口へ近づいていった。すぐに鹿の群れを見つけた。静かにリイから降りる。

「リイ、ちよつとここで待っててね。」

ユージが小声でそう言うと、リイは少し鼻息をユージにかける。

ユージは、腰にぶら下げた袋に入っているしびれ薬を矢につけると、そつと身を低くしながら、鹿に近づいていった。木に隠れ、弓矢を持ちかまえると、ゆっくり木から身を乗り出し一頭の鹿に的を絞る。じつとそのまま動かずに待つ。あたりをキョロキョロ見ているその鹿が下を向いて草を食べ始めた。その瞬間ユージは矢を放つ矢が鹿の腹に刺さる。鹿が前足を上にあげて鳴いた。すぐに鹿が動かなくなる。ユージは鹿の元へ走った。そして、鹿の心臓を剣で一突きする。センの方に向いて手を振った。

「いやはや、まさかこれほど早く大物を仕留めるとは…」

センはただ啞然としてユージの元へやってくる。

「いえ、たまたまですよ。」

ユージが恥ずかしそうに手で頭をかく。

「そのしびれ薬はどれくらい持つのだ？」

「だいたい、10分から15分です。万が一人間に当たっても、しびれてしばらくは動けません。効き目がなくなった後の後遺症はまったくありません。」

「なるほどな…」

センは馬から降り紐を取ると、鹿の足を縛った。すると、ユージはまた何かに気がついた。

「すいません。ちよつと行ってきます。」

ユージはしばらく歩き立ち止ったかと思うと、すぐに矢を放つ。

それは、うさぎだった。うさぎを手にし、センの所まで戻ろうとした時に、ユージは上を見上げた。ウサギを地面に置くと、腰袋に入っていた石を取り、4個ほどほりうりなげる。鳥が2羽落ちてきた。ユージはそれも手にしてセンのところへ戻った。

「今日は、このくらいでいいかな。もう帰りましょうか。」

「いや…まさかこれほどとは思わなかった。確かにこれなら、野営の時に重宝されるな。」

センがさらに啞然とした顔でユージを見ていた。ユージは頭をかきながら苦笑した。

ユージとセンが家に戻ったのは、まだ6時前だった。収穫した物を食堂にもっていくと、マーサーがあまりの早い帰宅に驚きながらユージたちを迎えた。

「これくらいあれば、2、3日持ちますか？」

「十分よ！余裕だわ！」

「よかった。毎日行くとさすがに動物たちが警戒してしまうから。またなくなりそうな頃に行きますね。」

「本当に、ありがとう。助かるわ。とりあえず、その隅に置いておいてもらえるかしら？ニーナたちが来たらみんなで処理するから。」

…ニーナたち？…あの3人の女中のことかな？

ユージはマーサーが一人で食事を作っているのをしばらく見ていた。

…朝は一人で作ってらっしゃるのか…それにしても、元王妃がこんな風に家事をしてるなんて信じられないな。それにこんな獲物に助かるなんて…ありあまるほどお金はあるだろうに。

センが鹿を言われたところに置いたのでユージもウサギを鳥をそこへ置く。

「では、私はこれで失礼する。また、朝食でな。」

センが食堂から出て行った。するとマーサーがユージに言った。「広場でカイがランニングしているだろうから、一緒に走ってきた

らどうかしら？」

「そうですか。じゃあ、行ってきます。」

広場へ行くと、カイが黙々と走っていた。ユージはカイの走りに加わる。

「なんだ、もう帰ってきたのか？獲物はいなかったのか？」

「ううん。鹿1頭とうさぎ一羽に鳥を2羽しとめたよ。」

「はあ？お前4時半に家を出たんだろ？じゃあ、1時間ほどでそれだけしとめたつてのか。」

「ああ。いつもそんなんだ。」

カイは肩を落とす。

「…お前のレベルになるには、程遠いな…」

「少しづつやれば大丈夫だよ。」

「…そうか？そうは思えんが、ま、努力はするかあ。」

「ところで、こうやって毎日走ってるの？」

「ああ、実技試験で10キロ走つてのがあつてな。タイムで点数が決まるからさ。早く走ろうと思ったたら、いつも走ってないとかかなりきついし、体力をつけるにもいいだろ。」

「ふーん。じゃあ俺も一緒に走る。狩りに行くのは週2〜3回にするつもりだから、その時は今日みたいに後から参加する。」

「おう。一人で走るのはつらいからうれしいぞ。」

しばらく走って、ユージたちは走るのをやめると、温泉へはいつて汗を流した。7時が朝食の時間らしく、カイにせかされて食堂に入る。もうみんな席について待っていた。

ユージはちよつときどきしながらネイルに朝の挨拶をした。

「お疲れ様。じゃあ、食事にしましょうね。」

みんなすぐに食べ始めたが、ユージは手をつけずに、朝ごはんをじつと見る。できたてのパンにほかほかの卵焼き、ソーセージやサラダにジューズ。朝食とは思えなかった。

「…それで、毎回こんなに食事が豪華なんだな…」

ユージは思わず思ったことを声に出してしまった。

「何が、それで、なのかしら？」

マーサーが首をかしげる。ユージは焦った。

「いや…あの…昨日の晩、カイから聞いたんです。ネイル様が昔この国の王様だったって。ここに来てから、いつも豪華な食事で…だからやっぱり、王様はこんなすごい食事をしてるんだなって、思ったんです。」

マーサーが一瞬目を丸くしたが、すぐにうれしそうに笑いだした。

「あら、あら。本当にユージはうれしい事を言ってくれるわね！でも、残念だけど、これはこの国じゃ、普通なのよ。」

カイがつづけて説明しだした。

「そうだ。農家も肉屋も仕立屋も、国民全員こんなモンだ。」

「ええ！！そうなのか？」

「ユージ。カイから聞いたろう。我が国には身分というものがないだから、みんな同じような食事に同じような暮らしをしているのだ。私は昔王だったから、多少はよい暮らしをしているが…。他の国の王や貴族は、これとは比べ物にならないほど豪華な料理を食べているな。毎回食べきれぬほどの食事が並び、そして食べきれぬから捨てる。それに、着もしない豪華な服に、使いもせぬ食器、贅沢な家を建て、毎日パーティだ。ある程度は、それにも意味はあるのだが…そうして、国の金を浪費し、民にはゆき届かぬ。いや、やるつもりはないのかもしれない。この国がこんなに豊かなのは、そういうバカな事をする貴族や王がいないからでもある。」

「そうなのか…」と感心していると、ネイルが咳払いしながら遠慮がちにマーサーにいった。

「もちろん、マーサー。お前の食事には満足しておるぞ。」

それを聞いて、あわててカイとセンが同時に言った。

「私事です！」

「まあ、本当にユージが来てくれて、うれしいわ。みんなようやく私のありがたさに気がついたようだから。」

「いや、だから、ずっとありがたく思っておったぞ。」

ネイルがそう言うと、カイとセンが必死に頷いた。

「はい、はい。ようやくわかりました！」

ユージはみんなのやりとりがおかしくてたまらず、思わずクスリと笑ってしまった。

すると、カイが不満そうな顔でユージに向き直った。

「お前、普通に接することができてるじゃないか。」

ユージは思わず飲んでいたジュースを嘔き出しそうになった。

「何がなんだ？」

センが不思議そうに言う。

「昨日、ネイル様たちが何者かを話したら、びびりまくって、とてもじゃないけど、同じような態度でいられないって言ってました。あゝあ、また騙されたよ。」

カイはユージが青ざめた様子をマネしながら言った。

「カ、カイ……。そんな事、今、言わなくていいだろ！」

ユージはカイをにらみつける。

「いや。今だから言ってるんだ。」

カイもユージをにらみつけ、二人は顔をくっつけたようになる。

そのやりとりに、今度はネイルたちが大笑いした。

「そう、ユージ。もう私は王でないからな。私たちには、普通に目上のものに話すように話してくればよい。今のような感じで十分だ。」

「は、はい。」

ユージが思わず背筋を正してしまった事は言うまでもない。

食事が終わるとネイルもセンもどこかへ出かけて行き、カイも学校へ行った。ユージは部屋へ戻ろうとすると、マーサーが言った。

「ユージ。一番玄関に近い部屋に、先日熊にやられた子がいるのよ。ご自宅はお仕事が忙しくて面倒が見れないから、うちで預かっていの。お礼がしたい、っていったから、会ってやってくれるかしら？」

「あ、はい。わかりました。」

ユージは食堂を出て向いの部屋のドアをノックした。どうぞ、という声が聞こえたので、ユージが入ると、一人の少年がベッドからこちらを見ていた。しかし、ユージはその少年よりもその部屋の広さに目をむいた。

…な、なんだ…この部屋は！

よく見ると、椅子やテーブルが奥の方に詰めて置かれていた。

…会議室とか大人数のお客さんが来たときに対応する部屋なのかな…？

気がつくと、少年が痛みで顔をゆがめながら慌てて起き上がろうとしていた。

「そのまま寝てください！」

慌ててユージは少年の元へかけよる。そう聞いて少年は体を横に戻す。

「…僕、フウっていいいます。あの時は本当にありがとうございました。ユージさんがいなければ、僕だけでなく他にもたくさんやられたと思います。それに、お医者さんが、ユージさんの薬がなければ、僕はここまで持たなかったかもしれないって聞きました。本当に、どれだけ感謝しても足りません。」

フウが笑いながら言う。その笑い顔には幼さが見えた。ユージは自分より年下なのかな、と思った。

「フウさんが助かって本当によかったです。」

「ここで講師をされるって聞きました。弓矢だけでなく剣の腕もすごいって。早く治って教えてもらうのが楽しみです。」

急にフウの目がキラキラとした。ユージはこれほどまでに自分が必要とされていると知ってなんだか嬉しいような恥ずかしいような変な気分だった。

「…私も楽しみにしてますよ。…ゆっくり休んで早く治してくださいね。」

「はい。」

ユージはそう言つて、部屋を出た。

自分の部屋に戻り、机の上にある教科書を手に取ると、ベッドに寝ころがった。まず歴史の本を広げて読み始める。

昨日カイが話してくれたことは、ごくごく一部だった。本には今までの王の名前やその業績や年号が事細かに書いてある。アイカ国は建国1238年とのことだった。

…こんな細かいことまで覚えなくちゃいけないのか？

ユージは頭が痛くなつて、歴史の本を閉じ、昨日見てまだ自分になんとかなりそうな地学の本を選んだ。雲の様子や天気の変化、季節に見える星座のことなど結構知っている事が多かった。1時間半ほど読んでいたが、つかれてきたので本を閉じる。

…気分転換にリイに会いに行こうかな。

リイはユージが来るとうれしそうにしてくれた。ユージはリイに乗って広場の中を走る。リイは気持ちよさそうに走った。30分くらいそうしてリイと遊んでいたが、また部屋に戻って地理の本を手取る。アイカ国の地図が載っていた。その周りには近隣諸国の名前もある。リート国とアイカ国を比べると、アイカ国は10倍ほどもありユージは改めてアイカ国の大きさに驚く。

…カイが国境だと言っていた川は、ハウゼ川という名前なのか。アイカ国とソイ・モイ国との国境の山々はバーサルー山脈といい、川はそこから流れ、アイカ国と東にあるカルデ国とアイカ国の間を通り、アイカ国とリート国の間を通つて、そのまま行くと海にいくらしい。

…この川がカルデ国との国境でもあるんだな。

ユージは朝早かつたので、なんだか眠くなつてきた。ちょっと休むか…と目を閉じた。

「ユージ！昼メシだぞ！」

ユージはあわてて飛び起きた。

「なんだ。熱心に勉強してるのかと思ったら、寝てたのか。」

カイがドアを開けて軽蔑したような顔でユージを見ていた。

「べ、勉強はしてたさ！でも、朝早かったから、眠くなってきて…さ、さつき寝たところだよ。」

「ふーん。」

疑いの目でカイが見ていた。

「ま、いいさ。とにかくメシだ！早く食べないとみんなが来ちまうぞ。」

「そ、そうなのか？」

ユージは急いでベッドからでてカイと一緒に食堂へ行った。

机には、またサンディがのっていた。昼はカイとマーサーとユージの3人だけだった。

「ネイル様とセンさんは？」

「あの二人なら、ネイルの弟の家に行つて畑仕事を手伝つてるわ。」

「は、畑仕事??？」

ユージはまたまた驚いた。

「そうなの。ネイルは元々農家の出身ですからね。そういうのをやってると落ち着くらしいわ。センは別に違う仕事をすればいいのに、自分はネイル様の秘書だから、と言つて、一緒に畑をやつてるのよ。笑つちやうでしょう？」

「はあ…そうなんですか。」

ユージは二人が農作業をしている姿を思い描こうとしたが、どうしても思い描けなかった。仮にも昔王だった人間がリート国で言えば最下層の階級のする仕事をするなんてとても考えられなかったからだ。

「俺のオヤジも農家の出身さ。王をやめたら、ネイル様みたいに畑をするつて、言つてるぜ。」

ユージはしばし言葉を失う。

「…なんだか、やっぱりしっくりこないなあ…マーサー様だつて、女中さんたちに手伝ってもらっているとはいえ、この家の家事をこ

自分でやってらっしゃるし…元王妃なのに…」

「あら。ユージ。この国の王妃はただの飾りなのよ。この国のトップは王だけなの。たまに優秀な王妃がいて王と共に国政にかかわったりするけど、ほとんどが、その辺の主婦と変わらないわ。普通に食事をつくって掃除して、子育てして。王妃としての仕事と言えば、隣国の要人を招いて数年に1度あるかないパーティーをするだけね。それもみんなが手伝ってくれるから、綺麗な服を着て笑ってるだけでいいの。だから、誰でもできるわ。それからね、こういう話は他国の人間には内緒だから覚えておいてね。だって、そうでしょう？相手の国に、この国の王が貴族でも王族でもない、農家の出身だと知られたら、なめられてしまうわ。だから、アイカ国では他国から住み着いた人間には信用がおけるまでずいぶん長いこと黙っているのよ。それが自分たちの国を守ることでもあるから。」

「じゃあ、どうして私にそのようなお話を？」

「それはね、私たちみんな、もうあなたを信用しているからよ。それに、あなたは監視下にあるのよ。一人で出歩けないのに、どうやってその話をいいふらすのかしら？」

言われてみればその通りだった。

突然外が騒がしくなった。誰かが大声で叫んでいるみたいだった。

「あいつら、もうやってきたな。マーサー様。ごちそうさまでした！ユージ、さあ行こうぜ。」

「ああ。ごちそうさまでした。」

10話 訓練

二人が急いで広場へ行くと、もうみんな揃っていた。

「よし！全員そろってるな！みんな、ちよつと並べ！」

みんなカイの言う事をよく聞き、整列する。

…カイがみんなのリーダーなんだな。

「改めて紹介する。俺の隣にいるのがユージだ。これから、しばらく俺たちの指導をしてくれることになった！みな、挨拶だ！」

すると、みなが大声で、

「よろしくお願いします！」

と言った。ユージはたじろいだが、

「ユージです。これからよろしくお願いします。」

と挨拶した。

「試験は16歳にならんと受けれんと言ったな？正しくは、試験の1か月前の試験の申し込日に16歳になってるやつだけが受けれる。この中で、今度の試験を受ける資格があるのは、俺とこの、ミン、キース、マーフィの4人だ。みんな同い年だ。一応、今度の試験をみんな受けるつもりでいる。」

ミンとキースとマーフィが笑って頭を軽く下げる。

「けど、みんな同じように訓練してくれればいい。…じゃあ、これからどうしたらいい？俺達。」

「そうだな…とりあえず、ネーチェから普段やってるようにやってくれるかい？しばらく様子を見てみたい。」

「わかった。」

カイたちは倉庫からネーチェの棒を出し、白い服を着ると、それぞれペアになって組み合わせはじめた。ユージはそれを10分ほど見ていたが、やがてみんなをやめさせた。

「カイ。ちよつと聞きたいんだけど。」

「なんだ？」

「試験の時は、これじゃなくて、試験用の剣でやるんだよね？」

「ああ。」

「その時もこの白い服を着るのか？」

「いいや。」

「じゃあ、どうやって点数を決めるんだ？ルールはあるのか？」

「試験官が、動きや相手を倒した時間、その技なんかで決めるらしい。ルールは相手の急所さえ避ければOKだ。」

「そうか。わかった。」

ユージはみんなに向きなおると言った。

「みんなの弱点が分かった。ネーチェにこだわりすぎている。」

「こだわりすぎているとは？」

カイが言った。

「服に黒い汚れがつけば気持ちがいい。だから、汚れをたくさんつけてやるうと思う。だから、棒を振り回し動きがどうしても大きくなる。けど、本当の戦いでそんな大きな動きをすれば、逆に隙を作ってやられてしまうことになる。だから、動きは最小限にしなければいけない。それに、剣ではほんの少し傷つけるだけで十分だ。そうすれば、痛みで相手が一瞬ひるむ。そこをつくんだ。…もつとも、優秀な兵士はそれくらいでひるまないが。それから、みんな相手をやっつける事だけを考えている。それで自分がやられてしまつては意味がない。少しでも傷つけられないように、もつと必死で逃げなければ。これは、ただの棒だ。けれども、本当の剣だと思い込む必要がある。」

みんなは、静まり返って聞いていた。

「お前は本物の剣でやりあったことあるのか？」

カイが聞いた。

「ああ。昨日風呂に入ったときは、もう暗くなつてたからみんな気がつかなかったんだな。」

そう言つとユージは自分の服をまくりあげた。腹も背中も傷だらけだった。それを見てみんな驚いてざわめいた。

「リート国では訓練でも真剣を使う。だから、訓練中でも怪我はつきものだ。誤って死亡事故がおきるなんて事も、しょっちゅうだ。」
カイは昨日、ユージは殺されたくなければ、相手を殺すしかない
と平然の言っていたのを思い出した。

「だから、昨日ネイル様ともあんなに冷静にやりあえたんだ。訓練
用の剣とはいえ、マスクも防護服もつけずにやりあうなんて…って、
怖くて仕方がなかったけど。」

マーフィが言った。

…そういえば、昨日そんな事言ってたな。

「マスクに防護服って？」

ユージはカイを見た。

「試験用の剣で試合を行う時は、事故防止のためにマスクと防護服
の着用が義務付けられている。もともと、兵士になったら普通に訓
練でも着用する。ネーチエの大会でも着用するが。」

「なぜ、それを使用しない。」

「まあ、ただの訓練だし…それに今は夏で暑いからな。」

ユージの顔が急に怖い顔になった。

「…今からマスクと防護服を着用しろ。」

恐ろしく低い声でユージが言う。あまりのユージの怖さに、慌て
てみんな倉庫にマスクと防護服を取りに行き着用した。

「カイ。その棒で俺を思いきり殴り倒すつもりで来い！」

カイはユージの真剣な顔にひるむ。

「お前はマスクと防護服つけないのか。」

「いない。」

カイはためらいながら、棒を持って構えた。ユージも構える。カ
イがものすごい勢いでかかってきた。ユージがよける。カイの右腕
を狙おうとする。カイは右腕をすばやくしたにおろし、転がる。ユ
ージがカイをおいかけて、上から棒を振り上げる。カイが必死にな
って転がって逃げる。ユージは少しふらついた。その隙にカイが立
ちあがり、ユージを狙う。するとユージは頭を下げ、左腕で思い切

りカイを叩いた。カイはそのまま後ろに倒された。ユージはその上におおいかぶさり、カイののどめがけて棒をつきさそうとする。

やられる！！

カイは思わず、身を固くして、目を閉じた。しかし、棒はのどには当たらなかった。しばらくして恐る恐る目を開ける。棒はカイののど元の寸前で止まっていた。ユージはものすごい形相でカイを見ていた。カイはそのまま固まったように動けなかった。

…殺されそうだとはこういう事なのか。

ユージが棒をカイののど元からはずし、立ち上がった。カイもおずおずと立ち上がりマスクを取る。

「わかったか。相手をやつつけるには、別に墨をつける必要はない。相手を倒せばそれでいいんだ。それにお前、マスクと防護服つけていたから、余裕があつたろ。」

「あ、ああ。」

「だから、大胆に俺にかかってこれた。昨日とは別人だったよ。」

ユージがニコリと笑って言ったので、カイは思わず笑顔になる。

「さあ、これから、みんな同じように真剣を持っていて、相手を何なんでも倒すつもりでやるんだ。ルールは急所をさけるだけなんだ。つまり、それ以外は、どんなに卑怯な手をつかってもいいということだ。蹴ったり、棒をはいたり。」

すると、それを聞いていたマーフィが答えた。

「確かにネーチェの大会では、みんなそうやってる。」

「なら、大会で見たような技も使ってみるんだ。後、ペアはどうも気の合うもの同士で組んでいるようだが、それでは上達しない。自分と同じくらいのレベル同士で組むんだ。それはわかるか？」

みんなが頷く。

「じゃあ、それでペアを組んで、組み合いを続けてくれ。」

それぞれ、ペアを変えて戦いはじめた。ユージはそれを見ながら、

一人一人注意したり、ペアの組み合わせを変えたりした。30分も続けるとみんなヘトヘトで座り込んでしまった。カイだけが、多少はしんどそうにしていたが、そのまま立っていた。

「なんだ、もうみんなダウンなのか？みんな、体力がなさすぎるぞ。」

みんな、声にならないを出した。

「…カイ、試験の体力測定には、腹筋や背筋などもあると言っていたな？」

「ああ。」

「じゃ、それも、これからもつとやるんだ。今までの3倍はしろ！それに足腰も弱い。もつと走りこまねば。みんな、体力測定分野は、最低カイのレベルになるように努力すように。」

「ええ……。カイのレベルって…試験じゃ満点レベルだって、センさんが言ってたよ。」

ミンが情けない声で言った。

「そうなのか？」

ユージが驚いてカイに聞いた。

「ああ。俺は剣も弓術も馬術も自信がないから、体力測定で点をかせようと思ってさ。」

「ふーん。じゃ、みんな満点を目指せ。」

全員が不満の声をあげた。

「合格したくないなら、好きにすればいい。」

と、ユージが言うともな黙りこくった。

「あと、剣では瞬発力が必要だ。それには、長距離ではなく、短距離ももつと練習しなくてはいけない。しばらく休憩したら行っ。」

休憩はほんの10分ほどだった。ユージはみなを2列に並べて、20m走をさせた。1組がゴールにたどり着いたら、次の組が発し、その繰り返し。ゴールにたどり着いたら、すぐにスタートに戻って、順番を待つ。それにはユージも加わった。延々と1時間ほど繰り返し続けた。ユージだけが最初から最後まで同じ速さで走った。途

中でかなりスピードが落ちたもののカイはなんとか走っていたが、それ以外は最後の方は走っているのか歩いているのか分からない状態となった。

終了すると、さすがのカイも地面にあおむけになって寝ころんだ。ユージだけが、肩で息はしていたが平然と立っていた。それを見てカイが言った。

「お前…なんだ、その体力…」

「何いってんだ。リート国じゃ、こんなの普通だぞ。もっと厳しい訓練もさせられた。もっとも、それは訓練じゃなくって、いじめだったんだけど。」

カイはユージを見上げた。そしてまじまじと見た。大勢の兵士の中でみなによってかかっていじめられているユージを想像した。

…なんて自分は甘かったんだ。ここや学校にいる連中の中で一番上手だとひそかに自慢に思っていたが、同じ穴のムジナだったのか…

「じゃ、次は弓矢だ。」

「ええ？休憩なし？」

みんなが驚いた。

「順番でやるんだから、まっている間に休憩できるだろう。」

ユージがさつさとの的の方へ歩いて行ったので、みんなは体にムチを打ってユージについていった。それでもユージはみんなをちよつとは休憩させてやろうと、ユージだけで弓矢を用意し、弓矢をじっくり見て、いくつか選んだ。そして、みんなに言う。

「まず、半分の位置からはじめる。」

みんな疲すぎている返事もできなかった。

「カイ、とりあえずやってみて。」

カイが弓矢を構え矢を放つ。的の上の端にあたった。みんなパラパラと拍手した。

「矢を持ってちよつと構えてみて。」

とユージが言ったので、カイは構えた。

「ほら、背筋が曲がってる。だから、矢もそれるんだ。背筋はまっ

すぐ。それに变なところに力入っている。なんでもそうだけど、必要のところ以外は力を抜くように。今のこの姿勢を覚える。」

カイは頷いた。

「じゃ、そのまま矢を放せ。」

カイはそのまま、ポーンと矢を楽に放した。すると、矢がど真ん中に刺さった。疲れてうつろだったみんなの目がとんき輝き歓声をあげた。

「とにかく、弓矢の基本は、まず姿勢だ。そして、まっすぐに矢を射抜く感覚を身につけるんだ。俺が選んだ弓矢はくせがない。だから、きちんとやれば、かならず中心を射ぬけるはずだ。一人づつ順番にならんで。一人一人直接指導する。」

それを聞いて、みんな我をも先に並ぶ。最初に並んだのは、あの唯一の女性だった。

彼女が構えたところで、ユージは姿勢のチェックをする。

彼女が、矢を放つ。すいこまれるように的の中心に矢があたった。彼女は大喜びで飛び跳ねた。

そうやって、順番にユージが指導すると全員が的の中心にあてることができた。

2回転したところで、ユージはみんなに言った。

「では、これからしばらく、今俺が言ったことを思い出しながら、分かれて練習しろ。」

的は3つあったので、みんな分かれて練習した。その間、みんなをみながら、気になった人だけをユージは注意したが、ほとんど見ていただけだった。みんな的には当たるものの、中心には当てられなかった。1時間ほどすると、ユージはやめさせた。

「まあ、最初はこんなもんだろう。明日からは同じような感じでやる。学校以外では、俺がいいというまで、絶対これ以上遠くからはやるな。わかったか？」

みんな元気よく返事した。

「じゃ、広場を10周走って終わる。」

「ええ〜！また走るの？もうヘトヘトだよ〜。」

みんなが口ぐちに言った。

だが、ユージが怖い顔でみんなをにらんで走り出したのでみんな黙ってユージについて走り出した。

訓練が終わった後は、みんなで昨日と同じように温泉につかった。するとみんな今度はユージの体をこぞって見にきた。

「ほんとに傷だらけだな。」

ミンが言った。

カイがユージの腕を触る。

「しかし、お前、すごい筋肉だな…まったく贅肉というものがない。」

「ちよつと！カイ！触るのやめてくれ！こんな体になりたいんだったら、今日の訓練をやってればそのうちなるよ。」

「ほんとか！…！」

みんなが顔を乗り出して聞いた。

「ああ、たぶん…」

「よー！明日からもっと頑張るぞー！」

マーフイが大声で叫んだ。みんな、こぶしを上突き出し、おおー！と答えた。ユージはみんなの異常な熱に圧倒されどうしてよいか分からず困った。

風呂に上がって、またみんなを門まで送って行くと、例のただ一人の女性が言った。

「なんだか、すぐお風呂で盛り上がってたわね。なんだか、うらやましいな。誰か女の子が来ないかなあ…いつも私は一人で入ってるんだもの。」

「なんだよ。だったら、ジェッシーも俺たちと入ったらいいじゃないか。俺たちみんな大歓迎だぜ！」

キースが言った。すると、ジェッシーが顔を真っ赤にした。

「な、何よ！！！本当に、私が乗り込んでいったら、驚くのはそちの方じゃないの？」

全員が思わぬ攻撃に真っ赤になって黙りこくった。

「ふん！みんな！帰るわよっ！」

ジェッシーがつんとして歩きだすと、みんな慌ててついていった。門から出るときにジェッシーがちらつとユージとカイを振り返り、舌を出して笑いながら手を振る。

ユージとカイは慌てて手を振りかえした。

「…あの子、ジェッシーっていうのかい？かわいい子だな。あんな子も兵士になるなんて驚きだ。」

「そうだろう？…めちゃくちゃかわいいからさ、俺たちみんなのアイドルなんだ。」

夕食の時間、カイはずっと今日の訓練の話を一人でネイルたちに詳しく話して聞かせた。ユージは恥ずかしくて聞いてないふりをして、黙々と食べた。

「とにかく、ユージときたら、とんでもなく厳しいんです！あれを経験したら学校なんか屁です！ネイル様やセンの訓練ですら足もとにも及びません！」

「ほお、そんなに厳しいのか。みんなよくついてたな。」

ネイルが感心していった。

「ネイル様やセンだと、上手で当たり前だと思いますが、ユージは俺達とほとんど年が変わりません。だから、ユージほどではないにしろ、自分たちにもなんだかできるような気がするんです！それにユージはものすごく教えるのがうまいんです。ユージの言う通りにやって、的の中心を射たときは感動したぞ！」

カイが興奮してユージの顔を見て言った。

「いやはや、お前はどれだけ私たちを驚かせたら気が済むのかね。」
ネイルがうれしそうな顔を自分を見つめる。マーサーもセンもだつた。

「いや…あの…」

ユージは頭をかきながらそういつただけだった。ここで、大したことないとか、なんとか言っと、カイにぶん殴られるに違いなかった。

「とにかく、厳しかった！！ヘトヘトだ！夕食が終わったら、仕返ししてやる！今度は俺がお前を教える番だ！覚えとけ！」

そうだ！今日の夜から勉強を教えてもらうんだ！すっかり忘れてた！

ユージはカイに厳しく訓練したことを後悔した。

夕食が終わり、カイはユージの部屋に来ていた。

「お前、実技試験ではほぼ満点がとれそうだな。」

「じゃあ、あと100点で合格できるんだ。」

「何いつてるんだ。俺達が目指すのは、1等兵だぜ。」

「ええ？いきなり1等兵？そんなの無理だよ！」

「無理なもんか。だいたいお前なんか、ネイル様に近衛隊でも通用するかもしれないって言われたクセに、1等兵目指さなくてどうする。」

「…でも、実技はいけても、勉強がさあ…」

「とにかく、俺は今度の試験で合格してたぶん1等兵になる。」

「どうして、そんなに自信たっぷりなんだ？」

「俺は筆記試験は得意だからな。この間過去の問題やってみたら、全教科満点だった。だから、俺は実技で足を切られないようにさえすれば合格だ。体力測定でも満点だとすると、あとたった200点だからな。余裕で1等兵になれる。」

ユージはそれを聞いてむっとした。

「そんな考えだから、剣も弓矢も上達しないんだ！」

カイがニヤリと笑う。

「その言葉、そっくりお前にかえすぞ。」

ユージはしまったと青ざめた。

「…けど、筆記で満点だなんて、どうしてそんなことがわかるんだ？」

「ネイル様の家の図書室には、過去の問題がそろってるんだ。好きに見ることが出来る。みんながここに来るのはそういう理由もある。他にもたくさん本もあるしな。」

「へえ…そうなのか。」

「だからな、お前も1等兵を目指せ！わかったな！」

「う、うん。」

ユージは急に心細くなってきた。

「でも、まあ、可能性は十分あるぞ。まだ、3か月もあるからな。筆記試験で300点も取れば余裕だ。医学と地学はなんとかなりそうだと言っていたな。これで、80点づつとるとして…他の3教科でそれぞれ50点もとれば大丈夫だ！ま、もつともこれはこれで、お前には満点をめざしてもらおう。」

「分かった…」

としぶしぶ返事するしかユージにはできなかった。

まず数学からカイは教え始めた。教えるというより、はじめは計算式の表を渡され、それを覚えさせられただけだった。とりあえず、20までの足し算だった。そのあとはひたすら、カイが問題を言つて、ユージはそれに答えるだけだった。さすがに1時間もすれば、すらすら言えるようになった。

「よし、今日は終わりだ。明日は引き算もやる。」

ユージはどつと疲れて机に伏せる。

「お前、歴史と地理は本を読んだと言っていたな。どのへんをやった？」

「ほんの初めの方だよ。」

「じゃ、アイカ国が建国される前の、元の大きな国の名を何ていう？」

「ええと…確か…何だったかな。」

「じゃ、アイカ国が建国されたのは何年前？」

「ええと…12…」

「…やっぱりな。じゃ、次、地理。お前と出会った川。あれは国境だと言ったが、何という。」

「…」

カイがじろつとユージを見た。

「お前、ただ読んだだけだろう。」

「う、うん。」

「それで覚えられるか！何度も何度も暗唱するんだ。そして指書きする。」

「指書き？紙に書かないのか？」

「紙に書いた方がいいんだけど、もったいないから使わない。たまにきちんと書けるか確認に使うくらいで十分だ。」

「わかった。」

「…ちよつと待ってる。」

カイが突然部屋から出て行ったかと思うと、本を4冊もって戻ってきた。

「これ、俺の教科書だ。やる。」

ユージがそれを手にすると、カイが言った。

「それ、開けてみる。」

ユージは開けてみてびっくりした。教科書にいくつも線が引いてあったからだ。数学にいたっては、何やら丁寧に解き方がかいてあった。

「試験つて、重要なところしか出ないんだ。王の名前も全部覚える必要はない。さすがにそんな事は俺もできない。何か記録を残したとか、改革をしたとか、そういう王が質問にされる。地理も医学も地学もほとんど毎回同じ問題だ。その重要なところに線が引いてある。そこだけを覚える。毎日歴史は3ページづつ、地理は1ページでいい。それを午前中に覚えるんだ。それを俺は夜にテストする。そして、土日に1週間分をまとめて復習のテストをする。医学と地

学は大丈夫そうだと言っていたから、普段は自分でやれ。これは2ページづつでいい。これも土日にテストをするがな。わかったか？」
「う、うん。」

カイの教科書を見て、どれだけカイが努力をしていたのかが分かった。過去問題で満点だという話もうなずけた。

「で、でも、これいいの？いくら満点でもさ。」

ユージは、カイの教科書を持ってカイに言った。

「ああ。俺は近衛隊の教科書で勉強してるからもういらないんだ。ユージは目を丸くした。

「とにかく、数学って、できるようになるまで、結構時間がかかるんだ。おれはさっき50点と言ったが、最悪数学は20点でもいい。他の教科はわりと短期間でできるようになるから、それをしっかりやるようにすれば、1等兵になれると思うぜ。」

「じゃ、数学やらずに他の教科だけやった方がよくない？」

「数学やるとさ、頭の回転が良くなるんだ。」

カイが右手で頭を指差していった。

「頭の回転？」

「そう。物事をすばやく考えたり、早く理解したり。集中力もつく。だから、今度は点をとれないかもしれないけど、頭のトレーニングだと思っただけでいい。まあ、しばらくは俺がつきつきりでやるから、今は、一人でやる必要はない。」

「分かった…。なんだか、いけそうな気がしてきた。」

「だろ？じゃ、もう10時だし、もう寝る。今日、俺ヘトヘト。」

「うん。そうだ！いつも何時に起きて走っているんだ？」

「5時半に起きてる。」

「分かった。じゃ、また明日。」

カイはあくびをしながらユージの部屋を出て行った。

カイが出て行くと、ユージも大きなあくびが出た。

…今朝、早かったもんな。…俺ももう寝よう…

ユージはベットにもぐると灯りを消した。

11話 入隊試験

それから、ユージは、本当に毎日忙しい生活を続けた。そして、あつという間に1ヶ月がたつ。すると、このネイルの館である変化が起こりはじめた。若者がぼつぼつ増えだしたのだ。1か月半を超えるころには30名近くになった。

「どうしてこんなに増えてきたんだ？」

「あのな。ここで訓練している全員が、学校でみるみるうちに腕をあげ、トップの成績をあげるようになったんだ。みんなさ、お前のおかげだと触れまわってるんだ。だからさ。」

「……そうだったのか。」

ユージはみんながそんなに学校で成績があがっていたたのかと、胸がジーンときた。

「しかも、なんだか知らないけど、馬術までできるようになったぞ。たぶん、体力がついてきたからだと思う。」

「へえ……そんな事ってあるんだ。」

それはユージにも驚きだった。

「でさ、今度の試験でみんなそろって1等兵になりそうな気がするってきた。みんな、家じゃ家族がうるさくて勉強に集中できないといつて、朝早く学校に行つて勉強するようになった。それがどうもよかったらしい。筆記のミニテストでも軒並みんな高得点を出してさ。授業も真剣に聞くようになって、先生に質問しまくってる。先生もびっくりさ。」

「……俺も、もし試験が受けれたらみんなと一緒に1等兵になりたいから、勉強頑張ろうつと。」

「そうだな。みんなで1等兵になればいいな。」

そうして、さらに2か月がたったある日の夜、ユージはネイルに

呼ばれた。

「ユージ、喜べ。次の試験、受けられることになったぞ。実はな、昨日訓練学校の校長が見学に来ていたのだ。ユージの実力を見て驚いておったぞ。」

「ほ、本当ですか？」

ユージはうれしくて泣きそうになった。

「そうだ。それに、これだけ短期間の間に、これほど生徒を上達させることは、今まで誰もできなかったからな。学校の講師よりお前の方が上だな。」

ネイルは自分のことのように自慢げに大笑いした。

「だから、今度のお前の試験を期待しておるぞ！試験に合格すれば、お前の監視もなしだ。晴れて自由の身となる。」

「わかりました！ありがとうございます！絶対1等兵になれるように頑張ります！」

ユージははちきれんばかりの笑顔でネイルにそう言うと、急いで部屋にいるカイの元へ走った。

「カイ！今度の試験受けられるってさ！！昨日訓練学校の校長が見に来てたんだって！」

「そうか！よかったな！！！」

カイの顔もぱつと輝く。

ユージはこの日から今まで以上に勉強に励むようになった。

その週の土曜日、カイに言われてユージは筆記試験の時と同じように時間を計って、過去の問題をやってみた。最後の数学はさっぱりで、早めに切り上げ、訓練を取りきっているカイの所へいく。

「なんだ、お前、えらく早いじゃないか。」

さっぱり数学がわからなかったというと、大笑いしてユージと交代し、答え合わせに行った。しばらくするとカイが大急ぎで戻ってくる。笑顔だった。

「おーい！！すごいぞ！！！！347点だ！！！！これなら、余裕で

1等兵だぞ！」

「ほ、本当に、そんなにとれていたのか？」

みんなが自然と集まる。

「ああ、歴史67点、地理73点、地学89点、医学94点、数学24点の計347点だ。」

ユージは数学の点を聞いてガクつとする。

「そうかあ……やっぱり数学、そんな点かあ……」

「でも、これならまだ1カ月あるし、ひよっとしたら数学以外は満点を狙えるかもしれない！こうなったらお前、首席を狙え！」

「しゅ、首席？」

「トップ合格だ。この町の訓練学校のトップじゃないぞ。アイカ国入隊試験受験者全員の中でのトップだ！900点を超えることが出来たら、それも夢じゃない。さっきの点数に実技の点数を足してみる。馬術がどれくらいできるのか分からないが、少なくとも450点は可能だろう。すでに797点だ。あと100点なら、十分射程圏内だ。」

それを聞くとみんなが目を輝かせて拍手をした。ユージの気持ちも大きく膨らむ。

「ま、俺も首席狙ってるからな。お前には負けんぞ！」

カイがそういうとみんなが、カイらしいと大笑いした。

ひよっとしたら首席になれるかもしれないとカイから聞いてから、ユージは数学を急にやる気になり、勉強の時間の半分は数学をやるようになった。

やがて2週間前になると、入隊試験を受けるものは筆記試験の勉強に集中したいといって、3時になると帰るようになった。試験を受けるのは全員ではなかったが、11月も深くなりさすがに寒さが増してきたためか、みんな一緒に帰って行った。はじめからここにいたメンバーだけが残って暗くなるまで訓練をつづけた。

そして、試験から1週間前の日曜日の昼、ユージはリイに乗って、カイと訓練学校に来ていた。

馬術の試験の会場を見学したいと学校側に申し入れていたのだ。学校について校長に挨拶すると校長は、

「見学だけじゃなくて練習もぜひして行きなさい。」

と言ってくれたので、遠慮なく練習させてもらうことにした。

会場には、ポールや柵が何個もあった。カイがまず手本を見せる。ポールを交互に通じ、柵でジャンプしてクリアする。

「じゃ、お前、好きなだけ練習しろ。」

カイに言われて、ユージはリイを走らせる。

はじめは、なかなか上手くいかなかったが、1時間も練習すると、難なくできるようになった。

「お前、馬術も満点だな。」

カイがうれしいような呆れたような顔で言う。

「そうだとうれしいな。じゃ、俺は実技で満点めざすよ。」

そうして、最後の日曜日がやってきた。その日は訓練も勉強も休みにした。

昼にネイルの館のメンバーを呼んで、明日の試験の壮行会をやった。それには、熊に襲われて大けがをしたフウもやってきた。

彼は怪我をしてから1か月ほどで家に戻っていったが、その後まったく姿を見せないの、ユージはずっと心配していた。なので、元氣そうな彼の姿を見てほっとした。

食事は今まで見たこともないくらい豪華だった。ユージはこれが本当に豪華というものか、と思った。

最後に明日試験を受ける5人が立ちあがって目標を一人づつ言いあう事になった。

「筆記試験を満点。実技試験で400点の計900点を目指して、首席を狙います！」

カイが自信満々の顔で言うと、みんな、その顔を見てカイらしいところり笑った。

次はミンだ。

「なんとか2等兵を狙います。」

今度はキースが立ち上がる。

「俺も2等兵を目指します。」

そして、マーフィも立ち上がり、小さな声で

「はじめは、とりあえず合格したらいいと思ってたけど…3等兵を目指します。」

と言う。

すると、カイがものすごい形相で怒りだした。

「何いってんだ！お前ら！十分1等兵が狙えるだろ！俺たち全員、1等兵が目標だ！わかったか！」

「わ、わかった。1等兵目指すことにする。」

3人はカイの剣幕にたじたじになる。

一方それを聞いてユージはため息をついた。

「…カイ、先に言わないでくれよ。」

「す、すまん。じゃ、次ユージ。」

カイは照れて咳払いをしながらいった。

ユージは立ち上がり背筋を正す。

「俺も1等兵が目標です。実技で満点、筆記試験で400点の90点以上を目指して、カイを押さえて首席になります！」

「なんだと！俺が一番だ！」

カイが立ち上がって怖い顔でユージをにらみつけた。

「何だよ。首席を目指せて言ったのお前じゃないか。」

「そうだけど、なんだか腹が立つ。」

ユージはカイのわがままぶりに頭が痛くなった。

「ユージ、カイなんか、まともに相手にしてたら、無駄にエネルギー使っただけよ。ほっといたらいいのよ。」

ジェッシーだった。ユージを見てニヤリとしている。

あまりにも的確な意見に思わずユージは噴出してしまった。すると、みんなもその通りだと言って大笑いし始める。カイ一人がしばらくふてくされていたが、そのうちみんなと笑いだした。

次の日の月曜日がやってきた。

筆記試験の日だ。

朝8時に家を出て、歩いて学校へ行つた。8時半前に学校につくと、100人近くの人があった。ユージはその様子に目を丸くする。

「こ、こんなに受けるのか？」

「ああ、前にもいったろ？筆記試験だけを受けるやつもいるからな。明日の実技になったらガクツと人数が少なくなるよ。確か、17名だつて聞いた。今回は少ないんだ。普段は40名くらいはいるんだけど。」

すると遠くの方で誰かが笑顔でユージとカイに手を振っているのを見つけた。

ミン、キース、マーフィだった。すぐに、二人は3人の所へいった。

「あゝ、俺、昨日緊張してなかなか眠れなかったよゝゝゝ。」

キースが青い顔で言う。

「俺も。」

と、ミンとマーフィ。

「なんだ、お前らなさけないな！俺はいつも通りぐっすりだよ！な、ユージもだろ？」

「いや、俺だつてなかなか寝れなかったよ。数学が心配で心配で…」

「…さすがだな。カイ。ぐっすりだなんてさ。」

キースが呆れたような尊敬するような複雑な顔を見せる。

そのまま、5人である事ない事を話あった。みんな、緊張しているのか饒舌になっていた。

そうこうしている間に、教室が空けられ受験生は受験番号順に教室へと入って行く。4つの部屋に分かれていたが、5人とも同じ部

屋だった。

教室に入って席に座る。机には紙が置いてあった。あたりは静まり返り、ただ試験が開始されるのをまつた。ユージはこの時間が一番長く感じた。

やがて、試験官が5人ほど入ってきて、所定の位置につく。一人が前の席で、他の4人は教室の隅の席だった。4人は監視役だった。

試験が始まった。

まず、歴史だった。前に座っている試験官が問題を読み上げる。ユージはその答えをひたすら書いていった。部屋にはペンを走らせる音と、試験官の声だけがする。

そして歴史が終わり、地理・地学が行われた。

昼食の休憩になる。

5人で集まって、紙にくるんで持ってきたサンディを食べた。カイ以外は試験の出来に自信がなく無口だった。カイ一人だけが笑顔満面でにこやかに一人で話していた。

すぐに昼の部が始まり、医学・数学に挑む。ユージは最後の数学にどきどきしたが、カイに言われた通り、難しい問題は捨てて、自分にできそうな問題だけをしっかりとやった。

「では、終了。」

試験管のその一言を聞くと、みんなため息をついてペンを置いた。

5人はそろって、ネイルの館へ戻った。

マーサーがお茶とお菓子を用意してくれた。みんな疲れていたの
で、無口でお菓子をほおぼる。

「みんな、どうだったの？」

マーサーがいつもの笑顔で聞いた。

「…まったく、自信ないです」

ユージが暗い顔でそう言う。

「おい、おい、そんな情けないこと言くなよ！」

「…俺だってそうさ。自信満々なのは、カイだけだ。」

キースがぼそつと言った。妙な沈黙が走る。

「ふふふ。考えるだけ不安になるから、みんな軽く運動してらっしゃい。体を動かせば、つかれて夜は何も考えずに寝れるわよ。」

マーサーがそう言ったので、5人は広場へ向かった。

他のメンバー8人がネーチェをやっていた。5人を認めると、集まってきて試験のことを聞いてきた。大まかに話を終わると、やがてみんなで走り出す。

走りながらユージがカイに聞いた。

「なあ。試験が終わった後は、学校はどうなるんだ？」

「1か月間休みさ。その間、学校側は、試験の丸付けをしたり、新入隊員の配属を決めたり、講師が休暇をとったりするからな。昼から通常通り兵士が練習してるだけだ。だから、1月の10日から授業が始まるまで休みさ。」

「ふーん。みんなはこれからどうするの？ここにはもう来ないの？」

「家の手伝いをしたり、ここに来たり、それぞれさ。」

「じゃあ、俺はもうお役御免なのか？」

とユージが言うと言った。

「そんなのヤダよ！ユージが兵士として配属されるまで、続けてくれよ！」

「…そうだな。せつかくここまでみんなレベルが上がったんだ。ここでやめちゃうと、体がにぶっちゃう。続けてやろっぜ。」

カイもそう言った。

「そうか…」

ユージはちよつと考えた。

「じゃあ、午前中は馬で遠出しなにか？それに、狩りの練習もしよう。石投げのコツも教えてやる。で、午後からいつもどおりの訓練をする。」

「賛成！」

みんな口ぐちに言った。ユージは、まだしばらく、みんなとこうやって過ごせるんだ、と思うとうれしかった。

次の日になった。いよいよ実技試験の日だ。

学校へ行くと、カイが言っていたように、人が少なくなっていた。試験の開始は10時からで、それまでの間、それぞれ準備運動をしたり、馬術や弓術やネーチェをしながら待機した。ユージたち5人は何をやっても注目の的で、チラチラとみんなが見られ、なんだか5人ともいい気分になった。

やがて、10時になり、体力測定が始まった。いきなりランニングだった。5人はあつという間に他を引きはなし、5人で先頭グループを形成しながら走った。後2キロになったところ、ユージが一人飛び出した。そして、ダントツでゴールした。カイたちは、それにはついて行かず、そのまま自分のペースを保って走り、しばらくしてから同時にゴールした。他はずいぶんしてから、バラバラに入ってきた。みんな、走った後、その辺に苦しそうに寝転がっていたが、ユージたちは平然と笑いながら雑談していた。

そのあと、腹筋・背筋・腕立てを5分間に何回出来るかのテストだった。ユージは最後まで平然とやり続け、カイ達は最後に苦しそうな顔は見せたものの最後まで続けた。

だが、他は全員5分続けることができなかった。そして、柔軟性や反発力のテストが行われた。すべてユージがダントツで、カイ達がそれにつづき、他は散々な結果だった。午前の部が12時すぎに終わり、5人は固まって昼ごはんを食べた。みんな興奮していた。「ユージはさすがにダントツだったけど、俺達も頑張ったよな！」

ミンが言った。みんな激しく頷いた。ユージはみんながあまりにも素晴らしいかったので、涙が出てきた。それに気がついて、カイがなかった。

「何だ。お前泣いてるのか？本当に、お前よく泣くなあ。」

「だって、みんな本当にすごかったから……」

すると、マーフィが言った。

「ユージ、泣くのはまだ早いぜ！昼からの剣術と弓術、これがメイシンドかな。これがうまくいったら、その時こそ泣いてくれ！」

「うん。そうだな。」

と言いながら、ユージは必死で涙をこらえた。

昼からの部は、まず、馬術だった。ユージはかるやかにこなし、他の4人も多少時間はかったがミスすることなく出来た。後の受験生はやはり、ほとんどがどこかでミスをしていた。そして、弓術だ。ユージは20本すべての矢を中央にあて、100点満点だった。カイとマーフィが75点。ミンとキースが70点で、他は40点くらいが多かった。そして、いよいよ、剣術になった。200点も配点あるため、この点数で合格の是非がほとんど決まる。そのため、受験生全員が緊張し、一言も話さず、会場は緊迫した雰囲気につつまれた。

みんながマスクと防護服を身につけると、順番に名前が呼ばれ、剣が渡される。そうして、1等兵が相手となり組み合いをした。みんな、あつという間にカタをつけられる。

……あれで1等兵なのか。……なるほど。あれなら勝てそうだなぞ。

ユージはそう思うと早く自分の番にならないかと思った。

やがてユージたち5人だけが残る。すると、相手が別の1等兵に変わった。みんな少し驚いたが、自分たちが見込まれているから、体力のある兵に変わったのだと思い、逆に闘志を燃やした。ミンが呼ばれた。ものすごい気合いで挑み、迫力のある組み合いを見せた。なんと5分たつても終わらなかった。そこで試験官が合図をしてや

めるように言った。キース、マーフィ、カイが順に呼ばれて、組み合いをする。みな、みんな同じように5分たっても終わらず試験官に言われてやめた。その間、ユージはみんなの様子にハラハラしたり、よし！とガッツポーズをとったり、自分のことのように応援した。

そして、いよいよユージの番となった。注目の一戦を前に、会場の緊張度が増す。相手をする兵がまた変わった。そして、ユージの相手をするらしい兵がコートを脱ぐ。その瞬間、まわりが息をのむ音が聞こえた。

「ユ、ユージ！あ、あれ、近衛隊だ！！あの真紅の服は近衛隊の服なんだ！現職の近衛隊が、入隊試験で剣術の相手をするなんて聞いたことがない！うわっ！！腕に4本の白い線が入っているじゃないか！」

「4本の白い線が入っていたら何なんだ？」

「近衛隊長官の印だ！！今年の9月に近衛隊長官なったばかりのシヨーだ！前回のネーチェの全国大会で優勝してる！」

ユージは信じられなかった。マスクと防護服を着て準備を始めた近衛隊を見た。きつとネイルがユージのために用意してくれたのだろう。

…よし…近衛隊長官相手に、どれだけ自分が通用するのか、試してみよう。

ユージは覚悟をきめて、前へ出た。シヨーも前に出て来て、ユージの前に立った。二人は向い合って、おじぎをした。

「では、はじめ。」

試験管が合図をした。

二人を身がかがめ、剣を構えた。ユージはマスク越しに、ネイル以上の殺気を感じた。

ユージは武者ぶるいがした。

…さすが、現職の近衛隊長官だ。

30秒ほどそのままお互い見つめたままだった。やがて、シヨ
ーが動いた。ユージはすばやく反応してよける。ユージは驚いた。
…なんて、動きが早いんだ！

また、二人の睨み合いとなった。今度はユージから挑んだ。すば
やくシヨーがかわす。そこへユージが攻める。シヨーが剣を振り払
う。ユージは後ろへ飛んで逃げる。シヨーがすかさず剣についてく
る。ユージはのけぞってよける。

二人の対戦は5分たつても終わらなかった。全員が二人のあまり
の迫力に静まりかえる。

やがて、シヨーがユージの足を救おうとしたので、ユージはすかさ
ず、右足でシヨーを蹴り上げた。シヨーが右に体を倒しよける。ユ
ージもバランスをくずし倒れた。すると、シヨーは右に体を倒した
不安定な姿勢のまま、思いきり腕を伸ばす。シヨーの剣がユージの
左脇のすぐよこの地面に突き刺さった。シヨーも地面に倒れこむ。

試験官の終了の合図が響き渡った。

シヨーが立ちあがったので、ユージも立ち上がった。すると、も
のすごい拍手が起こった。受験生だけでなく、校長や試験官、他の
受験生の相手をした1等兵までが、ユージを見て笑いながら手を叩
いていた。シヨーがマスクをとった。

「ユージ君。今日、君と対戦出来て楽しかった。」

「私もです。…ですが、近衛隊長官と対戦出来るとは思ってもいま
せんでした。本当に、貴重な体験をすることができました。ありが
とうございました。」

二人は握手をした。

「ユージ君、来年にある、ネーチェの全国大会に出場してみないか
？君が出るなら、私も出ようと思う。また君と対戦したい。」

「そ、それは是非！！私もまた近衛隊長官と対戦してみたいです。」

「では、また来年に会おう。」

シヨールは笑ってユージに手をあげると、校長たちの所へ戻っていた。すると、受験生全員がユージにかけよってきた。ユージはもみくちゃにされた。みんながすごいすごいと目を輝かせて自分を見る。ユージは幸せいっぱいだった。

その後、5人は昨日と同じように、一緒にネイルの館に向かった。試験の結果は12月14日の日曜日10時より学校にて発表との事だった。ユージだけでなく、みんながその日が早く来ないかと思った。

館につくと、広場で訓練をしていたメンバーが走ってやってきて出迎えた。ユージ達がみんな笑顔だったので、うまくいったのだと全員が思った。

その晩の食事は、またごちそうだった。その晩は、ユージとカイは二人で大興奮して、今日の出来事を話した。シヨールとの組み合いの話の時には、ネイルもマールサーもセンも食い入るように話を聞いた。聞き終わると、3人とも、ユージならやってくれると思ったと、そろってユージを自慢し始めた。今回はかりは、ユージは自分がほめられているのが、まったく恥ずかしくならずに、誇りに思った。その日、二人はカイの部屋で夜遅くまで、話し込んだ。興奮して寝れなかったのだ。

次の日、二人はセンに起こされるまで朝が来たのに気がつかなかった。慌てて朝食をすませると厩舎へ行った。8時すぎには、みんながやってきた。熊で怪我をしたフウもやってきた。いつもの森ではなく、町の郊外の森へ行った。

9時にその森へ着くと、それぞれ狩りの練習をした。みんなが近づくだけで動物が逃げていくので、まったく狩りにはならなかった

が、みんな笑顔で何度も挑戦した。石投げの練習もした。これまたさんざんだったか、お互いをけなし合いながら、大笑いでやった。

最後にユージは見本で、弓矢と石投げで、鳥11匹とうさぎ6匹をしとめた。これは、みんなの分とマーサーへのみやげを渡すためでもあった。

喜びいさんで、ネイルの館に戻ると、すぐに昼食を食べ、訓練を始めた。フウはみんなと同じようにはできないので、時々休憩がてら、マネージャー役をかってでて、訓練のペースを取り仕切った。

最後には、ネーチェの試合をした。かわるがわるみんながよつてたかって、ユージと対戦した。さすがのユージもこれだけの人数を何回も相手にすると大変だった。そうして、訓練を終えるとみんなで大騒ぎして風呂に入った。夕食の後は、ユージとカイは図書室で勉強をした。近衛隊の試験に向けての勉強だった。カイがユージに歴史と数学がとにかく大変だと言ったので、ユージはその2教科を中心に勉強をすることにした。

12話 合格発表

そして、試験の発表の12月14日がやってきた。

ユージとカイは落ち着かず、9時半には学校についた。ミンとキース、マーフィも、もう学校にいた。5人は固まって、大丈夫かな、と口ぐちに言った。けれども、5人とも兵士にはなれるに違いないと確信していた。不安はまったくなかった。

10時前に、校長がまるめた紙を持ってやってきた。そして、それを掲示板にはる。そこには合格者の名前と点数と等級、それに配属先まで書いてあった。

合格者

1位	ユージ	実技500	筆記438	合計938	1等兵
配属先	エルパ隊				
並びにエルパ町訓練学校講師					
2位	カイ	実技392	筆記500	合計892	1等兵
配属先	エルパ隊				
並びにエルパ町訓練学校講師					
3位	キース	実技372	筆記417	合計789	1等兵
配属先	ミュール隊				
並びにミュール町訓練学校講師					
4位	ミン	実技369	筆記408	合計777	1等兵
配属先	センバー				
並びにセンバー町訓練学校講師					
5位	マーフィ	実技366	筆記410	合計776	1等兵
配属先	シーナ隊				

並びにシーナ町訓練学校講師

6位	カナ	合計643点	4等兵	7位	ヤーナ	合計639点
4等兵						

8位	ロック	合計627点	5等兵	9位	ランディ	合計616点
5等兵						

上記4名エルパ隊

それを見て、ユージたちは大声をあげた。

「みんな1等兵だ！！！」

「やったぞ！！」

みんな肩を抱き合って喜んだ。すると、カイが言った。

「ユージ、お前、名前の前にある星を見る！あれは首席のマークだ！」

驚いてユージはもう一度合格者の発表を見た。

ほんとだ。星のマークがついていた。

ユージは目がうるんできた。また、みんなにからかわれると思った。でも、ユージを誰もからかったりしなかった。みんなの目もうるんでいた。

やがて、合格者と筆記試験優秀者だけが残った。

筆記試験優秀者が、校長より合格証が渡される。彼らは、金一封も貰っていた。次に、5等兵の二人、4等兵の二人が合格証が渡された。その顔を見て、ユージは驚いた。後からネイルの館に来ていた青年たちだった。

そしてユージたちの番だ。5位のマーフィから順だった。そうして最後にユージが呼ばれた。

「ユージ君、おめでとう。見ての通り君は首席で合格です。938

点という数字は歴代4位の点数です。しかも、実技において満点というのは、記録に残る限りでアイカ国はじまって以来の点数です。ええ、もちろん入隊試験だけでなく、一般兵士の更新試験でも誰一人出してはおらぬのです。さすがに、近衛隊が受ければ満点はとれるかもしれませんが、彼らが一般試験を受けることはありませんからね。」

ユージは驚いた。

「ほ、本当ですか…」

「はい。」

ユージは自分の目がまたじんわり潤むを感じた。涙が出そうになるのを必死でこらえた。

「それから、カイ。君は次席です。彼がいなければ、君が首席でした。」

カイは、小さくガッツポーズをして喜んぶ。

「それから、3 5位もその3名です。」

校長がミン、キース、マーフィを見て言った。

「つまり、ここに今回のアイカ国軍入隊試験合格者369人中、1位から5位がそろっているというわけです。」

全員が驚いてお互いをみた。

「しかも、君たち全員、今回が初めての試験ですね。訓練生がいきなり1等兵になることはほとんどありません。本当によく頑張りました。よって、ユージ、カイ、ミン、キース、マーフィ。5名は特別に王から表彰されることとなりました。追って、王より詳細の手紙が届くはずですよ。」

そして、校長はまた賞状を手にする。

「校長の私からも、この5名に特別に表彰をしたいと思います。」

ユージはあわてて、

「私は、この学校には通っておりません！ただけません。」
とユージが言った。すると校長はにこやかに笑って言った。

「何をおっしゃいます。ユージ君、あなたがネイル様の館でこの者

たちを教えてくださいださなかったら、全員落ちていたかも知れないですよ。十分、表彰に値します。」

「ユージ。その通りだ。お前がいたから、みんなここまでやれたんだ。表彰されよう。」

カイが肩をたたいて言った。ユージはカイを見て頷いた。校長からみなに表彰状が渡された。その場の全員がユージたちを祝福した。「合格者には、入隊式の詳細を追って知らせます。では、これにて合格発表を終わります。」

校長が部屋から出て行った。

5人は急いで馬を走らせて、ネイルの館へ行った。ジェッシーやスコットやフウやその他のメンバーが門の外で、ユージたちが帰ってくるのをまっていた。

「全員1等兵だ！しかも上位5位独占だ！ユージが首席で、カイが次席。なんと、全員校長に表彰されたうえ、王にも表彰されることになった！」

カイが喜び勇んで言った。

みんながそれを聞いて、目をぱつと輝かせお互いに抱き合って喜んだ。その騒ぎを聞きつけて、ネイル達が家から出てきた。ネイルもセンも気になって今日は畑にいかず、ユージたちを待っていたのだ。そして、カイが結果をネイルたちに報告すると、全員が涙をためて、ユージたちに、おめでとうと言った。ミンとキースとマーフイは、両親に報告したいからとすぐ帰っていった。他のみんなも、いったん帰って昼を食べてからまた来るといつて帰った。

ユージとカイは部屋に行き、ベッドに寝転びながら、合格証と成績表をじっくり見ていた。

「おお！俺、剣術で145点もとってるぞ！剣術は100点をとるのが難しいんだ。体力測定95点か。ユージがいなかったら、体力測定は100点だったに違いない！」

「カイ、俺、数学63点も取れてる!!!」

「な、数学ってコツコツやってたら、ある日急に伸びるんだ。」

「うん。なんだか、数学、好きになった。」

「こうなったら、次の近衛隊の試験受けるぞ!」

「そうだな。」

ユージもすっかり気分をよくして答えた。

「近衛隊ってさ、みんな優秀だから、みんなが地理と地学と医学の3教科はほとんど満点とっちゃうんだ。まあ、一般兵士試験に毛がはえたような問題しか出せないからなんだが。でさ、それじゃあ選抜できないから、歴史と数学で恐ろしく難しい問題を出してくるんだ。だから、配点も違う。同じ500点満点だけど、歴史と数学は150点満点、地理が100点で地学と医学が50点づつ。だから、数学が得意になるとかなり有利になる。次の試験といったけど、最低1年は一般兵をしなくてはいけないから、次俺たちが受けられるのは再来年の8月だ。それまで1年と8か月、死に物狂いで勉強だ。まあ、ちょっとユージには短い気もするが…それに、まさか訓練学校の講師になるとは思わなかったからなあ。かなり時間の拘束をうちまう。さすがの俺もちょっと不安だ。」

「まあ、次は無理かもしれないけど、合格できるように最善の努力をすることにしよう。」

「ああ。」

そう話しているうちに、マーサーが昼ごはんができたと呼びにきた。昼ごはんを食べたら、すぐに広場にいつて、ランニングしながらみんなを待った。

やがて、みんながやってきた。それに大人も一緒にやってきた。

キース、マーフィ、ミンの両親だった。

「ユージさん、本当にありがとう。何とお礼をいつたらいいか。まさか、息子が1回目の入隊試験で合格するとは。しかも、1等兵で、さらに王からの表彰を受けるとは…夢にも思わなかった。いや、本当に何度お礼をいつても足りない。」

と口ぐちにユージにお礼を言った。

「いえ、みんなが頑張ったからです。」

と言ったが、誰もユージの話は聞いておらず、泣きながらユージにお礼を言うだけだった。

3人の親が帰ってから、ユージは人数が増えているのに気がついた。

「あれ、見たことない顔がいるな。」

カイが答えた。

「ああ、新メンバーさ。14名いる。まあ、俺たち5名はいなくなるからな。こいつらの訓練は、ジェッシーたちに任せようと思っている。」

確かに、ユージたち以外の最初のメンバーも驚くほど上達した。きつとみんな次の試験で合格できるだろう。ユージは人に教えることで自分も上達できたと思った。だから、ユージの変わりに彼らが教えるのは、彼らにもいいことだと思った。

昼からの訓練は、ユージたち5名だけで別に訓練した。ユージたちはすべてにおいてお互い競争した。どんだんから離れてどれだけ当てれるかを競争したり、試験の時と同じように、体力測定をやったりした。

次の日はものすごく忙しかった。午前中はエルパ市の市長の表彰を受け、昼食を招待された。昼からは、ユージとカイ、それに4等・5等に合格した他の4名と一緒に、学校で訓練している兵士に新入隊員として、挨拶をしにいった。

その夜、ユージとカイに手紙が届いた。現国王ザイルからで、表彰式の招待状だった。次の日曜日の11時から表彰式と書いてあった。せっかく首都ペネまで行くのだから早めに行って、観光しようということになった。キース、マーフィ、ミンにそれを伝えると

彼らも大賛成した。

5人は、みんなに見送られ17日の朝に首都ペネへ向かった。その日は宿に一泊した。

その晩に、ペネでは、カイが家でみんなの世話すると言いだしたので、ユージは顔面蒼白になった。

「だからあ、王といっても、普通のおっさんだよ。家だって、ネイル様の家とほとんど変わらない。王は、宮殿には住んでいないんだ。王宮の敷地内にある普通の家に住んでる。俺も小さい頃はそこに住んだ。宮殿はこの国では飾りだ。式典をおこなったり、他国から客を招くときに使用するだけだ。ああ、近衛隊の連中は、宮殿で結婚式をあげたりするな。」

すると、マーフィが言った。

「俺達だって、やっぱり王の家に世話になるなんて、緊張するよ。」

ユージはまだネイル様の屋敷にいたんだから、マシじゃないのか？」

「何言ってるんだ！リート国じゃな、王なんて、雲の上のはるかかなたの、神様みたいな存在なんだ！いくらこの国に階級がないっていったって、俺には考えただけでも恐ろしい。ネイル様が元国王だったって聞いた時どれだけ恐ろしかったか。カイだって、こいつが王子だってして、どれだけ恐ろしいと思ったか！！！！」

それを聞くとみんなが大笑いした。

「まあ、さすがにそこまで俺達は怖くないかな。」

ミンが言った。キースとマーフィもうなずいた。

「とにかく、もうオフクロには手紙を出しておいたから、断れないからそのつもりでいろ。」

ユージはしぶしぶ承知した。そんなユージの姿を見てカイがため息をついた。

「……いつとくけど、表彰式は立派な式典だから、当然宮殿で行われるからな。覚悟しとけよ。」

「ええ！そうなのか？」

ユージが飛び上がった。

「当たり前だろ！王からの招待だぞ！宮殿以外のどこでやるってんだ。」

ユージはめまいがした。

「はあ…そんなことになるなんて…」

そんなユージにみんながまた大笑いした。

「ところでさあ、ネイル様やセンさんが、あの年でまだあんなにお強いって事は、ザイル様やヤンネ様も、さぞかしお強いんだろうなあ。」

ユージが何気に聞いた。

「オヤジは王になってすぐに腰を痛めたから、激しい運動が出来なくなっただ。ヤンネ様もそんなオヤジに遠慮して、あんまり運動してない。…俺が小さい頃は、ヤンネ様、俺にだけは相手、してくれてたけどな。」

カイが寂しそうに答えた。

「そうなのか…」

ユージはなんて言っているかわからなかった。

「気にするな。俺には最高のオヤジだから。」

カイが笑ってそう言ったのでユージはほっとした。

「そりゃ、自分の父親が王様なら、さぞかし自慢だろうな。」

キースが言った。

「そうさ！本当に、あんなオヤジを持てて俺は幸せだ。」

ユージはカイがそんな風に自慢するザイルはどんな人なんだろうと思った。早く会ってみたいと思った。

次の日、宿で朝をゆっくりすごしてから、9時すぎに出発した。首都ペネには、14時くらいについた。遅い昼食を食べ、王宮に向かった。王宮が近づくとユージがそわそわしだしたので、みんなおかしくて笑った。王宮の前は広場になっていた。沢山の市民がそこに集い話をしたり、子供たちが遊びまわっていた。広場を通って、

門の前にやってくると、1等兵が何人が警備をしていた。カイが門の外にいた1等兵に何かを見せると、1等兵が笑って、「王宮へようこそ。」と挨拶してくれた。

ユージ達は門の中に入ると、中にいた門番の1等兵に、入ってすぐ左の小屋で待つように言われた。一人の1等兵が馬に乗ってどこかへ行く。しばらくするとその1等兵が近衛隊とともにやってきた。近衛隊長官のショーだった。

「やあ、君たち、久しぶり！王宮へようこそ！無事アイカ国軍入隊試験に合格おめでとう。」

「ありがとうございます！」

ユージたちは慌てて立ち上がりそう言うと、頭を下げて挨拶をした。

「ユージ君、実技で満点だったと聞いたときは本当に驚いた。しかも、歴代4位の成績で首席だとはな。その上、カイ君達も1回目の試験で1等兵に合格したうえに上位を独占したと聞いて、開いた口がふさがらなかった。私も式典には参加するが、その時にはあまり話せんからな。今日は無理やり都合をつけて、君たちのお伴にかつてでたというわけだ。カイ君がいるから必要はないとは思ったんだが。」

「本当に自分でもいまだに信じられません。しかし、私だけでは到底そのような素晴らしい成績をとることは不可能でした。ここにいる仲間がいたからこそ、頑張れたんだと思います。」

ユージがみんなを見て言った。

「そうだな。一人じゃ無理だったな。」

カイが笑って言うときスとミンとマーフィも笑顔で頷く。

「そうだ。仲間はとても大事だ。これから、みなお互いを大事にするがよい。」

みんな元気に、「はい！」と答えた。

「君たちは、16歳という若さでトップの成績で入隊試験に合格した。つまり、この国のエリート候補生というわけだ。これから、ぜ

ひ、近衛隊を目指して頑張ってくれたまえ。かなり大変だが、私が近衛隊にいる間に来て欲しいね。」

シヨールは笑ってそう言った。ユージ達はうれしさと顔から笑顔がこぼれる。

「では、ザイル様の家まで案内しよう。」

シヨールは宮殿の敷地内を案内しながら進んだ。カイも時々説明してくれた。王宮の中は森のように木々が生い茂っていた。

…リート国の王宮とはまた全然違うな…なんだか住みやすそうだ。

リート国の王宮は、木々はほとんどなく、整備された森があるだけだった。

少し歩くと、すぐ近くに宮殿がそびえたち現われたので、あまりの大きさと豪華さに、みんな口を開けて見上げた。

やがて、近衛隊舎監へつく。前の広場でたくましい近衛隊が数名訓練をしていた。ユージたちは、あこがれの人たちを間の前に大興奮した。いつか本当にここで働く日が来るのだろうか。そうなりたい。と全員がそう強く思った。

そして、王の家についた。カイの言っていたように、ネイル様の屋敷より少し大きいくらいの家だった。ユージはそれを見て、ほっとした。

シヨールが式典で会おう、とみんなに言った後、さっそうと馬にまたがり去って行く。

その姿があまりにもかっこよくて、ユージ達はシヨールが見えなくなるまで、ずっとシヨールを見ていた。

カイが玄関にあるベルのうち小さい方を鳴らした。

すると、やさしそうな女性が家の中から現れた。

「まあ、カイお帰りなさい。試験合格おめでとう！本当に鼻が高いわ！」

そういつて、カイを抱きしめた。カイは恥ずかしそうにして、「母上、もういいでしょう？離してくださいよ。」

と言った。そうやっている、また別のからいらしい女性が玄関を開けて出てきた。

「お兄様！お帰りなさい！本当におめでとう！」

とまたまた抱きついてきた。今度はカイは嫌がらず、カイもその女性を抱きしめた。

「マユ、久しぶり。ありがとう。また綺麗になったな。」

「カイ、お前、妹がいたのか！」

ユージは驚いて言った。

「ああ、そうだ。あれ？言ってなかったっけ？」

「聞いてない！」

二人のやりとりを聞くと、マユはカイからはなれて、ユージたちの方に向き直った。カイがみんなに向かって、

「こちらが、俺の母、レノだ。そして、こっちは妹のマユ。」

「みなさん、ようこそお越しくださいました。みなさんが来るのを知ってから、首を長くして待ってましたのよ。今回は本当に素晴らしい成績での合格おめでとうございます。式典が終わるまで、どうぞゆっくりなさってください。」

とレノがにこやかにあいさつした。

「みなさま、カイの妹マユです。はじめまして。このたびは、本当におめでとうございます。」

マユがかわいらしく言った。まだ幼い顔をしていた。

「で、母上、マユ。順番に、ミン、マーフィ、キース。」

カイが自分たちの名前を言ったとき、一人一人、丁寧にお辞儀をした。

「そして注目の男、ユージだ。」

ユージはそれを聞いて、ずっこけた。

「な、なんだ、その紹介の仕方は！」

そう言ってしまったから、しまったと思った。あわてて、

「す、すみません。ユージです。よろしくお願いいたします。」

と言い、お辞儀をした。すると、レノが笑いながら言った。

「ええ、確かにあなたは、この国全員の注目の的ね。」

「ええ？国全員？」

ユージは目を向いた。するとカイが言った。

「当たり前だろ！この国始まって以来、初めて実技試験で満点をたたきだした男だぞ！さっき近衛隊舎監に寄ったときだって、みんなショー近衛隊長官とともにいる、われわれ5名のうち、実技試験で満点を出したのはどいつだ、って興味津々で見てたに違いない。オヤジだってその男の顔が見たくって、わざわざ式典に呼んだんだ。俺達はそのオマケさ。」

「そ、そうだったのか…」

ユージは青ざめた。

「ま、とにかく。これで、お前は俺の母には、普通に接することができたってわけだ。俺に礼を言え。」

ユージはびっくりしてカイを見た。

「そ、そんな事言っなよ。」

ユージは、ちらつと、レノを見ながら小声で言った。レノが不思議そうな顔でユージを見る。

「あのさ、こいつ、王様や王妃様の家に泊まるって聞いて、そりやもうびびって。家に来るの、嫌がってたんです。」

レノは大笑いした。

「王妃なんて、本当に名前だけなんだから、そんなに固くならないでね。ただのカイの母親だと思って頂戴な。」

「は、はい。」

ユージは恐縮して答えた。でも、カイが言っていたように、レノもマユも、本当に普通の家庭の家族に見えた。王はともかく、彼女たちには、なんとかやっていけそうだ、と思った。

「じゃあ、お部屋に案内するわね。お疲れでしょう？」

ユージたちはみんな一緒に部屋だった。カイがみんなと一緒にいいと言ったので、会議室をみんなの部屋にしたと言った。だから、

今日は王たち重役は宮殿で会議をしているのだと言った。

体が冷えていたので、すぐみんなで風呂に入って温まった。ここも温泉だった。風呂からあがると、また部屋に戻って夕食まで、しゃべり倒した。

「あのな、お前ら、妹のマユには気をつける。」

「何を気をつけるんだ？」

キースが聞いた。

「あいつさ、『私、強くてカッコイイ男が好きなの！』って、いつも叫んでてさ。」

カイがマユのマネをして言った。

「だから、お前ら、その強くてカッコイイ男だから、絶対マユが気に入るに違いない。とうか、すでに気に入ってるかもしれん。ま、もつとも、マユはちょっと当てはまる男がいると、キヤーキヤー騒いでいるからな。たぶん、近衛隊全員がマユの理想の男だな。だから、あんまり気にすることもないけど。それに、今一番夢中になっているのは、シヨー近衛隊長官だしな。」

ユージたちは、確かにシヨーに、カイの妹が騒ぐのは無理もないと思った。前の試験でもカッコイイと思っていたが、みんな、今日ですっかりファンになってしまっていた。

やがて、夕食の時間となった。王のザイルはまだ帰ってきていなかった。ユージはほっとした。夕食はネイル様のところとあまり変わらなかった。本当に王妃も同じ食事なんだ、とユージは思った。旅の疲れと昨晚遅くまで起きていたので、この日はみんな早めに眠りについた。

13話 表彰式

あんなに疲れていたのに、やはり、緊張しているせいか、みんなして早く起きてしまった。する事もないので、朝食前に、王宮内をランニングをする事になった。森の中のような王宮をみんなで話しながら走る。時折、王宮内を見回る兵とすれ違い、軽く会釈をした。「しかしさ、なんで、こんなにいいところから、わざわざエルパ町なんて田舎にやってきたんだ？」

キースが言った。

「ほんとだ。俺だったらずっとここにいたけどな。」
ミンだった。

「俺が、11歳の時に、オヤジが家から出て行って言われてさ。」

「ええ？どうして？」

マーフイが聞いた。

「こんな贅沢な環境でずっと暮らしていたら、勘違いして、ただのバカに育ってしまったから、外へ出て、この国をもっとよく見てみるってさ。」

「へえ、厳しい父親だな。」

キースが言った。

「あの時は、このクソおヤジ、おれがただのバカになるだ！と、怒り心頭だったけど、今では、父の言ってたことは、そのとおりだったと思う。だから、今では、俺をここから出してくれたことに感謝している。お前たちにも出会えたしな。」

しばらく走った後、お風呂で汗を流し、食堂に向かった。もう、食事の用意がほとんどできていて、マユとある男性が席についていた。その姿を見ると、カイ以外の4人は直立不動となった。その男性が立ち上がる。

「朝から訓練とは感心だ。…はじめまして。私がカイの父のザイー

ルだ。我が家へようこそ。今回は本当におめでとう。カイ、よくやった。」

「父上、お久しぶりです。おほめのお言葉ありがとうございます。」
カイが誇らしげな顔をして頬を染める。

「は、はじめまして！ユージと申します！」

ユージが慌ててあいさつをした。ミン、マーフィ、キースも続く。
あまりのみんなの緊張ぶりにザイルが大笑いをする。

「ははは。そんなに固くならないでくれ。今は私はただのカイの父親だ。さ、席につきなさい。」

4人とも席についた。ユージの前はザイルだったので、どうしていいやら、そわそわしていた。けど、ちらつと横目で見ながら、カイの言うように、ザイルはとてもかっこいいと思った。本当にこんな人が父親なら、どれほど自慢だろうと思った。

朝食を食べ始めると、カイが試験の時の話をザイルに話はじめた。ザイルにレノ、マユが目を輝かせて話を聞いた。朝食の席は話が盛り上がり、気がつくと、ユージ達もカイと一緒にあって、話を夢中になってしていた。

「いかん。もう9時を過ぎているではないか。もう私はいかなくても。みなさん、21日までの表彰式までこの家でゆっくりしてください。」

ザイルはそう言っただけで席を立つていった。

朝食のあと、ユージたちはレノに服を渡された。アイカ国軍の制服だった。

「式典では、式典用の軍服を着るのが習わしよ。本当の入隊は1月になってからだから、あなたたちは正式に言うはまだ兵士じゃないんだけど。でも、兵士扱いをすることになっているの。サイズが大丈夫か、ちよつと着てくれるかしら？」

ユージたちは茶色の軍服をレノから受け取り、部屋に戻って着てみた。腕には1等兵の印の白い5本線がはいっていた。みんなお互いを見た。みんなまったく似合っただけだったので大笑いした。

「母上。サイズは大丈夫でした。俺たち、これから町へ行きます。夕食はチェ・チェで食べようと思ってますから、夕食は結構です。」

「わかりました。予約してあるんでしょうね？」

「それは、ネイル様が手配してくださってるはずです。」

「そうなの。じゃ、気をつけて行ってらっしゃいね。」

ユージたちは、みな伝統的なアイカ国の民族衣装を着ていた。合格の祝いにとネイルからみんなにプレゼントされていたものだった。「この服、すごく着心地がいいな。けど、なんでこれをわざわざ着るんだ？」

ユージが言った。

「チェ・チェは、ちょっといい店だから、ちゃんとした服装でいかないとダメなんだ。これなら問題ないし、町へいってもおかしくない。たくさんの人が着てるしな。そうさ。あと、それからこれ。」

カイがユージたちに小さなカードを渡した。

「王宮の通行許可証だ。一応みんなにも渡しておく。」

とカイが自分の分もみんなにみせた。するとマーフィが言った。

「昨日、お前が門で見せていたのは、これか？」

「ああ、そうだ。」

「自分の家に入ったりするのに許可証がいるのか？」

ユージが驚いて聞いた。

「昔はもちろん、こんなもの必要なかったさ。けど、俺はずっとここにいなかったから、兵の誰も俺の顔を知らない。だから仕方がないな。ま、そのうち、すぐこんなものなくても、素通りできるような身分になってみせるさ！」

カイが大笑いした。そんな大口をたたくカイがとてもカイらしくてみんな大笑いした。

歩いて王宮から出て繁華街をカイに案内され、あちこちの店を回るとあつという間に昼になった。昼ごはんには、町で一番人気のサンディ屋に入った。その店のサンディはびっくりするほど大きく新

鮮なジュースもついていた。信じられないほど美味しかった。

昼ごはんを食べるとみんな急に眠くなってきた。そこで、近くの公園で少し休むことにした。公園も王宮のように緑がいっぱいで、池にはたくさんの水鳥たちが、浮かんでいた。

芝生の広場でみんなで寝転がる。小鳥たちがせわしなく鳴きながら空を飛んでいる。12月だというのに、風もなかったせいか、ぽかぽかしていて気持ちよかった。その後は、カイがペネの名所を案内してくれた。ユージはアイカ国の名所は、どの建築物もとても古くて、さすが長い歴史を誇る国だと感心するばかりだった。

やがて、あたりが暗くなってきたころ、ユージたちはチェ・チェにつく。チェ・チェは町の建物の中でも一番立派で大きかった。ユージたちはそれを見て圧倒された。

「こ、こんな所、すごく高いんじゃないのか？いくら、市長から表彰されたときに報奨金をもらったとはいえ、ちよつとここはキツイ気が…」

マーフィが言った。

「心配するな！ネイル様のおごりだ。ここはな、王宮ご用達の店だな。この国で一番格の高い店だ。王宮で、他国の客人をもてなす時や戴冠式など、特別な行事の際の料理はこの店が担当するんだ。つまり、ユージ。ここで食べる料理が、本当の豪華な料理というわけだ。・・・もつとも、俺もこの店に来たのも食べるのも今回が初めてだ。俺は一度も王宮のパーティに出たことはないし、どんな料理が出るかまったく想像がつかん。」

カイが苦笑して言う。みんな、びっくりして口がきけなかった。

カイが店のドアをノックすると、上品そうな年配の男性が現れた。「ネイル様の名前で予約しているものですが。」

そうカイが言いうと、

「伺っております。おまちしておりました。」

年配の男性に連れられ店に入るとみんな目を丸くした。ホールの広さ、豪華な装飾品、立派な絵に、鎧。どれをみても高価そうなも

のばかりだった。そのまま奥の個室へ通される。年配の男性が椅子を引き、ユージたちを一人一人座らせてくれた。

「では、すぐお料理をお持ちいたします。しばらくお待ちください。」

「
そういつて年配の男性は出て行った。しばらくすると、たくさんの人が入ってきて、次から次へと見たこともないような料理が運ばれてきた。どれもが、信じられないほどおいしかった。デザートはなんと2つも出てきた。」

「あゝ、腹いっぱい。」

マーフィがデザートを食べ終わって言った。

「俺も」

ミンが言った。椅子の背に持たれて、お腹をさすった。

「まあ、動けない……」

ユージが言った。

「そおだなあ……」

「俺も動けん……」

カイとキースが言った。デザート皿を下げに店のスタッフが入ってきた。皿を下げ終わると、今度は青い服を着た男性が、お茶を持って入ってきた。ユージ達にお茶を注ぐと、

「私はこの店のオーナーのクラブと申します。お食事はご満足いただけましたでしょうか？」

ユージたちは慌てて、背筋をただし座りなおした。

「はい。想像以上に素晴らしい料理でした。このような料理をいただくことができて、光栄に思います。」

カイがみんなを代表していった。

「光栄なのはこちらです。ネイル様から伺っておりますよ。将来有望な若者に自慢の料理を出すことができて、大変うれしく思います。実は私からも、デザートを1品プレゼントさせていただきます。料理長も大変張り切って料理してましたので、皆様に満足いただけ

て大変うれしく思うことでしょう。」

「それは、ありがとうございますっ！」

全員、かしこまって大声でお礼を言う。

「さて、皆様。これから動けますかな？当店は、客室もいくつかございます。ネイル様より皆様さえよければ、泊っていただくように言われております。もちろん、お代金はネイル様がお持ちになりますので、ご心配はいりません。私どもいたしましたは、ぜひお泊りいただきたい。」

全員顔を見合わせた。

「そうさせてもらうか？」

カイが言った。みんな笑顔で頷いた。せつかくのネイルの気持ちを出しなしたくなかったし、こんなに凄い店の客室はどんなものなのか知りたくてたまらなかったからだ。

「では、お言葉に甘えて宿泊させていただきます。すみませんが、私はザイルの息子のカイといえます。私の家に、今日はこちらで世話になると、そして帰りはおそらく明日の夕方になると、伝言をお願いしたいのですが…」

「承知いたしました。しばらくいたしましたら、別の者がご案内にまいります。それまでこちらでお待ち下さい。」

そういつてクラブは部屋からにこやかに出て行った。

やがて、係の者がやってきた。そのままついて2階のある部屋へ通された。部屋に入ったとたん、みんなその場に立ち尽くした。あまりにも広かった。豪華な家具が並ぶだけでなく、玄関のホールにあつたような絵や彫刻までが飾りたてられていた。奥には2つ寝室があり、これまた信じられないくらい大きくて立派なベッドが並んでいた。風呂も全員が一緒にはいれそうなほど大きなバスタブに綺麗な彫刻が彫られていた。寝具やタオルもすべて高級そうな刺繍が施されている。

すると、カイがベッドにダイブした。

「うわゝゝ、すげー、気持ちいい。」

その行動にみんなも同じようにベッドにダイブする。あまりの布団の感触のよさにみな自然と笑顔になる。

その晩は、あまりの素晴らしい部屋に寝るのがもったいないと、何度も風呂に入ったり、部屋をあちこち移動したりして、大はしゃぎをしながら夜が明けるまで盛り上がった。

次の日の朝、睡眠不足でだるい足取りで、朝食の部屋に向かうと、またまた信じられないほど豪華な食事で全員一気に目が覚めた。丁寧にオーナーにあいさつして店を出た後は、ユージたちはいろいろな店に立ち寄り、土産物を買ったりした。昼ごはんを食べ終わり、公園を抜けて王宮へ帰ろうとすると、昨日と違い人が沢山集まっていた。近づくともまだ小さい子供がネーチェをやっていた。あちこちで声援が湧き上がる。

「ネーチェのジュニア大会だな。」

カイがいった。

「この国では、しょっちゅうこうやって、ネーチェの大会をするんだ。小さい大会から大きな大会まで。一番大きな大会は、シヨー近衛隊長官がおっしゃっていた全国大会だ。」

みんな、無理やり前の方まで近づいてみると、どうやら決勝戦らしく、なかなかいい試合をしていた。両親らしき人が手を振り上げて応援している。

やがて、背の高い方の男の子が勝ち、マスクを脱いでちきれんばかりの笑顔でガッツポーズを取る。

「優勝者だけがマスクを外して、その顔をみんなに見せるんだ。」とカイがユージに説明してくれた。みんなでその少年に拍手を送る。少年は、審判だった1等兵と最後に握手してもらいとても嬉しそうにして、舞台から降りていった。

…訓練学校はなくとも、こうやってこんなに小さいうちから遊びで訓練をやっているんだな…けど、こんな頃からやっているなら、も

つとみんな剣が強くてもよさそうなのに…やっぱり実戦を経験してないからなのかな…

ユージはアイカ国の未来に一抹の不安を覚えた。

いよいよ、表彰式の日となった。みんな緊張して、また朝早く目が覚めた。走る気にもなれず、部屋で朝食までごろごろしてすごした。朝食もあまり喉が通らなかった。その様子を見て、ザイルとレノとマユがくすくす笑う。

新しい制服を身にまとい、緊張しながら10時に宮殿に向かった。宮殿の前まで来て、ユージたちは呆然と立ち尽くす。昨日のチェ・チェとは比べ物にならないくらい巨大で立派だったからだ。

応接室に通され、式まで待たされた。みんな無口だった。カイでさえまったく何も話さなかった。11時前になると、ショーが部屋にやってきた。ショーは立派な式典用の近衛隊の真紅の軍服を着ていた。めちゃくちゃカッコイイとみんな思った。

「想像通りの顔をしてるな！さ、行くぞ。」

と笑って言う姿もカッコ良かった。

ショーの後をカチンコチンになって、ついていくと、大きな扉の前で一旦止まった。扉の前には近衛隊が二人、両側にたっていた。ショーが彼らに合図すると、右にいた近衛隊がコンコンと扉をたたく。すると、部屋の中から、ファンファールが聞こえてきた。その音にユージたちは、今まで以上に緊張して、自分の心臓が飛び出すようになる。

ファンファールが終わりに近衛隊の二人が扉を開けた。ショーが歩き出す。ユージたちもショーについていく。割れんばかりの大きな拍手で出迎えられた。両側にたくさんの人がいた。みんな笑って拍手している。その前を近衛隊が立って道を作っていた。その奥には、カイの父親、ザイルが王座に座り、その横を側近らしき男が立つ

てこちらを見てる。王座の前に来ると、一列に並んだ。ザイルは白に金の刺繍の王様らしい服を着ていた。頭にはきらびやかに輝く真紅に金が縁取られた王冠をかぶっている。

シヨがユージたちの後ろに下がる。すると、ザイルが立ちあがった。部屋の中がシーンと静まりかえる。

「ユージ、カイ、キース、ミン、マーフィ。王宮へようこそ。」

ユージたちは膝をまげ、王に対する忠誠を示す。

「カイ、キース、ミン、マーフィ前へ出よ。」

側近のヤンネが言った。4人は階段をのぼりザイルの前へ整列した。ザイルが手に賞状を持ち読みあげ、4人に順番に賞状を渡す。賞状の後には、袋も手渡された。報奨金だ。

「若干16歳にして、第1回目の試験で1等兵に合格とは、まことにすばらしい。これからは、将来アイカ国を担うリーダーとなれるよう、さらなる精進を期待する。」

4人再び、ザイルに忠誠のおじぎをした。大きな拍手が起こった。ユージの所まで戻ると、みんなは後ろを向き会場の客に向かって敬礼をした。さらに大きな拍手が起こった。

「ユージ。前に出よ。」

ヤンネに呼ばれ、ユージは階段を上りザイルの前へ立つ。ユージにも賞状と報奨金が手渡された。

「1回目の試験にて1等兵に合格をし、さらに歴代4位という成績を残ただけでなく、実技試験においてアイカ国初の満点をとった事、まことにすばらしい。その栄光を称える。これからは、先ほどの4名とともに、アイカ国を導いていけるような人物になる事を期待する。」

ユージもザイルに忠誠のおじぎをする。さきほどよりも大きな拍手が起きた。ユージも元の場所に戻り、後ろを向き敬礼をした。また割れんばかりの拍手となった。拍手が終わると、ザイルに向き直った。

「では、これにて表彰式を終了する。」

ヤンネがそういうと、シヨーがユージたちの前に出て、みんなを見ると、扉に向かって歩きだした。ユージたちはまたシヨーに続き、部屋を出てまた応接室へと戻る。部屋に入ったとたん、ユージたちは椅子に座れ込んだ。

「はぁ…緊張したぁ…」

キースが言った。

「まさか、俺もあんなに人がいるとは思わなかった。」
とカイ。

「俺もう一生分のエネルギー使い果たした…」

ユージが机にふせて言う。

「まだ、足がガクガクしてるよ。」

足をさすりながらマーフィが言った。

「俺も…」

ミンも自分の足を見ながら言った。

5人のその姿を見てシヨーが腹をかかえて笑った。

「まあ、無理もないが。私も同じようなものだったからな。」

「シヨー近衛隊長官がですか？」

カイが驚いて訪ねた。

「あたりまえだ！何度か表彰は受けたが、一番緊張したのは、やはり近衛隊長官になった時だな。それは口には出せないほどの重圧を感じたな。」

シヨーですら、そんな感じだったら、自分たちがこうなるのは当たり前だとみんな思った。

「さ、俺はもう行かねばならない。君たちはここでしばらく待機してくれたまえ。宮殿からすべての兵士が出て行った頃に、迎えをよこす。君たちと次に会えるのはいつかわからんが、立派な兵士となるよう、祈っている。」

あわてて、ユージたちは立ち上がって敬礼をした。シヨーはまた飛び切りの笑顔を見せると部屋を後にした。

ユージたちが、カイの家へ戻る頃には、もう昼をかなり過ぎていた。キースやミンやマーフィは引越しの準備をしなければいけなかったのだ、すぐに昼食を食べ、5人はエルパ町へと向かった。その日の宿では、さすがに疲れが溜まりみんな晩御飯を食べるとすぐに泥のように眠った。

14話 王の子

「今回お呼びいたしましたのは、受け持つことになるクラスの発表と、カリキュラムについての相談なのです。」

エルパ町に帰って来てから3日後、ユージとカイは校長に呼び出され学校に来ていた。

「ユージさんには、上級コースの実技クラス、カイさんには同じく上級コースの筆記クラスを担当していただくこととなりました。今回、上級コースは全部で4クラスで112名となり……」

「112名？しかも、私は筆記の講師ですか？」

カイが目丸くしていた。

「はい。例年なら、初級・中級・上級と、2クラスずつなのですが、前回上級コースで受験するのをあきらめた者が多数出たため……実は、私が口を滑ってユージさんとカイさんが上級コースの講師になると生徒にもらしてしまいましたね……そうしたら、中級コースから上級コースへ変更する生徒が続出したしまして……今回は、初級2クラス・中級1クラス・上級4クラスという、アンバランスな編成となつてしまいました。本来なら、筆記の講師は1等兵で退役したものがやるのですが……筆記で満点を出したカイさんにぜひ教えていただきたいと思ひましてね。」

「どうして、前回受験するのをあきらめた人が沢山出たのですか？」

ユージは不思議に思つて言った。

「それは、お前がいたからだ。」

とカイがユージを見て言う。

「俺が？」

「そうだ。実技は特別優秀なものがあると、どうしてもそれ以外の者の点数が抑えられてしまふんだ。」

……そういえば、俺がいなければ、カイは体力測定で満点だったに違いないと言っていたな。

「で、カリキュラムに関してですが、実は上級コースに関してはすべてあなた方に一任するように、ザイル様から通達がありましてね。カイさんが筆記の講師になったのも、そういうわけです。」

「父上から？」

カイが驚いて聞いた。

「はい。」

すると、カイが顔をしかめて、

「あのクソオヤジ。俺たちに直接言え！」

と、小声で言った。ユージと校長は思わず笑う。

「それで、どのようにされるか考えていただきたいのです。それに応じて、必要な講師を決めようと思っています。」

「俺は学校がどんな感じが全く分からないからお前に任すよ。」
すると、カイは独り言を話すようにぶつぶつ話し始めた。

「…うーん。そうだなあ… 4時間授業だろ？実技2時間、筆記2時間として、俺は毎日数学をやらせたいな… だから、毎日1時間数学として…すると、残りの1時間で…歴史・地理・地学・医学とやって、残り1日はその週行った授業の復習を兼ねたミニテスト…こんな感じでいいかな。…で、筆記の方を先に2時間、実技を2時間とつづけてやる。実技をつづけてやる分、その前に休憩を持てきたら、実技の準備にたっぷりかけていいかな。あとクラスは前期の成績を元にクラス分けして、一番できるクラスを俺が担当。後は、ミニテストの合計点で、月に1度成績順にクラスを入れ替える。こんな感じでいいかな。だから、筆記の講師は他に3人必要です。」

最後だけカイが校長を見て言った。

「お、お前、よく、そんなにすぐ考えられるな！それに、自分が一番できるクラスを担当するって、どこからその自信が湧いてくるんだ？」

「前々から、こうしてみたら面白いんじゃないかって思ってたのさ。それから、俺は教えるのには自信がある。何せお前で実験済みだからな！」

カイがニヤリと笑った。

「じ、実験って！俺はお前の実験材料だったのか！」

「ま、悪いけどさ。ちよつと試してみたかったんだ。俺と同じようにやったら、他のやつはどうなるんだろうつて。でも、そのおかげで首席になれたんだろうつて。だから、いいじゃないか。」

「そ、それはそうかもしれないけど…なんだか納得いかないなあ…」
ユージの口がとんがる。

校長はそんなやりとりを見てニコニコしていた。

「わかりました。そのようにさせていただきます。で、実技の方はいかがいたしましょう？」

またカイがぶつぶつ言いだした。

「うーん。こっちは、4クラス合同でやるとして…。で、毎日1時間、体力増強にすべて当てる。いかに体力が大事かわかったからな。残りの1時間で剣術と弓術だ。体力がつくまで、当分の間馬術は週1回でいい。体力測定も成績順にしてと…残りの1時間は剣術の成績で班を分けるか。そうだな…8つの班に分けるか…。そうだ！そのリーダーにネイル様の館に来ている8名にやらせよう。あいつらなら、任せても大丈夫だろう。それに、あいつらはこの調子でいくと、俺達と同じように1回目の受験で1等兵になれるかもしれない。そうなると、近衛隊候補生だ。だとしたら、今からそういうことをやっておくのは、あいつらにもためになる。それに教えるのも勉強になるしな。」

後半の1時間は、剣術を中心にやって、休憩がてら各班順番にそれぞれ弓術をやる。ユージは毎日2班づつをメインに指導。まず一番成績の悪い班から見て、順番に成績のよい班を見る。4日で全部見れる。だから、のこりの1日が馬術だ。あとは、毎週その繰り返し、とまあ、こんな感じかな。だから、講師はユージ一人で十分だな。必要な時だけ一等兵にでも頼んできてもらえばいい。馬術は成績順にする必要ないかな。ま、あとはユージが適当にアレンジしろよ。みんなの体力がついてきたら、体力測定時間を減らして、

弓術や馬術を増やすとか。」

「またまたカイがすらすらと、こんな事を考え出したので、ユージはただただ感心するしかなかった。」

「……いや、ほんと、お前すごいよ。」

「こっちは、お前がやってたのを参考にしただけだぞ?」

「いや、それでも、やっぱりすごいよ。そこまで複雑なのは、絶対考えられない。」

「そうですね。私もそんな風にすらすら考えられませんか。いや、驚きました。カイさんは、こういう才能があるのかもしれないね。」

「校長も唸りながら言った。」

「カイはこれが才能だったのか、と自分でも驚いた。」

「わかりました。実技もそのようにさせていただきます。いや、思いのほかすばらしいアイデアですので、初級や中級でも同じようにやらせてみたいと思います。何か分からないことが出てきましたら、カイさん、質問させていただきますね。」

「あ、はい。いつでも構いませんので、遠慮なくお聞きください。」

「あと、学校は1月10日開始です。8時半から授業は開始されますが、この日は朝7時半学校に来てください。他の講師の方への挨拶をすませた後、打ち合わせをしたいと思います。そのあと、1等兵の方が来られて、お二方の入隊式を行います。」

「わかりました。」

二人はそう返事し、校長にあいさつして家に戻った。

次の日、キースとミンとマーフィが配属先へ出発する前にネイルの館に来ていた。他の訓練のメンバーも集まっていた。

「お前ら、学校でどのコースを教えるか分かったか?」

キースがユージ達に聞いた。

「二人とも上級クラスだ。俺が筆記担当で、ユージが実技担当さ。」
「カイが答えた。」

「やっぱりな。俺達も全員上級クラスで実技担当だ。」
とマーフィー。

「それから、学校からカリキュラムについて、何か言われているか？」

ミンが聞いたので、カイが自分の考えたカリキュラムを話した。
「そうかあ…なるほどな。いや、カイさすがだな。俺達もちよつと参考にさせてもらうよ。実は両方の教科のカリキュラムも全クラス考えてほしいと言われててさ。」

キースがそう言ったので、カイがむつつりした顔で答えた。

「それは、クソオヤジの差し金だ。」

「えーそうなのか！じゃあ、ますます真剣に考えないといけないな…まあ、あっち行つてからゆつくり考えるよ。」

そうして、3人はみんなに見送られそれぞれの配属先に旅立っていった。

やがて、年が明ける。ユージがアイカ国にやってきて初めての新年だ。

ユージとカイはみんなを呼んで新年のパーティをして大騒ぎをした。こんな風に新年パーティをするのは初めてでユージは本当に心から楽しんだ。

そうして、1月4日の夜がやってきた。

その日、ユージとカイが夕食を終えていつものように、図書室で勉強していると、ネイルが図書室にユージたちの様子をめずらしく見にやって来た。

「頑張つとるな。」

ネイルは暖かいお茶の入ったコップを2つ持っていた。

「お前たちの様子を見に行くなら、お茶を持って行けとマーサーに言われてな。」

ネイルが二人の前に、お茶を置いた。ユージ達は勉強の手を休め、お茶を飲んだ。

「どうだ？ユージ。調子は？近衛隊の試験は歴史が大変だろう？」

「はい。でも、こちらにはリート国の歴史までのっているので結構面白いです。リート国にいた時にはまったく知りませんでしたから。」

「そうか。しかし、その教科書にはあまり詳しくのってないだろう？もっと詳しく知りたければ、ほれ、その棚の真ん中のあたりに、リート国の歴史が詳しく書かれた本があるぞ。時間がある時にでも読んでみるといい。」

ネイルに背を向け、ユージはそのあたりを探した。本の背表紙を手で一つ一つ確かめる。

「リート国といえば…去年の暮に、王女のリディア姫の話を聞いたな…」

ユージはどきりとして一瞬手をとめた。そして再び手を動かす。

「…ご婚約されたのですね。私がリート国から出てくる前、殿下の誕生日祝いが王宮で行われていましたね。いくつも花火があがり、それは盛大でした。その時に、他国から何人が婚約者候補の王子が来ていたという話でしたから。」

ユージは、古くてすすけた背表紙にリート国歴史書と書いて本を発見した。ユージはそれを手にとり、パラパラと見てみた。

「いや…そういう話ではなく、2か月ほど前、姫が原因不明の病になり、1週間ほど高熱が出て、一時は命も危ないほどだったそうだ。」

ユージは固まった。手が震えた。ユージは、ネイルとカイに悟られないように、必死だった。

「そ、それで、その後、回復されたのでしょうか？」

「ああ、回復はされたようだ。だが、そのままベッドに伏せっているらしい。なんでも、毎日、窓から遠くの山を見て過ごされるだけだそうだ。あのあたりは平地だから…バーサル山脈のことだろう。」

な。」

その瞬間、ユージの脳裏にリート国での日々が鮮明に思い出された。彼女の笑顔、抱きしめた時のぬくもり、自分の胸の中で幸せそうにする彼女。倒れて泣きながら自分の名前を呼ぶ彼女。

「リディアはアイアン達から聞いたんだ。俺が北に向かったと。自分がひよっとしたらアイカ国にいるかもしれないと、そう思っているんだ。」

毎日自分のことを思いながらベッドに横たわり、窓から山を見るリディアが、ユージの脳裏にありありと思い描かれた。ユージの息が突然荒くなる。持っていた本が手から落ちた。体が震えるのが止められなかった。

その様子に慌ててカイが立ちあがり、ユージのところにやってきた。

「お前、大丈夫か！」

カイがユージを振り向かせ、ユージの顔を見て驚いた。真っ白だった。ユージは立っていられなくなった。カイがユージを支え、椅子に座らせた。ユージは目の前が真っ暗になり、自分が一体どうなっているか、まったく分からなかった。

「ユージ！深呼吸をしろ！」

カイの声が遠くに聞こえたが、言っている意味が分からなかった。「おい！しっかりしろ！息をゆっくりはけ！」

ユージはカイに言われるままにはく。

「今度は、ゆっくり吸え。…そうやってゆっくり息をするんだ。」

震えながら、ユージはゆっくり何度も息をした。

「少し、落ち着いたか？」

ユージは答えることができなかった。まだ体の震えが止まらなかった。カイがずっと背中をさすってくれていた。ずいぶん長いことユージはそのまま下を向いて震えていた。

やがてネイルが口を開く。

「そうか…お前の恋人は、リディア王女だったのだな…」

ユージはそれを聞いた瞬間、自分の気持ちを抑えることができなかった。あえぎ声を出して思いきり泣いた。今までずっと心の中にしまっていた気持ちが悪流となって流れ、止めることができなかった。

ユージはリート国を出たとき、自分の人生は一体どうなるんだろうと心配でたまらなかった。いったいこの先、生きていけるのだろうか。そう思いながら、リート国に背を向けてリイを走らせた。そして、思いもかけずカイたちと出会った。今までに経験した事がないほど充実した毎日を送り、カイたちとふざけて楽しんだ。いつしか、自分はリート国ではなく、アイカ国に生まれた人間じゃないかと感じるようになった。そうして、リディアの事もあまり思いださないようになっていた。

なのに！

彼女は違ったのだ。毎日窮屈な王宮で一人部屋にこもり、自分のことを毎日案じていたのだ。大変な病にかかり不幸せな日々を送っていたのだ。そう思うと、こんな風に楽しくすごしていた自分に罪悪感を感じた。

…俺もリディアと同じくらい苦しまなければならなかったんだ！

「…再び彼女に会える方法がひとつだけあるとしたら、どうするかね。」

ユージは驚いて、涙でぐちゃぐちゃになった顔でネイルを見上げる。

「私もカイも、もちろん現国王のザイルもだが、ずっと前から、この国の王となれるに相応しい男を探しておった。…そして私たちは見つけた。その男を。お前だ。」

ユージはネイルは何をとぼけた事を言っているのだらうと思った。

「ここへお前がやってきてすぐに、私とカイはひよつとしたら、お前が我々の探していた者ではないかと感じていた。そうしていつもお前を見ていたのだ。お前は毎日のように私たちが思う以上の事をし毎日驚かせた。ここににいる者たちをうまく導き、信頼を勝ち取り、試験で歴史に残る結果を仲間と共に出した。そのような能力のある人間であるにも関わらず、お前はまったく自分の能力をひけらかそうとはしない。」

「きつとお前なら、民のことを常に考える素晴らしい王となるだろう。お前が王になるためにこれから努力するというのなら、私たちはお前を全力で支えよう。そうすれば、いつかお前は王の子となるだろう。」

「王の子？」

「この国の王は、自分の後継者を見つけると養子とする。それを王の子と言う。つまり王子の事だな。だから、王の子となれば、お前は堂々と自分が生まれた国へ帰れる。国へ帰っても殺されることはない。他国の王子を殺す。すなわちそれは戦争を意味する。それを承知したうえで、お前を殺すほど、あの国も愚かではないだろう。それがいつになるかは分らん。その時には、お前はもう別の女性を愛し、リディア姫も別の男性を愛しておるかもしれぬ。だが、彼女に自分が幸せにやっている、そう伝えることはできよう。そして、ご両親や兄弟、友人にもう一度会うこともできよう。」

ユージは黙ったままだった。

「もちろん、そうなるためにはお前は近衛隊になり、近衛隊長官とならねばならぬ。険しい道のりだ。だが、お前なら努力すれば、必ずなれるだろう。」

ユージとネイルはしばらく、黙ったままお互いを見つめた。

「このような話を突然されても、いきなり決めれるはずもないな。よく考えるがよい。」

そう言うとネイルは図書室から出て行った。カイはそのままユージのそばにいた。ただ、黙ってそばにいた。

やがて、カイがおもむろに話を始めた。

「俺さ、小さい頃から、いつもオヤジの背中を見て育った。俺はオヤジが自慢だった。だから、俺もオヤジのように、いつか王となるんだ。そう思っていた。やがて、9歳になった時、自分が決して王にはなれないと知った。シヨックだった。泣いて喚いた。すると、ヤンネ様が俺に言ったんだ。ならば、お前が王に相応しいものを探せ。そして、お前がその者を王にして見せよ。そのためには、お前は常にその者と一緒におらねばならぬ。そう、お前は王の側近になるのだ。お前は十分なれる素質がある。そうして、本当にそれを実現することができたとき、お前の今の悔しさは報われよう。ってな

それからヤンネは忙しい身を削って、時々俺に剣術や弓術、馬術を教えてくれた。俺は、勉強にも励んだ。そして、俺が父に家を出るように言われたとき、ネイル様の所へ行くことを勧めてくれたのもヤンネ様だ。そうだ。センというすばらしい前側近がいたからだ。俺がお前とあの川で知り合い、その次の日に弓術だけでなく、卓越した剣術を見て、こいつは俺と一緒に近衛隊を目指せることが出来るヤツに違いないと思った。そしてさらに次の日、俺はお前の指導の素晴らしさに舌包みを打った。そして、とんでもない体力を知り脱帽した。その時、俺は、ひよつとしたら、お前が俺の探していたやつではないのかと思った。お前を知れば知るほど、その気持ちはどんどん増していった。だから、お前に無理を強いて勉強させた。そして、入隊試験でお前が俺を押さえ記録に残る成績で首席をとった時、それは確信に変わった。お前に違いないと。…頼む。王になつてくれ！そのためには、俺はなんでもする！必ずいつもお前といてみせる！不安な時は俺がお前を全力でお前の不安を除いてやる！お前が困った時には、俺がその問題を解決してやる！必ず、お前の手となり動いてみせる。」

カイはユージをすぐるような眼で見ていた。握りしめたこぶしが白くなっている。

ユージは友の心の叫びに、心が震えた。

…そうだ。カイはいつも俺のそばにいて、俺の悩みを聞き励ましてくれていた。常に俺を影でささえてくれていた。勉強に対してのあの厳しさ。それは、俺がお前に厳しい訓練を課したからだと思っていた。友達だからだと思っていた。しかし、それには、そんな真剣な思いがあつたのか…

「すまん。俺の気持ちを押しつけてしまつてるようだが…でも考えてくれ。」

「…俺はこの国の人間じゃないのに？」

「お前も歴史で勉強しただろう。この国にはかつて何人もこの国以外で生まれた人間が王になっている。」

「もし、王の子となつて、リート国に戻ったきり帰つてこなくなつたら？」

「…それは…仕方ない。決めるのはお前だ。それに、それでお前が幸せだつたら、友として喜んでそれを受け止めよう。その時は…また違うヤツを探すさ。」

カイがちらりと時計を見た。

「…もう12時すぎてる。寝ようか。」

カイが席を立つた。ユージも立つた。そして、二人は黙つたまま2階に上がった。部屋に入る時、カイが「おやすみ」と言ったが、ユージはカイをチラリと見ただけで何も言わず、そのまま部屋に入つていった。

その晩、カイはユージの話を思い返したり、自分がとうとうユージに自分の思っていたことを話したのだと、興奮してほとんど眠れなかった。

次の日の朝、カイがいつものようにユージの部屋のドアをノックした。返事がなかった。そつと開けてみた。ベッドはもぬけのからだった。狩りに出たのかと思い、厩舎を見に行った。リイがいなかった。

…やっぱり、狩りに行つたのかな…

そう思ったが、カイは不安になって、台所へ行きマーサーに聞いた。

「私が起きてここに来た時には、もう出かけていたようね。机の上にメモがおいてあったわ。」

「メモ？」

「ええ。そこにあるでしょう？」

カイは机の上の端に伏せられていたメモをとった。

ちよつと出かけてきます。朝食も昼食もいりません。夕食までには戻ります。

それを見て不安がさらに大きくなりカイの顔が曇る。すると、マーサーがそんなカイの様子を見て言った。

「今までにあの子が私たちに嘘をついたことがあるかしら？そして突然、私たちの元から何も言わずに去るような、そんな礼儀知らずな子かしら？それは、あなたがよく知っているでしょう。必ず帰ってくるわ。心配しなくても大丈夫よ。」

「で、でも…俺、やっぱり、不安です。このまま戻ってこないんじゃないかって。あんなあいつを見たのは初めてだ。俺達にあいつの秘密を知られて、もうここににいるのがいやになったんじゃないかって。なのに、俺はあいつに俺の気持ちを勝手に押し付けて…俺は…俺は…」

すると、マーサーが珍しく真剣な表情をした。

「カイ。あなたの仕事は、ユージを信じることよ。王の側近は、たとえ世界中が王を疑っても、ただ一人王を信じ抜く。それが仕事なのよ。だから、あなたもユージを信じなさい。」

カイはこの時はじめて、マーサーがただの飾りの王妃ではなかったのだと知った。自分の夫と共にこの国を導いてきたのだ。そうだ、当たり前だ。王の相談相手に妻がならないはずがない。彼女も王の側近だったのだ。

「わかったら、これから走りに行きなさい。いつものように過いで、ユージを待ちなさい。」

「はい。」

そう短く答え、カイは走りに行った。

ユージは夕食の時間になっても帰ってこなかった。そのうち帰ってくるだろう、と先に夕食をみんなで食べ始めた。すると、食堂のドアが開く音が聞こえた。みんな一斉にドアを見る。

ユージだった。

「すみません。遅くなつて。……すっかり体が冷えてしまつてので、風呂に先に入りたいんです。俺の分だけ残しておいていただけますか。」

「わかったわ。ゆっくり温まつてらっしゃい。」

マーサーが優しく言った。

ユージが食堂へはいると、カイが座って待っていた。

「すっかり冷えちまつたから、温めなおしといたぞ。」

ユージは、テーブルの上に並べられた料理を見た。みな、湯気が立っていた。カイの前の席についた。スープを飲んだ。カイの優しい心が胃の中で溶けて、体全体に行きわたり、暖かくなるのを感じた。

「聞いていいか？何処に行つてたんだ？……いやなら、別に話さなくていい。」

ユージは手をとめた。

「……南に下つて、国境の向こうまで行つてきた。」

そして、スプーンを置く。

「……川の向こうの森を抜けたところで焚き火して、ずっとつづく荒れ地の先の地平線を見た。俺はあの先にある国からやつてきたんだな、そして、その国の地を二度と踏むことはできないんだ。って、そう、改めて思つて……そうしたら、また泣けてきた。……リディアに

もう一度会いたいと思った。両親にも会いたかった。弟のタツはどうしているだろう。ちゃんと父と母を支えてくれているだろうか。イアンやデミー、ダレンがどうしているだろう。

…話したことあるな。俺が剣で一度も勝ったことがない奴らだ。親友だった。きっと、今頃みんな俺を心配しているだろう。

…俺は、俺は、あいつらに、どうして俺が国外追放になったのかを教えてしまった。おそらく、口止めされたに違いない。秘密を人に話せば殺すと。そんな重荷をあいつらに背負わせてしまった。俺は…俺はみんなを不幸にするだけなんだ！こうやって、またお前に迷惑をかけている！」

ユージはまた声をあげて泣いた。カイは、静かに言った。

「俺は一度もお前に迷惑をかけられたなんて思っていない。不幸にされたとも思っていない。きっと、お前のリート国の友人たちも同じだろう。それに、俺は、こうやってお前が悩みをぶつけてくれてうれしいぞ。」

ユージは涙いっぱい目でカイを見た。

「…よかったら、詳しい話を聞かせてくれないか？その…彼女との話とか。」

ユージは昨日カイが真剣な目で、自分に言ってくれた言葉を思い出した。

俺はなんでもする。必ずいつもお前といてみせる。不安な時は俺がお前を全力でお前の不安を除いてやる！お前が困った時には、俺がその問題を解決してやる！必ず、お前の手となり動いてみせる！

今までカイが自分にどういう風に接してくれたのか、走馬灯のよう思い出された。

カイなら、本当にそうしてくれるだろう。この自分の苦しみを少しでも減らすように努力してくれるだろう。

カイにすべてを話そう…

リディアのことだけではない。どれだけ自分が3級兵士で大変な思いをしてきたか。最年少の12歳で入隊し、妬まれ、それでどれだけ年上の兵士にいじめられたか。だからこそ、ここまで弓矢が上達したのだと…彼らに気に入られようと、得意だった弓矢だけでもなんとかしようして、寝る間も惜しんで練習したのだと…

それは、イアンたちも知らない事だった。いや、やがて近衛隊となるエリートの人々に、とうてい話す事ことなど出来なかった。

ユージは時々感極まって、うまく話すことができなかった。カイは、話を聞きながら、自分の胸が締め付けたように苦しくなった。ユージは、こんなにも苦しく悲しい恋愛をしていたのか…そして、兵士としてもそこまで辛い思いをしていたのか…

ユージがここに来て、国外追放された理由を聞いた時、カイには信じられなかった。身分差別というものが、理解できなかった。あの時のユージの態度から、ひどく苦しいことなんだと軽く思ったただけだった。だが、カイは自分のその考えがいかに甘いものだったと思いついた。

カイはユージを、はるか虚空を飛ぶ鷹のような、そんな存在に感じていた。どうやったら、ユージと同じところに行けるのだろう。どうやったら、ユージは自分たちの所に舞い降りてくれるのだろう。ずっとそう思っていた。

…当たり前だな。俺と同じ年でこれだけの運命を背負い、これだけ辛い思いをしてきた人間が、俺と同じでいられるはずがない。

カイは自分がいかに恵まれた環境で、恵まれた人生を送ってきたのかを思いついた。

ユージは長い時間をかけ話終わる。しばらくずっとユージは泣いたままだった。

「…よく話してくれた。そんなに辛いことを打ち明けるのは大変だったろう。…昨日、俺やネイル様が言った事は忘れてくれ。そう、この国の王になってくれという話だ。」

ユージは驚いてカイを見た。

「俺は、正直、そこまでお前が今まで辛い目に合っていたなんて、爪の先ほども思っていないかった。王になる事は、想像もつかないほど大変だ。今まで、そんな苦しい思いをして生きてきたお前に、これ以上の重荷を背負わせる事は、俺には出来ない。…お前は、それ以上自分を責めるな。お前の責任ではないだろう。…これから、もつと自分のために生きろ。…たぶん、それが彼女や家族や友人に対して出来る唯一のことだ。そうだろう。自分の大事な人が幸せにいる。それ以上の幸せがあるか？お前だって、彼女が病に伏せず、他国の王子と恋をして幸せに暮らしていたなら、そこまで辛い思いはしなかっただろう。だから、お前は幸せになれ。他の誰よりもそうなる必要がある。」

カイはすっかり冷えたお茶を見て立ち上がった。

「ちょっと一息つくか。お茶いれなおしてくる。」

ユージはまた自分の目から涙が落ちるのを感じた。今度は悲しみの涙ではなかった。

カイの言葉がユージの頭の中で反芻する。

お前の責任ではない。だから、お前は幸せになれ。他の誰よりもそうなる必要がある。

自分が王になれないと知った時の小さなカイがユージに見えた。それから、必死に自分が思うような人間を探し、辛い思いですごくカイが見えた。そんな人物がそうそういるはずがない。どれだけがゆかっただろう。そして、ユージに会い、ようやく自分の悔しい思いをぶつけられる男を見つけた。カイはどれだけうれしかったのだろう。なのに、カイはその男をあきらめようとしている。どん

な思いを今、カイはしているのか。

カイが湯気の立ったお茶を持って来て、ユージに差し出した。

「ほれ。飲めよ。ちよつとは落ち着くだろ。」

カイがお茶を飲み始めた。ユージは湯気の出ているお茶をじつと見つめた。

カイが自分の想いをこらえ、自分のためにこんなに気をつかつてくれている。その思いが何よりもうれしかった。何よりもありがたかった。

こんなに自分の事を考えてくれた人が今までにいただろうか？

「…俺、なるよ。」

カイが驚いてコップを置いた。

「王になるよ。お前のために。」

「俺のために、自分を犠牲にしないでくれ。俺のことは本当にいいんだ。」

「自分を犠牲にしようと思って言ってるんじゃない。お前は俺に言っただな？自分の大事な人が幸せでいる。それ以上の幸せがあるかと。お前の幸せが俺の幸せだ。だから、お前のために王になる。」

カイは驚きのあまり口がきけなかった。ユージは今までとは違う、穏やかな目でじつと自分を見つめていた。

「ほ、本当に？」

「本当だ。」

ユージの顔が本当だと告げていた。その瞬間、カイの目から涙がこぼれた。堪えようとしても次から次へと出てくる。

「…ありがとう…」

「礼を言うのは、本当に俺が王になってから言ってくれ。だから、お前は絶対俺の側近になれよ。そうでなければ、俺は王にはならない。」

「…分かった。」

「もう2時だ。寝るか。」

ユージが席を立ったので、涙を手でぬぐいカイも席を立つ。二人は部屋へ向かった。部屋の前で、カイが

「じゃ、また明日な。」

とユージに言つと、しばらく考えてユージが言った。

「お前の部屋で寝ていいか？お前と一緒になら寝れそうな気がする。」

「ああ。俺は構わん。」

ユージはカイの部屋に入ると、さっさとカイのベッドにもぐりこんだ。カイもその隣にもぐりこんだ。カイのベッドは大きかったので、二人が寝るには十分だった。

「…お前、いつも寝れてなかったのか？」

「10歳の時、リディアと引き離され、隠れて会うようになってから、見つかったらどうしよう、っていつも不安だった。近衛隊が俺を捕まえて処刑する夢を毎晩見て何度も目が覚めた。こっちに來てからも、寝ようとするとリディアの泣き顔を思い出してさ。だから、なかなか寝付けなかった。ようやく寝れても、リディアが泣いて俺をおってくる夢を見るんだ。それで目が覚めてしょっちゅう泣いてた。それでも、最近は、結構寝れるようになってきてたんだ。けど…昨日ネイル様にリディアの話を聞いたら…昨日はまったく眠れなかった。」

「…そうか…だったら、明日お前のベッドこっちに持ってこよう。」

明日からお前と俺は同じ部屋だ。」

「うん。ありがとう。」

すると、ユージは手を伸ばしカイに抱きついてきた。

「ごめん。今日はこっやって寝かせて。」

「ああ。」

自分のことを何もかも知っている友がいる。それは、こんなにも安心出来ることなんだ、そうユージは思った。すぐに、眠たくなった。

ユージは6年ぶりに何も心配なく眠りにつくことができた。

カイはそんなユージの寝息をしばらくずっと聞いていた。

…俺は、こいつを自分の命をかけて守ろう。こいつの側近になるからじゃない。こんな思いをしてきたこいつを幸せにするためにそうしよう。

カイは強くそう思った。

次の日、二人はドアをノックする音で目が覚めた。

「ユージもそっちにいるのかしら？もうすぐお昼よ。いいかげんに起きたらどうかしら？」

そう言うマーサーの声でびっくりして、二人で飛び起きた。

「す、すいません。ユージは俺の部屋にいます！」

「そう。よかったわ。お風呂にでも入って眠気をさましてらっしゃい。」

マーサーが歩いて下に降りていく音が聞こえた。

「もう、昼だつてさ。」

カイはユージを見て言った。二人は同時に笑った。

温泉に入って、二人とも、空を見上げた。真つ青な天気だった。外が寒いので、ものすごい湯気が出て、空へ昇って行く。

「俺の方からネイル様には言っておくな。」

「ああ。」

「それから、部屋の引越しはセンが帰って来てから、やることにしよう。俺達二人だと、キツイ。」

「ああ。」

「それからさあ…俺、なるほど、って思ったぞ。」

「何が？」

「リイのことだ。」

ニヤニヤしてカイがユージを見た。

「リート国の文字をとってるのかと思ってたけど、自分を国外追放するような国の名前と取るわけないよな。リイディアのリイ。なー

るほどな。しかし、リイってオスだったような気がするが。」

「別にいいだろうっ！」

ユージはバカにされた気がしてムカつときた。カ伊に思いきりお湯をかけた。

「何すんだ！このやろう！」

カ伊もユージにお湯をかけた。しばらくお湯のかけあいとなった。

食堂に行くと、てんこ盛りのサンディが置いてあった。朝を食べたなかった二人は、お腹がものすごくすいていたので、あつと間にたいらげた。マーサーがお茶のお代わりを運んできた。するとマーサーがユージに言った。

「ユージ。もうあなたは、この家の人間よ。私たちを本当に親だと思つて、遠慮なく困つた事があつたら言つて頂戴ね。私たちも、カ伊と同じように、あなたも本当の子供のように感じているのよ。私たちには、子供がいらないの。だから、あなたたちがここにいてくれて、本当にうれしいのよ。」

二人はマーサーがそんな風に自分たちの事を思っていたとして、うれしかった。

「わかりました。」

ユージは涙ぐみながら返事した。

それからユージは変わった。ものすごくリラックスして過ごしているのが分かった。今までどれだけ緊張して俺達と過ごしていたんだろう、とカ伊は思った。ユージは、時々精神的につらくなると、ユージはカ伊に「ごめん。」と言いながら抱きついてくるようになった。ベッドはくつつけて寝た。だから、ユージは寝付けないということはなくなった。けれども、夢で起きて時々夜中にカ伊のベッドにもぐりこんできた。

孤独に虚空をずっと飛んでいた鷹は、時々傷を休めに地上に降り

てくるようになった。

15話 訓練学校

学校が始まる、1月10日の朝、ユージたちは早めに朝食をすませ軍服に着がえすると、7時半前につくように学校へ行った。

校長や他の講師もみんなもう来ていた。ユージたちは丁寧にあいさつする。他の筆記の講師は年配の人ばかりで、初級と中級の実技の講師は2等兵と3等兵だった。校長が中級も成績別でやりたいが、中級は1クラスしかないからそれができないのが残念だ、と校長が言うので、カイはすぐ、1クラスを2つの班にでも分けて、優先順位をつけ、筆記の授業では、席をその班の塊で座らせ、実技の方でも、2つに分け別々に訓練すればいいと言った。実技のリーダーはその班のもつとも優秀なものにさせればいい。と提案しそうすることになった。

そして、時間割を二人はもらった。カイが希望した時間割になっていた。一緒に、初級・中級の時間割りもカイに渡された。上級コースと実技と筆記が入れ変わっただけで、上級コースと同じだった。カイが実技の後に筆記をやるのは結構きつ从から、初級と中級は、少し早めに授業を終わって、その分、休憩時間を長くとして休ませるといい、とカイが意見する。他の講師がなるほど頷いていた。そんな風に、カイがキビキビと大人に向かって意見しているのを見て、ユージはなんだか、カイが校長のように思えて苦笑した。

やがて、8時になり一人の1等兵がやってきて、ユージとカイの着任式が行われた。入隊許可証を手渡されただけの簡単なものだったが、ユージとカイはそれだけで十分うれしかった。

「入隊おめでとう。私はロブレスという。私は去年の夏まで近衛隊をしていたが、ここエルパ隊の隊長として後進の指導にあたるため、3日前にこの町にやってきた。君たちのような優秀な者を指導でき

ることを光栄に思っているよ。元近衛隊の名誉にかけて、君たちには絶対負けなように心がけなくてはな。では、昼にまた会おう。」
ロブレスは二人に笑顔でそう言と、他の講師に軽く会釈してすぐに部屋を出て行った。

そのころになるとあたりが騒がしくなってきた。生徒が登校してきたのだ。

8時半前になりカイは教室へ向かって行った。ユージは3時間目からだったので、その間、自分の机で勉強をした。他の担当する授業のない講師も、本を読みはじめた。

やがて、2時間目が終わり、カイが興奮して帰ってきた。

「いや〜、やっぱり大勢を前にしてやるのは緊張するな。ユージ、これから、お前がんばれよ！」

そう言うときカイはさつさと数学の教科書を出して勉強を始める。

2時間目と3時間目の休憩は20分あったので、時間はまだあったが、ユージは早めに教室を出て運動場へ出向いた。一人でグラウンドを走って生徒が来るのをまっ待っていると、ぽつぽつと生徒がやってきた。3時間目が始まる5分前には全員が集まった。ジェッシーたちがいてユージを見てニヤニヤ笑っていた。思わずユージも笑いそうになるが、ぐっところえる。

「さて、みんな揃ったようだから、少し早いがもう始めるとしよう。今期から上級コースを担当することになった、1等兵のユージだ。これから5ヶ月間よろしく願います。さて、まず最初の1時間は体力測定の間だ。では、まずこれから、30分間ランニングをする。私についてこい。」

ユージはさつさと走り出した。ジェッシーたちがすぐ後につき、残りの生徒が慌ててそれにつく。5分もすると、ユージとジェッシーたちは集団から抜け出した。10分後には長い列となり、15分後には、ユージたちは最後の人間に追い付いた。20分後には、ユ

ージがジェッシーたちを引き離す。やがてユージは最後の人間を再び追い抜く。

30分が経過し、スタート地点でみなが戻るのをユージはまった。ジェッシーたち以外のほとんどがスタート地点に戻ると、座りこんだ。

「これから、前期のみなな成績を元に班分けをする。」

ユージはそう言うと、1班から順に名前を呼んでいった。

「この班のリーダーに、ランニングで私に途中までついて来られた8名の諸君に行ってもらう。」

ユージは班とそのリーダーの名前を読み上げて行った。ジェッシー達は驚いていたが、目を輝かせてやる気満々の顔を見せる。

「ランニング以外は、これから必ず班ごとに行動してもらう。通常のみなの様子を私がチェックし、成績をつける。その成績をもとに1ヶ月後、また班を決める。1班から順に成績が良いものだ。みななるべく上の班にいけるよう、頑張ってくれたまえ。今のランニングを見せてもらったが、みな体力がなさすぎる。すべての実技の教科において、体力は不可欠だ。次回、試験を受けるもの、手をあげる。」

そういうと、112名のうち6割くらいの手があがった。

「では、その者たち全員に体力測定試験にて満点を取ることを要求する。」

数名の者が不満の声をもらした。

「みなも聞いているだろうが、前回の入隊試験で私と共に1等兵になったものは、全員私の指導を受けたものだ。彼らに同じ要求をしたが、全員それについてきた。だからこそ、素晴らしい成績を残せたのだ。彼らも最初はみなと同じような体力だった。だが、たった3か月と少しでそれをやり遂げたのだ。君たちには、まだ5か月もある。十分満点は可能だ。リーダーの何人かはおそらく、次回の入隊試験で1等兵となるだろう。彼らを目標に頑張ったまえ。もちろん、学校に帰ってから訓練をし、勉強に励めば君たちも1等兵に

なることは君たちにも可能だ。全員、とりあえず5等兵に合格すればよい、などという甘い考えは捨てるように。1等兵になることを目標にしる。そうでなくては、合格などとうていできん。次回試験を受けぬものも、今頑張っておけば、後が楽になるから、最善の努力をするように。さて、私が話している間に、十分休憩ができただろう。さあ、班に分かれて、柔軟体操だ。その後、腕立て・腹筋・背筋をつづけて5分間つづ。用意スタート！」

はやりこちらも、ほとんどのものが、5分続けることができなかった。柔軟体操が終わるころには、初日で班分けや説明に時間に取りれたとはいえ、ひとつひとつの行動に移るのが、みな遅くてもう1時間20分が経過していて、後20分しかなかった。

ユージは、こりゃ、前途多難だな、と思った。

「では、続いて剣術だ。今日は説明に時間がかかったので、弓術は行わず剣術だけを行う。こちらも班で行動してもらうが、別の班で行動してもらう。こちらは、剣術の前期の成績で決めた。名前を呼ばれた者は、すぐにマスクと防御服を身につけ、ネーチェの棒を持つて待機するように。」

ユージは次々名前を呼んで発表していった。リーダーもまたジェッシーたちだったが、成績順に班の担当を変えた。すぐ、組み合いを始めさせたが、リーダーがうまくやってくれ、ユージは時々注意しながら、見ているだけで大丈夫だった。あっという間に、終了の時間となった。

「では、これにて本日の授業を終わる。明日からは、時間になったら私が何も言わなくても、ランニングを始めるように。わかったか。」

「はい……」

元気のない返事が返ってきた。ユージが講師控え室に向かおうとすると、ネイルの館の8名が集まってきた。

「さすが、厳しいですね！」

ネロが言った。

「私たちがリーダーだなんて、びっくりしました。でも、実は去年の後半、実技の授業が物足りなくなっていましたので、これから楽しみです。」

ジェッシーだった。

「明日から、僕たちもみんなをビシビシ鍛えてやります。」

今度は、スコットだった。

ジェッシーたちが敬語を使ってきたので、ユージはなんだかおかしな気分だった。

みんな口々にそう言うのと軽やかに走って行った。ユージは彼らが楽しんで授業をしてくれたのを知って、うれしかった。そして、頼もしく思えた。

…あいつら、本当に1等兵になりそうだな…

なんだか、自然と顔がほころんだ。

そんな顔をして、講師控え室に入ったので、カイが

「うまくいったのか？」

と目を輝かせて言ってきた。ユージは苦笑しながら、授業の内容を詳しく聴かせた。

「そうかあ…結構大変そうだなあ…俺の方はさすがに優秀な生徒ばかりとあって、ものすごくやりやすいぜ。あゝ今度のミニテスト楽しみだ!!!」

昼からの訓練義務は、昼の2時からで時間が随分あったが、初めての日とあってユージとカイは早めにグラウンドへ向かった。するともうロプレスが来てランニングしていた。

「やあ、君たち早いね。まだ、2時まで40分もある。よかったらネーチェをやらないか。」

「は、はい!!」

ユージとカイが背筋を正して同時に返事をする。

「ちよっと君たちの腕を見たいから、本気でやりたい。マスクと防

護服を着てくれるかい？」

ユージたちはマスクと防護服を着た。ロプレスも身につける。

「では、カイ君。君からお願いしようかな。」

ロプレスはショー近衛隊長官と同じくらい、無駄のない動きとすばやさで正確さで、あつという間にカイをやっつけてしまった。カイはマスクを外すと、ロプレスに握手を求めた。

「さすがです！ロプレス…隊長と及びしたらいいのでしょうか？」

「ああ、隊長と呼んでくれ。この町での隊長は私になったからな。

私はこれでも、近衛隊では第7隊の隊長をやっている。ショー近衛隊長官とは友人なんだ。彼ともよくやりあった。剣術では何度か彼をさしおいて私が勝ったことがある。」

二人ともそんな人が、自分たちの隊長になるなんてびっくりだった。

「私は夏に近衛隊を辞めた後は、実は長期休暇をとっていたんだ。

去年君たちが好成績で試験に合格した後、ショー近衛隊長官から手紙をもらってね。とても優秀なものがいるから、ぜひ私に指導にいてくれないか、という内容だった。私も君たちのことを聞いていて、ぜひ会ってみたかったし、自分の手で優秀なものを育ててみたいと思った。二つ返事でOKしたよ。それで急いで準備して3日前に家族で引っ越ししてきたというわけだ。」

カイとユージは驚いてお互いの顔を見合わせた。

そんな立派な人が自分たちのために、わざわざ家族で引っ越してまで、指導しようとしてくれるとは。

「じゃ、次はユージ君。実技で満点の腕前をみせてもらおうか。」

ユージとロプレスの組みあいは、それは、すさまじいものだった。10分ほどすると、ロプレスが棒を下ろしたので、ユージも組み合いをやめた。ロプレスは息を切らし、マスクをとって笑顔でユージに言った。

「いや、素晴らしい。ショー近衛隊長官の言っていたように、君はすでに近衛隊レベルだな。カイ君もなかなかのもんだ。君も今でこ

れなら、いずれは近衛隊になれそうだな。」

二人は、ロブレスにそう言われて、感動して目に溜めた。

「だから、君たちには特別に指導をしようと思う。訓練は17時に終わるが、学校は18時まで開いている。訓練が終わった後、君たち二人は残りたまえ。」

「ありがとうございます！」

二人は敬礼した。

「それから、ユージ君。1等兵の訓練では、君は私の補助をしてくれるか。現在、この隊には私たちを含め31名だ。私一人でも見れないことはないが、補助がいてくれる方がやりやすい。他の実技も群を抜いていると聞いている。このあとぜひ見せてくれ。」

「了解いたしました。」

そうしているうちに、2時になり全員がグラウンドに整列した。400名位がいた。ユージとカイ、それに同じ試験で4・5等に合格した4名を合わせ、計6名が新しい新入隊員だった。6名は全員の前で紹介された後、等級ごとに分かれた。

「みんな、先ほども紹介したが、元近衛隊第7班隊長のロブレスだ。今期からこのエルパ隊の隊長だけでなく、1等兵のリーダーも務めることとなった。みな知っている者ばかりだろうが、私は来たばかりなのでな。それに、今期から1等兵になったものもいるから、これから、自己紹介を順にしてもらう。」

自己紹介を順にし、最後にカイとユージが自己紹介すると、みんなが拍手した。

「これ以外に、4名いるが彼らは現在国境警備にあたっている。戻ってきたら、また自己紹介してもらうことにする。それから、月に一度1等兵から5等兵まで合同訓練を行い、紅白に分かれて勝敗を決めるが、1等兵では普段も紅白に分かれて訓練を行おうと思う。」
すると、ロブレスはみなをちょうど半分の15人づつになるよう

に分けた。

「左が赤。右が白とする。」

カイもユージも白だった。

「赤のリーダーはネイソン君にやってもらう。今度の近衛隊の試験を受ける予定でいるようだし、今までの成績も拔群だ。そして、白のリーダーはユージ君に行ってもらおう。こちらは、まだ入ったばかりだが、みなも知っておるように、実技で我が国初の満点を出した男だ。十分にリーダーとしてやってくれるだろう。私は交代で両方の指導をする。では、訓練を始める。」

すると、おもむろにカイが手をあげた。

「隊長！」

「カイ君、何だ。」

「はい。1等兵だけで毎週金曜日に紅白戦を行ってはいかがでしょうか？紅白戦は隣国からの戦闘を想定した模擬戦としての役割があります。なら、なるべく多く行った方がいいのではないかと考えます。普段の訓練も紅白に分かれるのなら、その方が訓練にも気合が入ります。」

「なるほど：それは確かにその通りだ。このカイ君の案に賛成のもの、手をあげよ。」

全員が手をあげた。

「では、これを承認する。：そうだな。2等兵以下も同じようにするとしよう。カイ君。他に何か案はあるか。」

「はい。毎週の階級ごとの紅白戦でも得点をつけ、月1度の紅白戦の点数も足し、月の勝利チームを決めます。これなら、普段の訓練にも力が入るのではないかと。」

「なかなか面白い案だな。確かに、そうやって普段から得点を争い、ゲーム感覚でやれば、楽しんで訓練ができる。」

他の1等兵も、それは面白そうだと口ぐちに言った。

「よし、それを全階級で採用することにしよう。私はこれから他の階級のリーダーにその話をしてくる。各自剣術の訓練を初めておけ。」

「ユージたちの白チームはカイも含め、みなユージと対戦したがった。仕方なく、ユージは一人ずつ相手をしていく。しばらくするとロブレスが戻ってきて、両チームを交互にみながら、どすを聞かせて注意を始める。この日は、最初の自己紹介やなんかで時間を食ってしまったので剣術だけの訓練ばかりだったが、ユージはこの日は一人で、14名を交代で相手をするようになってしまい、さすがのユージも訓練が終わるころにはヘトヘトになった。」

「やがて訓練が終わり、二人はそのままグランドに残った。するともう一人残っている1等兵がいた。ネysonだった。」

「じゃ、これから特別訓練と行くか。ネyson君も特別に訓練を行うことにした。さきほどの訓練では、なかなかの腕前だったし、今年の夏の近衛隊の試験を受けるということだから。まずはカイ君にネyson君。二人でネーチェをしてもらうか。」

「二人はマスクをかぶってネーチェをする。ネysonの方が腕は上だったが、カイは必死でくらくいつき、なかなかいい組み合いを見せた。」

「やがてネysonがカイの腕に炭をつけ勝つ。」

「二人ともなかなかよかったぞ。さて。カイ君にネyson君。お互いの組み合いをしていて、何か気がついたことはあるかい？」

「いえ…あの必死だったので。」

「と二人がしどろもどろに答えた。」

「そうか。では、ユージ君。君は今の取り組みを見て何か思うことはあったかね。遠慮なくいいたまえ。」

「あ、はい。カイはまだ腰が弱いというか…だから、ネysonさんの攻撃にすぐ反応できていません。」

「そうだな。カイ君はもっと体力をあげねばならぬ。」

「はい。」

カイが小さくなって返事した。

「では、ネyson君はどうかね。」

「ネysonさんは、腕の力が弱いんじゃないでしょうか。棒を突いたりする時のスピードがやっていくうちに落ちていきます。」

「私も同感だ。ネyson君は腕の力を鍛えるようにしたまえ。」

「はい。」

「では、私とユージ君で行うか。二人はよく見て私たちの弱点を探し出すんだ。」

二人が向い合い組み合いをはじめた。みんなと総当たり戦をやったユージはさすがに疲れていて、5分ほどで負けてしまった。

「ははは。さすがのユージ君もかなり疲れておるようだね。まあ、いい。あれを普段からやれば、あつという間に慣れる。その昔、私もそうやって鍛えたからな。ユージ君は後ろが弱いな。ま、みんな後ろに目はないから、ほとんどがそうだが。だが、それさえ鍛えれば、私もそうそう君には勝てなくなる。」

「そ、それは本当ですか？」

「ああ。」

ユージの顔が満面の笑顔になる。

「では、カイ君にネyson君。今の私たちを見てどうだったかね。」

「あの…すごいとしか言いようがないです。」

とカイが言うと、ネysonもうなずいた。

「うむ。では、ユージ君は私を見てどうだったかね。」

「はい。ロブレス隊長は左からの攻撃がほんの少しですが、苦手でいらっしやるように感じました。」

「さすがだな！そのとおり、私は左からの攻撃を苦手としている。

それは実は私は左利きだからなのだ。」

「ええ！！！」

3人とも目を丸くして驚いた。

「では、ちよつとユージ君。これから私は左手でやるからもう一度やってくれるか？」

「は、はい。」

二人はマスクをかぶりなおし、また組み合いを始めた。ロブレスはものすごい勢いでユージに襲いかかる。

「な、なんてスピードだ！ ショー近衛隊長官と変わらないじゃないか！」

ユージは力を振り絞ってロブレスに挑んだがあつという間に負けてしまった。

ユージは肩で息をしながら、

「…すごいです。ロブレス隊長！」

「いやいや、利き腕でない方で練習をすると、利き腕の方も上達するんだ。だから、近衛隊になるとすべての隊員がこれを行っている。」

「ユージは左手もできるよな。」

カイがそう言った。

「いや…あんなの出来るうちに入らないよ。」

「そうか。では、ちょっと見せてもらおうか。カイ君とユージ君、二人でやってくれたまえ。」

二人が組み合いをやった。すぐにカイが勝った。

「なるほど…まだまだだが、そこまでできていれば、後は早い。これから、なるべく毎日やるんだ。カイ君とネyson君はまず左手で棒を使うことから慣れていくといい。」

それから、さきほど、お互いの弱点を言わせたが、あれはものすごく重要なことだ。明日から自分の相手の弱点はどこか、真剣にさがしながらやるんだ。他の取り組みも見る時もそうやって探しながら見るんだ。そして、その弱点を集中して攻撃する。

「もう日が沈んできたな。終わるとするか。そうそう、カイ君、今日のアイディアはなかなかよかった。また、何か面白そうなアイディアが思いついたら、どんどん言ってくれ。とりあえず何でも採用して、試してみようと思う。」

「はい。」

カイは得意満面で答えた。

ネイルの館に帰りながら二人は今日の訓練の感想を話あった。

「ロブレス隊長すごいなあ…あんな人に指導してもらえるなんて、ラッキーだな。」

カイが言った。

「ああ。そうだな。一瞬動きが見えなかったよ。ショー近衛隊長官の時もそうだったけどさ。」

「しかし。もつと腰を強くかあ…これ以上どうやって時間を作るかだ。」

「朝のランニングをやめて、そっちに集中したら？で、ランニングは、ほら、今日ロブレス隊長、みんなが来るまでに走ってただろ？昼にしたらいんじゃないか？」

「そうだな…うーん。すると、つかれて勉強どころじゃなくなりそうだ。しばらく平日は俺も数学と歴史に絞るかあ…それで早く寝ることにするかあ…それ以外は結構いいセンまで来てるし。」

「いいセンって？どれくらい？」

「過去問題で8割くらいかな。」

「今でそれなら十分じゃないか！！！」

「そうなんだ。」

「歴史と数学はどれくらいできてるんだ？」

「こっちはまだまださ。歴史は120点くらいで、数学は100点くらいだった。だから合計で約380点だな。ま、1次の筆記試験では420点を超える事が出来たらほぼ合格だから、あと1年と8カ月あるもんな。まあ、受かるだろうけど、俺は満点を目指してるからな。」

「ええ！もうそんなに仕上がってるのか？…しかし、近衛隊は1次に筆記ってどういうことだ？そういえば、俺まだ近衛隊の試験について詳しく聞いてなかった。」

「そうだったな。近衛隊は全員で約600名だ。任期は2年。任期

が終わってもまだ、近衛隊をやりたければ、また試験を受けなければいけない。だから、近衛隊の試験は、現役の近衛隊も含めて試験をする。試験は毎年やっているが、1年ごとに300名づつだ。受験者はだいたい2000名。1次試験が筆記で、上位約800名をとる。で、2次が実技でその上位約300名をとる。だから、みんなが優秀だといい成績とつても落ちちゃうことがあるんだ。そのボーダーラインが1次の筆記は400点くらいだけど、420点とはならないと確実とはいえないな。」

「よ、420点…何でもつと早く話してくれなかったんだよ！それに、お前が数学でまだ100点つて…一体俺はどうなるんだ！」

「だから、とりあえず数学と歴史に絞ってやれっていっただろ？」

「そ、そうだけど。」

ユージはため息をついた。

「で、続きだ。隊を半分に分けて試験を行ってるのは、全員が新人にならないようするためだ。ま、そんなこと絶対ないけどな。現職の近衛隊の方が圧倒的に2次では有利だからな。しかも、2次の実技は、競技方式でやるんだ。剣術2種目に、弓術2種目と、馬術の5種目。剣術と弓術は、もう一種目は馬にのってやるんだ。たぶん、明日の訓練でやるんじゃないかな？で、それぞれの総合順位で上位約300名を決めるんだ。」

「競技方式？」

「そうだ。だから、一般のお客も見に来るんだ。ネーチエの全国大会とこの近衛隊試験が、この国の一大イベントさ。特に、近衛隊試験なんか、総合順位で1位をとるやつは、たいてい近衛隊長官だから、そいつが、皇太子になるかもしれないわけだろ？だから、国民の関心が高いんだ。」

「へえ…俺もそれ見てみたいな。」

「残念ながら、俺達は講師してるし見に行けないんだ。会場は、首都のペネだしな。」

「そうか…」

「ま、自分たちが出る時までののお楽しみ、って事だ！」

ユージはそのカイの話を聞いて、その夜、さっそくその夜近衛隊の過去問題を見てみた。数学と歴史がさっぱり分からず青ざめた。

「俺、もっと勉強の比率上げるわ……」

「だったら、お前は明日から学校、後から来るか？授業に間にあえばいいんだから。家の方が集中できるだろ？」

すると急にユージの顔が険しくなった。

「……お前、俺と離れてどうやって俺の手足となってくれるんだ？」

カイは言葉につまった。

「俺はお前と一緒に学校に行く！わかったか！」

「あ、ああ。」

「じゃ、俺、勉強する。」

ユージは歴史の教科書を見ながら、ぶつぶつ言っただけで暗記しだした。カイは、しばらくユージを見ていた。ユージがそんな風に言ってくれたのがうれしかった。

……そこまで俺のことを頼りにしてくれてるのか……

「……俺は今日クタクタだから、もう寝るわ。」

まだ時計は10時になっていなかった。

「じゃ、俺も寝る。あんな無茶な相手させられて俺もヘトヘトだ。」

「そうか。」

二人は、ベッドに入るとあっという間に眠りについた。

次の日は、カイが言ったように、馬に乗って走りながら弓矢やネーチェの訓練だった。これは、ユージの独壇場だった。ロプレスや1等兵だけでなく、兵全員がユージの弓矢に唖然とした。そこで、ユージは白チームの指導に専念する事になった。初体験のカイは散々だった。なので、カイは土日はこの訓練を集中してやることにした。

そうして、初めての金曜日がやってきた。そう。初めてのミニテ

ストの日だ。

1時間目に数学と歴史、2時間目に医学、地学、地理だった。テストが終わって、鼻歌を歌いながらカイは講師控え室に戻つてくると、すぐに点数をつけ始めた。他の講師も点数をつけ始めた。ユージはそんな彼らを見ながら、講師控え室を出てグランドに走りに行った。

ジェッシーたちはユージが最初に授業をした次の日から、筆記の授業が終わるとすぐに着替えて、ユージと一緒に走るようになった。それを見て、結局他の生徒も休憩せずに、一緒に走るようになった。おかげで、体力測定に十分に時間を取れるようになった。

3時間目に体力測定 of 授業を早めに終え、馬術の授業になった。まず、障害物を飛ばせて、みんながどれくらい出来るのかを見た。これはほとんどの者がつまづいていた。なかには、うまく馬を扱えないものもいた。そこで、みんなにネーチェの格好をさせて、ユージとリーダー8名が鬼になって、みんなを追いかけるといふ遊びに変えた。グランドのところどころに、小さな障害物やポールを置いたので、逃げながら避けたり、飛んだりしなくてはいけなかった。これは、大好評でみんなキヤーキヤー言いながら、炭をつけられないようにユージたちをよけた。これは、8名のリーダーたちにも好評だった。授業が終わると、みんなもつとこれをやりたいと言いだした。

「そうか。なら、がんばって体力をあげるんだな。そうすれば、もつとこれを増やしてやる。」

すると、みんなが笑顔で大歓声を上げた。

「本当ですか！」

「だったら、俺、家でも、体力の方、もつと頑張る！」

と口ぐちに言いだした。

「本当だ。だが、ちゃんと体力がつかないとやらないからな。では、今日の授業はこれで終わる。」

みんな、面白かったなと言いながら、だらだらと片付けているのを見て、

「おい。お前ら。体力をつけたかったら、急いで片付けて、走って教室まで戻れ！」

試しに、ユージがそう言ってみた。すると、みんな急に目を向いて急いで片付けをすると、さっさと教室へ走って帰った。ユージはその姿を見て一人で大爆笑した。

…なかなかいいアイデアを思いついたな…これから、ご褒美にこのゲームをやらすとするか…

講師控え室に戻ると、カイが暗い顔をしていた。

「どうした？」

「…テストの結果が、みんなあまりよくなかったんだ…」

と小さい声で言った。なので、ユージは点数がつけられたテストを見た。みんなだいたい70点だった。

「これだけでできていたら、十分じゃないの？」

「そんな事あるか！俺のクラスは一番賢いクラスなんだぞ！俺は全員満点だと思っていたぞ！」

ユージはカイのバカ親ならぬ、バカ先生ぶりに苦笑した。

「それは、ちょっと生徒に対して求めすぎじゃないかな。それに、まだ始まったばかりじゃないか。」

「…でも、俺のクラスでこの成績ってことは、他のクラスがなあ…下のクラスになるほど、10点づつ平均点が下がるんだ。だから、一番下のクラスは、平均40点なんだ。いくら中級から無理して、上級にあがってきたやつらが多いとはいえ、これはまずいぜ…それにさ、こうやってクラス分けしてしまったから、どうも下のクラスほどやる気が出ないみたいなんだ。ひょっとしたら俺に教われるかも、って思ったのに、成績を取らないと俺に習えないんなら、絶対上になんかいけないし、中級のままでいたらよかったって、言ってるらしいんだ…実技の方もしんどいしだつてさ…」

しょんぼりしてカイが言った。

「…そうかあ。そういえば、実技でも体力のない奴ほど、やる気がないな…それでも、なんとかやってるのは、俺が教えてるからなのかなあ…」

「そうじゃないかあ…」

ユージはふと、いい考えが思いついた。カイに先ほどやった、馬の訓練の話をした。カイは、それはいいアイディアを思いついたな、と元気なさそうに答えた。

「だから、ミニテストでの平均点をあげることが出来たら、馬の訓練を1回増やす、ってのはどうだ？」

急にカイが目を輝かせた。

「それは、いいかもしれない！！それ、いただき！けど、いいのか？ユージ。」

「いいよ。もし、本当にみんなの成績があがったら、俺だってうれしいさ。月曜日は体力測定を早めに切り上げて、授業の終わりにでもやらすよ。まあ、20分くらいしか取れないだろうけど。でもそれでもみんな喜ぶよ。…それから、今思ったんだけど、成績が伸びた率が高い者は努力賞みたいなのをやったらどうだ？これなら、下の成績ほど有利だろ？」

「そうだな！それもいたただきだ！」

「俺も実技の方でも、そうするよ。」

すると、その二人の会話を聞いていた、初級、中級の講師が話に加わってきた。

「それは、面白そうですね。」

「初級と中級も同じようにしてみようかな。」

その後、しばらく講師同士で話が盛り上がった。

昼休みにカイがランニングに行くと、いつもロブレスの方が先に走っていたので、二人はいつも一緒に走るようになっていた。

「隊長は、いつも午前中は何をなさってるんですか？」

「うちは、子供が3人いるんだが、まだ小さくてね。子守りをしてる。その間に、妻が家事をすませるって寸法だ。だから、家ではまったく訓練など出来ぬからな。早めにきてこうやって走るようにしているんだ。実は、特別訓練も君たちに教えるという口実で、私が腕の立つものと訓練したかったのもあるんだ。」

カイはそうだったのか、と思った。近衛隊をやめたのに、こんなに努力をしているなんて、すごい人だな、と思った。

「隊長は、今おいくつなんですか？いくつで近衛隊にお入りになったんですか？」

「私は、22歳で近衛隊に入り、4年間務めた。誕生日が12月だったから、今は27歳だな。本当は、後2年は近衛隊を続けたかったが、下の二人の子供が実は双子でね。まだ5月に生まれたばかりなんだ。上の息子も3歳でやんちゃざかりで、子守をやとってはいたが、あまりにも妻が大変そうなので、長期休暇をとることにしたんだ。近衛隊を務めた者には許されるからね。」

「そんなに大変そうなのに、家族で引越してまで私たちに教えに来て下さったなんて…なんだか申し訳ないです。」

「気にすることはないよ。君たちにも言つたらう？自分の手で優秀な者を育ててみたいって。それに、4か月も休んだから、体を動かしたくてうずうずしてたんだ。妻に相談したら、昼からだけだし、快諾してくれたよ。」

「そうなんですか。素晴らしい奥様ですね。」

「ははは。ありがとう。自分で言うのは少し恥ずかしいが、いい妻だと思ってるよ。」

カイは、とてもいいご夫婦だな、と思った。

「あの…、もし、よければの話ですが…お願いがしたいことがあるんです。」

「何だい？」

「私もユージも、ネイル様のところでやっかいになってるんですが、土日の昼からも、ちよつとだけでもいいんで、特別訓練していただ

けませんか？…どうしても、ユージに追い付きたいんです。」

「…そうか。あのレベルには、なかなか大変だが…わかった。妻も昼だけなら了解してくれるだろう。では、2時から4時までいいかな。後で、住所を教えてくれ。」

「はい！」

カイは元気よく返事した。

2時になり、軽く柔軟体操をやって体をあたためた後、初のミニ紅白対抗戦が行われることとなった。まずは、剣術で1対1で組み合いをした。1等兵ばかりなので、すべてかなりいい試合となった。最後に、赤のリーダーネysonと、白のリーダーユージとなった。この時点で、15対15の同点だった。ネysonとユージの戦いが一番激しかった。ロブレスの特訓ではいつもユージに負けていたため、今日こそ勝つてやると、ものすごい闘志でネysonはユージに挑んできた。それでもやはり、ユージの方が上だった。ユージが勝つと白チームは大喜びした。

「これで10点獲得だ！！！」

次は、馬にのつての剣術だった。これは、まだうまく出来ないものがいたので、選抜3名で争われることになった。こちらは、白チームはユージがあまりにも突出しているためユージは出ないことになった。白チームは不満たらただったが、なんとか2対1で白チームが勝った。次は、弓術だった。こちらは、10名が普通の動かないのでやり、後の5名が馬にのつてやることになった。こちらにもユージは参加せず白チームの一人が二度やることになった。こちらでも接戦となり、赤チームが勝利した。赤チームは同点となったので雄たけびを上げた。次は馬術だった。障害物を二人で同時に出発して先に到着した方が勝ち、というものだった。こちら赤チームが勝った。この時点で20点对20点の同点だった。

「では、最後に陣地取りを行う。月に1度の紅白戦ではこれが一番メインの試合だからな。15対15は寂しい気もするがな。」

赤と白とのそれぞれの陣地に分かれて、相手の旗を奪ったら勝ちというものだった。ネーチェを使ってやった。白はみんなで旗を守り、赤はネイソンが旗を守る。ユージがどんどん一人で赤チームのメンバーを倒していき、白チームの圧勝となった。

「やった！30点对20点で俺達の勝ちだ！！！」

白チームが飛び跳ねて喜んだ。赤チームが悔しがった。

「ふむ…他はいいとして、この陣地取りは赤チームがかなり不利だな…しかし、これは全員参加してもらいたいしな…かといって、私が赤チームに入ると赤チームが強くなりすぎる…いずれ国境警備の者が帰ってきて同じだろうな。」

すると、カイが言った。

「隊長が赤チームの指揮をとられるだけなら大丈夫ではないかと。」

「…それでも、白が勝ってしまうだろうが、そうするしかないか。ま、赤チームは他で得点を稼ぐようにするんだな。」

赤チームはしぶしぶ承知した。

この日、帰る途中、カイがユージにロブレスとの話をした。

「そうなのか。そんなにしてまで、俺達を教えてくれるなんて…本当に、この国の人って、みんな親切だなあ…。」

ユージはしみじみ言った。リート国では誰もそんな風に、家族や友人以外の他人のために何かしようという考えがなかった。

けれども、それは、貧しさのためであるという事が、最近になってユージはわかってきた。

「うーん。それは、どうかな。以外にこの国の人間って、冷たいし、保身的だぜ。」

「ええ？それはどういう事？」

ユージは驚いた。

「この国でいじめに会うのは、自分の事しか考えないヤツだ。そういうヤツは、時には国から厳しく取り締まられ、仕事がなくなる。そういう人間が大嫌いなこの国の人間は、誰もそんなヤツを助けよ

うとはしない。それがたとえ、自分たちの家族であつたとしてもだ。そうして、そいつは、野垂れ死にする運命となる。だから、そうなたたりしないように、みんなで助け合つて、自分が何かあつた時に助けてもらえるようにしてるのさ。」

「ええ！そうなのか？俺にはそんな風に計算して、みんなが行動してるなんて思えないぞ。」

「計算なんかしてないし、みんな親切好きなのは親切好きさ。無意識のうちに、そういう考え方があるのさ。だから、よけいにこの国は平和で事件がないんだ。」

「ふーん。この国つていうのは、本当にみんなで国を支えているんだなあ……」

「そうだな。だから、みんな自分たちの国が好きだ。」

ユージは、本当にそうやって自分の国が好きだと言えるカイがうらやましかつた。自分は決してリート国が好きなのは口が裂けてもいえない。家族やイアン達、リディアがいなければ、あんな国なくなつても何とも思わない。いや、むしろそれを喜んでしまうような気がした。

「あ、それからさ。明日からロブレス隊長に頼んで、土日も特別訓練してもらうことにした。ネイソンさんも誘つたら来るつて言つた。昼の2時から4時まで隊長の特別訓練で、そのあとは日が暮れるまでネイソンさんと二人で訓練することになった。」

「へえ……じゃ、俺も一緒に訓練しようかな。それに、ジェッシーたちに左手の相手してもらいたいし。」

「俺は、朝にさっさと勉強すませて、10時から、あいつら8名を相手にすることにしたんだ。」

「がんばるな。」

「ああ。早くお前に近づきたいからな。」

「そうか。じゃ、俺は早くお前のレベルに勉強が追い付くように頑張る。」

そして、また金曜日がやって来た。ユージが実技の授業を終えて、講師控え室にやってくると、カイが大興奮してユージに話かけてきた。

「ユージ！すごいぜ！ミニテスト、全クラス点数大幅upだ！俺のクラスは何と平均点90点だ！初級も中級も同じ結果だ！」

「そうか！しかし、あの馬追いかけ訓練がそこまで効果絶大とはなあ…俺の授業でもみんな異常にキビキビ動くようになって、とてもやりやすくなってるんだ。」

ユージは苦笑しながら言った。生徒がみんないい成績を出し、講師控え室には、あたたかな雰囲気であふれた。講師全員がみんな笑っていた。これから、みんなでさらにいい成績が出るように頑張らしよう、とお互い言い合った。講師みんなの気持ちが一つになった。

その後生徒たちは、筆記、実技の両方で驚くべき成長を見せた。特に筆記では月末に、来月のクラス分けをしたところ、一番下のクラスから一番上のクラスにあがるといって、離れ業を見せるものが現れた。カイはその生徒に特別努力賞を与えることにした。そうなる、自分も上のクラスになれるかもしれないと、みんなが必死で勉強をするようになった。実技でも、朝早く学校にやってきて、自主的にランニングをしたり、短距離走をしたりするものが現れ始めた。体力も驚くほどアップし、疲れて座り込んでしまう生徒が皆無となっていく。

そうして、1ヶ月がたち、初の兵士による合同訓練の日となった。「諸君。現在、赤は400点、白は360点となっており。赤は白に負けぬよう、白は赤に勝つように頑張ってくれたまえ！」

ロブレスが、挨拶をすると、兵士全員が拍手をした。

前半は、各等級の優秀な兵士による、剣術の対抗戦だった。5等兵のリーダーが出てきた。みんな大歓声だ。カイとユージはその二人

を見て驚いた。ユージたちと一緒に合格した二人だったからだ。二人ともいい戦いを見せ、赤が勝ち大歓声があがる。赤410点对白360点となった。次は、4等兵だった。こちらも赤のリーダーがユージたちと一緒に合格した人だった。ユージは、ちよつとだけしか指導しなかったけど、みんな頑張ってるんだと思ってジーンときた。こちらにも、赤が勝った。また赤チームに大歓声が上がった。

次は3等兵だ。今度は白が勝った。白チームがようやく掴んだ勝利に大騒ぎとなる。

「では、次は2等兵だ。ここからは、騎乗しての剣術となる。ここからは、得点は勝利した方に50点とする。」

ロプレスが言った。

紅白のリーダー兩名が、騎乗して向かい合いお互いをにらみながら、ぐるぐる回る。今までとは違い急に会場が静まり、緊張感につつまれた。二人がマスクをかぶる。

「では、組み合いはじめ！」

白のリーダーは、学校で中級の実技を教えている2等兵だった。ロプレスの合図とともに、お互いのリーダーがものすごい勢いで攻撃し合う。また赤が勝った。赤が大騒ぎとなる。赤470点对白370点となった。白が100点も引き離され、ざわつき出した。すると、白の1等兵が立ちあがって他の白チームのメンバーに向かって大声で言った。

「1等兵の代表は、あのユージだぞ！！絶対白の勝ちだ！それに、最後の陣地取りは得点は100点だ！大丈夫だ！勝てる！」

すると、白に急に元気が出て、ユージの名前を呼んで応援した。赤も負けずにネイソンの名前を呼ぶ。

ユージとネイソンが中央に出る。二人で睨みあう。また会場は静まり返った。二人がマスクをかぶる。

「よし！はじめ！」

ユージがネイソンに向かって突進する。ネイソンは逃げようとするが、ユージの方が勝っていた。ユージがネイソンにあつと言う間

に追い付く。棒を振り上げる。ネイソンが体を左にねじってさける。ユージはネイソンが体をねじったため、バランスをくずしたのが分かった。その瞬間ユージが炭をつけた。あまりの早業にしばらく会場が静まりかえったままだった。やがて、白チームに大歓声が沸き上がる。

「やつぱり、すぐ負けてしまったな。けど、次の陣地取りは負けないからな。」

ネイソンがユージに手を差し伸べて、そう言った。

「こちらにも負けませんよ。」

ユージは握手をしながら答えた。

ユージとネイソンが馬に乗り旗の前に立った。1等兵と2等兵がその前に、さらにその前を3等兵から5等兵が立ち防衛線を築く。

「よし！はじめ！」

ロブレスの合図とともに、陣地取りが始まった。

お互いの兵士が入り混じって、ネーチェでやり合う。ユージはその様子を見ながら、指令を飛ばす。

「右が手薄だぞ！」

白チームがそれに気づき、薄くなった右を防御する。両チームの兵士が、炭をつけられ、どんどん脱落し、グランドの隅へ移動する。人数が半分になったところで、ユージが叫んだ。

「1等兵！旗はお前たちに任せた！何があっても死守せよ！」

すると、ユージは赤チームに一人突進していった。それを見て、赤チームは慌てふためく。その隙を狙って、ユージはほとんど旗に近寄る。赤の1等兵2等兵がユージに襲いかかる。ユージはかるやかに身をかわし次々に炭をつける。目の前はネイソンだ。ネイソンがふと、左から来た白の2等兵にひるんだ瞬間、その脇をすりぬけて、旗をつかんだ！そして、それを持ってさっそうと白チームへとユージは帰った。白チームに大歓声が起きる。みんなユージのところに集まってきた。カイも抱きついてきた。

そうして、閉会式が行われた。ユージは前に出て、ロブレスから小さな優勝杯を手にした。そして、後ろに向き直り、白チームのみんなに向かって、優勝杯を掲げる。白チームが大歓声をあげる。ユージは幸せだった。目の前に並んでいるカイを見た。カイも幸せそうに微笑んでいた。

16話 国境警備

やがて、春になる。

4月のある日、ユージとカイは昼食を食べていたところを、ロブレスに呼び出された。

「軍の国境警備の件なんだ。ご存じのとおり、1等兵から3等兵は必ず1年に一度は国境警備に当たらねばならない。そこで警備をしつつ、野営訓練も行うのだ。で、君たちは講師をしているため、学校のない6月と12月にしか行くことが出来ない。だが、12月にはネーチェの全国大会があるからな。6月に必ず行かせるようにと、シヨー近衛隊長官からお願いされてしまったね。それに、二人とも試合には出たいだろう？」

「はい！」

そろって二人は返事。

「で、配属先なんだが…普通は一番近い野営地になるんだが…これも、シヨー近衛隊長から、願われてしまったね。バーサル山脈のふもとのナベル町のはずれの野営地にするようにとおっしゃってるんだ。たぶん、首都ペネから馬で3時間ほどでいけるから、視察という名目で君たちに会おうと思ってるんじゃない。どうするかね？もちろん、決定権は君たちにある。」

ユージとカイはお互いの顔を見た後、即答でOKの返事をした。

「そうか。わかった。そのように手配しておく。私も一緒についていくことにするよ。」

カイが驚いた。

「あの、確か一度近衛隊を経験したことのある者は、国境警備の義務はなかったと思うのですが。それに、奥様とお子様はどうなさるんでしょう。隊長がいなくなれば、お困りになられるかと…」

「そう。私に国境警備の義務はないが…君たちの訓練をあちらでもしたいのだ。ネイル様に相談したら、その間、妻と子供をネイル様

のお屋敷で面倒見てくださるとおっしゃってくださったので、お言葉に甘えさせてもらうつもりだ。私のいない間は、ネイソン君に私の代役を頼むつもりだ。彼は、1次試験は大丈夫そうだと言っておつたし、最近、実技では、ユージ1等兵に迫る勢いを見せておるからな。安心して任せられる。」

カイとユージはなんだか申し訳なかった。

「あの野営地では、山のすぐふもとと言うこともあつて、結構面白い訓練があるんだ。山を駆け昇つて、山に置かれた宝を誰が一番早く取つて帰ってくるかつてね。馬術の腕も上がるぞ。」

「へえ。それは面白そうだな。」

カイがユージに言った。

「そうだな。リート国は山がないからな……やってみたいな。」
とユージ。

「それから、来年の近衛隊試験に君たちは挑戦するだろう？すると、来年の6月はその対策にあてたいはずだ。」

「はい。」

カイが答えた。

「私は、かなりの確率で君たちが、来年の近衛隊の試験に合格するのではないかと考えている。そうすると、1度しか国境警備をやらん事になるかもしれん。したがって、本来は2週間のところを倍の約4週間滞在してはどうかと思う。すると、訓練学校の試験が終わった次の日の早朝に出発し、その日の晩遅くナベル野営地に到着。学校が始まる4日前に、このエルパ町に帰ってくる、という強硬スケジュールになってしまふのだが。」

ユージとカイはそれも了解した。

「ユージ1等兵もカイ1等兵も注目の的だからな。そんな二人に、私が着いていたら、さぞかしみんなお前達を気にするだろうな。それに、シヨー近衛隊長官まで現れる。将来の近衛隊長官、副長官の候補生だと宣伝して回るようなものだ。」

ユージとカイはそれを聞いて驚いた。

「私達が近衛隊長官と副長官の候補生？…ユージはともかく、私が近衛隊副長官の候補生とは…そりゃ、なれるならなりたいですが…」

「カイ1等兵。ユージ1等兵があまりにも目立っているから、君のすごさが隠れてしまっているが、訓練生から1等兵にいきなりなった人間がその候補にあがらないはずがない。それに、講師としても奇抜なアイデアで生徒の成績を伸ばしているじゃないか。実にすばらしい才能だと思う。実技に秀でるユージ1等兵、知識とアイデアに秀でるカイ1等兵。なんとよい組み合わせだろうね。私はずっと君達の事を、将来の近衛隊長官、副長官候補生として鍛え上げてきた。だから、今回の国境警備もついていくんだ。」

カイの目に涙が溜まった。

「では、国境警備は4週間、ナベル町のはずれの野营地で希望を出しておくよ。…きつと、関係ない近衛隊もやってくるだろうな。私も思い切り君達とやり合いたいからな。あちらでは訓練攻めに合うと思ってくれ。」

ロプレスがニヤリと言う。

「はあ…そうですね。」

カイとユージは、想像してげんなりした。

「ははは！幸運だと思って頑張ってくれたまえ。それから、生徒たちの試験の結果は気になるだろうから、早馬で結果を教えてもらうことにするよ。」

「了解しました。」

ユージ達は、そう元気に返事したものの、その国境警備の期間がとても恐ろしい事になりそうで、頭が痛くなった。それに、ユージには、勉強があまり出来なくなるかもしれないというのは、大きな障害だった。

「でも、お前、数学が目覚ましい進歩じゃないか。過去問題で87点だろ？そこまで来たら、少しぐらい休んでも大丈夫さ。その代り、その間はちょっとした隙間の時間に、歴史を勉強するといい。こま切れで覚えるのって以外に覚えれるんだぜ。」

「ふーん。じゃ、お前の言うとおりにするよ。」

そうカイに言ってもらって、ユージは少し安心した。

それから1週間後の夜、ユージはネイルに呼び出されネイルの部屋にやってきていた。

「実は、今日、この図書室の本を少し整理しておったら、こんな本が出てきたのだ。」

薄くてわりと真新しい本だった。ユージはパラパラとめくってみた。

「こ、これは！」

ユージは驚いた。リート国の下級兵が持たされる薬の配合が書いてある本だった。

「やはり、お前にはわかるのかね？どうやら、リート国のものらしいという事はわかったが、一体さっぱり何が書いてあるのか、わからんのだ。」

「…ネイル様、これを私にいただけませんか？」

ネイルをじっと見つめてユージは言った。

「これには…リート国の薬の配合が書いてあります。私が持っているしびれ薬や風邪薬、痛み止めなどの作り方が載っています。」

「…そのような物を、お前に渡せと申すのか？それが、あればこの国の人間がどれほど助かるか分かっているって言うておるのだな。」

ネイルが鋭い目でユージを見た。

「…はい。もちろん承知しております。…私はこの国に来て気づきました。あのように荒れた大地に国があるにも関わらず、大した特産物もないあの国が成り立っている理由は、薬のおかげだったのだと。」

「我々リート国の兵士はこの読み方をまず習います。その時は子供だったため、どうしてこんな書き方をしているのか分かりませんでした。今は、わかります。国を守るために、こうやって暗号で書きとめているのだと。ですから、この内容を教えろと言われても、

私は決してお教えはいたしません。たとえ処刑となつてもです。

…私が手にすることで、万が一、この情報が漏れるのを防ぎたいのです。薬が専売輸出品でなくなれば、あの国は終わりです。

それに、私の持っている薬もそろそろなくなつてまいりました…新しい薬が欲しい。

ですから、どうか、私にいただけませんか。もちろん、フウを助けたように、危険な時にはその者に進んで薬を分けあたえることを誓います。」

ネイルはしばらく、黙つてユージを見る。ユージはそのネイルから目を離さずにいた。

「…分かった。お前を信用しよう。この話は私とお前だけの秘密としておこう。」

「ありがとうございます。」

ユージは丁寧におじぎをした。

「…けど、どうしてこんなものまで、この国にあるのでしょうか？」ユージはネイルに訪ねた。

「確か、歴史の教科書に載っていたと思うが…この国がどうやって現金を生み出していると思う？」

「紙が特産物だとカイに聞きましたが。」

「うむ。確かに、紙もそうだ。しかし、それ以上に莫大に利益を上げているものがあるのだ。その本も、教科書も、すべて人の手で書かれておらぬな。」

「はい。」

「その技術は、このアイカ国が独占しておるのだ。だから、他国からそういった本の制作が舞い込んでくるのだ。そうして、製作された本はすべてこの国にも保存されておる。だから、この国には、あらゆる国のあらゆる情報が詰まった本があるのだ。その情報もこの国を支えている物の一つだな。」

ユージは驚いた。

「そういえば、確かに、本を機械で製作する技術が200年前に生

み出されたと教科書に載ってました。しかし、この国だけの技術だったとは知りませんでした。」

「そうなのだ。だから、この技術を盗みたいと思っている他国の連中がうようよおってな。だから、その製作工場は、厳重に警備された場所で製作しておるのだ。この国がこれほどまでにたくさん兵士を育てているのは、その技術を守るためでもある。」

…そうだったのか。

ネイルが部屋から出ると、ユージはその本を改めてじっくり見た。

エナ・ジャン

これは、エナ（しびれ）・^{ジャン}薬だ。

クオー・サー・ジャン

これは、クオー（痛み）・サー（止める）・薬。つまり痛み止めだ。

その調合の内容はその下中に書いてある。

コモイ・ナ ソユ1は、コモイ（さな草）・ナ（粉末） ソユ（大）1だ。

…材料はこのあたりでも見かける草ばかりだ。よかった。これがあれば、思う存分狩りが出来る。

ユージは、最近、危険動物に会う時のために、残り少なくなつたしびれ薬を使わないようにしていたのだ。だから、大物の動物はなかなか仕留めることができなかった。

…マーサー様が喜ぶな…

ユージは本を懷にしまい、勉強を再開した。

そうして、いよいよ5月の末となり、試験の日となった。

上級コースからは、112名のうち、74名が受けるという学校

始まって以来の多人数が受けることになった。カイとユージが見込みのありそうなもので、16歳になっているもの全員に受験させることにしたのだ。今回受ける予定のなかった生徒もいたが、たとえば不合格でもためになるから、受けるようにとカイが無理やり説得したのだった。

1日目の筆記は、ユージとカイは試験管となった。解答用紙を配り、生徒に問題を口頭で言った。シーンとした会場に、自分の声とペンを走らせる音だけがした。たった半年前は、自分がそこにいたかと思うと不思議だった。

2日目の実技は、ユージとカイはただ不正がおこなれないか、見ているだけだった。試験官や実技の相手には、他の町からやってきた1等兵があたった。生徒の試験は、自分の時以上にドキドキした。しかし、ジェッシー達が想像通り素晴らしい実技を見せてくれ、目に涙が出そうになった。ユージは、カイに見つかるまいと、必死で我慢した。最後の剣術になった。ユージはジェッシー達8名の相手をロブレスに頼んでいた。彼女たちが順によばれ、相手をする。相手がロブレスだというのに、堂々とした組み合わせを見せてくれた。

…これなら、本当に8名全員が1等兵になるかもしれない…

ユージはそう思った。彼らはこの5か月筆記のクラスでも常にトップ争いをしてカイのクラスにいたのだから。

去年はテスト前日に壮行会をしたが、今回はカイとユージが講師だったため、試験が終わったこの日にパーティをした。カイとユージはネイルたちに熱弁をふるって、みんながどれだけ素晴らしかったかと語った。すると、8名みんな泣きだした。そうになると、ユージもつられて泣きだした。

「みんなはともかく、何でお前が泣くんだよ！俺、知ってるぜ。試験中も涙ぐんで、涙拭いてたろ。俺に見えないようにしていたつもりか知らんが、しっかり見ていたぞ！」

とカイがいうと、大笑いとなった。

次の日は朝の4時に出発し、国境警備の野営地へ出発するため、早々にパーティは切り上げられた。帰り際に、みんなと握手をする。彼らには内緒だったが、1等か2等に合格した際には、全員の街へ講師として配属されることが決まっていたのだ。彼らは、すくなくとも2等兵には必ず合格するだろう。ミンやマーフィ、キースたちと同じように、ユージは自分が手塩にかけた生徒が羽ばたいて別の地で今度は彼らが指導者となり、ユージやカイの教えを引き継いでいく。とても不思議でうれしく、そして寂しくもあった。

カイとユージは門まで出ていって、みんなの姿が見えなくなるまで見送った。

次の朝、ユージとカイは3時に起きた。マーサーが二人のために早起きして、あたたかな朝食を用意してくれた。

「しばらく、このおいしいご飯が食べられないんですね…本当に残念です。」

ユージがそういうとマーサーが、涙をためて言った。

「本当に二人がいなくなるのは、さみしいわ。帰ってきたら、いっぱいおいしいもの用意しますからね。さ、もう3時半よ。準備なさい。」

センがリイとカイの馬アンディを玄関まで連れてきてくれていた。玄関に運んであった荷物を、リイとアンディに載せる。二人ともそれ以外に背中にも荷物を背負った。そうしていると、蹄の音が聞こえてきた。ロブレスだった。

「おはようございます。ロブレス隊長。」

二人は敬礼をし挨拶をした。

「やあ。おはよう。」

ロブレスは馬から降りた。マーサーとセンもやってきた。

「おはようございます。この後、奥様とお子様を迎えにまいりますからね。」

マーサーがロブレスにそう伝える。

「おはようございます。申し訳ございませんが、よろしくお願いいたします。」

ロブレスは丁寧にマーサーにお辞儀をした。

「さあ、そろそろ行くか。できれば日が沈む前につきたい。」

「はい。」

3人とも馬にまたがった。

「では。ユージー等兵とカイー等兵は私が責任を持って面倒を見ますので、ご心配なく。」

ロブレスがマーサーに言った。

「ええ。よろしくね。カイ、ユージ、頑張るのよ。」

マーサーが二人の手をとって、涙ぐんでいた。

「はい。」

二人は、しっかりとマーサーの手を握り返した。

町の近くはゆっくり歩いて進んだが、町をはずれるとロブレスは馬を飛ばし始めた。いくつかの森を越え、いくつかの町や村を抜けた。途中、小川で休憩をとった後は、昼までノンストップだった。

昼食は途中の町のエーナで食べた。

「この町はな、鱒のサンディがうまいのだ。君たちにごちそうしよう。」

そういつて、ロブレスが、たくさんの人でにぎわっている店に連れて行ってくれた。

鱒とレタスが挟んであって、そのソースがなんともいえない味だった。

「これ、本当においしいです！」

ユージは、カイが食べようとしないのに気がついた。

「あれ？カイ、どうしたの？」

「尻が……腰が……食欲ない……」

サンディを持ったまま、死にそうな顔をしていた。

「ははは！まあ、8時間ほとんど休憩してないからな。でも、食べないと野营地まで持たないぞ！まだ、半分だからな。」

ロプレスが言った。

「ま、まだ半分…」

「そうだよ。食べなくちゃ、カイ。馬のるのに体力いるのはわかってるだろ？」

カイは元氣のない返事をして、ボソボソと食べ始めた。

「しかし、ユージ1等兵はよく平気だね。」

「リート国じゃ、こんなの普通です。夜通し走らされたこともありましたから。」

「よ、夜通し…考えられない…」

カイはと真つ青な顔して言った。

「ふむ。私も君のその年で、それが普通というのは、やはり信じられないな。」

「大人の兵士も子供の兵士も、まったく関係ありませんでしたからね。ついていかなければ、盗賊に襲われて殺されるか、猛獣に襲われて死ぬからです。死にたくなったら、ついていくしかなかったんです。でも、やはり最初はきつかったですね。何せ12歳でしたから。」

「そうか…だから、他国の軍は少数の人数しかおらぬのに、強いのだな…わが軍は人数こそはいるが、そこまでの事が出来るのは、1等兵以上、いやひよっとしたら、近衛隊だけかもしれぬ。ユージ1等兵のその話を聞くと、ちよっと怖くなるね。昔は1等兵もたくさんいたし、もつと屈強な若者が沢山いたらしいんだが、今はすっかりこの国の平和になれて、現在では5000人しかおらぬからな。兵のほとんどが4等・5等兵だ。それですら、入隊試験・継続試験の実技の足切りを下げねば、兵を保たれぬようになっておるのだ。私の祖父が入隊した時には、370点が足切りだったし、300年前までは400点が足切りだったらしい。しかも、等級の基準となる点も今の点数よりすべて50点上だったということだ。つまり5

級の合格点が650点だったというわけだ。だから、そのころの兵の力は、今とは比べ物にならぬほどだったと考えられている。唯一、近衛隊だけが昔のレベルと保っていると言われているが。…今、攻められたら、かなりの確率で負けてしまいかもしれぬ。」

険しい顔をしてロブレスが言った。

「でも、エルパ町の兵士はかなりレベルが上がってきていると思います。毎週紅白試合をするようになったからでしょうか。おそらく次の更新試験では、ほとんどの者が1等級ずつ上がると思います。」

と、ユージが言った。

「ふむ。そうだな。私もそう思っておるが…ショー近衛隊長官がやってきたら、私たちの町の訓練方法を説明して、全国で行ってもらうようにするか。訓練学校の方は、昨日の試験で合格者が沢山出れば、ユージ1等兵とカイ1等兵の方式をすべての学校で採用することが決まっているらしいぞ。もちろん、君たちと一緒に1等兵になった他の3名の生徒の合格数も見てだ。」

「そうなのですか？わが学校からは、私とカイの考えで、おそらく7割は何らかの等級の兵になるのではないかと。」

そうユージが言くと、ロブレスは目を大きく見開いた。

「そうかね。いやはや、君たちは本当にすごいね。たくさんの後継者を作り、その子たちを全国の学校の講師として配属させ君達の方式を浸透させる。それが、ザイル様の考えらしい。」

「オヤジの？」

自分の父親の話が出て、カイがよくよく口を挟んできた。

「そうだ。ザイル様もひよっとしたら、同じように危機を感じてらっしゃるのかもしれないな。」

カイはようやく、サンディを食べ終わった。

「よし、食べ終わったようだな。ちよつと行った先に公園があるんだ。30分ほど横になって休憩してから出発するでしょう。」

公園につくなり、カイはすぐにごろつと横になって、変なため息をついた。ユージとロブレスは思わず笑う。そして、ユージもロブ

レスも横になった。真上に上った太陽が照りつける。まだ6月に入ったばかりだというのに、真夏のように暑かった。

「あの…隊長。」

ユージがおもむろにロブレスに話かけた。

「何だ？」

「さきほどの兵士の話なのですが…。昔の試験のレベルが、今より上だったとしても、実技の足切りが400点ということは、昔はそれほど筆記に重点がおかれてなかったということですよね？つまり、半分の250点あれば、兵士になれたということでしょう？」

「そうだな。」

「つまり、昔は下の等級の兵士には、そういう能力を求めているなかったということですよ？近衛隊や、1等兵・2等兵といった、この国のリーダーとしてみなを率いて行くもののみが、そういう能力を求められた。だから、筆記の勉強をさせてランクづけをした。」

「その通りだ。」

「今は、実技は足切りの350点さえクリアすればよい。後は、筆記で点を稼ごう。そう思っている人が多いように思っています。だから、実技の訓練はほどほどにしておこう、と。」

ロブレスはユージを真剣に見ていた。

「ですから、試験の合格点と一般兵の基準を、昔と同じ基準にあげるべきだと考えます。そうすると、今の授業のカリキュラムでは、とうていそれはクリアできません。ですから、訓練学校自体を抜本的に見直す必要があると思います。リート国ではだいたい12歳から14歳で訓練学校に入れられますが、今の上級コース以上のことを、朝から晩まで行っておりまして。」

「では、君はどうすればよいと思うのかね？」

「…私は、上級コースではほとんどの授業を実技の授業に当てたいです。しかも、本格的な訓練を中心に。今のように入級コースで、基礎体力をつけさせてやるなど、時間がもったいなくて仕方ありません。それに、カイは1等兵になり、いきなり騎乗で剣術や弓術を

やらされて、とても戸惑っています。1等兵に合格させるなら、学校でそれも教えるべきだと思うのです。…私は中級コースで今の上級コースと同じ事をやらせたい。そうになると、初級コースにかなりの負担をかけさせることになる。では、どうしたらよいか、となると、私にはさっぱりわかりません。」

「なるほどな…。いや、そう言われれば、そのとおりかもしれんな…しかし、こうなると話が大きくなりすぎるな…」

ロブレスはしばらく黙って考え込んだ。

「…ユージ1等兵、すまないが野営地についたら、その意見、まとめてレポートにして提出してくれぬか。他にも何か、あれば追加しておいてくれ。カイ1等兵とも相談するとよい。それを私の意見も添えて、シヨー近衛隊長官に提出し、考えてもらおうようにしようと思う。おい！聞いておるか！カイ1等兵。」

「は、はい…聞いておりました…」

カイが慌てて身を起して返事した。

「さてと、そろそろ行くとするか。」

とロブレスが言うと、カイが情けなそうな顔をした。

「君は、1等兵なのだぞ！もう、少し自覚を持ちたまえ！そんな事でこの国が守れるか！」

とロブレスが笑いながら言った。

「は、はい。」

カイは、急いで馬にまたがった。そして、そのまま走り続け、4時にはペネに到着した。馬がかなり疲労していたので、一度王宮に寄り、近衛隊に馬を預け、別の馬も貸してもらった。リイだけは平気そうだったので、ユージはリイで最後まで行くことにした。

ロブレスはそれを見て、馬も訓練する必要があるな、と、つぶやいた。ナベル野営地には、予定通り7時すぎにつくことができた。さすがのユージもヘトヘトだった。

「リイ。お疲れ様。やっと着いたよ。しばらくゆっくり休んでくれ。」

ユージはリイを優しくなでて、荷物を下ろしてやった。

ナベル野営地には、約300名ほどの兵士がいた。ユージ達がついた時は、夕食の時間らしく、みな焚き火をして、ご飯を食べていた。その中から、真紅の制服を来た兵士が二人、ユージ達に気がついてこちらに近づいてきた。その二人の袖を見てユージとカイは驚いた。2本と1本の白い線が入っていたからだ。近衛隊の各隊の隊長と副隊長の印だった。

「お久しぶりです。」

二人が、ロブレスにそういった。

「こちらが、ユージ1等兵、カイ1等兵です。」

ロブレスがそう言って敬礼をしたので、ユージとカイもそれに続いた。

「私は、近衛隊第7班隊長カウス、こちらは副隊長のゼナだ。」

左の方の近衛隊が二人を見て言った。

「近衛隊の隊長と副隊長になられていたのですね。」

「はい。隊長がやめられた後に後任に抜擢されました。」

カウスが言った。

「隊長は、エルパ隊の隊長をしておりますからそれで結構ですが、その言葉づかいはおやめください。私は、今は部下なのですから。」

「…そうなんだけど、慣れないよな。」

カウスが困った顔で言うのと、ゼナも頷いた。

「しかし、近衛隊の隊長、副隊長の両名が、この野営地のリーダーとは、私も、正直驚きました。普通では、ありませんから。」

ロブレスが言った。

「シヨー近衛隊長官のご意向でね。まあ、我々もぜひ話題の二人に会ってみたかったんで喜んで引き受けたんだ。」

ゼナが言った。二人は、ユージとカイに握手を求めてきた。

「少しの間だが、よろしくお願いするよ。とりあえず、今日は朝からぶっ通しで、さぞかし疲れているだろう。3人とも、今日は客用

のテントで寝るといい。」

ユージたちは、カウスにそう言われて、客用のテントに案内された。

3人の姿を兵士全員が見ているのが分かった。テントの中は、小さい机が4つと、ベッドが4つあった。ベッドの脇に3人は荷物をおいた。

しばらくすると、カウスと、ゼナと、1等兵らしき者が、さらに盛られた夕食とお茶を持ってきた。

「こちらは、1等兵のサトだ。」

カウスに紹介され、お互い敬礼をかわす。

「君たちには、明日の朝から正式にこのナベル野営地に配属されることになる。配属班は、4班。このサトが副班長を務める。ロブレス1等兵に班長を務めてもらう予定だ。君たち二人も4班だ。」

サトがロブレスに手を出し、

「あなたのような方の元で訓練出来るとは光栄です。明日からよろしくお願いします。」

と目を輝かせて言った。

「いや、こちらこそ、よろしく願います。」

ロブレスは握手に答えた。

サトがユージとカイを見たので、二人は自己紹介をした。

「ユージです。」

「カイです。」

お互いに握手をする。

「君がユージ1等兵か。うわさは聞いているのが分かった。明日から楽しみだ。」

「では、君たちは食事が済み次第、ゆっくりしてくれたまえ。明日の起床時間は5時となっておるから、早めに休むとよい。」

カウスはそういうと、ゼナとサトとともに、テントを出て行った。

1つの皿にごはんと焼いた鳥と野菜の煮物がのつていた。ユージはリート国ではこれよりひどいものを食べていたというのに、マーサーの作ってくれる料理にすっかりなれてしまい、これだけか……とがっかりした。それでも文句を言わずに食べた。

「ロブレス隊長……いや、ここでは班長ですね。私は疲れましたので、さっそく寝かせてもらいます。」

そう言うと、カイはすぐにベッドに入ってしまった。

「さすがに私も疲れたから、もう寝るよ。今日はこの皿はこのままでもいいだろう。」

ロブレスも伸びをしながらベッドに向かった。

ユージもベッドにもぐった。ロブレスがテントの中の明かりを消した。ユージはあっという間に寝た。先に疲れて寝たはずのカイが、寝つかれずに寝返りを何度もうっているのにも何も気付かずなかった。

次の日、5時に鐘を鳴らす音で起きた。外に出ると、野宿をしていた兵士が起きて寝袋を片付けていた。カウスがすぐにやってきてユージ達を4班のところまで連れて行ってくれた。

「君たちの全体への紹介は、食事の後の合同訓練の前にする。荷物は食事が終わってから移動してくればよい。後は、サト第4班副班長、任せた。」

カウスはそう言うと、その場を去って行った。全員で簡単な自己紹介をした後、すぐに朝食の準備に取りかかった。ユージとカイは他の1等兵に言われるままに手伝う。ロブレスはみんなの手際を見ながら、火に薪をくべていた。

食事を食べると、しばらく自由時間だった。ユージたちは、同じ班の人に質問せめにされた上、さっそくネーチェの組み合いを申しこまれ、何人もの相手をやるはめになった。すると、カイがすぐ負けてしまう。

…いくらなんでも、カイがそんなにすぐ負けるなんておかしい。そう言えば、口数が少なかった。まだ、昨日の疲れが取れてないのかな…。

「カイ。お前、なんだか元気がないぞ。大丈夫か？まだ、疲れが残ってるのか？」

とユージが聞くと、カイはユージと目を合わせずに答えた。

「…そうかもな。」

「そうだな。いつもの元気なカイー等兵ではないな…昨日はかなり無理をしたからな。さらに無理をして体を壊してしまっただけなん。カウス近衛隊隊長に言っておくから、疲れがとれるまでテントに戻って休むとよい。」

とロプレスが言った。

「…はい。」

そういうと、カイは無表情でテントの方に歩いて行った。

「大丈夫かな…」

「まあ、しばらく様子を見ることにしよう。」

ロプレスも心配そうな顔で言った。

合同訓練は、8時からだった。

みなを整列している前で、ユージとロプレスの他に6名が今日から新しく加わると紹介された。合同訓練は、まずネーチェからだった。班ごとに分かれて組み合いをした。ユージの相手は、結局ロプレスがやることになった。誰もユージの相手になれるものがないかったからだ。すると、カウスとゼナがうれしそうにやってきて、ぜひ、ユージとやらせてくれと二人を相手にする事になった。すると、それに気が付き4班以外の兵士も、ユージたちの周りに集まり、その取り組みをみようとして押し合い圧し合いとなった。

二人とも、やはり現役の近衛隊隊長だ。強かった。それでも、ユージはさすがに毎日ロプレスと相手をしていたわけではない。最近では、ロプレスに利き腕の左で相手をされるようになっていたのだ。

ユージは信じられない粘りを見せ、負けはしたものの、あまりの技に、周りの兵士が大歓声を上げた。

「想像以上だな。これから、楽しみだ。毎日、我々の相手もしてくれ。」

カウスとゼナがユージに言った。ユージはうれしくて、すぐカイに教えてやりたくなった。

…どうしてるのかな。大丈夫かな。風邪とかじゃないだろうな…とカイの事を思った。

そのあとは、ロブレスの言っていた、山の中腹に宝（丸めたタオルだが）を馬で山に登り誰が早く取ってくるのか、というものだった。さすがに、300名全員が出来ないので、毎日交代で班の代表を決めてやっているということだった。今日は、ユージが初めてだから、お前がいけ、と言われ、ユージがやることになった。リイはまだ疲れが残っているだろうから、カウスの馬を借りることにした。14名の代表が一齐に出発し、山を目指す。ユージは山が初めてだったので、まったく感覚がつかめず、馬をうまく操ることができなかった。結局ユージが宝を取って戻ってきたのは、一番最後だった。他の兵士は、ユージに勝てるものを見つけて、大喜びだった。

あつと言つ間に昼になり、昼食の準備に取りかかった。昼食が出来る上になると、ユージはカイの分を持ってテントへ向かった。すると、テントから話声が聞こえた。一人はもちろんカイ、そしてもう一人は、ロブレスだった。

「どうしたんだね。私は、君が何か悩んでいて、それで元気がないように見えるんだが。…私に言ってみたまえ。話すだけでも、すつきりするかもしれない。」

ロブレスの声だ。

「…俺は、今までずっと必死で毎日毎日訓練をしてきました…早く、

ユージに追いつきたかった。あいつと肩を並べる人間になろうと……しかし……昨日のユージと隊長の話を聞いていて……なんだか、とてもじゃないけど、あいつにはかなわないって思ってた……」

カイは泣いているようだった。

「……俺は、俺は、あいつがうらやましくしようがない。その気持ちを押さえられないんです……！あいつの隣にいと、いつも比べられる。自分が出来そこないのようになって、みじめになるんです……」

「……そうか。しかし、君だって1月から比べると、素晴らしい成長を見せているぞ。あのネyson君と互角にやれるようになっていないか。彼はおそらく次の近衛隊の試験で合格する。つまり、君だって近衛隊と同じレベルにあるということだ。まあ、騎乗での剣術や弓術はまだまだだが、これは慣れておらぬのだから仕方がない。……それに、ユージ1等兵は君より早く兵士になり、厳しい訓練に耐えてきたのだ。それを、一朝一夕で追いつくはずがないことくらいは、君にも分かっているだろう。」

「そ、それは……そうですが……」

ユージは激しい怒りを感じた。ここまで怒りを感じたのは初めてだった。ユージはテントの中に入った。二人がびくつとして、振り向いた。カイがすぐに目をそらした。

「……すみません。ロブレス隊長……カイと二人きりにしていただけませんか？」

ユージは今自分がどんな顔をしているか想像がつかない程、怒りでいっぱいだった。そんなユージの顔を見て、ロブレスは何も言わずにテントから出て行った。

「……お前。何だ。今の話は……」

ユージは手に持っていた皿を机の上に置いた。

「……何って、聞いた通りだよ。俺はダメな人間なんだ。お前にはかないっこない。」

目をそらしたままカイが言った。

ユージはカイのところへ走り寄ると思いきりカイを殴り飛ばした。

「な、何すんだよ！」

カイはいきなり殴られ、頬に手を当てて、ユージの事をにらんだ。

「俺が、俺が、こうやって努力しているのは誰のためだ？」

それを聞いた時、カイは、はつとした。ユージに対して急に申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

「俺は、お前のために、絶対お前より劣った人間には絶対になるまいと。勉強だつて、お前に失望されないように頑張らなくてはと。

…そういう人間になるために、俺が平然とやってきたと思っていたのか！何もプレッシャーを感じてなかったと思うのか！お前は！」

ユージは怒りで目に涙をためていた。

「…お前は、俺がこの国の王になると決めたことが、どういう事だったのか、分かってなかったんだな。俺は、あの国を捨てたんだ！リディアのこともあきらめたんだ！国外追放で帰れないからじゃない。…俺は、全てを捨ててお前を選んだんだ！それを、それを…」

ユージはこぶしを握り震わせていた。

「ユージ、ごめん。」

「…いまさら、謝ってくれたってもう遅い。お前の夢をかなえるために努力してた俺は何てバカだったんだ！もう、俺は、この国の王にはならない。でも、王の子にはなる。そして、国へ帰って彼女と結婚してあの国の王になる。そして家族と一緒に暮らす。」

そう言い残すと、ユージはきびすを返しテントを出ようとした。

「ユージ！」

カイはあわててユージを追いかけようとした。ユージは誰かにぶつかった。ロブレスだった。

「すまない。聞くつもりはなかったんだが、聞こえてしまったね。そんな話はもつと小声でするべきだな。」

ロブレスはユージの腕を掴んで、逃げないようにしていた。

「まあ、ユージー等兵も落ち着きたまえ。カイ等兵も。椅子にかけなさい。」

ユージとカイは言われた通りに椅子に腰かけた。ロブレスは二人

の向いにあつたベッドに腰かけた。

「君たちが、あんなに頑張っていた訳が分かったよ。まさか、その年ですでに近衛隊長官、副長官の上を目指していたとはな。…まあ、カイ君はあのザイル様の息子なのだから、それを目指しても不思議はないか。」

ユージはよそを向き、カイは下を向いたままだった。

「それで、わかったよ。ユージ1等兵が昨日どうしてあんな事を言ったのかも。どうして、この国の兵力をもっと上げなければならぬと考えているのかが。」

カイは、思わず顔をあげてロブレスを見た。

「君は…将来の王として、この国のことを考えていたのだな。」

カイは驚いてユージを見た。

「そして、ひよつとしたら、今、この国が攻められたらどうしようと考えているんだ。そうなれば、おそらくこの国は負けるに違いない。そうしたら、カイ1等兵の夢をかなえてやることは出来ない。そして、本当に王になれたとしても、攻められれば終わりだ。カイ1等兵を悲しませることになる。君は、自分がこの国の王として辞めた後も、ずっとこの国が平和でいられるように願っているんだ。そして、それは自分のためじゃない。すべてカイ1等兵のためだ。そうだろう。」

「ほ、本当なのか…？」

ユージは何も言わずに、余所を向いたままだった。

「考えてみたまえ、カイ1等兵。彼ほどの腕の持ち主なら、いくら国外追放されたとはいえ、どの国でも雇ってくれる。ましてや、いまや彼は、リート国とアイカ国の両方の軍事情報を持っているのだぞ。これほど、貴重な人材、どの国ものどが出るほど欲しいだろう。外から見たら、確かにこの国は大国だ。だが、中に入り、この国が本当はたいして強くない国だとわかった今、どうしてこの国に留まる必要がある？どうしてこの国を強くしようとする必要がある？そんな回りくどい事をする必要はない。もっと強い国に行けばいいだ

けだ。」

ユージはまだ黙ったままだった。

「しかし、君たちは勘違いしているな。」

カイだけではなく、ユージもロブレスを見た。

「確かに、王と側近はこの国の最高責任者だ。だから、君たちはそれにふさわしくなろうと完璧な人間を目指そうとはしてないかね？」

ロブレスは探るような目で二人を交互に見た。

「王や側近とて人間だ。完璧になれるはずがなかるう。王に必要な事と、側近に必要な事はまったく違うのだ。王に必要な事はなんだと思うかね。ユージ1等兵。」

「強さ……だと考えています。」

ユージが答えた。

「では、カイ1等兵。側近に必要な事は何だと思う？」

「王と同じくらいの強さです。」

「やはりな。それが間違っておるのだ。」

二人は驚いた。

「王に必要な物は、カリスマ性と決断力だ。そして、側近に必要な事は、いろいろな事を分析する事が出来る処理能力だ。つまり、参謀役という訳だ。はつきり言って、両方とも強さはいらない。そうだろう？ 他の国の王が、我が国の王ほど強いと思うかね？ 違うだろう。剣を持ったことすらない王など山ほどいるはずだ。しかし、彼らは王をしておる。側近が存在しない国もある。」

ユージ1等兵、君はこの国始まって以来の一般兵士の入試試験の実技において満点を叩き出し、歴代4位の成績で合格した。すでに君は国民が注目する存在だ。すでに、カリスマ性は十分すぎるほどある。十分王になれる素質があると言うわけだ。

そして、カイ1等兵。昨日も言ったが、君は本当にすばらしい知識と分析力の持ち主だ。講師としてだけでなく、エルパ隊の1等兵としてもその能力を発揮し、誰も思いつかぬ考えを編み出してみなを向上することに成功しておる。これほど、側近となるに相応しい

おのはおらぬだろう。」

「い、いや。私の場合は、ユージにずいぶん助けてもらってますから……」

「それを言うなら、俺だってお前に助けられてるぞ！」

二人はようやくお互いの目をみた。

「……そこだ。君たちは非常にバランスのとれた組み合わせなのだ。お互いにないものをそれぞれが持つておる。だから、お互いでお互いの弱点を埋めることができるのだ。この国の王と側近に一番求められるのはそれなのだ。この国では、王が上で側近が下ではない。王と側近は同格なのだ。そして、二人で一人なのだ。だから、ユージ1等兵もカイ1等兵より上になるうとしなくていい。カイ1等兵もユージ1等兵のようになる必要はない。お互いでお互いの長所を伸ばしていけばよいのだ。……これは、王や側近に限った事ではない。近衛隊長官と副長官も同じだ。君達がその若さで近衛隊長官、副長官の候補になつていいるのは、お互いがそういう相手をもつて見出しているからだ。ここだけの話だが、カウス近衛隊長長とゼナ近衛隊副隊長も割と早いうちから、近衛隊長官、副長官の候補生として名前があがつていた。それも同じ理由だ。彼らを見ていればよく分かるはずだ。私が言った意味がな。」

そう言われて、二人は目に涙をためた。

「それからな……君たちはおそらく、実技、筆記に特にすぐれた者が近衛隊長官・副長官になると思つておるうが……もちろん、近衛隊長官には常に実技にて1位を求められる。最低でも2位だ。だが、ここだけの話、筆記の方はどうでもよいのだ。それは副長官も同じだ。」

「ええ？ どういう事ですか？」

二人は同時に言った。

「昨日、ユージ1等兵が言ったとおりだ。兵士にはそんな能力はいらんのだ。最低限のことさえ知つておればいいのだ。近衛隊の入隊試験では、1次には、ちまたで400点はないと受からんとか、上

から成績順にとるだとか、だから、近衛隊でも落とされるとか言われておるが、実際、まったくそんな事はない。試験委員会もそのような事はまったく言っておらん。この国でもっとも仕事の多い近衛隊が、そんな勉強してられるか。だから、近衛隊は筆記でよほどひどい点数をとらぬ限りは合格する。だから、筆記試験は合格者の名前しか発表されんのだ。近衛隊が試験で落ちる事があるとすれば、それは実技だけだ。しかし、この国の最高の軍の機関で訓練を行っておるものが、落ちるはずがない。：ユージ1等兵、君は近衛隊の過去問題を解いたことはあるかね？どれくらい取れた？」

「あの、302点でした。」

「カイ1等兵はどうかね？」

「私は413点です。」

「つまり、ユージ1等兵が今年の近衛隊の試験を受けることができたでしょう。必ず受かる。そして、カイ1等兵。来年の試験までに、騎乗での剣術と弓術さえなんとかすれば、合格間違いなしだ。試験勉強はほどほどにしておくがよい。無駄な労力はさけるべきだ。あんなもの、6割の300点取っていれば十分だ。」

「ええ！そんなんですか？」

二人が驚いていった。ロブレスは笑った。

「この事は近衛隊以外は誰も知らぬ。そうしなくては、誰も勉強などしまい。あれは最低限知ってほしいということを勉強させるために行っておるのだ。おそらく優秀なのに落ちるものがあるという噂は、いくら点数が取れても人間的に問題があれば、容赦なく落とすからな。そこから出た噂だろう。君たちに人間的に問題など見当たらぬ。だから、これからは実技だけに集中するがよい。実は、これはネイソン君にもこっそり教えてある。私からも推薦しておくから、筆記試験は適当にしても合格するとな。」

ロブレスはニヤリと笑った。二人はロブレスの話に驚くばかりだった。

「それで、昨日の話だ。ユージ1等兵、君にこの国の軍のあり方に

ついて思うことをレポートしてくれと頼んだな？」

「はい。」

ユージは返事した。

「そういうことなら、将来の王と側近として、この国の軍事力をあげる方法はどうしたらいいかを考えてくれたまえ。」

「…実は、私もこの試験の方法は、おかしいと考えていたのだ。特に、近衛隊の試験で、あれほどのレベルの問題をだす必要があるのだろうか？そう考えていたのだ。そのあたりも君たちに考えてもらいたい。ショー近衛隊長官は、おそらく1週間後に試験の結果を持ってやってくるだろう。もちろん、発表は2週間後だから極秘情報だ。だが、君たちが早く知りたいだろうと、結果が分かり次第知らせにこちらへ来るといふ手紙をもらっている。その時に、ショー近衛隊長官に渡したい。ユージ1等兵の話してくれた、リート国の兵士の様子も話すつもりだ。おそらくショー近衛隊長官も私と同じように危機感を持つてくれるはずだ。さっそく今から取りかかってくれたまえ。仕上がるまで、昼からの自由時間はここを使用するとよい。カウス近衛隊長官には、私の方から言っておく。」

「分かりました。」

カイとユージが返事した。

「では、私は他の兵をからかいにでも行くか！」

ロブレスは、笑って出ていこうとした。

「あ、あの…」

ユージがロブレスを引きとめた。

「何だ？」

「そ、その…私がカイに言っていたことですが…」

ユージが言いにくそうに、もじもじしていた。

「…君の恋人が、リディア姫だったという事か？」

そう言われて、ユージはうつむきながら、小さく頷いた。

「ネイル様から、君が身分の高い人と恋仲になったから国外追放になってこの国にやってきたとは聞いていた。が、その相手がまさか

リート国の王女とは思わなかったな。だが、心配はいらん。私の心の中にとどめておく。…しかし、君もあきらめない方がいい。いつか本当に君がこの国の王となれば、彼女をこの国の王妃をして迎えることもできるのだからな。」

ユージは驚いてロブレスを見た。

「あの国の王には、養子でも取らせればよいのだ。血が大事というなら、親戚のものがいるだろう。その者を王にさせればよいのだ。もしくは、君が新しい王を指名してやればよい。この国がそれほどの圧力をかけられるほどの軍事力を持つことができれば可能だろう。…カイ1等兵がリート国かのどちらかをとるのではない。すべてを手に入れる努力をしたまえ。わかったか？」

ユージは声にならなかった。ただ、頷いた。

「では、私は行ってくる。レポート頼んだぞ。」

ロブレスは出て行った。

二人はしばらく黙ったままだったが、カイの方から口を開いた。

「…本当にごめん。ユージ。」

「ううん。もう、いい。謝るな。」

ユージは涙を拭きながら言った。

「これ、ありがとう。食べるな。」

カイはユージの持ってきた昼ごはんを食べ始めた。

「…しかし、俺、気が抜けたよ。何を一生懸命、勉強頑張ってたんだろうつてさ。」

カイが言った。

「うん。俺もだ。」

二人は大笑いした。すると、ふと真面目な顔になってユージが言った。

「けど…まさか、彼女をこの国の王妃にするだなんて、思いつきもしなかった。」

「そうだな。俺も一人娘だからダメだと思い込んでいた。」

… 本当に、そんな事が出来るんだろうか？リディアも家族もこの国に呼んで一緒に暮らす。そんな夢みたいな事が。

ユージはそんな日が、もし来るなら、どんなに素晴らしいだろう。そう思った。

食事を食べ終わると、二人はアイカ国の軍について、試験方法や学校の在り方、すべてを話し合い始めた。

17話 改革案

改革案は、昼間だけでなく、夜にも話しあつたため、2日目の夕方にまとまつた。

二人は、そのレポートをロブレスに見せていた。

訓練学校

初級コースを1年間とする。13歳から入学を許可。基礎体力を徹底的に身につけさせ、基礎的な学習をさせる。

中級コースを1年間とする。14歳から。

現在の上級コースと同じレベルとする。

上級コースを1年とする。15歳から。

本格的な訓練を中心にを行い、すぐに兵士として役に立つ者を育てる。騎乗の訓練もこのコースから行う。

入隊試験の実技は400点を取らなければ合格とはならない。

その点数に筆記試験の点数を足し何等兵かを決定する。

全コースにおいて成績表をつける。筆記、実技とも、その成績表に基づいてクラスを編成する。著しく成績をあげたものには、努力賞を与える。

一般兵

・一般兵試験は、実技において、足切りを400点と引き上げる。
・4等兵・5等兵を撤廃し新たに準兵士を設置。現在の4等兵・5等兵は準兵士にすべて移行される。軍を辞めた後も、体に問題がない限り40歳までは準兵士を務めなければならない。準兵士は今までの4等・5等兵と同じ扱いとなる。

・近衛隊の試験について

1次試験の筆記にて。数学と歴史を100点満点とし、合計400点満点とする。なおかつ合格ラインを300点とする。

2次試験について。今まで通り。

・準近衛隊を設立

近衛隊の2次試験にて優秀だが、成績の足りなかった者を採用。

理由：1等兵と近衛隊のレベルの差がありすぎるため。軍に入つて1年末満の一般兵も受験可。

・特別兵の設立

・近衛隊を務めたものは、その後、特別兵になることが出来る。階級は近衛隊の上となり、王直属の兵士となる。国境警備は免除。

ネーチエでの訓練は訓練学校の上級コース以上にすべて撤廃。試験用の剣を使用。

ロプレスは、「特別兵」のところで嘖き出した。

「いや、いかにもカイ1等兵らしい考えだな。」

大笑いしながら言った。

「これを思いついた時の、カイを隊長にお見せしたかったです。特別兵を作るってのはどうだ？おお！特別兵！素晴らしい響き！！」

ユージは手を前に出し、上を見上げながら高揚した顔をする。ロプレスは大爆笑した。カイがマネすなとばかりに、ユージの足をけろうとしたが、ユージはあっさりとかわした。

「で、ですが、近衛隊は特別な存在のはずです！私がもし近衛隊になれたとして、その後、一般兵に降下するとしたら…なんだかやる

「気がなくなります。」

「でも、君には関係のない話だろう？」

いじわるそうな顔でロブレスがカイを見る。そう、王の側近になるなら、関係のない話だった。カイは顔を少し赤らめた。

「…そうかもしれませんが、そうでないかもしれません…それに、やはりおかしいです！カウス近衛隊隊長だって、ロブレス隊長が部下となって、戸惑ってらっしゃったじゃないですか。私は、どうも近衛隊を務めた者をないがしろにしているようしか感じられません。」

「まあ、確かにそうだな。私も特別兵などと言われれば、気持ちが良い。なんだか、もつと頑張ろうって気になるな。」

ロブレスがさらに大笑いした。カイはからかわれて少しすねた顔をする。

「でも、いいアイディアだよ。一般兵になりたくなくて、軍そのものをやめていくやつは確かにかなり沢山いるからな。優秀な人材をそうやって失うのは、やはり、国にとつての損失だ。それに、準近衛隊もいいと思う。ただ、問題は金銭面だな…それは、われわれが考えることでないからな。よし！レポート作成、御苦労だった！明日から訓練に集中して頑張ってくれたまえ。」

「はい！」

二人は敬礼した。

次の日から、二人は暇さえあれば訓練をした。ユージは時々一等兵以下の者と左手でネーチェの相手をしたが、ほとんどは、訓練用の剣でロブレスと対戦を行った。カイにはカウスとゼナが付きつきりで騎乗の指導をした。ロブレスは、二人を山へもよく連れていった。

ロブレスは山が大得意で得意満面でどんどん先へ進んで行くので、ついていくだけで大変だった。

そうして、ナベル野営地にやってきて、あつという間に8日が過ぎた。

ユージたちが昼食を食べ終わり、そろそろ訓練を行おうとした頃、シヨーが2名の近衛隊とともに、ロブレスとカイの馬にのってやってきた。

「やあ！ユージ1等兵、カイ1等兵！ずいぶんたくましくなったな。さぞかし強くなっているだろうな。とりあえず試験の結果を教えるから、カウス、ゼナ、ロブレス1等兵も一緒に、テントへ来てくれ。」

シヨーにそう言われ、みんなでテントに入った。

「さあ、これが結果だ。見て驚くな。」

シヨーが笑顔で通知を全員に手渡した。ユージとカイはそれを見て驚いた。

なんと、受験者全員が合格していたのだ。しかも、1等兵8名。ジェッシー達ネイルの館のみんなだ！2等兵が23名、3等兵はなんと31名、4等兵が10名、5等兵は2名。

二人は信じられなかった。7割は受かるだろうと思っていたが、ここまで好成绩で、しかも全員が合格するとは夢にも思っていなかった。

「いや、素晴らしい。講師としても、これほど優秀だとは！」

カウスが言った。ゼナ、ロブレスも力強く同意した。

「しかも、エルパ町訓練学校で1等兵に合格した8名が、1位、8位を独占だ。今回の首席はスコット君で876点だった。そして、次席はなんとジェッシー君だ！彼女は、筆記試験で満点でスコット君とは1点差だったから、実技で375点も取っている。訓練生の女性が実技でいきなりこの点数というのはもちろん、1等兵になるという事も、アイカ国史上初の事だ。」

それを聞いて、ユージもカイも涙が止まらなかった。

「それに君たちと一緒に1等兵に合格した、キース1等兵は、32

名中27名を合格させ、2名の1等兵を出し、ミン1等兵は25名中23名で1等兵1名、マーフィ1等兵は1等兵は出せなかったものの、14名全員を合格させることに成功している。これまた、それぞれの町で始まって以来の出来事だ。」

ユージとカイは夢でも見ているようだった。

まさか、あいつらもそこまでやってくれたとは！

「そこで、エルパ町で1等兵に合格した8名は、その功績を讃え、21日の日曜日に王より表彰されることとなった。ユージ1等兵とカイ1等兵の2名には講師栄誉賞が贈られる。」

ロブレス、カウス、ゼナがそれを聞いて拍手した。

「したがって、20日、21日には有給を与える。」

「はい！」

二人は涙を流しながら、敬礼した。

「では、さつそく、君たちがどれほど上達したのか、見せてもらおうとするか！ネーチェをやるぞ！」

シヨーがそう言って席を立った。すると、ロブレスがシヨーに耳打ちした。

「すみません。その後で結構ですので、お時間をいただけませんか？ご相談したことがあります。少し、込み入った話なのですが。」

「…分かった。」

シヨーは鋭い顔で返事した。ユージとカイは、どきりとした。

近衛隊長官まで一緒になって、ネーチェを行うのを見て、兵士全員が慌てて集まってユージたちを囲んだ。

「まず、カイ1等兵から見せてもらおうか。去年とは比べ物にならないほど、たくましくなっておるからな。さぞかし、腕前をあげたことだろう。グレイお前が相手をしろ。カイ1等兵、このグレイは次期隊長候補だ。」

シヨーが、そう言った。二人は軽く会釈をした後、防護服とマス

クをして棒を持ち、向き合った。カイはグレイとほぼ互角の戦いを見せたが、最後で疲れが出て来てその隙を突かれ負けた。回日から拍手と大歓声が上がった。カイは自分が信じられなかった。自分が次期隊長候補にここまでやれるとは…もつと体力を鍛えれば、勝てるのではないか…？と、思い急に自分に自信が湧いてきた。

「素晴らしいカイ！等兵。正直君がここまで腕をあげていたとは思わなかった。…カイ！等兵がその腕なら、ユージ！等兵、君は一体どれほどなのか…サイモン。心してかからねば負けるかもしれんぞ。」

ショーがそう言うと、サイモンが恐ろしく怖い顔でユージをにらみつけた。ユージも負けずににらみ返した。サイモンとユージの組み合いは、ユージの圧倒的勝利で終わった。サイモンは悔し涙を流していた。なんだか、申し訳ない気持ちにユージはなった。

すると、こつそりショーが言った。

「ユージ！等兵、気にする必要はない。最近、このサイモンは自信過剰になって、訓練も弛んでおつてな。だから、負けると分かっているわざと君とさせたのだ。これから、心を入れ替え訓練に励んでくれるとよいのだが…」

そうだったのか。せつかく近衛隊に勝ったと思ったのに、そういう事だったのか。ユージはがっかりした。それを聞いていた、カイもがっかりした。カイの表情をすばやく読み取り、ショーがこつそり言った。

「グレイの実力は本物だ。君は自信を持ちたまえ。」

カイの笑顔がこぼれた。

「さてと…ユージ！等兵とやる前に、体を温めんな。ロブレス！等兵！久しぶりにやるか！」

「はい。」

ロブレスとショーが向き合った。あたりは静まり返った。ユージもカイも、一体二人がどんな組み合わせを見せるのか、ときどきだった。先行はロブレスからだった。恐ろしく素早かった。ショーは鮮

やかにかわす。二人の組み合わせは、今までに見たことがないほど、激しかった。20分ほど続いた頃、シヨールがロブレスの棒をたたき折り勝利した。

マスクを取り、二人は握手をした。二人は息を切らし、ものすごい汗とかがいていた。

「さすがだな。ロブレス1等兵。本当に4か月も軍から離れていたのか？」

シヨールが感心してそういうと、ロブレスはニヤッと笑い、「ですから、シヨール近衛隊長官がお勝ちになれたのです。」と言った。

「こいつ！」

シヨールは笑って言った。

「本当のことを言ったまです。そして、…この私が手塩にかけて面倒を見たのですからね。ご期待に添えると思いますよ。」

ロブレスはユージの事をチラリと見てシヨールに言った。

「そうか…」

シヨールはユージに向いた。

「君には十分すぎるほどのハンデだろう。このロブレスと真剣勝負をした後だ。私はかなり疲れておる。私を倒しても構わん！かかってこい！」

シヨールが真剣な眼差しで言った。ユージは頷いた。

ユージは思い切ってシヨールに向かっていく。シヨールはさすがに疲れているらしく、少し動きが鈍くなっていた。

…これなら、なんとかなるかもしれない…

そう思うとユージは急に大胆になり、積極的に何度もシヨールに向かって行った。何度もシヨールはユージをかわすが、組み合わせはユージの方が有利に進んで行った。シヨールの方が後ろへと追いやられる。それをユージがさらに追い詰める。

…よし！いけるぞ！

と思った瞬間、あ！とユージは思った。ユージが勝利を確信したときに出来た一瞬の隙について、ショーがユージの腹に炭をつけた。大歓声が上がった。カイが右腕をあげて、すごいぞ！と叫んでいた。ロプレスも満足そうに手を叩いていた。ショーがユージに手を差し伸べた。ユージも差し伸べた。

「予想通り、来年、史上最年少の近衛隊が2名誕生するな。」

ショーが笑顔で言う。ユージは驚いてカイを見た。

…史上最年少？

「今までの最年少記録は19歳だからな。」

カイが照れくさそうに答えた。

「しかし、たった半年でこれか…半年後のネーチェの全国大会では、油断すると負けてしまいそうだな。」

「いえ、そんな…ショー近衛隊長官がお疲れだったから、ここまでやれたのです。」

と息を切らしながらユージは言った。

「そんな事はないな。ユージ1等兵。」

ロプレスが二人に近づいて来て言った。

「君の今の組み合わせは、今までの君とはまったく違っていた。この組み合わせで何かをつかんだようだな。動きが急になった。今の君なら、カウス近衛隊長とゼナ近衛隊副隊長とも互角に戦えるだろう。」

ユージは信じられなかった。

ロプレスはショーに向かって言った。

「12月のネーチェの全国大会では、ショー近衛隊長官をさしおいてユージ1等兵が優勝しますよ。そうなるように、私がさらに鍛えますからね。カウス近衛隊長とゼナ近衛隊副隊長も、あと2週間と少し、そのつもりでユージ1等兵のお相手をしてください！」

カウスとゼナが、笑顔で頷いた。

「そろそろ、夕食の時間だ！これから、すぐに準備に取り掛かれ！」

カウスが日が暮れかけているのに気が付いて声をかける。すると、みな、散り散りに自分の班の場所へ戻って行った。カイとユージも4班の兵と一緒に戻った。ロブレスは、4班の班長のサトに近衛隊長官と話があるからと言って、シヨーとテントへはいつて行った。10分ほどすると、シヨーがテントから顔を出し、グレイとサイモンを呼んだ。

「私は今日ここに泊まることにした。君たちは、先に王宮に戻ってその旨、近衛隊副長官のドレアに伝えてくれぬか。明日の夕方までには戻るとな。」

そういうと、すぐにシヨーはテントの中へ戻った。

その晩、ユージとカイは、シヨーに呼び出された。ロブレスもいた。シヨーはユージたちのレポートを持ち真剣な顔でユージたちに言った。

「読ませてもらったよ。ロブレス1等兵にも話を聞いた。私も今、かなりの危機感を持つておる。さっそく、これは明日、ザイル様に提出しすぐに会議を開いてもらおうと考えておる。」

ユージとカイは、今になって、ひしひしと肩にのしかかる重圧を感じていた。すると、二人の表情をさとしてロブレスが言った。

「そんなに心配しなくていい。君たちが確かに案を出したが、それを頼んだのは私だ。つまり、責任者は私だ。」

「いや、責任者には私かなろう。その方が事がスムーズに進む。それから、ロブレス1等兵に聞いたよ。君たちが近衛隊長官、副官の上をすでに目指していたとはな。君達なら確かなになれるかもしれない。」

ユージとカイは、はっとしてロブレスを見た。

「すまない。しかし、シヨー近衛隊長官には話しておいた方がいいと思ったのだよ。近衛隊長官、副長官にさせるのと、王と側近にさせるのでは、協力する側の対応も変わってくるのでね。」

「ザイル様もご存じなのか？」

シヨールがカイに聞いた。

「おそらく。私が側近になりたくて、王に相応しいものをずっと探していたのはご存じでした。ですから、これだけ私がユージと共にいれば、お気づきになっておられるでしょう。今はユージが、本当にそうなるに相応しいものかどうか、様子を見てらっしゃるのだと思われます。…ネイル様もご存じです。」

「なるほどな…それで、ネイル様は私に入隊試験でユージ1等兵の相手をしてくれないかと頼んでこられたのだな。…ザイル様は息子である君がかかわってくる以上、ご自身から何か働きかける事はなかなか出来まい。ロブレス。私とお前とで、この二人を全力で支えることにしよう。」

ロブレスがうなずいた。ユージは、感謝の気持ちでいっぱいになった。シヨールとロブレスは、若い自分たちが迷わないように上からひっぱり上げてくれようとしている。なんとという安心感だろう。

「…カイ。」

「なんだ？ユージ。」

「お二人に、俺の話してくれないか？」

「お前の話って？」

「俺の過去の話。」

カイは少し言葉に詰まった。

「…いいのか？」

ユージはほほ笑んで頷いた。

「ああ。お二人には、知ってもらいたくなっただ。それに、ここまでしてくださるなら、話すべきだと思うから。」

ユージが穏やかに話すのを見て、カイも頷いた。

「すみません。シヨール近衛隊長官、ロブレス隊長。私は失礼させていただきます。後はカイからお聞きください。」

ユージは丁寧な頭を下げると、テントから出て行った。

カイの話終わった後、シヨもロプレスもしばらく黙ったままだった。

「いや…それほど、彼は辛い思いをしてきていたとは。」

シヨが言った。

「…私は何もせずに彼を傷つけてはなかったろうか…」

ロプレスが心痛な面持ちで言った。

「いえ、ロプレス隊長。ユージは感謝しております。隊長は、ユージがいつかこの国の王になった時、リディア姫をこの国の王妃にすればよいと言ってくださったでしょう？ユージはまだ希望があったのだと分かって、大変うれしそうにしていました。それに、あの時、隊長が我々に、お互いの長所をお互いで伸ばしていけばいいのだと言ってくださったことも、大変感謝しています。それまで、私もユージもお互いに負けないようにと肩を張りすぎていました。そうじやなくてもいいんだって、分かってすごく楽になりました。…これから、お二人が支えてくださるのだと思うと、私もこれほど心強いことはありません。」

「そうか…そう言ってもらえると、私こそうれしいよ。」

「カイ1等兵。これからは、どんなささいな事でもいい。ロプレスなり私になり、相談してくれたまえ。上にたつものは、不安や悩みを抱えていては、思ったことはできん。それはすべて私たちが解決するから、君たち二人は自分たちのやるべきことに集中したまえ。」

「はい。了解しました。」

カイはシヨに頭を下げた。カイは泣いていた。ありがたかった。こんなにも素晴らしい人たちが自分たちを支えてくれる。信じられなかった。

ロプレスとカイがテントからさった後、シヨはベッドに横になりながら、一人で考えていた。この国の近衛隊長官となったからは、王の子になれる可能性がある。近衛隊長官になったものは、誰もがそれを夢みる。だが、それを一緒に目指そとした相手は、ど

うやらその気がないらしかった。ロブレスがせめて、あのまま近衛隊を続けることがいれば…と想っていたが…今は、それもあの二人が王と側近になるためだったのか、と思えた。

彼らを応援しようと心から思った。王と側近を自分の手で育て上げる。こんな体験もそうそう出来るものではない。自分が知りえる限りのことを、彼らにすべて与えよう…そうシヨールは強く決めた。

次の日の朝食を食べると、シヨールは何名かの1等兵を護衛につけさせ、ペネへ戻って行った。

その日から、ロブレスの訓練はさらに激しくなった。カウスとゼナのカイへの訓練も同じだった。5人のあまりに激しすぎる訓練に、午前中の訓練が終わった後の自由時間も、なんだか訓練しなくてはいけないような雰囲気がい、みんなが訓練するようになった。

シヨールが帰った後、近衛隊がペネからぼつぼつ現れ始めた。シヨールが二人の実力がお前たちと同じくらいか、もしくは上だと焚きつけたからだった。二人に挑戦しにわざわざ休日をつぶしてやってきたのだった。ユージはほとんどの近衛隊に圧勝し、カイも近衛隊と互角に戦えるようになっていた。

18話 ヨナさん

そうして、シヨーが去ってから1週間後のことだった。

昼食を食べてから、いつものようにロブレスに連れられて、ユージは山にやってきていた。すると、たくさんの荷物を積んだ馬を発見する。一匹で山の中腹でのんびり草を食べていた。ユージもロブレスも不審に思って、馬に近づいた。鞍がしてあるのに人がいない。「落馬か！」

ロブレスはそう言った。二人はあわてて、その馬に乗っていた人間を探しはじめた。ユージは、ずいぶん離れたところに、大きな黒い鳥が何匹も群れているのに気がついた。

「ロブレス隊長！」

ユージは指で指し示した。ユージ達が近づくと、鳥はユージ達を攻撃し始めた。ユージはすぐリイから降りると、石を投げて次から次へと鳥を撃退した。

その人間のところへ近づくと、50歳くらいの男性だった。服がやぶれ、かすり傷だらけであちこちから血が出ていた。気を失っているようだった。ロブレスはすぐ男の手首に手をあてた。

「大丈夫だ。生きている。すぐにテントへ運ぼう。ユージ1等兵、すぐに山を下りて誰かと一緒に担架を持ってきてくれ。医者も呼ぶように言ってくれ。」

ユージは急いで山を駆け降りた。カウスとゼナとカイの3人がいたのを見て叫んだ。

「大変です！山に怪我人が！担架を1台持ってきてください！それから、お医者様をよんで下さい！」

ゼナが走って倉庫テントに入っていく、担架を持ってきた。カウスが医者を呼んで来いと叫ぶと一人が馬にのってかけていった。3人はユージと一緒に山を駆けあがった。そばにいた4班全員も一緒についてきた。ロブレスとカウスの二人で、男を担架に載せ、カイ

とゼナが男を慎重に運んだ。ユージは、4班の兵にさつき自分が撃退した鳥を運んでくれるようお願いすると、男のものらしい馬の元へ行き手綱を持った。馬はおとなしくついてきた。

山を下り男を宿泊用テントへ運んでいる間に、ユージは自分の荷物置き場へ薬を取りに向かった。そして、急いでテントへはいる。テントの中には、カイとロブレスとゼナがいた。ロブレスが男の衣服をハサミで切り裸にした。服の下も傷だらけだった。ロブレスは泥が付いている部分を丁寧に水で洗う。

「ロブレス隊長、この薬を使ってください。リート国の傷薬です。」ユージがそういうと、ロブレスは容器を受け取り、男の傷にふりかけた。右足と左腕の骨が変な方向に曲がっていた。ロブレスは腕を慎重に確かめた。

「これは、関節が外れているだけだな。」

そういうと、ロブレスは男の腕をとりひっぱりはじめた。そしてゆっくり押さえると腕が元に戻っていた。

「添え木と包帯を！」

ゼナがあわてて、ロブレスに手渡す。ロブレスは添え木を腕に固定すると包帯を巻き始めた。すると、男が突然、

「クオー！」

と言った。ユージたちは驚いた。男が目を開けた。

「ここはアイカ軍の国境警備のナベル野営地です。山であなたを発見し、つれてきました。」

ロブレスがそう言うのと、男は痛みで顔をしかめながらロブレスを見た。

「…ありがとうございます。」

ユージたちは、男の話し方がおかしいのに気がついた。

「バランスおかしくなって、…馬からおちた。…山もずいぶん落ちた。クオー！」

ユージは今度は袋から痛みどめを取り出した。

「これは痛み止めです。」

と言つて男に飲ませた。

「ありがとです……」

外が騒がしくなり、テントの中に医者が入ってきた。

「ヨナさんじゃないか！こりやひどい！どうなさったんだ。」

医者が言つた。

「山で落馬して山から転げ落ちたそうです。怪我の部分に薬を塗つて、腕は関節がはずれていただけでしたので、私が処置し固定しました。足は骨折しているようですのでそのままです。」

ロブレスが代わりに答える。医者はヨナに近づき、足を見た。

「こりや、手術をせんといかん！」

「さきほど、リート国の痛み止めを飲ませましたから、あと20分ほどすれば手術可能です。」

ユージが言つた。

「そうかね！では、その間に準備をしましょう。すまないが、熱湯を頼む。手術道具を消毒する。」

ゼナがテントから出て言つた。医者はすぐにカバンから、手術道具を取り出した。そして、机の上に包帯やタオルなどを並べ始めた。ユージはさきほどロブレスに渡した薬を医者に渡した。

「これも、リート国のものです。化膿止めに止血止めの効果があります。」

「おお！それは助かる。そんな薬はペネに行かねば手に入らぬからな。」

そう話しているうちに、ゼナがテントに入ってきた。

「外にお湯を沸かしましたが。」

「おお。そうか。そちらへ行く。」

医者は手術道具とタオルを持って外へ行つた。すぐに戻ると再び、それを持って戻ってきた。医者は男の足をつついてみた。

「どうかね？痛みは感じるかね？」

「ジャン……きいてキタ。痛くない。」

ユージはそれを聞いてふと何かを連想した。

…ジャン…？そういえば、さっき確かクオーと言っていたな…

「そうか、では始める。」

医者は男の足を熱湯で消毒したタオルで丁寧に拭くと、小さなナイフで足を切り始めた。血が沢山出てきた。医者はそこへユージからもらった粉末を振りかけた。とたんに血があまり出なくなった。医者はみごとな腕前で手術をしあつという間に切った場所を縫い始めた。最後にもう一度粉末を振りかける。そして嚴重に足を固定し包帯を巻いた。

「よし、これで終わりだ。よい薬で行ったから、熱を出さずにすむだろう。」

「ありがとうございます。」

「あの、まだ痛み止めありますが。」

ユージが痛み止めの入った袋を医者に渡した。

「そうか、この薬は何時間ほど効果があるのかね。」

「8時間ほどです。」

「そうか。では、ヨナさん。寝る前にこれをまた飲むんだ。後はご飯の後に毎回飲めばよい。私がいいというまで飲み続けるように。」

「わかりました。」

すると医者はロブレスに向かって言った。

「しばらくは動かすことが出来ないから、すみませんが、当分の間、面倒見てもらえないでしょうか？私がこの男の保証人となります。それに毎日朝と夕方に診察しにもまいります。この男は、ソイ・モイ国からやってきたヨナさんで、15年ほどまえからナベルの町に住んでるのです。弓矢を作る名人でしてね。ナベルの町周辺の兵たちは、ほとんど彼の工房で作ってもらってますよ。」

ロブレスがカウスを見て頷いた。

「そうですか。では、こちらで面倒をみさせていただきます。具合が悪くなれば、すぐにお呼びさせていただきます。」

カウスが言った。

「では、ヨナさん。また明日な。しばらく眠った方がよい。」

「はい。」

全員、テントから出て、医者を見送った。医者は丁寧に挨拶して去って行った。

ユージたちが班に戻ると、さきほどの鳥が7匹その場に積まれていた。

サトがユージに不思議がって聞いた。

「これどうやって仕留めたんだ？矢で射抜いたような跡もないし……」

「ああ、それはユージが次々と石を投げてな。あつという間に仕留めおった。あれにはびっくりしたぞ。石投げであそこまでやるやつは、初めて見た。」

とロブレスが言うのと、まわりのみんなが、石投げを見せると騒ぎ出し、収集がつかなくなったのでユージは仕方がなく、石投げを披露した。動物にみたてて小さい物を投げさせ、それに石を当てた。すべての中させるユージを見て、大歓声が上がった。すると、みんなはおもむろに石を取り投げてコップにあてる、という事をやろうとしはじめた。そんな様子を白い目で見ながらカイがぼそつと言う。

「やめといたほうがいいと思いますよ。はつきり言って弓矢の方が簡単です。」

みんな一斉に石を捨てた。ロブレスはその様子を見て大笑いした。「なんだ、みんな諦めが早いな。」

「いや、賢明な選択ですよ。ユージは、弓矢よりもあれの方が上だと私は思っていますから。」

カイが言った。

「そうかなあ。簡単だと思うけど。」
とユージが言った。

「みんな。こいつの言う「簡単」は信用しない方がいいぞ！」

カイがそういうと、みんなまじめにうなずいた。ロブレスは笑っていないが言った。

「では、これからの鳥の争奪戦をやるか！この鳥はうまいからな！1匹はさきほどの男性の夕食に差し上げるとして、残りは6匹だ。宝取りの先着順でこれを夕食のおかずに取りつけることにしよう！」

それぞれの班の代表が麓に集まる。ロブレスが山の中腹に「宝」

を6つ置いて、山から下ってきた。カウスは3班を、ゼナは13班を指名し、その班が勝てば、一緒に夕食を食べることにした。4班からは、ユージが代表に選ばれた。最初は4班の全員が反対した。なにしろ、最初がさんざんだったからだ。それ以来ユージは一度も代表に選ばれてはいなかった。すると、ロブレスが言った。

「みんなそう思うだろう。だから、他の班は反対はしまい。私はかけてもいいぞ。ユージ1等兵が1番で山を下りてくると。つまり、うちの班は絶対鳥にありつける。」

そう聞いた4班はロブレスの言うことを信じることにした。

4班の代表がユージと知ると、他の班は、これで4班はなくなつた、食料の提供ごころうだった、と笑って4班に言う。

カウスが号令をかけた。全員が一斉に馬で駆けだす。するとあつという間にユージが先頭になった。それをみて4班全員が大喜びでユージを応援した。結果は、ユージが余裕の1番だった。4班が大歓声でユージに駆け寄る。カウスの指名した班は6位以内にはいることができず、悔し紛れにロブレスに言った。

「まったく、詐欺だな。油断させる作戦とは。」

「はっはは！私の指導が素晴らしいですよ。カウス近衛隊隊長。」その日の夕食は盛り上がった。みんな、ユージの馬が上達したのをすごいすごいと褒める。ユージは単純にその言葉を喜んだ。

「いや、本当に上達したぞ。だが、ユージ1等兵のあの馬のおかげもあるな。カウスの馬よりはるかに賢く強い。おそらく、ここに来た時にあの馬で挑戦していたら、あそこまでひどい事にはならなかっただろう。もちろん、ユージ1等兵と馬との相性もすごくいいことは言うまでもないがね。」

そういうロブレスにユージは驚いた。

…近衛隊隊長の馬より能力が上？？じゃあ、リート国の軍馬の中でもとびきりよい馬が俺に譲られたというのか？

そう思った瞬間、ユージはリディアの声を聞いた。

ユージ。ずっとずっと守るから…

後ろからリディアに抱きしめられたような気がした。

ユージはいそいで食事をたいらげると、

「ロブレス班長。ヨナさんの様子が気になるので、ちょっとテントへ行ってまいります。」

と言い、その場から一人でそそくさと離れた。カイはあわててユージを追いかけた。

「カイ。来ないでくれ！お前が来たら俺は泣いてしまう！」

ユージは後ろを向いたままそう言った。カイは何も言わずにロブレスのところへ戻った。ロブレスがカイに小声で言った。

「私は何かいけないことを言ったかね？」

「いえ…思いたしてしまっただんだと思います。彼女の事を。」

「…そうか。」

ロブレスは今まで強い精神力のある青年だとユージを思っていた。しかし、本当の彼はガラスのようにもろいのだ、そして、それをカイがつきつきりで支えているのだ、と思った。

ユージはテントに入る前に、深呼吸して気持ちを切り替えた。そつとテントに入り、ヨナが起きているかどうか確かめた。ヨナは起き上がって、食事をしていた。

「すみません。」

ユージが声をかけると、ヨナが気が付き顔をあげた。

「あなた、薬くれた人。」

ユージはヨナの前の椅子に腰かけた。

「はい。ユージと言います。あの…薬はちゃんと効いてますか？」

「はい。全然痛くない。傷も腫れてない。リート国の薬、高いと聞いている。大変感謝してます。」

「そうですか。よかった。」

ユージはほっとした。実は、ヨナに渡したのはユージが作った薬だったからだ。自分で試していたとはいえ、他人に与えるのは初めてだったのだ。

「ちょっとお伺いしたいんですが…」

「何ですか？」

「クオー、ってヨナさん、おっしゃってましたが…ひよっとして、痛いって言う意味ですか？」

「そうです！」

「止めるとかなくなるとか、そういう意味は、ひよっとして、サー？」

「はい！」

「だから痛みどめの薬は、クオー・サー・ジャン。そうか、ソイ・モイ国のソイは大きいっていう意味なんだ！」

「そのとおり！モイは大地で、ソイ・モイは大きな大地という意味！どうやって知ったのですか？」

ユージは懐から本を取り出した。あのリート国の薬の調合の書かれた本だ。

「これです。」

ヨナに見せた。ヨナはその本をちらちらと見たが、すぐ閉じた。

「何が書いてあるか、さっぱりです。私、アイカ国の字読めない。」

「そうですか…でも、読んだらわかると思います。」

ユージは声を出して読み始めた。ヨナは目を丸くした。

「そ、それは。」

「私はリート国出身なのです。これは、リート国の兵士なら誰もが知っている薬の本です。これは暗号かと思っていたのですが…ソイ・モイ国の言葉だったのですね。」

ヨナは何度もうれしそうに頷いた。

「実は、あなたにお渡しした痛み止めも傷薬もこの本を見て私が作ったものなのです。」

「そうですか！」

ヨナは驚いて言った。

「ですから、材料費しかかかってません。それもほとんどその辺に生えている草ですからタダみたいなものです。もし、私にお金を後で払おうと思われているなら、そんな必要はありませんよ。けど、私がこの本を持っているのは、どうか内緒にしてください。」

「わかりました。実は、お金どうしようと思っていました。私の弓矢で払おうと、思っていました。」

ヨナは笑顔で言った。それを聞いてユージはふと思いついた。

「私の持ってきたリート国の弓矢が、ボロボロになって使用できなくなってしまったんです。…この国の弓矢にも慣れてきましたが、狩りをするには、やはり使い慣れた弓矢がよいのです。お怪我が治られたら、ぜひ、それを作っていただけないでしょうか？もちろん、十分なお金はお支払いいたします。」

「そういう事なら、任せてください。あなた専用の特別な弓矢作ります。あなた、入隊試験の実技で満点とったユージさんでしょ？弓矢、すごい腕だと聞いた。だからお金、いりません。私の弓矢、みんなに宣伝してください。そしたら注文来る。私、もうかる。これで大丈夫。」

ヨナは笑って親指を出した。ユージは思わずクスリと笑う。

「ありがとうございます！お言葉に甘えてそうさせていただきます。…そうだ。こちらにいらっしゃる間、よかったらソイ・モイ国の言葉を教えていただけませんか？なんだか、全然違うのが面白くて。夜しか時間はとれないのですが。」

「私、暇。来てくれたら嬉しい。それに、国の言葉話せるのも嬉しい。」

ユージは、簡単な挨拶から教えてもらいメモをし始めた。すると、

外で人の気配がした。ユージは、ひよつとしてカイではないかと思つて、外を見た。やっぱりカイだった。

「ごめん。もう大丈夫。今、ヨナさんに、ソイ・モイの言葉習つてんだ。カイも一緒にやる?」

ユージが笑つてそう言つたのを見て、カイも笑顔を見せた。

「ああ!」

その晩、4班は夜の見張りの当番だった。ユージが時間になり、前の4班の人間と代わると、寝転がつて一人で星を見た。すると、誰かが近づいてきた。ロブレスだった。ユージはあわてて体を起こした。

「やあ。ちよつと君と二人で話がしたくてね。」

ロブレスはユージの隣に座った。

「あの…夕食の時のことなら、気になさらないでください。あのまま、あそこにいたら泣いてしまいそうだったので…」

「ああ。カイ1等兵が君が彼女の事を思い出したんじゃないかって教えてくれたよ。」

ユージはうれしそうに笑った。

「あいつ。なんでもお見通しだな。…私は、本当なら処刑されるはずでした。なのに、国外追放に変わったただけでなく、罪人として考えられぬような旅支度が整えられていました。その上、まさかあの馬までが軍でも生え抜きの馬だったなんて思わなくて…今でも彼女が私を守ってくれてるんだ、って思ったら、我慢ができなくなつてしまつたんです。」

ロブレスはユージの話を黙って聞いていた。

「私は、向こうではひと前では一度も泣いたことなど、なかったんですけどね。こっちに来てからは、泣いてばかりです。自分でも驚きです。でも、泣ける相手がいるっていうのは幸せな事です。…あ、ダメだ。また泣けてきた。」

ユージは目で涙をぬぐった。

「そうだな。泣けるってのは、人間にしかできないことだからな。泣きたい時には、いっぱい泣くといいさ。私だって、妻の前では泣いてるからな。」

「そうなんですか？信じられません！」

「私を何だと思っているんだ？同じ人間だぞ。」

ロブレスが笑った。

「隊長の奥様、素敵なお方なんでしょうね。向こうへ帰ってお会いするのが楽しみです。」

「ああ。子供もかわいいぞ！」

ユージは早く、あの家へ帰りたいかった。すっかりあそこが自分の家になっていた。

19話 2度目の表彰式

20日がやってきた。

先日やってきた近衛隊から手紙を渡され、この昼からの会議に参加するように、とのことだった。もちろん、ロプレスも一緒だ。

ユージ達は朝食を食べた後、すぐ準備をして出発した。ヨナもなんとか馬にも乗れるようになっていたので、家まで送って行くことになった。

ナベル町は野营地からは、すぐだったので、30分ほどで着いた。ヨナの家には、医者と弟子らしき人が迎えでた。

「どうも、ありがとうございます。ユージさん、あなたの弓矢、腕が治りしだい作る。」

ヨナが手を差し出してきたので、ユージは握手した。

「よろしく願います。ソイ・モイ語を学べて楽しかったです。次にお会い出来るまでに、もっと覚えておきますね。ええと、シイ。」

「シイ。」

うれしそうにヨナが答える。カイも「シイ。」と言った。

ロプレスが不思議そうに、

「何だ、それ？」と聞く。

「ああ、これは、ソイ・モイ語でさようなら、って意味なんですよ。」

ユージがそう答えると、ロプレスは目を丸くし「ほう。」と言い、すぐにヨナを見て、「シイ。」と言った。

王宮のカイの家に10時前についた。すぐにレノが出てきてすぐに風呂に入って身支度をするようにと言った。

3人は野营地でドロドロだった体をきれいにした。

「うえー、泡が茶色いぜ……」

「こんなモンだよ。カイ。まだ、マシかな。」

「ははは！そうだな。何せ2週間ほど風呂に入ってなかったのだからな。こんなもんだ。」

さつさと体を洗ったロブレスが湯船につかって言った。二人も体を洗った後、湯船に入る。

「あゝ。ダメだ。緊張してきた。」

ユージが言った。

「そうだな。俺も会議なんて初めてだからな……」

「心配しないでいい。ショー近衛隊長官の言うようにすれば大丈夫だ。先に、こちらに来て打ち合わせをしようっていたしな。」

風呂から上がり、レノが用意してくれた新しい軍服を着て風呂場から出ると、ショーがもう来ていて応接室で待っているということだったので、すぐ3人は応接室へ向かった。

応接室に入ると、ショーがレポートを読んでいた。3人が敬礼をする。

「ロブレス1等兵は、私の隣に。ユージ1等兵、カイ1等兵はそちらにかけてくれ。」

言われた通り、ロブレスはショーの隣に、ユージとカイはショーの向いの席に腰かけた。

「とりあえず、簡単な打ち合わせを行う。まずは、私がどうしてもこのような提案をすることになった旨を説明する。それでユージ1等兵にリート国での兵士の現状等について話してもらおうと思う。よいか？」

「はい。」

「その次に、ロブレス1等兵。お前の意見だ。」

「分かりました。」

「最後に、カイ1等兵。この案についての詳しい説明をしてくれたまえ。」

「はい。」

固くなっているユージとカイを見て、ショーが笑って言った。

「そんなに固くならなくてもよい。会議と言っても、ザイル様と側近のヤンネ様と王のブレーンと試験委員会委員長、それに私たちの合計14名だからな。それに、すでにこの案件はほぼこれで進めることになっている。今日は、形式的に、君たちの話を詳しく聞いておこうというだけだ。後、ロブレス1等兵は8月1日付で特別兵に昇格し、ユージ1等兵、カイ1等兵はロブレス1等兵の補佐となつてもらう予定だ。」

「補佐？」

カイが言った。

「そうだ。君たちのためにだけに作られた階級だ。これから君たち3人は、この案件をさらに練り上げ、一緒に考えるチームの一員となつてもらいたいのだ。それには、特別兵という身分は非常に動きやすい。ユージ1等兵とカイ1等兵は、まだ近衛隊を経験もしておらず、特別兵にするには、あまりにも特別待遇すぎるのでな。だから、表向きはロブレス1等兵の補佐という事にするが、実質上、近衛隊と同じ待遇だ。」

したがって、エルパ町での引き継ぎをなるべく早く終えて、7月末にはペネに引っ越してもらいたい。ユージ1等兵も、このザイル様の家に住んでもらうことになった。ロブレス1等兵には王宮内の家を提供する。子育てが大変な奥様のために女中も用意する。そして、会議を行いながら、ペネの各学校を回り兵の指導にあたってもらいたい。さつそく、次の近衛隊入試試験から準近衛隊を設置する予定だ。訓練学校の方も、来年1月から1年制を行えるように、これからの半年でその調整にかかる予定だ。だから、これからかなり大変になるな。3人とも訓練の方は近衛隊とともに行うとよい。」

ユージとカイはあまりの展開の速さに、ついていけずにいた。ロブレスもここまで対応が早いとは思わず、ただ驚くばかりだった。

「私もこの急展開には驚いた。だが、ザイル様の一声ですべてが決まったのだ。やはり、一国の主として、危機を感じられたようだ。」

すぐに、4人は会議室に移動してザイル達が来るのをまつた。

しばらくすると、あたりが騒がしくなり、ザイルとヤンネ、そして重役たちが入ってきた。会議の進行はショーが行った。それぞれの話に真剣に話を聞き、頷いていたが、一番、ザイルたちが反応したのは、ユージのリート国での訓練学校や兵士の訓練の様子、そのレベルについてだった。会議はあつという間に終わり、ロブレスの言ったように、ショーの言うようにしていればよかっただけだった。

昼からは、ショーが近衛隊と一緒に訓練でもするか？と、誘ってくれたので、ユージとカイは喜んでそうさせてもらった。近衛隊での訓練は楽しかった。8月からここで訓練が出来るんだと思うと、ユージもカイも嬉しくてしょうがなかった。

その晩、ユージは自分の部屋を用意されていたが、カイの部屋で寝ることにした。カイとユージは一緒のベッドでいろいろ話した。そろそろ、寝ようとした時、久しぶりにユージがカイに抱きついてきた。

「…本当にこれから大丈夫なのかな？」

ユージは今日の話聞いて急に不安になっていた。

「まあ、どうなるか分からないけど、俺達だけで頑張る必要はないさ。ロブレス隊長も、ショー近衛隊長官も、親父も、みんな協力してくれるさ。」

「うん。そうかもしれないけど、なんだか話が急に進みすぎて怖い。」

カイも本当はそう思っていたが、ユージの不安をあおらないためにあえて黙っていた。

「…いつだって俺はお前の側にいるから。」

「うん。…野营地、本当はもう行きたくない。こうしてカイと二人でいられないのがすごく辛い。」

「そうか…ロブレス隊長に言つて、ちょっとした間だけでも、二人でいられるようにしてもらうか？」

ユージは少しほっとした顔をした。

「うん。」

「じゃ、寝ようか。」

ユージはそのまま久しぶりに、カイに抱きついたまま寝た。

次の朝、ユージたちは軽く王宮内をランニングした後、朝食を食べ9時すぎに家を出た。ロブレスは最前列をとって、宮殿へ向かって行った。ユージとカイは馬にまたがり、王宮の門へ向かった。ジェッシー達を迎えに行くためだ。門の横の小屋でしばらく待っている、門番の1等兵が、彼らがついたと教えてくれた。ユージとカイは小屋から出ると、みんなが門を入っているところだった。「ユージ先生！カイ先生！」

みんなが寄ってきた。

「みんなおめでとう！おかげで、俺達まで一緒に表彰だ！」

ユージが言った。

「そりゃ、先生がサイコーの先生だからでしょう？」

ネロが言った。

「その通りだな！」

カイが自慢げに腕を組んでいった。みんな大笑いした。

その後、ユージたちは、去年ショーが自分たちにしてくれたように、王宮の中を案内した。みんなもやはり近衛隊舎監の前で一番興奮した。表彰式の準備があるため合同訓練はなく、何名かが自主訓練を行っているだけだったが、それでもみんな満足だった。すると、近衛隊が数名手を振って来た。ユージとカイが敬礼をしそれに応える。あわてて、他の8名も敬礼をした。

「先生、もう近衛隊にあんなに知り合いがいるんですか？」

スコットが聞いた。

「おう！なにせ俺達はすごい先生だからな！」

カイがいばって言ったので、ユージが嘖き出した。

「一応言っておくけど、みんなが見てるのは、俺達だけじゃない。将来の近衛隊候補である君たちにも、彼らは興味津々なんだよ。」

ユージがそう言くと、8名は全員の顔が硬直し急に背筋を正す。ユージとカイは去年の自分たちを見ているようで、面白かった。

カイの家に一度立ち寄って、みんなを軍服に着替えさせてから、宮殿へと向かった。

応接室へ行くために、宮殿内の廊下を歩いていく。近衛隊や1等兵とすれ違ったび、ユージたちは自然と敬礼をかわす。それを見て、みんながあわてて敬礼をする。応接室へはいると、8名はぐったりして椅子に座りこんだ。

「ははは。去年の自分たちを見ているようで、面白いな。カイ。」

「そうだな。俺達、こんなに情けなかったんだな。」

「先生もこんなに緊張したんですか？」

ジェッシーが聞いた。

「当たり前だ。今だって、かなり緊張しているさ。」

ユージがそう言った。

「そんな風に見えませんが…あゝ、もうダメ！」

ジェッシーが泣きそうな顔で机に伏せる。ユージとカイはほほ笑んだ。すると、ドアをノックする音が聞こえた。シヨーだった。

「やあ。宮殿へようこそ。私は近衛隊長官のシヨーだ。本当に君たち全員よく頑張った。おめでとう。」

カイがみんなを紹介した。一人一人シヨーは握手をした。みんな、近衛隊長官との握手に目をキラキラ輝かせた。握手が終わると、シヨーがユージとカイに向かって言った。

「ロブレスのやつ、まだ準備が終わってもないうちにやってきたぞ。1番のりだ。」

「あ、はい。9時すぎに最前列をとる言われて、宮殿に向かわれましたから。」

ユージが答えた。ショーが苦笑した。

「あいつ、よっぽどお前らが表彰されるのがうれしいみたいだな。仕方ないから、特別席を用意してやったよ。紫の特別兵用の試作品の軍服を着て、近衛隊が作る列の一番先頭にいるから、よく見てやるんだな。」

ユージとカイは驚いてお互いを見たが、ロブレスがうれしそうな顔をして、そこに立っている姿を容易に想像ができ、二人で笑った。「さ、そろそろ行くか。」

ユージたちがショーについて広間の前につくと、近衛隊がコンコンと扉を叩いて合図しファンファーレが流れ出す。

扉があきショーが歩き出す。ユージとカイがショーの後ろを、8名はその後に行く。拍手の中をゆっくりと歩く。

やがて近衛隊の列の先頭が見えた。ロブレスが想像通りのうれしそうな顔をしてこちらを見ている。ユージとカイはロブレスを通り過ぎる時、ちらりとロブレスを見た。するとロブレスがウィンクして応えて、二人は笑いを堪えるのに腸がねじれそうになるほど苦労した。

王座の前に来て、一列に並ぶ。ザイルからジェッシーたちに順番に表彰の言葉と賞状と報奨金が手渡される。ジェッシーは、訓練生から1等兵になった初の女性として、賞状と報奨金とは別に、盾ももらった。ジェッシーは涙を流しながら受け取った。

そして、カイ、ユージの両名が呼ばれた。会場の拍手は一層沸き立つ。

ユージ、カイがそれぞれ、ザイルから賞状を手渡される。列に戻り後ろを向き敬礼をした。ロブレスが見えた。本当にうれしそうな顔をしていた。二人は、また来年の夏には近衛隊に最年少で入隊しこの場に立つのかと思った。絶対、そうしてみせると思った。

応接室に戻ると、去年のユージたちを同じように、8名は椅子に

座りこんだ。ユージとカイとシヨールは大笑いした。すると、スコットが口を開いた。

「そういえば、俺たち全員、はじめは他の町に講師として別々に配属されたのに、急に取りやめになって、全員がエルパ町の講師に変わったんです。ユージ先生とカイ先生もいるのに、新たに8名もどう考えても必要ないですよね？」

ユージとカイははっとして、シヨールを見た。

「すぐに発表される事だから、君たちには言っておこう。」

8名は背筋を正してシヨールを見た。

「8月から、特別兵が設置されることとなった。最初の特別兵には、エルパ隊のロブレス1等兵隊長が今のところなる予定だ。ユージ1等兵とカイ1等兵は、そのロブレスの補佐となることが決まった。そして、ロブレス1等兵、ユージ1等兵、カイ1等兵の3名は、私やザイル様、そのブレンと共に、この国の訓練学校と軍についての改革を行う事になった。したがって、ユージ1等兵とカイ1等兵はロブレス1等兵と共に、8月からこの王宮での勤務となる。」

8人が目を丸くした。

「だから、君たちには、ユージ1等兵、カイ1等兵の後を引き継いで、あの町の生徒を育ててもらう事になった。」

全員あまりの驚きにすぐに口がきけなかった。

「特別兵とは、何でしょうか？それに補佐とは？」

ネロが聞いた。

「この8月から設置される階級だ。近衛隊を経験したものうち希望者が特別兵となれる。特別兵は、王の直属の兵士となる。補佐、正式には、特別兵補佐官だが、それはユージ1等兵とカイ1等兵のために作られた階級だ。彼らにぴったりの適当な階級がないのでな。」

それを聞いて、8人がそろって席を立ち、ユージとカイに向かって、敬礼をした。

「それは、おめでとうございます！確かに先生たちが改革を行えば、軍はさらに向上すると思います。エルパ町はわれわれにお任せくだ

さい。」

ジェッシーが言った。

「ありがとう。頼もしいな。」

ユージが言った。そして、ユージとカイは順に8名と握手をした。「でも、だからだったんですね。近衛隊の方とすでに何人も知り合いがいたり。ショー近衛隊長官ともかなり親しそうに見えたので、驚いていたのです。」

ネロが言った。

「我々、近衛隊の連中はみな、この二人が来年近衛隊に入ってくるに違いないと待ち構えているからな。彼らは、いずれ近衛隊長官、副長官にもなるだろうな。」

8名はそれを聞いてさらに驚いた。

ジェッシーは、今までの話しと、二人がこの若さで次の近衛隊長官、副長官の候補だという話を照らし合わせて、ひよつとしたら、と思つて恐る恐るそう言った。

「も、もしかして、あの・・・先生たちは…王の子とその側近の候補者…ですか？」

「そうだ。」

全員が、絶句した。

「この話は、まだ内緒でね。誰にも言わないでもらいたい。ああ、ネイル様はもちろんご存じだがね。君たちは、なるべく早く近衛隊となつて、ユージ1等兵、カイ1等兵の手助けをしてもらいたい。君たちは、彼らの弟子であり友人だ。だから、話をさせてもらった。これからの君たちの活躍を期待しているよ。」

「は、はい！」

全員がショーに敬礼をした。

「では、私はそろそろ行くよ。ユージ1等兵、カイ1等兵。1か月後に会おう。」

ユージとカイがショーに敬礼をすると、ショーは部屋から出ていった。すると、8人が二人の周りに集まってきた。

「ユージ先生が王になったら、確かに素晴らしい国になるに違いないわ！それにカイ先生だって、素晴らしい側近になるに違いないわ！……けど……うれしいけど、さみしいです。なんだか、遠い人になっちゃうみたい。」

ジェッシーがそう言いながら泣きだした。

「たとえ、本当にそうなっても、ジェッシーもみんなも、俺達の大事な友人だ。いつでも遊びに来たらいいさ。」

カイがそつとジェッシーの肩に手を置いて言った。すると、ジェッシーが涙顔でカイの顔を見上げる。

「私、私、カイ先生のことが好き！だから、絶対近衛隊になって、先生のお手伝いが出来るように頑張ります！」

みんなびっくりした。一番びっくりしたのはカイだった。

「あ、あの……ありがとう。……ええと……」

あまりの驚きに一体何を言っているのか分からず立ち尽くしただけだった。

「……いいんです。……先生は今そんな事考えられないでし……それに、近衛隊にだって、女性は誰ひとりなかった人はいません。……ほとんど無理なことも分かっています。……ただ、自分の気持ちを言いたかっただけなんです……」

すると、ユージがジェッシーに優しく言った

「ジェッシー。近衛隊は無理かもしれないけど……これからこの国は大きく変わる。ひょっとしたら、別の道が出来るかもしれない。だから、諦めないで努力してくれよ。俺も君みたいな優秀な人間に手伝ってもらいたいから。」

ジェッシーが泣きながら頷いた。すると、ドアをノックする音が聞こえた。ロプレスだった。

「何かあったのか？」

「いえ。別に何もありません。ただ、ショー近衛隊長官の方が彼らに私たちの事情を話してくださったものですから……その、感激して……」

ユージがそうやって誤魔化してくれて、カイは胸を撫で下ろした。
「そうか。君たち、私は、エルパ隊隊長のロブレス1等兵だ。今回はおめでとう！国境警備が終わりそちらに戻ったら、短い期間だがビシバシ鍛えてやるから、覚悟しておけよ！」
何も知らないロブレスは笑ってそう言った。

「はい。」

ジェッシー以外の7名は無理やり元気そうに返事をした。

そのあと、みんなでカイの家に行って、昼食を食べた。そのころになるとジェッシーは元気を取り戻し、カイの妹のマユと仲良くしゃべっていた。それを見てカイはほっとしていた。昼食を食べた後、ユージとカイは、エルパ町に帰るみんなを見送りに行った。みんなが見えなくなると、カイが大きなため息をついた。するとユージが冷やかに言った。

「カイ。お前、彼女のこと、どう思ってた？」

「え？ど、どうって……？」

「だから、好きなのか？嫌いなのか？」

「そ、そりゃ、あんな可愛い子、き、嫌いではないさ。」

「ふーん。お前、俺に遠慮なんかするなよ。」

「けど、何度も言うけど、そんなんじゃないって。」

ユージは白けた顔を見た。

「ホントか？」

「ホントだっ！」

カイは真っ赤な顔でむきになっていった。

「ま、それならいいけど。でも、お前、将来、彼女が好きになったら本当に遠慮すんなよ。」

「うーん。でもさ、俺が彼女と付き合いだしても大丈夫なのか？」

「大丈夫さ。」

「お前の事ほったらかして、彼女とばっかり会ってても大丈夫なのか？」

すると、ユージが黙った。

「…ダメだ。」

「だったら、やっぱり当分の間遠慮しとく。どのみち、さつきも言ったけど、そんなんじゃないんだから、安心しろよ！」

「…分かった。」

と返事をしつつ、ユージはずっとカイを訝しげに見ていたが、本人はまったく気がつかず、家に向かったのでユージもついて行った。

訓練が終わってカイの家に戻って風呂に入って汗を流しながら、ユージがジェッシーことを話すと、ロブレスが大笑いした。

「そうか…どうりで、何か妙な雰囲気だと思ったよ。」

「ユージ、別にロブレス隊長に言わなくなっただっていいじゃないか！」

「恥ずかしい事じゃないしいいだろ？それに、カイがいい男だって事じゃないか？」

カイが急に目を輝かせた。

「そうだな！」

ロブレスとユージが大爆笑した。

「単純だな。」

「はい。単純ですよ。」

カイ一人だけが、複雑な顔をしていた。

3人は、次の朝早くにナベル野営地に戻った。

野営地での残りの1週間の訓練はそれは激しかった。カイは弓矢での馬術を集中してやり、ユージはロブレスと訓練用の剣で真剣勝負を、気分が悪くなって吐くほど行った。それでも、カイがロブレスに頼んで二人での時間を貰ったため、ユージは精神的にずいぶん楽になった。何も話さなくても、二人で遠くの景色を見ているだけで、心が落ち着いていた。

そして、国境警備の期間が終わる。その次の日の早朝、カウスと

ゼナが見送りに野営地の外れまでついてきた。

「カウス近衛隊隊長、ゼナ近衛隊副隊長、本当にこの1か月ありがとうございました。」

ユージとカイは深々と頭を下げた。

「いやいや、こちら也非常に有意義な1カ月だった。」

カウスがそう言っていると、ゼナも頷いた。

「では、また8月にお会いしましょう。その時には、念願通り、私が上司ですぞ。」

ロブレスがそう笑いながら敬礼をした。カウスとゼナが嬉しそうな表情をする。ユージとカイもそれに続く。そして、馬にまたがると、エルパ町を目指してひたすらに走った。

その夜、3人はエルパ町についた。この1ヶ月間、馬にのりっぱなしだったカイは、さすがに腰が痛くはなったが、行きほどづらくはならなかった。ネイルの館につくと、ロブレスの上の子供が飛び出してきた。ロブレスはすぐに長男を抱き上げる。すぐに後から、みんなが出てきた。マーサーは久しぶりのユージとカイを見て涙をためて喜んだ。ユージはそんなマーサーを見て、すぐここを離れペネに行くと思うと少し胸が痛んだ。

久しぶりのマーサーの夕食はとにかくおいしかった。ユージとカイだけでなくロブレスも、大絶賛した。マーサーは上機嫌でデザートを追加してくれた。

夕食も終わり、カイの部屋で二人はベッドに寝転がっていた。ユージがぼつりと言う。

「やっぱり、ここが一番だな。なんてほっとするんだろう。なのに、また違う場所に移るのか…」

「そうだな。俺も、今ではこっちの方が自分の家みたいな気がしていたからな。少しさみしいな。でも、あっちも俺の家だし、俺の部屋でお前は寝たらいいんだから同じさ。」

「そうか。同じか…。」

ユージはカイに向き直ると真剣に言った。

「あっちでも、絶対、俺と一緒にいてくれよ。」

「ああ。当たり前だろ。」

そう言うカイの笑顔を見て、ユージはほっとした。そうして二人は久し振りの我が家でゆっくりと寝た。

20話 新しい生活

あくる日、カイとユージは、午前中、みんなの所を回っていた。みんな、学校に打ち合わせにいつているらしいと言う事が分かったので、二人は学校へ向かっていた。学校の門につくと、みんなが中から出てきた。

「あれ？先生どうなさったんですか？」

スコットが聞いた。

「お前たちを探していたんだ。実は、ユージの誕生日、4月でさ、とつくの昔にすぎてたから、今日の夜、パーティをする事になったんだ。だから、お前たちもどうかと思って。」

「ええ！そうなんですか！絶対行きます！」

全員が口をそろえて言った。カイはジェッシーが自分を見ているのに気がついて、少しどきつとした。ユージたちは話が溜まっていたので、自然と話しながらそのままネイルの館に向かった。

「へえ。お前たち、ほとんどが実技の講師なのか。」

カイが言った。

「はい。今年は初級が2クラス、中級が3クラス、上級が1クラスです。実技で一番成績のよかったスコットが上級クラスを担当することになりました。ジェッシーは筆記で満点だったこともあって、上級クラスの筆記を担当します。私は中級クラスの実技担当です。」

ネロがそういうとカイはジェッシーを見ていった。

「そういえば、最初から俺のクラスですっと首席だったもんな。数学はいつも満点だった。だから、最後に首席の表彰をしたんだよな。」

ジェッシーが顔を赤くして頷いた。

「そうか。今から考えると、カイ先生が好きだからあんなに筆記、頑張ってたんだな！」

スコットがからかって言った。ジェツシーはますます顔を赤くした。すると、カイが突然席をたつて、部屋を出て行く。ジェツシーは自分がいけなかったのかと思って、肩を落とした。しばらくすると、カイはどつさり本やら書類やらを持って来て、ジェツシーの目の前の机の上に置いた。

「ジェツシー。これ君にやるよ。俺が使っていた教科書と講師をしていた時にまとめたレポートだ。これから講師をする君の役に立つだろう。俺はもう必要ないしな。」

ジェツシーは急に明るい顔になった。

「は、はい！ありがとうございます！」

「それから、何か困ったことがあったら、いつでも相談に来るといい。俺達がペネに行つてからでも手紙をよこすといい。」

ジェツシーは涙をためて頷いた。

「そろそろ、昼だから、いったんここで解散しようか。また夕方にここにきてよ。」

ユージが言った。

8名は一旦家へ帰つていった。ジェツシーはカイにもらった教科書と書類をまとめて大事そうに抱えて持つて帰った。

結局、誕生日パーティは、カイの誕生日が8月11日で、その時にはカイはもうここにはいないので、2人の誕生日パーティとなった。ジェツシーは早めにやってきて、マーサーを手伝いにやって来た。マーサーがジェツシーの料理の腕前がなかなかのものだと言って、ベタ褒めしたので、またジェツシーは顔を赤くして小さくなっていた。確かにジェツシーの作った料理はすごくおいしくて、ユージはおいしいと連発した。カイも本当は連発して褒めたがったが、普通に褒めるだけにとどめた。それでも、ジェツシーは顔を真っ赤にしてうれしそうにしていた。ロブレスもロブレスの奥さんも楽しそうだった。ロブレスの上の男の子も大はしゃぎだった。ユージはこんなに楽しい誕生日パーティは初めてだった。子供たちがまだ小

さいので早めにお開きにしたが、それでもユージは十分満足だった。

その後、寝るまではまだ少し時間があつた。ユージの希望で図書室に来ていた。ユージは本を取り出し、部屋に持っていこうとするので、カイが言った。

「なんだ？お前、勉強するのか？」

「うん。試験の勉強は直前になるまでやらないけど、歴史や地理はいろいろ本を読もうと思うんだ。最近、とても興味が出て来ててさ。それに、たぶん、王に必要なのはこういう知識だと思うし。」

「ふーん。そうか。じゃ、俺も夜は少しは勉強するかな。ロブレス隊長は必要ないって言ってたけど、数学が好きだから、やっぱり満点目指す。」

二人は部屋に戻り、ユージは本を読み、カイは数学の勉強を始めた。

ロブレスはペネに移るまで、あまり日もないことから、そのままネイルの所に家族でやっかいになることになった。午前中、ネイルの館の広場で、ネイソンも呼んで一緒に訓練をした。時々、ロブレスの子供たちが奥さんと一緒にロブレスを見にきた。そんな時はきまって、上の息子が棒をもって父親のマネをした。それがとてもかわいらしかった。

昼からの訓練義務では、ジェツシー達はあつという間に1等兵をまとめあげ、みごとにチームプレイをみせるようになった。ロブレスもこれなら自分の代わりを呼ぶ必要もないと、8名にエルパ隊を任せることにした。隊長にはスコットが抜擢された。

ロブレスは7月20日ユージたちより先に家族と共に馬車でペネに向かつていった。

24日には、またみんなを呼んでお別れ会を開いた。

お別れ会では、ジェツシーが大泣きをしだしたのをきっかけに、

ユージまで泣きだし、つられてみんなも泣き出した。カイは一人でおろおろして、とにかくみんな頑張ってペネに来れるようにと、みんなを慰めた。

そして25日の朝、ユージとカイはネイルとマーサーとセンに見送られてペネへ出発した。

26日の昼に王宮のカイの家についた。軽く昼食を食べた後は、ロブレスの所へ挨拶にいった。ロブレスの家はカイの家より少し奥に行ったところにあり、歩いて5分ほどで行くことができる距離だった。ロブレスは上の子供を自分の上に乗せて腕立てをやっていた。ロブレスがユージ達に気がついた。すると、上の子供もユージたちに気がつきユージたちに駆け寄ってきた。

「やっと来たな。待ってたぞ。ローザ！」

ローザが家から出て来て、ユージたちに挨拶をすると、上の子供を家の中へと連れて行った。ロブレスは庭にあったテーブルへ案内した。3人が席に着くころ、ローザがお茶を持ってきた。ユージたちが丁寧にお礼をすると、ローザはにこやかに笑って「ゆっくりしてゆっくりしてくださいね。」と言って家の中へはいつて行った。

「引っ越しの方は無事終了か？」

ロブレスが聞いた。

「私は自分の家に戻るだけですし、ユージもネイル様の所の物を借りていただけですから、ほとんど荷物がなくて。ですから、引っ越しなんて言うほどの事ではありませんね。」

カイが答えた。

「そうか。では、少しは体力残っているかね？君たちとあまりにも濃厚な訓練を経験してしまったもので、近衛隊との訓練が物足りなくなってしまうてね。もっとも、私の相手になれるようなものは、隊長クラスやショー近衛隊長官やドレア近衛隊副長官だけだからな。彼らも忙しいから、そうそう私の相手ばかりしておれんだ。だか

ら、君たちが来るのを待ち構えておった。」

ロブレスがうれしそうに言った。

「多少は疲れておりますが…少しなら大丈夫です。ロブレス…特別兵…とお呼びしたらいいんでしょうか？」

ユージが戸惑って言った。

「ロブレスさん、でいい。」

ユージとカイは顔を見合わせた。

「それはいくらなんでも…。」

カイが言った。

「私が女中までつけてもらいこの王宮で住めるのは、私がユージの足となったからだと思っているのだよ。」

「足？」

ユージが聞いた。

「そう。王の側近が王の手のようなものだから、そのブレーンを王の足と呼ぶのだ。」

ユージはカイの顔を見た。カイがうなずいた。

「だから、軍での階級は私が上だが、事実上、私は君たちの部下なんだ。だから、ロブレスさんでいい。…私は君たちに本当に感謝しているよ。」

「…感謝？」

カイが言った。

「ああ。私は家族のために第一線を離れてしまったが、やはり残念でならなかった。だが、君たちのおかげで、特別待遇でこうやって再び第一線に戻ることができた。いや、第一線どころか、国の中枢として働くことができるのだ。これほど名誉なことはない。妻も感謝しているよ。彼女が一番、私が近衛隊を辞めることになって、残念がっていたからな。」

ロブレスがユージとカイに手を差し伸べてきた。

「本当にありがとう。」

ユージとカイはその手を取り握手した。

「だから、プライベートでこうして会っている時は、私の事はロブレスさんと呼んでくれ。その方がうれしい。私もユージ、カイと呼び捨てさせてもらうよ。一応私の直属の部下となるわけだしな。」

「分かりました。ロブレスさん。」

ユージが言った。

「では、そろそろ行くか。」

ロブレスは後ろを向いて家の中に聞こえるように大声で言った。

「おい。ちょっと行ってくる！」

すると、ローザが窓から顔を出してを笑顔で返事した。

「では、走って行くか！」

近衛隊舎監につくと、何人かの近衛隊が自主訓練をしていた。3人に気がつくと、こちらへ寄ってきた。カウスとゼナもいた。

「やあ、二人とも、待っていたよ！」

カウスが回りにいた近衛隊に二人を紹介した。全員、カウスの班の隊だということだった。二人は敬礼をして挨拶をした。

「カウス、すまないが、隅の方を借りるぞ。」

とロブレスが言った。すると、

「そんな事言わずに、私たちと一緒にやりましょうよ。今日は、私たちは用事がないので、ゆっくりやれますよ。」

とカウスが言ったので、あわててカイが言った。

「今日こっちへ着いたばかりなんで、いくらなんでもそれは無理です！」

「そうか。それは残念だな。まあいい。これからたっぷり時間はあるからな。」

ゼナが含み笑いをして言った。

ユージたちは、訓練場の隅へ行ってマスクと防護服に身を包み剣を持った。先に、カイがロブレスと対戦を始めた。疲れているから、ということでロブレスは手加減をして対戦したら、カイが勝って

しまい、ロブレスが怒りだした。

「何が疲れてるだ！カイでこれなら、ユージ、お前は全然大丈夫なはずだ！あっち行くぞ！」

と言つて、カウスたちの方に歩きだした。ユージとカイは二人で困ったな…と思ったが仕方なくついて行つた。結局、ユージはロブレス、カウス、ゼナと、カイは他の近衛隊全員と対戦するはめになり、終わるころには、立っているだけがやつとだった。

「しかし、来た早々、これだけの訓練をして、それでも立っているなんて、やっぱり君たちはすごいな。明日から楽しみだ。」

とカウスが言つた。

「明日から？」

カイはうつろな目で聞いた。

「8月1日の配属を待たずに、明日から午前中の近衛隊の合同訓練に君たちも参加するつてシヨー近衛隊長官から聞いたよ。」

ゼナが言つた。カイとユージがロブレスを見た。

「その通り。8月1日まで5日もあるんだぞ。その間、何をしてすごすんだ。だから、シヨーに私から希望しておいたのだ。」

「はあ…そうですね…」

カイが小さな声で答えた。ユージとカイはうれしいような、うれしくないような複雑な気分だった。エルパ野営地でもかなりきついと思つていたが、それ以上だったからだ。あれは一人か二人を相手にやつていたため、お互い休み休みだった。しかし、今日のように、まったく休憩のないまま何人も相手にされては、体が持たないと思つた。するとカウスが言つた。

「今は、もうすぐ近衛隊の試験があるから、それに合わせた訓練を行っているから面白いと思うよ。ちゃんと競技場でやるしね。」

…そうか、8月には近衛隊の試験があるんだ…俺たちが試験を受けるまでは見られないと思つていたのに、今度の試験、見ることができるんだ。しかも、それを体験できるのか！

それが分かるとユージは、急に元気が出てきた。

「それは楽しみです！」

「…お前の体力やっぱ人間じゃないわ…」

ユージの元気そうな姿を見てカイがため息交じりに言った。

「じゃ、そろそろ帰るか。では、カウス、ゼナ、他のみんなも明日からよろしく願います。」

とロブレスが言っていると、みんなが敬礼をした。カイとユージも敬礼をした。

そして、ロブレスが走りだす。

「は、走って帰るんですか??？」

とカイが情けない声を出した。ロブレスは走りながら、後ろを向いてにこやかに言った。

「だいたい、家まで走っても5分ちよつとだろう。そのぐらい走れんどうする。」

ユージはカイを笑いながら見ると、ロブレスについていった。カイもしぶしぶついて行った。

次の日、ユージとカイは特別兵補佐のうすい紺色の訓練服、ロブレスは特別兵の紫色の訓練服を着て、訓練が行われる9時より早く8時すぎに競技場へ馬にのってやってきた。シヨーがもう来ていた。「やあ。おはよう。少し、4人で話しがしたいんだ。ちよつと来てくれるかい。」

そう言われて、3人はシヨーとともに競技場内の部屋へ通された。

「まあ、腰かけてくれ。」

3人は椅子に座った。シヨーも座る。

「ロブレスの申請もあり、本日より、ロブレスは特別兵、カイとユージには、ロブレス特別兵補佐官として扱うことになった。ああ、もう君たちは近衛隊と同じ扱いだから、これからは呼び捨てさせてもらうよ。おっと、ロブレス、お前はもう俺の部下ではないから、敬語は必要ないぞ。」

「分かった。」

ロブレスがニヤリとすると、シヨもニヤリと笑った。

「それで、一応、正式には8月1日の10時よりの着任だ。10時より王の家の会議室にて、着任式と会議を行うことになった。この日、ともに特別兵として着任式を迎えるのは、ロブレスを含めて8名だ。ペネ市内の隊の隊長となつてもらふことになっている、パウ、コフ、ホヨ、ガスパ、デニスの5名と…」

カイは驚いた。

「ええ？そんな方々が直々に訓練を指導されるのですか？」

ユージはカイの方とちらつと見た。

「そうだ。ユージは知らないな。すべて以前に近衛隊の隊長をやっていた者たちだ。私やロブレスのかつての上司だな。全員、近衛隊長官をしてもおかしくない程優秀な者たちだった。」

ユージは驚いた。

「そして、あとの2名だが、準近衛隊の隊長と副隊長は、しばらく特別兵がやることになった。ベームとシャーフだ。」

「ええええ！！！」

カイがさらに大声を出していった。すると、カイがユージの方を向いて説明した。

「ベーム様は前近衛隊長官で、シャーフ様が前近衛隊副隊長なんだ！」

ユージはさらに驚く。

「優秀な者が指導すれば、兵力も自然と上がるということが、君達二人のおかげで分かったからな。他の地域でも、今まで近衛隊をやっていた者に出来るだけ特別兵となつてもらい、各町の隊長となつてもらふことになった。」

当面は、君たち3人は、午前中は近衛隊とともに訓練、午後からはペネ市内の隊の視察と兵の指導。月に1、2度、土曜日の午後から会議。9月からは準近衛隊の方の訓練にもできるだけ土日に参加してもらふ予定だ。」

「超多忙だな。シヨより忙しいんじゃないのか？」

ロブレスが笑って言った。

「俺は週に1度の休みはあるが、結局訓練につきあっているから、似たようなものだ。どの道、お前たちだって休みがあっても暇をもてあそぶだけだろう？だから、すぐにでも近衛隊と訓練をさせると言ってきたのだろう？だから、不満はないはずだ。」

シヨーも笑いながら言った。

「ま、その通りだな。」

ロブレスが苦笑した。

すると、ドアをノックする音が聞こえた。

「ドレアだ。」

と男の声が聞こえた。

「おお！入ってくれ！」

シヨーがそういうと、ドレアが入ってきた。背が高く、優しそうな男の人だった。

「カイは知っているな。ユージ、彼が近衛隊副長官のドレアだ。」

ユージはあわてて立ちあがり、敬礼した。

「ユージ特別兵補佐官です。はじめまして。」

カイも立ちあがり、敬礼をして挨拶をした。

「カイ特別兵補佐官です。」

すると、ドレアがにこやかに手を出してきた。二人は順番に握手をした。

「はじめまして。私が近衛隊副長官のドレアだ。ようやく会えたね。シヨーから君たちの事は聞いているよ。軍の改革は大変だと思うが、我が国のために頑張ってくれたまえ。」

「はい！」

二人は元気よく返事をした。

「ロブレス。君がまたここに戻ってきてうれしいよ。」

ドレアがロブレスに向かってニコニコと言う。

「いや。私こそ。これからよろしく頼むな。」

ロブレスは席を立ち、ドレアと握手を交わした。ユージはそんな

やりとりを見て、ドレアがとてもじゃないけど、軍人には見えないと思った。近衛隊副長官というのだから、ショーやロブレスのうにたくましいと思っていたが、まったく想像と違った。こんなに、すらつとして優しそうな人に近衛隊副長官が務まるのだろうか？そうユージは思った。

「では、そろそろ行くか。」

ショーも立ちあがり、全員競技場へ向かった。

競技場へ戻ると、すでにちらほら近衛隊がやってきて、自主的にランニングを始めていた。ショーは各隊の隊長と副隊長を呼ぶと、3人を紹介した。その中に、カウスとゼナもいた。

「君たちはカウスの第7隊と共に行動するとよい。カウス頼んだぞ。」

そして、3人はカウスとゼナとともにランニングを始めた。カウスが走りながらユージたちに話かけてきた。

「君たちが、私たちと同じ第7隊と行動することになったとはね。本当にラッキーだ。それに、ロブレス特別兵ともまた一緒にできるのは大変うれしいです。」

「そうだな。私も馴染みのある第7隊でうれしいよ。ショー近衛隊長官が気を利かせてくれたんだろうな。」

そのうち、他の7隊も一人一人混じってきた。昨日一緒に訓練をした人も何人かいた。ユージとカイは走りながら挨拶した。みなロブレスがまた第7隊と共に行動することになったと知り、目を輝かせて喜んだ。ユージとカイは、ロブレスがどれほどみなに慕われていたのかが分かり、ロブレスがここに戻れた事は本当によかったと思った。

9時前になると、整列し朝礼と点呼があった。そして、3人はショーに呼び出されて、全員の前で紹介をされた。拍手で向かいいれた。

その後は、隊ごとに分かれて訓練となった。ひとまず、自己紹介をした。自己紹介が終わると、ユージとカイが競技場での訓練が初めてだったので、体慣らしに馬での競争をしようということになった。これは全員でできるので、カウスの合図とともに一斉に駆け出した。ユージはあつという間に先頭に躍り出てそのまま1位でゴールしてしまった。周りにいた他の隊の近衛隊もそれを見ていて、どよめきが起こった。ユージのすぐ後には、カウス、ゼナ、ロブレスがほぼ同時にゴールした。他の近衛隊はしばらくしてからばらばらにゴールした。カイもその中に入ってゴールすることが出来た。

「やっぱり、ユージとリイのコンビは最高だな。」

カウスが笑顔で言った。

「いえ、私の实力では…リイのおかげです。」

ユージは本当にそう思った。そしてリイを優しくなでた。

「ユージ。ちよつと、俺の馬と取り換えてもう一度やってみないか？」

ロブレスが真面目な顔をして言った。そう言われて、ユージはロブレスと馬を交換した。ユージはロブレスの馬をなげると「頼むよ。」と優しく声をかけた。そして、もう一度競争をした。今度は、カウス、ゼナが同時にゴールし、わずかに遅れてユージ、そしてさらに少し遅れてロブレスの順番だった。

「お前は俺の馬でもそこまでの实力をだせる。そして、俺とはリイはこれだけしか实力を出せん。…お前はもつと自分に自信を持て！」

ユージはロブレスにそう言われて、ものすごく嬉しかった。

「それに、カイもなかなかだな。2度とも他の近衛隊に遅れずについて来ているのだからな。」

カイもそういわれて嬉しかった。

次は障害物をやった。カウス、ゼナ、ロブレスがまず最初にやり手本を見せてくれた。すばらしく綺麗にかわしていく。ユージとカイは思わず拍手してしまった。

そして、一人ずつ順番にスタートしていく。カイは、初めての障害物に少し苦労はしていたが、それでもなんとか、ついていった。最後にユージだった。ユージは、ロブレスに自分に自信を持って言われたおかげで、もっとリイと自分を信じてやってみようと思って、思いきってスタートした。かなりのスピードを出してすんなりそのままゴールした。すると、第7隊全員が拍手をした。いや、第7隊だけではなかった。近くにいた別の隊の近衛隊も拍手していた。「初めてでこれだけスムーズに障害物をやった奴を私は見た事がない。」

カウスが目を丸くして言った。みんなが口ぐちに

「これは強敵が現れた。」

と笑いながら言った。

「ほれみる。お前の実力は本物だ。」

ロブレスが言った。

「私も驚きました。本当にリイが私の思うように動いてくれたのです。ナベル野営地での山での訓練がものすごく役に立ったような気がします。」

「そうです！私もそう思いました！山ではしょっちゅう態勢を崩してしまつて、それでもロブレス特別兵は先に行つてしまわれるので、必死についていってましたが…今回も同じように態勢を崩してしまつたのですが、おかげでそのまま不安定な姿勢でも馬に乗り続けることができました。」

カイも興奮していった。するとカウスが、

「ご自分の部下の自慢をしたいのだと思つていましたが…実はご自身の指導の自慢だったらしい。」

と言つたので、全員が大笑いした。

そのあとは、弓術だった。普通に的に当てるだけではユージには簡単すぎるので、騎乗での弓術をした。これはユージの独壇場だった。あまりのユージの腕のすごさに回りにいた他の近衛隊全員が

手をとめて、ユージを取り囲んで見入った。

それでもユージは浮かない顔をしていた。

「ユージ、どうした？」

ロブレスが気づいて声をかけた。

「…これだけの成績を出しておいてなんですが…やはり、アイカ国の弓矢にはなれません。リート国の弓矢があつたら…」

そこまで言つてユージは言つのをやめた。なんだか、厭味に聞こえそうだったからだ。

「すべて中央を射ぬけたと？」

すると、ロブレスはその続きを言つた。ユージは遠慮しつつも、
「はい。」

と返事した。それを聞いた周りの近衛隊全員が啞然とした。すると、シヨーが馬にのつて割りこんで入ってきた。ドレアもやってきた。

「なんだ、なんだ。ユージのお披露目会となつてしまつてるじゃないか。みな訓練をせんか。」

というと、何人かが口をそろえて言つた。

「これほどの腕前とは想像だにしておりませんでした。我々は、このユージ特別兵補佐官の剣術の方の腕前も見たいです！」

「私もぜひ見たいな。」

いつの間にかすぐそばにやって来ていたドレアがにこやかにシヨーに言つた。

「…そうだな…その気持ちは分からんでもない…よし、ロブレス相手してやれ。」

大歓声があがった。

ユージとロブレスとシヨーは競技場の中央に移り、防護服を身につける。ユージは緊張していた。これだけの近衛隊を前に対戦をしなければいけない。しかも、相手はロブレスだ。ユージはしばらく集中する時間をもらった。そんなユージの姿を見て、あたりは静ま

り返った。やがて、ユージは真剣な顔をしてロブレスを見た。

それが合図とばかりに、ロブレスが真剣な顔でユージを見て中央に出てきた。ユージも前に出る。二人はマスクをかぶると構えた。

ユージは回りには誰もいない、いるのはロブレスだけだ。

そう思いこんだ。ロブレスが先に仕掛けてきた。ユージはすばやく身をかがめ、ロブレスに剣を振る。ロブレスもそれをかわし、ユージに襲いかかる。

二人の対戦は今までで一番激しいものとなった。10分たってもまったく二人の勢いは衰えない。すると、ロブレスは突然ユージから一旦離れた。

…どうされたんだろう？

ユージは不思議に思った。ロブレスが深呼吸をして息を整えていた。ユージもそれにならって、深呼吸をした。しばらくすると、ロブレスがまたユージに襲いかかる。すると、急に剣を右手に持ち替えて振ってきた。ユージは予想しなかった動きに驚いた。なんとかよろけながらかわしたが、ロブレスは今後は左に持ちかえて剣をユージに突き刺してきた。ユージは転げてかわすだけで精いっぱいだった。そこへロブレスがユージの剣を力任せに右足で蹴った。ユージの剣が遠くまで飛ばされる。そのあたりいた近衛隊が剣が当たらないようによけた。剣が地面に落ちた。

ユージは地面に寝転がったままロブレスを見あげた。驚きで体が固まったままだった。今までこんな風に対戦された事はない。

ロブレスもそのままユージを見降ろしたままだった。

やがて、ロブレスがマスクを脱いだ。ものすごい汗だった。真剣な表情でユージを見ていた。あたりは静まりかえったままだった。すると、ロブレスが笑い出す。

「まさか、こんなに早くお前にこんな戦いをする事になるとは思ってもみなかった。」

ユージはゆっくり立ち上がるとマスクを脱いだ。

「あのまま戦っていたら、間違いなく私が負けていた。こうやっ

て両手を使って戦ったのは今までショーだけだ。私が彼に勝つことが出来たのは、こうやったというわけだ。」

ユージは驚いた。

「本当に、お前は期待以上の事をしてくれるな。」

ロブレスが握手を求めてきたので、ユージもそれにこたえた。

「……どうやら、カウスよりも先にお前の方が私の地位を脅かす存在になりそうだな。」

ユージははつとしてショーを見た。ショーは真剣な顔でユージを見ていた。あたりがざわついた。ユージが次の近衛隊長官の候補だと公言したのも同然だったからだ。

「これで満足だろう。各自訓練に戻るように。」

ショーが近衛隊長達に真顔で言った。近衛隊達は何も言わずにそれぞれ散って行った。ショーもなにも言わずその場を離れた。ドレアも何も言わなかったがユージに笑いかけてから離れていった。

ユージとロブレスはお互い見つめたままだった。カイがそばにやってきた。

「お前、本当に今のすごかったぞ。」

他の第7隊の近衛隊もユージの周りを囲んだ。

「本当に素晴らしいかった。さすがロブレス特別兵の愛弟子だな。」

カウスが言った。

「俺がロブレスの愛弟子？そうだ。確かに俺はロブレスの訓練を一身に受けてきたじゃないか。だからこそ、ここまでやれるようになったのだ。」

ユージはうれしくて目に涙をためた。すると、ロブレスが言った。

「ユージ。お前が俺に礼を言おうと思っているのなら、まだ早いぞ。お前がショーを倒した時に言ってくれ。」

ユージは小さく頷いた。

「それから、俺の愛弟子は、そこにいるカイもだぞ。ユージはリート国では兵士を4年もやっていたんだから、これくらい当然といえば当然だが、カイはまだ本格的に訓練を初めて1、2年だ。こいつ

もかなりの能力を秘めている。」

それからは、カイが第7隊の近衛隊と対戦を始めた。カウスとゼナもお互いで対戦を始めた。ユージはあまりにも疲れたため、その様子をただじつと立って見ていた。すると、ロブレスがユージの隣にやってきた。

「シヨーは、はつきり言つて恐ろしく強い。ああせねば、勝てぬのだからな。おそらく今度のネーチェの大会では、お前が両手を使つて戦ってくるに違いないと思つて訓練してくる違いない。ひよつとしたら、あいつも両手を使ってくるかもしれん。そのつもりでいろ。」

ユージは頷いた。すると、ロブレスはユージを笑いながらまじまじと見た。

「しかし、よくここまで短期間の間にこれほどの腕をあげた。今、私は感動している。お前のような男に巡り合えて私は本当に幸せだ。」

「いえ。そんな。私こそ、ロブレスさんに巡り合えて幸せだと思つています。」

「ありがとうございます。」

ロブレスは満足そうに笑いながら答えた。

「…実は、さきほどお前と対戦して、シヨーに勝つかもしれない方法を思いついたのだ。」

「そんな方法があるのですか？」

ユージは驚いて聞いた。ロブレスはニヤつと笑った。

「ああ。お前にあつて、シヨーにないもの。それは、若さだ。私が途中で、両手を使おうと思つたのは、あのままでは確実に体力を消耗し、お前に負けると思つたからだ。シヨーは私よりひとつ下の26歳だ。ネーチェの大会の時には27歳となっている。」

「つまり、長期決戦に持ち込めば私が勝てるかもしれないと？」

ロブレスが頷いた。

「それには、体力をさらにつける事だな。」

ユージは本当にそんな事が可能なんだろうか？と一瞬、疑ったが、ロブレスが今まで自分に言ってきたことはすべて正しかった。だから、信じようと思った。

「それから、シヨ―は来年試験を受けねばならん。そうだ。お前たちと一緒に受けることになるのだ。私は今、あいつを差し置いてお前を1位にさせようという気になっている。」

ユージはロブレスのとんでもない計画に目を丸くした。

「おそらく来年の試験では、シヨ―とお前の一騎打ちになるだろう。馬にのつての弓術はシヨ―とてすべての矢を中央を射ることは至難の業なのだ。つまり、お前は弓術では両方とも1位となる可能性があるわけだ。そして、あとどれか一つでもあいつを差し置いて1位になることができれば、お前が総合で1位だ。おそらくネーチェで長期決戦をしてしまえば、あいつは警戒して剣術で短期決戦に持ち込んでくるだろう。だから、馬術で勝つしかない。あいつは恐ろしく馬術も上手だ。だが、お前とリイなら十分可能だと私は考える。」

そう言う風に分析して言われるとユージもなんだか可能性があるように思えてきた。

「…分かりました。これからそのつもりで訓練します。」

ユージは不敵な笑みを見せた。

その日の昼、昼食を食べたあと、ユージたちが近衛隊舎監の前の広場で訓練をしていると、一人の1等兵が馬で駆けてやってきた。そして、ユージのところへ来ると

「今、ユージ特別兵補佐官の許可証を持って門にヨナという人物が来ております。」

と言った。

「そうですか。わかりました。すぐにいきます。」

ユージはロブレスにちょっと行ってきますと言い残し、リイに乗ると近衛隊と共に門へ行った。門には弟子らしき男を3名つれてヨナがいた。ユージは近衛隊に確かに自分の招待した人物だと言って、

中に入れてもらった。

「タウト、お久しぶりです。」

「タウト！」

ユージがこんにちわ、とソイ・モイ語で話しかけたので、ヨナは上機嫌でユージと握手した。

「もうお怪我は大丈夫なですか？」

「足の方はまだ、歩くの大変。でも、腕は大丈夫。」

ヨナは元気に腕を振って見せた。

「ユージさん、こちらに來ると、手紙もらった時、驚いた。でも、すぐに來れるから、助かった。約束の品、できた。」

ヨナは、弟子たちの馬を見た。弓矢が積まれていた。

「ありがとうございます。とりあえず、私について来てくださいますか？さっそく試してみたい。」

「分かりました。」

ヨナが馬にまたがると、ユージはヨナ達をつれて近衛隊舎監の広場へ向かった。

広場につくと、ロブレスとカイが近寄ってきた。

「これ、頼まれた弓矢。」

ヨナがユージに弓矢を手渡した。ユージはそれを持ち、じっくりを触って確かめた。なるほど。以前の弓矢と寸分たがわぬ感触だ。いや、以前よりもしっくりくるような気がする。ユージは試しに、的に矢を射てみた。ど真ん中に矢はささった。ユージは目を輝かせた。カイとロブレスも驚いた。

「まったく癖がない！こんな弓矢は初めてです！」

ヨナはうれしそうに笑った。

「ちよつと、これ、試してください。」

そう言つて別の弓矢も手渡した。アイカ国の弓矢だった。

「その弓矢だと、普段使えない。違いますか？」

「はい。」

「これ、ユージさん専用に作ってみた。」

そう言われて、ヨナの作ったアイカ国の弓矢を受け取った。ユージは触ったとたん、手がすいつくような不思議な感覚を感じた。よく見てみて、構えてみる。

「これは…普通のアイカ国の弓矢よりほんの少しですが、小さいように思えますが？」

「そう。ユージさん。リート国の小さい弓矢使ってた。だから、アイカ国の弓矢やりにくい。だから、見て分らないくらい、小さくしてみた。弓の太さも、ユージさんの手に合わせて、作った。」

なるほど、とユージは思った。そして、その弓矢で的を射る。あっさり、ど真ん中にささった。ユージは驚いた。さきほどのリート国の弓矢がこれ以上のものはないと思ったが、これはそれを上回る性能だった。

「ちよつと、リイに乗ってやってみます。」

ロブレスとカイにそういうと、リイにまたがりの的を射た。何本も連続して射る。すべてが中央に吸い込まれた。ユージは目を疑って弓矢をまじまじと見た。そして、カイたちのところへ戻ってきた。

カイとロブレスも驚いていた。

「ヨナさん。ありがとうございます！！こんなに素晴らしい弓矢は本当に初めてです！」

「礼いらない。ユージさん、私助けてくれた。薬もくれた。それに、私、ユージさん気に入った。自分の弓、そこまで使えた人、今までいなかった。これから、私あなたの専属の作り手となる。」

「本当ですか？」

ユージは思いもかけない申し出に目を輝かせた。

「これは、これは。ユージ。計画が本当に実現しそうになったな。」

ロブレスが笑って言った。

「そうですね。なんだか本当にやれそうな気がしてきました。」

「なんだ？その計画って。」

カイが不思議がつて聞いた。

「また後で話すよ。」

そういうと、ユージはヨナに向き直った。

「リート国の弓矢は遠慮なくいただきますが、このアイカ国の弓矢の代金の方はお支払させてください。十分なお礼をいたします。」

「今回だけ、それも代金いらない。次から代金貰う。前にも言った。宣伝してください。そうすれば、私、もうかる。」

ユージはロブレスとカイにくるりと向かって言った。

「ぜひ、ロブレスさんも、カイもヨナさんに作ってもらってください!!!」

ロブレスとカイが大笑いした。

「仕方ないな。だが、私も今のユージを見て、ヨナさんに作ってもらいたくなった。ぜひ、お願いする。」

「私もです。私はあまり弓矢が得意でないのですが、ヨナさんの弓矢ならあつという間に得意になれそうです。」

「では、一度、この弓矢、試してください。」

二人はヨナに弓矢を受け取ると、交互に試してみた。ロブレスもカイもすんなり中央付近に射ることが出来た。

「これは!!!」

二人とも驚いた。

「ちよつと、身長と手の大きさ、はかる。」

そういうと、ヨナは丁寧に二人の身長や腕の長さ、手の大きさをはかって調べるとメモをしだした。

「では、二人の分、さつそく作る。それ、弟子の作ったやつ。それまで、その弓矢使うといい。そして宣伝してください。あなたたち二人も、私助けてくれた。だから、私作ル。でも、もうこれ以上は無理。後は、弟子が作る。」

「これは、ラッキーだな。カイ。」

「そうですね!!!」

二人も目を輝かせて喜んだ。

ユージはヨナを門まで送りどけてすぐにカイたちのところまで戻ってきた。

そして、また弓矢を触って確かめた。するとカイが言った。

「で、なんだ？計画ってのは？」

すると、ロブレスが話はじめた。カイは目をまんまるにして驚いた。

「そ、そんな計画を相談してらしたんですか？」

「ああ。しかし、可能だとカイも思わないか？」

「…確かに、これなら弓矢では両方とも1位は確実でしょうから…やれるかもしれません。なんだか、俺わくわくしてきた！」

3人とも来年の試験の日が待ち遠しくなった。

21話 訓練で…

8月1日、10時にカイの家の会議室でユージとカイ、ロブレスは式典用の軍服に着替えて着任式のために待機していた。

やがて、そろそろといかにも体格のよい男たちが部屋に入ってきた。みなロブレスと同じ紫の軍服を着ていた。そして、そのあとから、ザイルとヤンネ、シヨーが入ってきた。

ザイルが特別兵から順に承認の賞状が渡すだけの簡単な着任式だった。その後、シヨーがそれぞれの紹介をし、簡単な挨拶を交わして式は終わった。

ザイルとヤンネが出て言った後、シヨーから今度の予定を言い渡された。ロブレスには予定表が配られる。今日の昼からさっそく訓練義務の視察と指導にあたることになっていた。他の特別兵にも簡単な説明を行うと、みんなで雑談をした。といっても、ユージとカイは緊張しまくって背筋を正して聞いているだけだった。

そのうち昼が近くなったので解散となった。特別兵たちが帰っていった、ユージとカイは机にうつぶせになった。

「あゝ、緊張した…」

ユージがそういうと、カイも

「そうだな。さすがの俺もめちゃくちゃ疲れた…これからあんな人たちと一緒にやっていくのか…はあ…」

とため息を漏らしながら言った。ロブレスは大笑いして

「何を言っている！そのうち、お前たちが彼らの上司となって、彼らを使うんだぞ。」

ユージとカイはロブレスを情けない顔でロブレスを見た。

「…そんなの絶対無理です。」

とユージがつぶやくと、カイがはげしく頷いた。

「ユージはそういういつつ、何かがあれば対等に張り合はずだ。自分の信念は曲げんと思うね。」

「…そうかもですね。何か気に入らない事があつたら、オヤジにだつて食つてかかりそうです。」

「そうだな！そうかもしれん！」

ロブレスは、大笑いした。

ユージはそんな事ある訳ないだろう、かんべんしてくれ、という顔をする。

この時、冗談半分にかわした事が本当になるとは、誰も想像だにしなかった。

さつそくその日の昼から訓練義務に視察と指導に行つたが、思ったより楽だった。何しろ、名の知れた元近衛隊が隊の長となつたこと、準特別兵が出来たことで、1等兵の士気が高まり、ほとんど何もなくてもよかつたからだ。ユージは全等級を回り、気になる兵を少し指導する程度でよかつた。それでも、全員が目に見えて変わるので、全隊員のユージを見る目つきがあつという間に尊敬のまなざしに変わった。ユージとロブレスの対戦はどの隊へ行つても知れ渡つていて、二人の対戦が見たいとせがまれ毎回対戦をした。

あつという間に、8月4日になった。ユージは晩御飯の後、台所へと向かう。レノが女中と一緒に食器を洗っていた。

「すみません。レノ様。今日、リイの誕生日なんです。ごちそうをあげて、祝つてやりたいんですが…何をやったらいいんでしょうか？」

「あら？そんなの？野菜や果物でいいと思うわ。ちよつと待つてね。用意するわ。」

そういうと、レノは女中たちに野菜と果物を取り、食べやすい大きさに切つてかごに入れてユージに渡してくれた。

「ありがとうございます。これからやってきます。」

丁寧にお礼をして台所から出た。そして、厩舎へ行きリイにその野菜と果物をやった。ユージは優しくリイをなでながら、「おめで

とう」と言った。リイはおいしそうにバクバク食べた。すると、突然、

「お前、リイの誕生日なんか知ってたのか？」

とカイが後ろから声をかけてきた。ユージは飛びあがって驚いた。「なんで、そんなに驚くんだ？」

「あ、あの……」

「俺に黙ってるなんて水くさいぞ！リイ、おめでとう！」

カイがリイの顔をそっとなぜる。すると、

「今日は、リイに触らないでくれ！」
とユージが怒りだした。

「な、なんだよ？いつも、なぜてやってるじゃないか。」

カイはあまりのユージの剣幕にたじろいだ。

「……今日はリイの誕生日なんかじゃない。だいたい、俺の馬じゃなかったんだから、そんなの知ってるわけないだろ！」

「じゃあ、誰の誕生日だって言うんだよ！」

と言ってしまってからカイは急に誰の誕生日なのかに気がついた。「ああ、そうか。ごめん。」

カイは慌ててリイから離れた。ユージは気まずそうにしながらも、カイとリイの間に割り込んだ。

「俺、部屋に戻って勉強するわ。」

そついうと、カイは家に入って行った。カイの姿が見えなくなると、ユージはまたリイを見た。もう、野菜と果物は食べ終わっていた。

「おいしかったかい？」

リイがユージの顔に自分の顔をこすりつけてくる。ユージはリイを抱きしめた。

「もう、体は大丈夫なのかな？ベッドから出られるようになったのかな？」

リイが軽くブルブルと声を出した。

「ちよっと散歩に行こうか。」

ユージはリイに乗って王宮の中の森を軽く散歩した。月が道を照らす。その月をじっとユージは見た。

…あれから、まだ1年しかたっていないというのか…

ユージはリディアと別れた日のことを、久しぶりに鮮明に思い出していた。

…君に会いたい。会って抱きしめたい。待っていてくれ。必ず君のところへ行くから。

ずいぶん長い間、リイとそうやって散歩した後、家に戻った。部屋に入るとカイがユージをチラッとみたが、何も言わずに机に顔を向ける。

「俺、もう寝る。」

ユージは寝間着に着換え出した。

「じゃ、俺も寝るわ。」

カイもペンを置き、着替え始めた。着替え終わるとユージはさつさとベッドに入った。カイが明かりを消してベッドに入ると、ユージがカイのベッドに入ってきて抱きついてきた。

「さつきはごめん。」

「謝るなつて。」

ユージはさらにカイに抱きついた。

「…俺さ、お前がうらやましいよ。」

「俺のどこが？」

「俺もお前みたいに誰かを一途に好きになってみたい。」

「…だったら、俺に熱あけてろ。」

カイは苦笑した。

「そうだな。」

するとユージはカイから離れて自分のベッドへ戻って行った。

「ありがとう。もう大丈夫だ。」

「そうか。じゃ、おやすみ。」

「ああ。」

その日もユージはリディアの夢を見た。

この日は、今まで何度も見た悲しい夢ではなかった。自分がアイカ国の王となり、その傍らにリディアがいる夢だった。

近衛隊の実技試験の日がやってきた。

この日、ロブレスは試験官をやることになり、ユージとカイは場内の警備にあたることになった。9時開始だったが、朝の7時にはすでに満席状態になり、場内は興奮でつつまれた。ユージとカイが場内を見回っていると、あちらこちらで二人は客に軽く会釈された。市内に住んでいる一般兵だった。

見回りの兵はユージ達以外は、全員が一般兵で、その中で二人だけが紺色の軍服を着ていたためかなり目立ち注目の的だった。すぐに、あの二人が例の二人だと、兵でないものまでが口ぐちに言いだした。一人の年老いた女性が二人のところへやってきて、二人に握手を求めると、まわりにいた人まで次々と二人の周りに集まってきて握手を求めてきた。二人はあわててその場から退散し、警備を行う兵が待機する部屋へ移動した。そのには、ショーがいた。

「あれ？お前たち、どうしたんだ？場内の見回りはどうした？」

「いや、あの、みんな私たちを見ると握手を求めて来たんで逃げきたんです。」

カイが頭をかきながら答えた。

「ははは！そうか！有名人は辛いな！！！！では仕方がない。受付の手伝いでもしてくれるか。雑用で悪いが。」

「了解です。」

ユージが答えた。

その後、二人は試験を受ける兵に、番号がかかれたゼッケンを渡す仕事をした。何千人もいるためかなり大変だった。その中にネysonがいた。話すことはできなかったが、お互い目であいさつをした。時間になると、兵を会場内へ案内する仕事をした。そのあとは、場グラウンドの隅で警備にあたった。

それからは、その場にたって競技を見ているだけでよかったので楽だった。

まずは、馬術からだった。やがて、ゼッケン2番をつけた人物が目を見張る軽やかさと美しさで障害物をしていく。スピードもあきらかに違った。

「あの人すごい！！！！」

ユージがカイに小声で言った。

「ああ、ドレア近衛隊副長官だよ。近衛隊副長官は2番をつけることになっているから。ちなみに1番は当然、近衛隊長官だ。」

カイにそう言われて、よくみると本当にドレアだった。

「…俺もあんな風にリイを操りたいな。」

「そうだな。さすがだよな。」

ユージはドレアのことを誤解していたと思った。あんなにやさしそうな人だから、たいしたことないと思っていた。だが、やっぱり近衛隊副長官だ。あまりの優雅さにユージはそれからも、ずっとドレアの事ばかりを目で追いかけた。ドレアは弓術もとにかく美しかった。汗などかいていないんじゃないかというほど、無駄な動きがなく素晴らしかった。

弓術が終わると、昼休みとなった。

ユージたちは、さつさとサンディを食べ終え、ネイソンを探しに行った。たくさん人がごった返しているので、なかなか見つけれなかった。だが、ネイソンの方から二人を見つけて手をあげた。急いで、ネイソンの元へ行く。

「久しぶり！なかなかその軍服がかっこいいな！」

「ありがとうございます！…試験の方は、どんな感じですか？」

ユージが聞いた。

「まあまあ、つてところだな。」

すると、ネイソンは二人に顔を近づけて小声で言った。

「これからの剣術が問題だけど、なにしろ、君たちをあれだけ相手にしていたんだからな。だから、結構自信はあるんだ。ロブレス特

別兵も太鼓判を押して下さってるし。」

ネイソンがニヤッと笑った。二人も笑い返した。

少し、ネイソンとはその後話しをしたが、すぐに二人は警備にあたって兵が待機する部屋へ戻った。そこには、すでに今までの順位が集計されて、部屋に張り出されていた。

1位はやはりダントツでドレアだった。ネイソンは216位だった。ネイソンは、弓術が苦手だった。だからこれ以上下がることはない。剣術で得点をあげるだろうし、ロブレスの言うように無事に合格できるだろうと二人は安心した。

昼からの剣術は、トーナメントだった。会場の客がこれを一番楽しみにしていたようで、場内に受験者が入ってくると大歓声で出迎えた。

二人ひと組のペアで、対戦が始まった。対戦が進むにつれ、どんな人が少なくなっていく。ネイソンがその中かなりねばって残っていた。

対戦者の中では、やはりドレアは目を引いた。誰と対戦してもあつという間に片付けてしまい、会場が大歓声につつまれ、手をあげてその都度それにこたえていた。

最後の二人になった。ひとりには当然ドレアだった。二人が対戦を始める。会場は静かになった。さすが決勝戦だけあり、さすがのドレアも一瞬で片付けることはできなかった。その二人の対戦を見ていて、ふとドレアと対戦しているゼッケン番号10番の人がカウスと重なった。

「カイ。あの10番の人、カウス近衛隊隊長じゃないのかな？」

「お前もそう思っていたのか？受けるなんて話は聞いてなかったけど……」

剣術はマスクをしているため、誰なのかまったく分からなかった。そして、やがてドレアが勝った。ドレアがマスクを脱ぎ、会場に向かって手を振った。

ゼッケン10番の人がその場から離れ、競技場内に入る前にマスクを取った。

「やっぱり、カウス近衛隊隊長だ！あんな人に俺達見てもらってたのか。」

二人は、本当に自分たちは大事に育てられているんだとつくづく思った。

そうして、最後の騎乗での剣術が始まった。こちらも最後はドレアとカウスの対戦となった。とにかく、二人の対戦は素晴らしかった。ドレアの美しさにカウスは荒々しさを挑んでいく。やはり、こちらでもドレアが勝った。またドレアがマスクを脱ぎ、聴衆の歓声にこたえる。この頃には、すっかりユージはドレアのファンになってしまっていた。

最後の対戦が終わり、長い間待たされると、受験者が全員グラウンドに呼び出された。今回の合格者は、317名ということだった。

1位のドレアが呼ばれると、会場内がものすごい大歓声に包まれた。ドレアがさっそうと歩き、笑顔で手を振りながら中央に出る。

2位はやはりカウスで大歓声につつまれながらドレアの隣にならぶ。そして、3位が発表された。ゼナだった。大歓声があがる。

「あれ？ゼナ近衛隊副隊長まで受けてらしたのか？」

カイが驚いて言った。ユージもまったく気がつかなかった。こちらでも大歓声にこたえて手をあげて列に並ぶ。つぎつぎと合格者が呼ばれ整列する。ネイソンが156位でよばれた。ユージとカイは目を合わせて喜んだ。

そのあと、新しく設置される準近衛隊の合格者が発表された。今回は198名が採用された。上位から順に名前が呼ばれる。

最後の合格者が呼ばれると、不合格者が会場から出ていった。すると、ザイルが出てきた。合格者に何か言っている。遠いので聞こえないが、祝の言葉を述べているのだろ。王が客に向かっ

て手をあげると、また大歓声があがり、試験は終了した。

片付けを手伝い終え、会場から帰る頃には日が暮れていた。ロブレスと一緒に、競技場から王宮へ帰りながら、ユージとカイは興奮して今日の感想を話していた。あまりにも、ユージがドレアのことをほめちぎるので、

「そんなに言うならドレアに指導してもらったか？」

とロブレスが言った。

「ほ、ほんとですか？？可能なら、ぜひ、時々でいいので見てもらいたいです。」

ユージが輝く目で言った。

「分かった。私の方から話をしておこう。なら、当然、カイも見てもらっただろう？」

「は、はい！」

カイも喜んで返事した。

「しかし、ドレアに見てもらったのは、なかなかいいアイディアだな。ショーは指導してくれと頼んでも引き受けてくれそうにないしな。特にユージには。」

「どうしてですか？」

「…どうも、ネーチェの大会まで自分の手のうちは見せたくないらしい。俺との対戦も近頃あまりやろうとしないからな。」

ロブレスは苦笑しながら言った。

「ショーにはもちろん許可は取るが、こちらもショーに手のうちを見せずにいけるようにドレアと相談してみよう。」

ドレアは土曜日の夕方ならなんとかなるということだったので、さっそく次の土曜日から見てもらったことになった。

「私の戦い方は、武術の呼吸法を元に行っているのだ。」

「呼吸法？」

ユージとカイが二人で同時に言った。

「そうだ。人間は、普段無意識に息をしているが、それを意識的にコントロールしながら戦うのだ。そうすると、無駄なところに力が入らず、よけいな力を使うことなく効率よく戦える。私はこの通り、体格がよくないからな。どうやったら、体格のよい連中に勝つことができるだろうと色々調べた結果、ソイ・モイ国にそういう武術があるのを知ってな。ちょうど、ソイ・モイ国の武術の達人がナベルいると聞いて、その武人に習ったのだ。」

ユージ、カイ、ロブレスはお互いの顔を見合わせた。

「あの、ひよつとしてその人、ヨナさんておっしゃいませんか？」
ユージが聞いた。

「おや、知っているのか？」

「ナベル野営地でソイ・モイ国からこちらへ来る途中、落馬して山で倒れていたのを助けたんだ。」

ロブレスが答えた。

「落馬だと！」

ドレアの顔つきが変わった。

「足はまだ引きずってはいらしたが、もう元気に弓矢作りの仕事をおこなってる。」

ロブレスがそういうとドレアがほっとした顔をした。

「今、ユージが使っている弓矢は彼の物なんだ。先日、お前が隣町にいつていた時、この弓矢をユージに渡すために王宮に来ていたんだ。…そうか。あのとき、ドレアがいるかどうか聞いていたのはドレアとヨナさんは知り合いだったからなんだな。」

「そうか！それでユージは、急に的の中央に当てることができるようになったんだ。師匠の弓矢は最高だ。私も師匠の弓矢を使っているのだ。そういうことなら、そのうち師匠がこちらに来た時でも直接教えてもらうことにしよう。では、さっそく始めるか。まずは、型から始める。」

ロブレスも一緒になって、ドレアのやるように真似をした。動きながら、呼吸を止めたり、吐いたりするのが結構難しかった。1時

間もやると、汗がものすごく噴きだし、ヘトヘトになった。

「よし、今日はこのくらいでいい。これを毎日やるんだ。ゆっくりでいい。確実に呼吸をコントロールするのと、余計なところに力を入れないように集中するんだ。これだけでも、かなり、基礎体力の向上にもなる。」

そうか。なら、これを毎朝やることにしよう、とユージは思った。

やがて、9月になり近衛隊と準近衛隊の着任式が行われ、その週末の土曜日、初の会議が行われた。ロブレスを含めた特別兵8名とユージ、カイ、それからショートとザイルとヤンネだった。特別兵がそれぞれ自分の隊の報告をした。すべて順調に行っていて、問題は無いということだった。だが、準近衛隊の長官・副長官を担当することになった、ベームとシャーフだけが頭を抱えていた。急に設置したので、人数を予定よりかなり減らしたが、それでもやはり兵のレベルが低いということだった。トップの連中は近衛隊から落ちて来た連中や近衛隊にもう一歩及ばなかった連中ばかりなので問題がないが、下位の成績だった連中がそれほどの腕でもないのに、準近衛隊になつて勘違いしてしまい始末に負えないということだった。自分たちだけでは、とてもじゃないが指導しきれないということだった。それで、とりあえず明日の日曜日にユージとカイとロブレスで様子を見てからまた考えようと言うことになった。

準近衛隊の訓練は、ベームとシャーフの言うようにトップの連中は勝手にお互いで競い合つて訓練をしていたが、真ん中より下らしき連中が得意満面で訓練はしているが、すぐしゃべったり、休んだりしていた。ベームとシャーフが行くと、その時だけ真剣にやる感じだった。

そこで、カイが、とりあえず今日の訓練を、隊を3つにわけ、上位はベームとシャーフ、中位はロブレス、下位はユージとカイで見ることにしてはどうか、という提案をした。ベームとシャーフがそ

れに同意し、その後隊を3つに分けた。

ベームとシャーフは上位に、よりレベルの高いことを要求し、なんなく上位の兵はついていって満足そうにしていた。ロブレスも、うまく指導ができていたようだった。やはり、問題は下位の兵だった。とにかく体力がないということが分かったので、ひたすら走らせ、腹筋や腕立てなどをやらせた。当然、ユージとカイも一緒にやった。誰ひとりとして、二人についてこれるものはいなかった。ユージとカイはこれはあまりにもひどすぎると思った。

準近衛隊の訓練が終わった後、昨日のメンバーで緊急に会議を行った。シヨーが全員の話を聞いて、それならユージとカイは準近衛隊を見ることがしようといった。すると、他の特別兵が、一般兵士の訓練義務への指導が軌道に乗るまで、ユージやカイやロブレスがたまには来てもらわないと困るといいだした。特にユージの指導能力を絶賛し、ユージだけでも来てほしいといいはった。そこで、ザイルが午前中行われている近衛隊の訓練を昼からにし、午前中に準近衛隊の訓練を行えばよいといい、と提案したので、問題は解決した。急には無理なので、来週の月曜日から、そうする事になった。

さつそく、次の週からユージたちは、下位の準近衛隊を徹底的にしごきまくった。3時間あるうち、2時間は基礎体力の向上のための訓練にあてた。残りの1時間で、ひとまず剣術からなんとかさせようということで、ユージとカイは可能な限りの兵と剣術の対戦を行ったりして、指導を行った。

この準近衛隊での指導は、精神的にかなりきついものとなった。なにしろ、全員が自分たちは準近衛隊になったのに、どうしてユージやカイのような若造に指導されなければならないと考えていたし、ほとんど実質的な訓練が行われない事にもみなが不満を持っていたので、どなり散らしてやらせなければいけなかったからだ。

ユージとカイは日ごとに、精神的にどんどん疲れていった。

そんなときに、二人の元に一通の大きい封筒が届いた。ジェツシーからだった。それをカイが先に読んで、驚いてユージに報告した。「おい！ユージ。すごいぞ！！！ジェツシーは毎回、それぞれの授業の終わりに、その日教えた事を確認するためのミニテストを行っていたらしい。そうしたら、効果てきめんで、週末のミニテストでほとんどの者が満点近い点を取ったってさ！全員に努力賞を送ってもおかしくない事態に陥ったらしい！」

「それはすごいな！」

「他のやつらも、順調に成績を伸ばしているらしい。特に上級コースの実技を指導しているスコットが、うまくみんなをおだててやる気を出させて、実技の方でもぐんぐんみんなが腕をあげているらしい。」

ユージもその手紙を読ませてもらった。みんなの笑顔が見えるようだった。

「おい。ユージ、これ見る。」

カイが手紙とは別に書類が入っていたので、それを見て、驚いてユージに見せた。ジェツシーがこの一か月の学校の様子を初級から上級まで、筆記、実技に分けて詳しく分析したレポートだった。

「こ、これは、すごい！なんて分かりやすくまとめてあるんだ。これだけの量をまとめるなんて大変だったろうに。」

「そうだな…こんなにするどい感覚で物事を見れる人間だったとは…俺のレポートより、断然いい。」

二人はすぐにジェツシーに返事を書いた。そして、いつまでもジェツシーの手紙とレポートを見ていた。それだけで、精神的な辛さが飛んでいった。自分たちも、ジェツシーたちに負けないようにしなくてはと、そう思った。

だが、ユージたちの思いと、下位の準近衛隊との思いはかけ離れていくばかりで、9月の終わりにとうとう、下位の準近衛隊の一人が不満を爆発させた。

「どうして、こんなバカらしい基礎訓練ばかりさせるんだ！」

一人の準近衛隊がユージとカイに食ってかかってきた。

「お前たちが、それをせねばならぬほど、準近衛隊として劣っているからに決まってるだろう！」

ユージは怒鳴った。

「では、なぜ、俺達はお前たちのような、特別兵補佐官などという訳の分からぬ階級の者に指導されねばならぬ！俺達だって、シャーフ様やベーム様に指導されたい！」

「…特別兵補佐官が近衛隊と同格だと知らないのか？」

ユージは、怒りをなんとか押さえて静かにいった。

「そんな事は知っている！入隊試験の実技で満点とったかしらないが、カイ王子様と仲がいいんだからな。本当にそれだけの實力があるかなんてわかるものか！カイ王子様だって、親の七光でなっただけだろう！」

カイがその男に飛びかかりそうになったが、ユージが止めた。

「では、今から、私と対戦しよう。すぐに用意しろ。」

まわりにいた準近衛隊がざわついた。そして、二人の周りを囲んだ。

その男は、防護服をマスクを身に着け、訓練用の剣を持った。ユージはそのまま防護服を身につけずに、左手で剣を持っただけだった。

「では、かかってこい。」

男はユージが何も身につけないのでたじろいだが、大声を出して向かってきた。ユージは無表情のまま、何度も身をかわしたり、何度も男の剣を自分の剣で受け止めた。男はどうやっても、ユージには勝つことが出来ないのです、どんどん焦ってかかってきた。

「…その程度の実力で、よくえらそうに言っな。」

とユージがほくそ笑んだ。男は目を見開いて怒った。

「お前だって、近衛隊と同じと言っておきながら、まったく俺にかかってこれないじゃないか！」

「お前は、そこまでバカなのか。」

すると、ユージは右手に剣を持ち替えた。

「では、本気でやってやるから、もう一度かかってこい。」

男は少し考え込んだが、ユージにかかっていった。一瞬でカタがついた。

「……言っておくが、俺は先日の試験で2位となったカウス近衛隊隊長と互角に戦えるぞ。それに、カイも近衛隊と全く互角に戦える。嘘だと思ふなら、カイとも戦ってみるがいい。」

男は顔を真っ赤にしてユージを睨み付ける。

「なんだ！いい気になりやがって！だいたい、この国は大国なんだ！兵の数だって他国より軍を抜いている！ここまでやらなくたって、余裕だろう！」

その瞬間、ユージが今まで見せたことのない冷やかな表情を見せた。その男は思わず少し後ずさる。ユージがおもむろに自分の腰にあった真剣を抜いた。そして、その男の顔の先に真剣を向ける。男が硬直した。

「防護服とマスクを脱げ。」

ユージが恐ろしく低い声で言った。男はあわてて防護服とマスクを脱ぐ。

「では、お前も真剣をとれ。」

「ユージ！」

カイが驚いて止めようとした。

「お前は黙ってる！」

ユージはものすごい剣幕で怒鳴った。カイもユージの勢いにのまれその場で固まった。男が恐る恐る真剣を抜いて構えた。

「では、それでかかってこい。」

男の手が震えていた。

「なんだ？かかってこれないのか？」

「……し、真剣での訓練は禁じられている。」

「他国の兵士が聞いたら大笑いだ。俺は10才でリート国の訓練学

校へはいったが、その時から真剣で練習したぞ。もちろん、防護服もマスクもない。それに、朝から晩まで毎日訓練だ。はっきり言うておくが、この国は数ばかりで、まったく力にはならん。他国の兵士と戦えるのは近衛隊だけだな。リート国の兵は2万だ。それも、ほとんどが近衛隊と同じレベルで戦える。… たったの600名でこの国が守れると思うか？ 今、リート国から攻められたら、3日でこの国は陥落だ。」

周りにいた準近衛隊はそれを聞いて静まり返った。

「俺が憎いんだろう？ この国は優しい国だからな。お前が俺を殺してしまっても、処刑にはならん。しかも、先に真剣を抜いたのは俺の方だ。正当防衛が認められよう。安心してかかってくればいい。」すると、男が震えながらユージに向かってきた。ユージは剣を振った。男の顔に赤い筋が走った。その瞬間、ユージはすばやく男の後ろに回り、剣をのど元にあてた。男はあまりの恐怖に硬直し真っ青になっていた。恐怖から手が震え、自然と男の剣が手から離れ、地面に落ちる。

やがてユージは男から離れ、真剣を納めた。

「これが、戦争だったら、お前は殺されていたな。他国の兵は、殺さないでくれと頼んでも、聞いてはくれないぞ。目ざわりなヤツはすべて殺す。… 攻められて殺されなくなったら、文句を言わず俺の言う通りに訓練しろ！ 他のもんなもだ！ わかったか！」

周りは水を打ったように静かだった。

「では、訓練に戻る！ 短距離走の続きをやれ！」

ユージがそういうと、みな蜘蛛の子を散らしたように、その場から離れ、訓練を再開した。それから、ユージはそれを怖い顔で見ているだけだったが、全員が私語をまったくせずひたすら訓練を行った。カイは深刻な顔をしてユージをじっと見つめていた。やがて、訓練が終わり、兵に解散を言い渡した。しばらくすると、ユージはベームとシャーフに呼び出された。その横に、さきほどの男が立っていた。笑ってユージを見ていた。

「ユージ特別兵補佐官。真剣を使ったというのは本当なのか。」
ベームが怖い顔をしてユージに聞いた。

「はい。」

ユージは真剣な顔で答えた。

「真剣を使つての訓練は禁じられていると知っておろう。」

「もちろん、知っております。」

「では、なぜ、使用した。」

「必要だったからです。」

「とにかく、これから至急、諮問会議を行う。自宅にて待機せよ。」

そう言い渡すと、ベームがロブレスを呼びその話をした。ロブレスは驚いてユージを見た。そして、ロブレスがユージを連れて、カイとともに家へと向かった。その途中でロブレスがユージに訪ねた。
「ユージ、どうしてそんな事をしたんだ！」

すると、カイが詳細を話出した。

「何故、俺かベーム様やシャーフ様をすぐ呼ばなかったんだ！」

そうロブレスが言ったが、ユージはただ怖い顔をして黙っているだけだった。ロブレスはため息をついた。そのままロブレスもカイも黙ったまま家に向かった。

部屋にユージが入ると、ロブレスはその前で監視のために立った。カイは食堂でじっと座って待った。

やがて、ザイルとヤンネ、ザイルの足達と、ベームとシャーフ、それにシヨーが深刻な面持ちでやってきた。カイがロブレスを呼びに行く。ロブレスはドアを開けた。ユージは怖い顔をしたまま出てきた。

3人は会議室に入り、ユージは真ん中の席に座らされる。

ザイルの足の一人が口を開いた。

「ユージ特別兵補佐官が訓練中に真剣を使ったとの事。詳細を話せ。」

ロブレスがカイを見て話すように促した。カイが席を立ち話し始

める。ザイルの足達全員が怒った顔をして聞いていたが、ザイルとヤンネはただただ無表情だった。

カイが話終わり、席についた。

「ロプレス特別兵。ユージ特別兵補佐官は君の直属の部下だ。止められなかったのかね？」

「騒ぎには気付いておりましたが、以前からよくユージ特別兵補佐官は全員の前で対戦の見本を見せておりましたので、そうしているものとばかり思っておりまして。」

「カイ特別兵補佐官。君はユージ特別兵補佐官と一緒にいたのだろう。止められなかったのかね？」

足たちが次々に質問を浴びせる。

「止めようとしたが……その……ユージ特別兵補佐官の剣幕にたじろいでしまい、何もできませんでした。」

「ベーム準近衛隊長官、シャーフ準近衛隊副長官はどうかね。」

「私たちは別の班を指導しておりまして、騒ぎにはまったく気づきませんでした。相手の男から事情を聞いて、初めて知った次第です。」

「

しばらく沈黙が続いた。足たちがお互いの顔を見た。全員が頷く。一人の足がため息の後に言い放つ。

「……残念だが、ユージ特別兵補佐官は本日をもってアイカ国軍より除隊を命じる。カイ特別兵補佐官とロプレス特別兵は1等兵へ降格とする。ベーム準近衛隊長官、シャーフ準近衛隊副長官もその責任者として、特別兵から退いてもらう。準近衛隊長官、準近衛隊副長官には別の適任者を抜擢することにする。以上、諮問会議を終了する。」

そついい終えると、足たちが席を立とうとした。

「……まったく、この国は重役たちまで、平和ボケして脳みそがくさっているらしい。」

ユージが吐き捨てるように言った。

「おい！お前何を言うんだ！」

ユージはまずカイを、そしてその次にロブレスに、ただらなぬ威圧感で睨みつける。

その瞬間、二人はこれはユージは自分達は側近と足だから黙っていると言われたのだと理解した。

ユージは足たちに向き直る。そのあまりに堂々した態度に足たちがたじろいだ。

「…その通りだろう。俺の話を聞いて、危機を感じたんじゃなかったのか？なのに、俺はともかくロブレス特別兵や、ベーム様やシャーフ様のような優秀な軍人を一線から退けるなど、バカのやることとは思えないぞ。」

ユージは冷ややかに言った。

足たちが全員真つ赤な顔になる。

「まったく反省の色がないとは！しかも我々にむかつてその暴言！これは、除隊だけでは済まぬ！独房行きを提案する。」

周りの足たちもそのとおりだと口々に言う。

すると、ユージは急に笑い始めた。

「な、何が可笑しい！！！」

「…さきほど、準近衛隊に今リート国に攻められたら、この国は3日しか持たぬといったが、これでは1日持たないな。」

ユージはさらに言い続ける。

「お前たちは歴史を学んだのか？この国は300年前までは真剣を使つて訓練していたのを知らないというのか？どうして、それをやめ、防護服とマスクが開発され、訓練用の剣を使うようになったのか、それも知らないというのか？」

足達は押し黙る。ユージは彼らの態度を鼻で笑った。

「そんな事でよくこの国の足が務まるな。教えてやろう。300年前にはやり病で次々とこの国の人間が死んでいったんだ。軍の人間もかなり数が減った。真剣を使った訓練では、どうしても事故が起きて死者が出る。少なくなつた軍人を一人でも減らさないようにす

るために、レイト国王が防護服とマスク、それに訓練用の剣を開発したんだ。…今、この国はそんな状況か？なら、すぐにでも真剣を使って訓練するように戻すべきじゃないのか？訓練で真剣を使うことを禁止するだとか？俺にしてみれば大笑いだ。死を覚悟して訓練せずにどうやって本物の戦争をするんだ？そんな甘い事いつていと、他国にこの国は実は見かけ倒しだということがすぐにバレて明日にでも攻められるぞ！」

ユージはさらに足たちを睨みつけた。

「言っておくが、俺は独房行きなどまったく怖くない。この国の独房なら天国みたいなものだからな。俺を独房にいたいなら好きにすればいい。だが、そうすれば、この国はそれで終わりだ。この国を本当に救いたいのなら俺をこのまま軍の改革の一員として留めることだな！」

「なんと、自信過剰なヤツだ！」

「自信過剰なのはお前たちだろう！」

ふと、ユージはザイルを見た。じっとザイルは無表情にただ自分を見ていた。

「…ザイル様。あなたは先ほどから、何もおっしゃておりません。あなたはどうお考えなのです？」

全員がザイルに注目する。

「…どうしてお前は、この国が1日で陥落するなどとそこまで自信を持っていえるのだ？そこまでわが軍はひどいとは思わぬ。」

「…訓練だけを見るなら、確かにそこまでひどくはないでしょう。」

「では、どうしてだ？」

「今、私がシヨー近衛隊長官と真剣で戦ったとすれば、100パーセント私が勝つと自信があります。」

シヨーが驚いた顔をした。

「それは、どうしてだ？」

「シヨー近衛隊長官は私を殺せまい。」

「では、お前はシヨーを殺せると？」

「はい。自分が生き延びるためなら、ためらいません。」

部屋にいた全員がどよめいた。

「お前は、人を殺した事があるのか？」

「はい。訓練中に同僚と上司の二人を誤って剣で殺してしまった事があります。それに、リート国では夜盗がものすごく多い。彼らをいったいどれほど弓矢で殺したか、覚えてもおりません。」

ユージはおもむろに上着を脱ぐと上半身裸になった。そこには、無数の傷があつた。

「この傷を見てください。すべて、これは訓練でやられたものです。この脇腹は、私を気に入らなかつた上司がはらいせに、わざと私を刺したものです。ですから、剣の痛みも殺されるという恐怖がどういうものかも私は知っています。ですから、人を殺すことなどためらいません。」

部屋の中は静まりかえつた。

「私に暴言を吐いた準近衛隊にも言いましたが、他国の兵は、相手を殺すことをためらいません。たとえそれが自分の友や家族であつたとしても、自分が殺される前に相手を殺します。そんな状態ですから、他国の兵にとって敵国の兵など虫けら同然です。どんなに懇願しても許してはくれない。真剣を持ったことのないこの国の兵がそんな兵と互角に戦えると思われませんか？」

部屋にいた全員が黙つたままだつた。長い長い沈黙が続いた。

「…確かのお前の言う通りだな…。」

すると、ザイルは足たちに向かつて、

「…一線から退くのはお前たちの方だな。只今より、お前たちは私の足ではない。なるべく早く、王宮から立ちのくがいい。」

と、静かに言つた。

「な、なんですと！正気ですか？ザイル様！」

「実に正気だ。この国の状況を理解しておらんのはお前たちの方だ。そんなものに、この国のことがまかせられようか。…それに、言っておくと、私はこのユージを王の子にしようと考えておる。」

それを聞いた全員が驚いた。ユージも驚いてザイルをみる。

「もちろん、今すぐという訳ではない。私はこの国を救えるのはユージしかおらんと思っておる。したがって、これよりユージに軍の改革を一任する。わかったな。シヨー、ベーム、シャーフ、ロブレス。それにカイ。お前たちはユージの補佐をするがよい。」

ザイルが5人を順番に見た。5人は静かに席を立つと忠誠のお辞儀をした。

「これからどうやって、真剣を使って訓練を行うかは土曜日の会議にて行う。では、解散だ。」

そういうと、ザイルとヤンネが部屋から出ていた。その後を足たちが急いで追いかける。部屋にはシヨー、ベーム、シャーフ、ロブレス、カイ、ユージが残った。

全員がユージを見ていた。するとロブレスが口を開いた。

「俺の言ったとおりだったな。何かがあれば目上のものだろうと、対等に張り合うはずだと。自分の信念は曲げんな。だが、これほど王に相応しい者はおるまい。ザイル様もついにお前を王の子にすると認めた。」

「ユージ、お前の言うとおりだと思う。この国はかなり危機的な状況にある。それが分からん足などクソくらえだ。」

シヨーが言った。

「真剣を使ったと聞いた時は問題外だと思ったが、お前の話を聞くと、確におかしな話だと思った。軍の訓練は戦争を仮定して行われている。なのに、虫も殺せぬようなひ弱な兵士ばかりを育てて一体何になるというのだ。」

シャーフだった。

「そのとおりだな。ユージ、これから頑張ってくれたまえ。期待しておるぞ。」

ベームがそういうと、ユージは目から涙があふれた。ふとカイを見るとカイも涙を目にいっぱい溜めていた。

「ありがとうございます。あんなえらそうな口を聞いたにも関

わらず、そんな風に言っていただけとは思いませんでした。

…私は、ザイル様の気持ちをありがたく受け止めたいと思います。そして、この国の将来の王としてふさわしい人間になれるように、一層努力をしたいと思います。みなさんにさらなるご指導を頂戴したいと思います。カイには私の側近になつてもらいたいと思っておりますので、カイのこともどうか、よろしくお願いいたします。

「ユージは涙ながらにそういうと、深々と頭を下げた。カイも一緒に下げた。」

「…もう2時前だな。近衛隊の訓練に行かねばならん。」
「シヨーがそう言った。」

「…ロブレスさん、カイ。俺達もすぐに昼を食べて指導に行きましょう。ガスパ特別兵殿が首を長くして待ってらっしゃるだろうから。」

「涙を拭きながらユージが笑って言う。」

「そうだな。」

「ロブレスが言った。」

「では、私たちも失礼するよ。明日からは、思いきり準近衛隊をしごいてやるといい。」

「ベームが言った。ユージは笑顔でうなずいた。」

その日の夕食、食卓の話題は当然ながら、ユージの話になった。

レノとマユが目丸くしてカイの話聞いた。

「あの…、本当に足の方は、解雇されるのでしょうか？」

「ユージはザイルに浮かない顔をして聞いた。」

「ああ。解雇する。…今日の会議でも、自分らで勝手にユージの処遇を決めてしまっていただろう。王の私の意見などまったく聞こうともしない。どうも、最近、あいつらは勘違いしているなと感じておったのだ。だから、どの道近いうちに解雇するつもりだったのだ。今日は、きっかけにしかすぎんから、気にせんでよい。私はお前と

あいつらのやりとりを聞きながら、心の中で腹を抱えて笑っておったぞ。もつと言つてやれ！ユージ！と思つておつたな。ヤンネも同じように思つていたらしい。」

ザイルは大笑いした。

「は、はあ……そうだったんですか……」

ユージは拍子抜けした。

「……しかし、ユージはアイカ国歴史全集を読んでおつたのだな。」

「あ、はい。……ネイル様のところでも、この家でも、あの本が一番ボロボロだったので、何度も読み返されたに違いないと思いました。ですので、そんなに重要な事が書いてあるのかと思つて。」

「ええ？あれつて、20巻もあるやつか？お前がよく読んでいた分厚い本はそれだったのか？」

カイが目丸くする。

「うん。」

「そうだ。歴代の王は、自分の政策が間違つておらぬのか、もつとよい方法はないのかと、みなあれを読んできた。私は、今でも、時々読み返しておるな。」

「ふーん。だったら、俺も読んでみよう。」

「ともかく、私はもう足はおかないつもりだ。他にも重役はいるからそれで十分だ。それに、どの道、世代交代が近づいておるのだからな。ユージの方に優秀な足をつける方がよからう。ま、すでに、ロブレス、シヨーといった、優秀な足がついておるがな。軍の改革に関しては、これから、私は口は出さんつもりだ。お前たちだけでなんとかやってみるとよい。困つた時だけ相談に来い。」

ユージとカイはそこまで自分達を信頼してくれているのかと、涙を溜めながらただ頷いた。なんとしてでも、この改革は成し遂げて見せると思つた。

22話 ミヨ

次の日の朝、ユージがいつものように準近衛隊の訓練に顔を出すと、準近衛隊達が驚いた表情でユージを見た。どうやら、昨日の事件がすでに全員に知れ渡っているようだった。ユージは怖い顔をしてその中を歩き、下位のグループの場所へと行く。

昨日の男がいた。

すると、ユージはその男に向かって近づき、前まで来ると腕を組み睨みつけて言った。

「おい。お前。お前のおかげで俺は軍の改革をザイル様から一任される事になった。礼を言うぞ。」

男は目を向いて驚いた。

「だいたい、今行われている改革は俺とカイの案だからな。当然と言えば当然だ。もう誰も俺のやることに文句は言わせん。」

そうだったのかと周りがざわつく。だから、これほど特別待遇をされていたのかと思った。

「…お前、その顔の傷が痛んで昨日は寝れなかつたろう。」

男ははっとして顔を押さえた。

「言っておくが、ミスではない。わざと傷をつけた。それだけで、それほど痛むのだ。体を思いきり切られたらどれほど痛むのか想像はつくだろう。いい経験をしたな、お前。俺に感謝するんだな。」

男は悔しそうに下を向いて黙っていた。

「なんだ。お前。反省の色なしか。俺に感謝しろと言ってるんだ！礼を言わんか！」

ユージは怒鳴ると、その男の足を思いきり蹴飛ばした。あたりが凍りついたように静まり返る。

男は足を押さえて痛がったが、すぐに背筋をただし、ユージに敬礼をして

「ありがとうございます。」

と言った。

「それでいい。次に俺に刃向ったら容赦せんぞ。お前らもだ！！わかったか！」

ユージは周りの兵に対して大声で叫んだ。回りの兵はあわててユージに向かって敬礼をした。

「…では、今からランニングだ。」

ユージがそう言い走り出したのでカイがその後を走り出す。他の兵も二人について走りだした。

そして、土曜日がやってきた。この日からザイルとヤンネはユージに一任するからという事で軍の改革に関する会議には参加しなくなった。まず、シヨーが事情を知らない他の特別兵の5名に、ユージの事件の事、ユージが軍の改革においてザイルから一任されたこと、王の子の候補として正式に王から認められたという報告をした。

「次の日の準近衛隊の連中の態度の変わりよう。おかしくて笑いをこらえるのが大変だったぞ。」

ベームが大笑いした。

「しかし、あれくらい緊張感があるとやる気がこちらも沸いてきたな。」

シャーフも笑いながら言った。

「…そうか。いや、私の隊は昨日ユージに来てもらったが、彼が来たとたん、シーンとしてな。その後、恐ろしい緊張感につつまれたまま訓練が終わってな。一体どういう訳かと思っておったんだが…もう、みな知っていたのだな。いや、確かにものすごく集中してみなやっておった。」

デニスが言った。

「とりあえず、一般兵は私がそうやって脅しをかけるだけで十分そうですね。問題はただ集中して訓練が出来るかですから。」

ユージが苦笑していった。

その後、みんなで外に出て、軽く真剣での練習をすることになった。みな防護服とマスクをする。まず、シヨールからやることになった。

「とりあえず、真剣に慣れる事から始めようと思いますので、ゆっくりで結構ですから、私に向かってきてください。私もゆっくり動きますから。」

シヨールは生唾を飲んだ後、言われたようにゆっくりとユージに向かった。ユージもゆっくりと身かわし、シヨールに剣を振る。そうやって、5分ほど行った。

「どうですか？」

ユージがシヨールに聞いた。

「いや、確かに、緊張度がまったく違うな。訓練用の剣などおもちゃに感じてしまいそうだ。」

ユージは笑いながら頷いた。

「こんな風に、ペアになってしばらくやってみましょう。」

全員で11人だったので、ユージは見ているだけにした。10分ほどたった所でユージは合図をしてやめさせた。

「みなさん。どうですか？ たった10分しかやってませんが、ものすごく疲れてませんか？」

「いや、まったくものすごい疲労だ。」

ベームが言った。

「こんな事を他の国は子供の時からやっておるといのか…」

ホヨが言った。

「そうです。しかも、下位の兵は防護服や鎧など身につけさせてなどくれません。もちろん、盾もです。」

ユージがそう言つと、みな黙りこくった。

「けれども、すぐ慣れますから大丈夫ですよ。真剣の練習は、当分の間、毎日10分で十分です。とりあえず、近衛隊と準近衛隊の上位・中位グループは全員練習をさせたいと思います。」

ユージはシヨーを見ながら言う。

「明日は、まず最初にこれをやってはどうかと。そうすれば、いかに今までの訓練が甘いものだったのかが分かるでしょうから。そのあと、訓練用の剣で訓練すれば、おそらくすぐに一段階レベルが上がると思います。みんな優秀ですから。」

シヨーとベームとシャーフ、ロプレスも頷いた。

「下位グループは俺達が見本を見せるだけで十分だろう。それだけで、あいつら縮みあがるに違いない。」

ユージがカイを見ながらおどけて言った。カイは苦笑しながら頷いた。

「一般兵は様子を見ながら行いたいと思います。まず、近衛隊・準近衛隊に徹底させたい。そうですね……一般兵は、もし、たらだらしている兵を見かけられたら、私に言いつけて真剣で戦わせるぞと脅しをかけていただけますか？」

特別兵の全員が笑った。

すると、ユージはしばらく考え込み、シヨーに言った。

「シヨー近衛隊長官。私と少し本格的にやりあってみませんか？もつとも、左手でお願いします。シヨー近衛隊長官に利き腕で本気でやってこられたら、手加減ができませんから。」

「……そうだな。願するか。」

シヨーは左手に剣を構えて、ユージと対戦した。ユージは軽やかにシヨーの剣をかわしていく。はじめは、おそろおそろだったシヨーもユージが軽かわすのを見て、どんどん本気になった。ユージはしばらくそうしてかわしていたが、やがて剣を振ってシヨーの首元近くでとめた。シヨーは驚いて体を硬直させた。そして、ユージは剣を下ろす。

「さすがですね。最初で、しかも利き腕ではないのにここまでやれるなんて。どうです？たまにはこんな風に私と真剣でやりませんか？」

「……ぜひ、願います。」

シヨールがそういうと、他のメンバーも全員やって欲しいと言った。「みなさん利き腕じゃない方をお願いしますよ。」

さっそく一人づつユージと対戦した。ユージは慣れさせるためにわざと相手の攻撃を受けてはかわす。シヨールと同じように、みなすぐ慣れて来て本気になってユージにかかってきた。カイもなかなか頑張ってユージにかかってきた。

全員の相手が終わると、さすがにユージも汗をかき息を切らした。その後、解散となった。

ユージとカイとロブレスは、ドレアの指導までの間、いったん、休憩する事にした。居間で、レノに入れてもらったお茶を飲みながら雑談する。

「真剣での対戦は想像以上だったな。」

ロブレスが言った。カイも頷いた。

「先ほども言いましたが、すぐ慣れますよ。けど、これでシヨール近衛隊長官は俺に手の内を見せる事になった。彼は左手の腕前はそうでもない。そうだな……二等兵くらいかな？俺の方が左手はかなり上だな。」

ユージが苦笑していった。

「ええ？お前、それが目的で対戦しようって言ったのか？」

カイが驚いて言った。

「ああ。」

ユージがしらっとした顔で言った。ロブレスが大笑いした。

「お前は大物だな！」

「でも、真剣に慣れたら、シヨール近衛隊長官だけじゃない。他の近衛隊も準近衛隊も急速に腕をあげるだろうから……。気を抜くとすぐに追い抜かれそうだな。」

「お前がそんなのだったら俺はどうなるんだ？」

カイが心細くなって聞いた。

「お前は俺と毎日やることになるんだから大丈夫さ。…俺は明日から、準近衛隊以下と訓練用の剣でやる時には防護服とマスクはつけないでやることにしよう。やっぱり、あんなものつけてると油断する。…たまに真剣でも防護服なしでやらないとダメだな。それは、カイ、お前に頼むよ。」

「ええ？真剣で防護服なしにか？そんなの怖いよ！」

カイは、情けない声を出した。

「大丈夫さ。お前の左での腕なら、絶対やられないと自信がある。」
そう余裕しゃくしゃくでユージが言うので少しカイは口をすぼめる。

「カイ、すねるなよ。けど、それくらいしないと、ショー近衛隊長官に決して勝てなくなると思うんだ。俺は、さっきショー近衛隊長官が俺に手のうちを見せる事になったって言ったけど、俺はその代わり、火に油を注ぐような事をしてしまったんだ。きっとショー近衛隊長官はあつという間にあれに慣れてネーチェではかなり余裕ができてしまうだろう。」

ロプレスが険しい顔をした。

「確かにそのとおりだな…私もなるべくユージの相手をするにすることするか？」

「そうですね…では、私は左手でやりますので、ロプレスさんは利き腕の左手で相手をしていただけますか？今日は初めてだったので大丈夫でしたが、ロプレスさんならすぐ慣れてしまえます。そうすると、たとえ利き腕でない右腕でも近衛隊レベルですから、訓練じやなくなります。」

…腕が近い者同士でやると、なかなか決着がつかない。そして、どうしても相手を倒したくなってしまう。それで俺は同僚と上司の二人を殺してしまった。…あんな思いはもうごめんです。

防護服を着ていても、真剣なら思い切りさせば貫通してしまう可能性はありますからね。

…近衛隊の人も慣れてきたら、一人は利き腕で、もう一人は利き腕

ではない方で相手をさせようと思います。」

ドレアが来る時間になったので、3人は再び外へ出た。3人はソイ・モイの武術の型の練習をしながら待った。やがてドレアがやってきた。

最近では、ソイ・モイの武術を元に剣術をやるようになっていた。ゆっくりとした動きで剣を持って踊りを踊るような感じだった。そして、最後にドレアと剣術の勝負をユージとカイにしてもらった。ロブレスも対戦をしたが、ドレアは二人を見るだけで精いっぱいと言うので、ロブレスは羨ましそうに二人の勝負を見ていただけだった。

そして、休憩がてら、ドレアの今日の会議の報告をした。その後、ユージはドレアに真剣での指導をした。しばらくゆっくりやった後、ユージはショーの時のようにドレアと真剣での本格的な勝負を持ちかけた。ドレアはしばらく考え込んでいたが了解した。ドレアが左に真剣を持ち、ユージにかかってくる。ユージはその瞬間驚いた。あわてて身をかわし、すぐにストップをかけた。ユージはマスクを取った。

「どうした？ユージ。何か問題でも？」

ドレアもマスクをとって言った。ロブレスもカイも不思議に思っ
てユージを見た。

「ドレア近衛隊副長官は、右も左もまったく実力が同じだ！」

ロブレスとカイは驚いてドレアを見た。

「…そのとおりだ。おそらく、私がロブレスのような卑怯な手を使えば、ショーには剣術で圧勝するだろうな。」

ドレアはロブレスをニヤッと笑いながら見た。

「だが、私はそのような手は使いたくないのでね。このことはショーももちろん、知っている。だから、今でもあいつは私が近衛隊長官をやるべきだと考えているようだが…あいつの方がいかにも軍人らしくカリスマ性もあるだろう。あいつの方がどう考えても適任だ。」

それに、私はあまり長にはなりたくないのだよ。近衛隊副長官も、はじめは断ったくらいだ。ロブレスを推薦したんだが…まさかお前が近衛隊から離れるとは思わなかったからな。他に適任者がいないからと、シヨーに懇願されて、しかたなく近衛隊副長官を引き受けたのだ。」

3人とも驚いた。それほどの腕を持ちながら、どうして表舞台に立つことを嫌がるのが3人とも理解できなかった。

「でも、それもどうやら来年で降りれそうだ。今度こそロブレス。お前に近衛隊副長官になってもらうつもりだ。その方がユージとカイにとってもいいだろう。」

「そ、それは！」

ロブレスが慌てて言った。

「これは、シヨーには言わないでくれ。あいつに言うと、ケンカになつてしまう。あいつが私を見込んでくれるのはうれしいのだが、私はネイル様のように、若者を育てたいんだ。そういう人物も必要だろう？」

3人は、確かにそのとおりだとは思ったが、あまりにももったいないと思った。

「では、話を戻そう。ユージ。どうして、私との戦いをやめたのだ？」

「ドレア近衛隊副長官の腕前だと、私はとてもじゃないけど、手加減ができません。…事故につながります。」

「そうか。では、私はどうすればいい？」

「…私が左でやりますので、ドレア近衛隊副長官が右でしていただけますか？私がかかっていきますので、それをよけてください。」

「了解した。」

ユージは左でドレアにかかっていった。かなり本気でかかっていったが、ドレアはさらりとかわしていった。これは、ひよつとしたら、利き腕の腕前もシヨーより上かもしれないとユージは思った。なのに、近衛隊長官を自ら放棄するとは。そして、後進の指導にあ

たりたいとは。ユージはドレアに対して、また別の尊敬の念が湧いてきた。

5分ほど対戦してユージの方からやめた。

「さすがです。私はかなり本気でやりましたが、まったく歯が立ちません。これでは、ドレア近衛隊副長官の練習にならないのでは……」

「いや、いや、そんな事はない。真剣はまったく違うな。たった5分だというのに、本当に疲れる。汗びっしょりだ。」

ドレアがマスクをとって笑いながらユージに言った。本当に汗びっしょりだった。

「では、そろそろ終るか？」

ロブレスがそういうと、ドレアが言った。

「そうだな。終わるとしよう。そう言えば師匠に手紙を出していたのだが、返事が来てね。来週の土曜日にロブレスとカイの弓矢を持つてきてくれるらしい。武術の方も見てくれと、お願いしておいた。」

「そうですか！　とうとう俺の弓矢がやってくるのか……！」

カイが目を輝かせた。

「そうだな。楽しみだな。」

ロブレスも同じように目を輝かせた。

「明日、私はちよつと準近衛隊の様子を見に行こうと考えている。さきほどの話を聞いて、みんながどれほどユージに縮みあがっているのかが見たくなつたからな！」

ドレアはそう言つて大笑いした。

「驚くと思いますよ。ほんとうに、こいつは、訓練になると人が変わりますから。」

カイがそう言つて、ユージにたてついた男をユージがけり飛ばした話をした。するとロブレスもドレアも大笑いした。

「君はそんなに暴君だったのか！　ま、軍には規律が大事だからな。そんなヤツにはそれくらいせんとな！」

ドレアが笑いながら言った。

「では、そろそろ失礼するよ。また、明日。」

ドレアが手を振って近衛隊の舎監へと戻っていった。
そうしてユージたちはこの日の訓練を終えた。

そして、次の日の午前中、ユージが準近衛隊をしごきまくっていると、にこやかにドレアがやってきた。現職の近衛隊副長官が現れたので、準近衛隊のみながざわめく。

ドレアはシャーフとベームで少し話をした後、ロブレスに軽く会釈すると、ユージとカイのところへやってきた。ユージは下位のグループにそのまま訓練を続けるように怒鳴って指示をした。

「なるほど……いつものユージからは想像もつかんな。あれなら、私も縮みあがりそうだな。」

ドレアが笑って言った。

「いや、あれでもマシな方ですよ。ドレア近衛隊副隊長がいらつしやるから少し押さえてるんです。」

カイも笑った。

「ほう、そうなのか。」

ドレアがおどけながら言う。

「そ、そんな事ないです。普段通りですよ!」

その後は、ドレアが訓練はどんな感じでやっているのか聞いてきたので、二人は説明を始める。時々、ドレアがおかしなことを言うので、3人で大笑する。説明がある程度終わると、ドレアがユージに少し剣術をやらないかもちかけてきた。ユージが了解すると、ドレアはそのまま剣を構えた。ユージは少し驚いたが、同じようにそのまま訓練用の剣を構える。

二人が防護服とマスクなしに対戦を始めたので、下位のグループの準近衛隊が手をとめ驚きの目で二人を見る。カイが見たいなら訓練を中断してもよいと言うと、全員が二人の周りに群がった。

すぐにユージはドレアが本気でやっていないことに気がついていので、ユージも軽く流して対戦した。10分ほどそうやって二人で

対戦していたが、ドレアの方から剣を下ろした。二人の対戦が終わるとカイが訓練の続きをしろと指示する。みんな訓練に戻った。

すると、ドレアがこっそり二人に言った。

「これで、彼らがユージを見る目がまた変わったろう。私とこうやって仲良く話し、互角に剣術をやりあえる。口だけではなく、本当に実力があるのだと思っただろう。もう、あそこまで脅しをかけずとも彼らは君に従うはずだ。では、私はそろそろ失礼するよ。」

そう言い終わると、その場を去ろうとした。ユージはあわててドレアに大声で言った。

「ありがとうございました！」

ドレアは振り返ると笑いながら手をあげた。

ユージとカイは訓練の指導に戻った。ドレアの言うように、もうユージが怖い顔で睨む必要がなくなった。ユージとカイは、ドレアに感謝した。そして改めて、なんて素晴らしい人たちが自分たちを支えてくれているんだろう。そう二人は思った。

日曜日の昼になった。近衛隊の訓練だ。

まず最初に、ユージとショーとで見本を見せ、真剣での練習を全員にさせた。想像以上にみなすぐ慣れてスムーズに進んだ。改めてユージは近衛隊の人たちの優秀さに唸った。この調子なら、すぐにもペアを組んで本格的に訓練をしても大丈夫と判断し、明日からそうする事になった。

そして、すぐに土曜日になる。

会議が終わった後、いつものようにカイの家の前で訓練をしていると、ヨナがやってきた。

まだ、ドレアが来ていなかったたので、先にロブレスとカイの弓矢をもらい、さっそく弓矢を試してみた。二人とも目を丸くして驚いた。

「いや、今まで貸していただいていた弓矢も、素晴らしいと思って

いたが…これは本当に自分の思うように射れるな。もつとも、ユージのようにはいかんが。」

ロプレスがユージを見て笑いながらいった。

「私も、これなら苦手な弓矢が苦手でなくなりそうです。今までで一番うまく射れました。」

ヨナは目を細める。

「ロプレスさんの弓矢、特に苦労した。体格大きいし、腕力もある。それに合わせるのが大変だった。だから、ずいぶん日、かかった。遅くなって、悪かった。」

「いえいえ、こんな素晴らしい弓矢を作っていただけたのでしたら、1年や2年くらい待っても、まったく気になりませんぞ！」

カイも頷いた。そうしているうちに、ドレアがやってきた。

「お久しぶりです！師匠。」

ドレアが馬から降りると、ヨナに深々と頭を下げた。

「ドレア、元気そうでよかった。」

「ええ。師匠。元気にやってますよ！さっそく、彼らを見ていただけますか？」

するとヨナがユージ、カイ、ロプレスの3人を見る。

「では、まず、型、見せてください。」

3人がドレアに教えてもらっていた型をやりはじめる。するとすぐに、

「確か、まだ、教えて、1か月くらいと聞いた！」

ヨナが目を丸くして言った。

「そうです。」

ドレアが実に嬉しそうな顔で答える。

「信じられない！」

「でしょう？特にユージが。」

ヨナが嬉しそうに頷いた。

「私、足、なおったけど、武術、もう出来なくなった。代わりに弟子、相手する。ミヨン。」

ヨナの後ろにいた30歳くらいの男が前に出てきた。

「ミヨンです。うわさのユージ特別兵補佐官殿にこうやってお目にかかることができます、本当にうれしく思っております。」

そういうと、ミヨンがユージに手を差し伸べてきたので、ユージは握手した。

「私は兵士ではありませんので、ネーチェで指導させてもらいます。」

ユージは頷いた。

「とりあえず、組み合いしましょうか。」

ユージはネーチェの棒を構えて驚いた。まったく殺気もなにも感じなかった。にこにこしてユージを見ているだけだ。大丈夫なんだろうか……?と思いつながら、ユージはかかっていった。すると、ミヨンは踊りを見ているかのように軽やかに身をかわしていく。ドレアの美しさが最高だと思ったが、ミヨンはそれ以上だった。ユージはあつという間に炭をつけられた。ユージは信じられなかった。カイとロプレスも信じられない顔でミヨンを見る。

「…本当に兵士ではないのですか?」

ユージが思わず聞いた。

「はい。ただ、ネーチェの大会では、近衛隊の方々を押さえて優勝した事があります。」

「そうか!!聞いた名前だと思ったんだ!確かに、3年前に優勝してるよ!俺も記憶にある!」

カイが突然大声を出す。するとロプレスも同じように大声で言う。「そうだ!俺も覚えているぞ!あの時も、俺も含め近衛隊隊長も数名出ていたんだ。なのに、全員負けてしまったんだ。みんなでその男を躍起になって探したが、どうしても見つからなかったんだ。」

ドレアがクスクス笑う。

「ミヨンは優勝したのに、マスクも取らず、そして、報奨金も受け取らずにその場を去ってしまったからな。あの大会は名前しか登録されない。誰もミヨンという名前しか分からず、謎の男として、か

なり話題になったな。」

ミヨンが頭をかいた。

「あの時は、まさか優勝するとは思わなくて……まあ、さすがにベーム様やシャーフ様が出ていらしたら優勝はできなかったと思いますよ。」

「何を言う！ベーム様やシャーフ様が出てらしても、お前が勝っていたに決まってるだろう！」

ドレアは大笑いした。

「どうして、知っていたのに内緒にしていたんだ？」

ロブレスが不服そうに言った。

「ミヨンが近衛隊を差し置いて兵士でないものが優勝してしまっただけは、近衛隊のメンツにかかわるから、内緒にした方がいいと言ったんだ。私も確かにその通りだと思ったので、その時近衛隊長官だったベーム様にも、私も知らないという嘘の報告をした。だから、この話はここだけの秘密だぞ！」

ドレアが悪戯な顔で言った。

ユージは改めてミヨンを見た。ドレアと同じように、優しそうな顔をしていてまったく強そうには見えなかった。

「君たちから師匠が落馬したという話を聞いた時は、まさか武術が出来なくなってしまうほどの大怪我をされたとは思ってなくてね。本当に、師匠を助けてくださって感謝しているよ。」

ドレアは3人に向かって頭を下げた。

「……それで、ミヨンを連れて来ていただいたんだ。師匠の一番弟子だね。私の親友であり兄のような存在の人間だ。私もよく彼と対戦したよ。ネーチェでは一度も勝ったことはないな。」

ドレアが続けて言った。ユージもカイもロブレスもさらに驚いた。近衛隊副長官のドレアですら勝ったことがないだって？

「そ、そんな人が兵士じゃないなんて、もったいなすぎます！」

ユージが言った。

「そうだな。私もそう思うんだが。彼は弓矢を作っている方がいい

らしい。彼もかなりの弓矢づくりの名人なんだ。」

ドレアがそう説明した。

「師匠を助けてくださったって、本当にありがとうございました。私は10歳で師匠の弟子になり、12歳の時に両親を亡くして以来、師匠の元で、実の息子のように可愛がっていただいているのです。師匠が怪我をされたと聞いた時は、野营地まで行きたかったのですが、仕事を任されていたので放り出していくわけにもいかず……。しかも師匠が帰っていらした時は、隣村へ弓矢の納入にいつておりまして挨拶もできず……。本当にみなさん、ありがとうございました。特にユージさん。お薬を分けていただいて、本当に、ありがとうございました。」

ミヨンはユージに深々とおじぎをした。

「いえ、当然の事をしただけなんで……」

そんな風に言うユージにミヨンは爽やかに笑った。

「……実は弟子の間でも、私が武術の達人だと知らないのです。師匠と二人きりで、指導を受けていましたから。私は自分が武術の達人だと知られたくないのです。みんな、口をそろえて兵士になれと言いますから。私は師匠と共に弓矢を作っている方が幸せなのです。ですから、誰にも指導したことはありません。ドレアだけは、まあ、いろいろ事情がありまして、指導しましたが。ユージさんやカイさんは、師匠の恩人だということ、ドレアの頼みだったという事、そして、ユージさんが王の子の候補だと聞いたことで、お引き受けしてみようと思いました。」

ユージははつとしてドレアを見た。

「すまん。だが、彼はかなりの頑固ものだから、そう言わねば引き受けてもらえんと思ったのだ。でも、師匠も彼も口が固いし安心だ。私たちが彼の秘密を守っている限りな！」

ドレアが大笑いした。ヨナもミヨンも笑った。

「では、ここではなく、俺の家の前で訓練をするか？ここは、いつ何時誰がやってくるか分かん。」

ロプレスが言った。

「…そうだな。そうしてもらえたら助かるな。」
ドレアが答える。

みんなでロプレスの家の前に移動し、一人づつミヨンに型の指導を受けた。ミヨンは的確に3人の弱点を読み指導をしてくれた。3人ともあつという間にコツが分かり、スムーズに動けるようになった。そんな様子を見てヨナが唸った。

「さすが、みなさん、優秀です。でも、やはり、ユージさんだけ、違う。ユージさん、たぶん、ミヨン以上の腕になる。」

ユージは驚いてヨナを見た。

「そうですね。師匠。申し訳ないけど、ドレアより教えがいがありますね。」

それを聞くとドレアが大笑いした。

「ああ、確かに、私もそう思う。この私の指導ですらたった1か月でここまで出来るようになったのだからな！」

「ユージ。これは、本当にひよっとすると、ひよっとするかもしれない!!」

ロプレスが目輝かせて言った。

「そうですね!」

ユージも目を輝かせる。

「何がひよっとするのだ?」

ドレアが眉根を寄せる。

「今度のネーチェの大会でユージにショーを差し置いて優勝させるだけではなく、来年の近衛隊の試験でも、あいつを差し置いて1位を取らせようと企んでいるんだ!」

ロプレスがニヤつとして言った。

「なるほど…それは、確かにひよっとするかもしれんな。…そう言うことなら、ミヨン。毎週土曜日にここにきて指導してやってくれるか?」

「分かりました!私もなんだか、わくわくしてきました。時間がも

つたいない。続きを行いましょー！」

3人はその日はかなり遅くまでミヨンの指導を受けた。

23話 再会

11月になった。

何事も順調に進んでいた。

準近衛隊は、グループ分けする必要がなくなり、ユージの予想通り、近衛隊は訓練用の剣術での腕前が見違えるほど全員上がった。シヨーが一番得意満面で、今度のネーチエの大会は絶対に自分が勝つとみんなに宣言した。しかし、ユージもミヨンとの訓練で恐るべき成果をあげていた。もちろん、シヨーには内緒だった。それに、シヨーがまったく左の腕前が上がらないので、これは本当にネーチエの大会は勝てるかもしれないと、ユージは思うようになってきていた。

やがて、ジェッシーから4度目の手紙が来る。

それを見て、カイが、

「な、なんだって！！！！！」

と叫んだ。

「なんだよ。そんな大声出して。」

ユージはカイのあまりのうるささに、あからさまに不愉快な顔をする。

「だ、だって、上級コースの連中に、9月の終わりに過去問をやらせたら、全員が400点前後を取れたって言うんだぜ！だから、筆記の授業を10月から1時間だけにして、残り全部実技に当ててるってさ！今度の試験ではエルパ町から大量の1等兵を出すと宣言してきた！！！！！」

「ええ？ほんとうか！」

ユージはカイの持っていた手紙をふんどくって読んだ。

「うわー！。本当だ！！！！すごい！！ジェッシーは俺たちより優秀じゃないのか？」

「うーん。そうだな。俺達といた時はそんなに優秀だとは思わなかったが…」

「そうだな。」

スコットの手紙も入っていたので二人で一緒になって読んだ。そこには、ジェッシーが実技でも細かな分析をしてくれたおかげで、それぞれに合った指導ができて、みんなの腕が急激にあがり、騎乗での弓矢や剣術の訓練まで始めたと書いてあった。昼からの訓練義務でも、ジェッシーのおかげで隊全体の腕が恐ろしく上がり、9月の終わりの土曜日に、有志で隣町のミュールに出向き、エルパ隊対ミュール隊で紅白戦をしたらしい。そうしたら、エルパ隊の圧勝でミュール隊の特別兵とキースがショックを受けて、猛特訓をして今度は10月にミュール隊の方がエルパ町にやってきて紅白戦をしたが、それでもエルパ隊が圧勝だったらしい。だから、近いうちにエルパ隊には1等兵しかいなくなるだろうと、そして準近衛隊と近衛隊も大量に出せるだろうということが書いてあった。

それを読んでユージがつぶやいた。

「…俺、ジェッシーを秘書に欲しい。そして、ジェッシーにもこの改革の一員となってもらいたい。」

「そうだな。俺も同感だ！」

「…でも、彼女をこっちに呼んでも大丈夫か？お前。ジェッシーのこと、実はまんざらでもないんだろう？」

「な、何いってんだ！あんなにかわいい子から好きだと言われたらうれしいに決まってるだろ！それだけだ！何回も同じ事言わせるな！」

カイが真っ赤な顔をして焦りながら言った。

「ふーん。ま、それを信じといてやるよ。」

ユージはしらけたような顔でカイをみた。

「ま、それはともかく、ジェッシーの授業ごとのミニテストが、これほど効果があるなら、来年の1月からこれをすべての学校で採用

するこのにしよう。それに、この隊同士での紅白線はなかなかいいアイディアだ。さっそく、ペネ市内の隊同士でやらせてみよう。」

「そうだな。それに、本当に大量に1等兵を出たら、ジェッシーに講師栄誉賞をあげてくださいと、オヤジに頼まなくちゃ。」

「うん。」

二人は、ジェッシーに手紙を書くと、キースにも冷やかしの手紙を面白がって書いた。

しばらくすると、キースから返事が来た。エルパ隊に2度も惨敗したのは、ものすごくショックだったと書いてあった。訓練学校の方では、今期は実技だけでなく、上級コースの筆記も担当しているとのことだった。そこで、ジェッシーの方式を採用していたら、ジェッシーに負けなくらい、いい感じで来ていると書いてあった。こちらでも11月から実技を3時間に増やしたということだった。

ユージとカイは今度の試験の発表が待ち遠しかった。

やがて12月6日になり、その知らせは来た。

ユージ達が夕ごはんを食べ終わり、図書室で本を読んでいるとザイルがニコニコ顔で現れた。

「結果が届いたぞ！ジェッシー君の宣言したように、エルパ町から大量の1等兵が出た！なんとその数47名！そして、2等兵が13名。3等兵以下なし。もちろん、全員が合格で1回目の入隊試験だ。まさに前代未聞だ！そして、またエルパ町が上位を独占だ！今回は人数がいすぎるので、上位3名だけを表彰する事にした。」

ユージもカイもあまりの驚きに声にならなかった。

「彼女には講師栄誉賞ではなく、特別講師栄誉賞を贈ることにする。この結果には、スコット君の存在もかかせんな。彼に講師栄誉賞を贈るぞ。それに、キース君までものすごい結果を出して来よった。

1等兵23名、2等兵31名、3等兵5名。以下なし。全員合格で、もちろん全員が1回目の入隊試験だ。彼にも講師栄誉賞を贈る。」

ユージとカイはお互いを見た。お互い目に涙をためていた。

「お前たちの言うように、ジェッシー君は、この改革には不可欠の存在だな。彼女にはロブレスの隣の家を提供し、女中もつける準備がある。このあたりはお前たちで相談して決めるがいい。それから、彼女を秘書にしたいという話だが、補佐官に秘書というのも変である。」

ユージもカイもそう言われれば、そうだと思った。

「だから、私はユージを王の子として宣言する事にしようと思う。」
二人とも目を見張った。

「近衛隊になつてから、と考えていたが、すでにこの軍の改革は半分は成功したようなものだ。それをユージ、みごとに中心となつてやり遂げておる。したがつてもう、もよかろうと判断した。王の子であれば、秘書を持つてもまったくおかしくはないしな。」

ユージはザイルにお辞儀をした。

「特別のご配慮、ありがとうございます。私はあなたの子として、恥ずかしくないように行動する事を誓います。」

「父上、ありがとうございます。」

カイは泣きながら言った。

「ジェッシー君、スコット君、キース君達の表彰式の時に発表しようと思う。日時はいつものように第3日曜日の11時から。こうなつたら、ユージ。ネーチェの全国大会では、絶対シヨを押さえて、1位を取るんだぞ！」

ザイルは笑顔でそう言うと、図書室から出ていった。

ネーチェの全国大会が行われる3日前の木曜日になった。

ジェッシーがやってくる日だ。

あらかじめ手紙をもらっていたので、ユージとカイとロブレスはこの日は昼からの町での訓練には参加せず、近衛隊の方の訓練に参加していた。3時ごろ、門番をしていた1等兵がユージを呼びにやってくる。2人は訓練から離れ、ジェッシーを門まで迎えに行った。すると、ジェッシー以外にも二人の男がいた。スコットとネロだっ

た。

「なんだ！お前たちまで来たのか？」

ユージが言った。

「ジェッシーがペネに配属になってすぐ引越すって聞いて、私たちも先生に久しぶりにお会いしたくなつたし、ついでにネーチエの大会にも出ようと思って。で、ジェッシーのお供と引越しの荷物運びをかって出たというわけです。講師は希望すれば訓練義務を2週間ほど休めますからね…試験の結果は気になるけど、帰ってからのお楽しみにしておきます。」

スコットが言った。

「…お前ら、宿はとれたのか？」

カイが訝しげに聞いた。

「いえ。ここに来る前に何軒かあたりましたが…やはりどこもいっぱいでした。まあ、最初からそうだろうと思っていましたけどね。」

ネロが言った。

「でも…前、キースやマーフィやミンが先生のお宅でお世話になつたって聞いていたので…先生のお宅でやっかいになろうかと。ダメなら、ジェッシーの家に雑魚寝でもしようかって話してたんです。」

スコットがうれしそうに言うと、カイがため息をついた。

「お前ら、ジェッシーは女性なんだぞ？そんなところに野郎どもが泊まれるはずがないだろ…しかも、引越してきて早々にだなんて常識にもほどがある。それに、明日の昼には、キースとマーフィとミンも大会に出場するから、俺の家で面倒みることになつてんのに…だいたい、面倒見て欲しいなら先に手紙出せよな。」

すると、スコットとネロがしょんぼりして顔を見合わせた。

「…まあ、部屋は余ってるし大丈夫さ。…問題はメシだな。…それは、ちよつとオフクロに相談してみるよ。」

「すみません。…食事だけなら、自分達でなんとかします。」

スコットがすまなそうな顔をする。

「…とにかく、ついてこい。」

ユージとカイはジェッシーたちと一緒に、ひとまず近衛隊の訓練場へと向かう。到着すると、ロブレスとシヨーがユージ達を認め、すぐに訓練から抜けて馬に乗りこちらにやってきた。

「あれ？彼らも呼んでいたのか？」

シヨーがユージとカイに言った。

「いえ。呼んでませんが、休暇届け出して、勝手についてきたんです。ついでにネーチエの大会に出るから、宿の世話をしてくれって……しかもアポなしで！」

ユージが呆れたように答えた。

すると、ロブレスとシヨーが大笑いした。

「こいつら、大物だ！！王の家にアポなしで泊まるうとは……！」
とシヨーに言われ、スコットとネロは二人で同じ事を思う。

……そうだった。カイの家は王の家だったんだ。俺達、マジでバカだった……

ユージとカイがシヨーやロブレスと雑談を交わしながら、王宮の中を進むのを、ジェッシーとスコットとネロはシヨーやロブレスに緊張しながらただついて行く。

しばらくすると、ユージ達がある家の前で止まったので、3人も止まり、みんな馬から下りる。

「ここが、ジェッシーの家だよ。」

ユージがジェッシーに言った。

ジェッシーもスコットもネロも目を丸く開けた。

「は？？わ、私の家って、王宮の中なんですか？」

ジェッシーが今まで見せた事のないような、驚いた顔をする。

「あれ？話してなかったのか？」

シヨーがユージに言う。

「実は驚かせようと思って、ジェッシーにはペネで働いてもらうことになったから、なるべく早くこっちに来てくれないかと手紙に書いていただけなんです。家具やなんかもこちらで用意するから、最低限

の荷物だけもってまず、俺達に会いに来るようになって。」

シヨールが大笑いした。

「お前たち、色々たくらむな！」

すると、ジェッシーの家の中から若い女性が現れた。ユー・ジ達より少し年上のふつくらしたかわいらしい女性だった。

「ジェッシー様ですか？ 私はこのたび、女中をさせていただくことになったマルタと申します！ よろしくお願いいたします！」

「じよ、女中ですか？」

ジェッシーが慌てふためいてユー・ジとカイを見る。

「そうだよ。君は今日からここに住んでもらって、俺達と一緒に軍の改革の手伝いをしてもらう。役職は俺とカイの秘書だ。」

ジェッシーもスコットもネロも全員が口をあぐり開けて固まった。

「ジェッシー、そこに見えるのが私の家だ。用事がなくてもいつで遊びに来るといい。マルタは君がいない間は、うちの手伝いをしてもらう事になっている。」

ロブレスがジェッシーに言った。

「は、はい。ありがとうございます。」

ジェッシーはあつけにとられたままの顔で、ロブレスに敬礼をしようとする。

「ああ、ジェッシー、君は私に敬礼をする必要はないよ。ついでに言うとそのシヨール近衛隊長官にもだ。ふつうに挨拶してくれればいい。」

「は、はあ？」

ジェッシーがさらにすつとんきょうな顔になる。

「まあ、詳しい説明は後でするよ。とりあえず、お前ら、ジェッシーの荷物を運んでくれよ。」

ユー・ジはスコットとネロに言った。二人ともあわてて馬から荷物を下ろすと家の中に運んだ。荷物を運び終わると、ユー・ジがマルタに言った。

「じゃあ、マルタ。後は頼んだよ。」

「分かりました。ユージ様。」

それを聞いた3名がまた驚いた。さ、様？

だが、ユージは近衛隊と同じ待遇なんだ。近衛隊はみんな様って呼ばれるから普通じゃないか、と思い直した。

「次は、俺の家に行くぞ。俺の家はあそこだ。少し見えているだろう？」

カイが顎でしゃくって言った。

カイの家につくと、すぐに会議室へと入る。レノと女中がお茶を持ってきた。

「母上。スコットとネロです。前回の表彰式でお会いしてますよね？こいつら、急にやってきてうちで面倒みてくれて言ってるんですよ。明日から、キース達も来るし…母上たち大変になるかと思うので、王宮の部屋、何とかあります？どうせなら、みんな同じ部屋の方がいいと思うんで。」

スコットとネロは王宮の部屋と聞いて青い顔をしたが、断る権利はないと思った。

「あら？そうなの？ええ、あの部屋でいいなら、全然大丈夫よ。」
スコットとネロが立ち上がって頭を下げる。

「ほんとうに、急に押しかけて申し訳ございませんでした。」

「いえいえ、いいのよ。大勢の方が楽しいですからね。」

レノはニコニコ笑うが、スコットとネロは恐縮したままだった。

「あのさ、今日、みんなで外に食べにいかないか？別にこいつらの分くらい近衛隊舎監の食堂からちよつと食料いただいてきたら何とかなるだろうけどさ。」

とユージが提案する。

「…そうだな…そうしようか！」

カイがそういうと、スコットとネロとジェッシーが大喜びする。

「じゃ、マルタはうちで面倒見ますよ。子供達も大喜びです。」

ロブレスが言った。

「じゃ、それに決定！」

ユージは人差し指を立てる。

「じゃ、宿と食事が解決したところで、さっそく話に入ろうか。」
すると、レノ達はそつと部屋から出て行った。

ジェッシーとスコットとネロは改めてユージを見た。ユージが向かいの席のと真ん中に座っていた。そして、その右隣にカイ、ロブレス、左隣にショーが座っている。

「ジェッシーが中央に座ってもらえないかな。」

ユージがそう言ったので、ジェッシーは席を変った。

「では、ショーさんお願いできますか？」

…近衛隊長官をさんづけ???

さすがに、3名はだんだん妙だと思いはじめる。

「まず、今回の試験の結果から発表する。みんな知りたいだろう？」
ショーが結果を言う全員がお互いを見て喜びあい、さっきの疑問はどこかへ行ってしまった。キースの結果も報告すると、さらに手を叩いて喜んだ。

「一応、この結果は日曜日に発表されるものだから、それまでは内緒にしておいてくれ。」

全員がショーに頷く。そして、エルパ町がまた上位独占した話になり、上位3名が表彰されること、ジェッシー、スコット、キースにも賞が授与されるという話になると、全員が涙目になる。

「だから、スコット。君は来週の日曜日までペネにいてもらう事になるよ。」

ユージが言った。スコットが涙を拭きながら頷く。

「ジェッシー、君がいつもくれたレポート、本当に素晴らしかった。その上、俺たち以上の好成績を残せた事、本当にうれしく思う。」
ジェッシーが真っ赤な目でカイを見る。

「それで、俺達は君に秘書になつてもらい、俺達と一緒に軍の改革

に携わって欲しいと考えたんだ。だが、俺達は特別兵補佐官にしすぎないからな。秘書なんてつけれない。」

カイがそう言った後をシヨールが続ける。

「そこで、ザイル様が彼らに秘書がつけられるように、君たちの表彰の時にユージを王の子として宣言する事となった。つまり、ジエツシー。君は私とロプレスと同じく、ユージの足となった。だから、君は私たちに敬礼をする必要がなくなった。」

ジエツシーはそれを聞くと我慢できずに涙を流した。後から後から涙が出てくる。

スコットもネロもつられて泣いていた。

「もちろん、この話も発表があるまでは内密に頼む。まあ、一部の人間は知っているし、近衛隊は全員がするどいからな。なんとなく気づいておるだろうがな。」

スコットもネロも、学校の講師としてさらに頑張ってもらいたい。1月から各コース1年制となるからな！期待しているぞ！」

スコットとネロは敬礼をして返事をした。そうしてシヨールとロプレスは部屋を出ていった。

そのあと、外に食べに行くには、まだ早かったので、ネーチェでもやろうかという話になった。ユージが3人と組み合いを試みた。ユージのあまりの上達ぶりに全員が目が点になった。

「ユージ様。すごいです！！！」

と3人が口をそろえて言う。

「…お前らにそう言われると気持ちが悪いな…」

ユージは苦笑して言った。

「プライベートで会っている時は昔みたいに呼び捨てでいいよ。もう先生でもないし、俺たちは普段はただの友達だ。とにかく、ネーチェの大会では、俺は1位を狙っている。おそらくシヨールさんと一騎打ちだな。ただ、シヨールさんも必死だからな。何がなんでも、近衛隊長官として負けるわけにはいかないと意気込んでいる。まあ、

かなりきつい組み合わせになることは間違いないな。」

3人がそう話すユージを輝く目で見ていた。ユージはなんだか照れくさかった。

「しかし、お前ら、やっぱり強いな……。どうだ。明日、午前中、準近衛隊の訓練に参加してみるか？」

「する！」

3人が目をキラキラさせて即答した。

「お前らには、是非ともあいつと相手してもらいたいね。あいつは、まだまだ根性がくさってる。」

ユージが顔をしかめて言うのを見て、カイが大笑いした。

「確かにな。こいつら、あいつより断然上だから、ぎゃふんと言わせれるな。」

「あの、一体何の話です？」

ジェッシーが聞いた。すると、カイがユージに刃向って痛い目を見た男の話を事細かに話をした。ユージが「あいつ」を蹴り飛ばしたところで全員が腹をかかえて笑った。

「もう、日が暮れかけて来たな。そろそろ、終わろうか。とりあえず、お前らを部屋に案内しないと。ジェッシー、いったん家に帰って、汗でも流して着替えたら、ゆっくりしていいよ。マルタとも少し話をしてるといい。迎えにいくから。」

「分かりました。ユージ様。」

「なんだよ。ジェッシーも普通に呼んでくれていいんだよ。」

「……秘書はプライベートとそうでない時の区別がつきにくいと思いますので。」

「……そうか。わかった。」

ユージはなんとなく、ジェッシーが自分たちとの距離を置こうと考えているのではないかと思った。

……そうか。ジェッシーは俺とカイの間には入るつもりはないと、そう言ってるんだな。俺にはカイが必要だって分かってるんだ。そし

て、その上で俺たちを支えようとしてくれようとしてるんだな。
ユージは改めて、ジェッシーなんて優秀な素晴らしい人間なんだろうと思った。

ユージとカイは、ジェッシーと別れると、スコットとネロと共に宮殿へと向かう。

彼らが案内されたのは、宮殿の1階の奥にある女中用の部屋で10名ほどが一緒に寝れる部屋だった。宮殿の入口から入らず、裏口から直接、部屋に入れた。

「なんだ！客室かと思ってびびってたなら、こういう部屋か！」
ネロが安心して大声で言った。

「客室がいいなら、そっちに案内するが？」

カイがニヤリ顔でそういうと、スコットもネロも慌てて首を振る。
「じゃ、そっちの奥が風呂だから、勝手に風呂入って汗を流せ。お前らものすごく汗くさいぞ！よく、ジェッシーも我慢してたな。まともな服あるんだろうな？」

カイが鼻をつまんでいった。

「ああ。一応民族衣装も持ってきてるぜ。」
スコットが言った。

「そうか。ま、そんなにいい店には行かないけど、俺たちと一緒にいるからには、身なりは綺麗にしろてもらいたいからな。」

カイがえらそうに言うので、ユージはニヤニヤしながらやりとりを聞く。

「じゃ、用意ができしだい、家に来いよ！ほら、部屋の鍵だ。」

カイはスコットに鍵を投げた。スコットがうまく鍵を取った。

ユージとカイも風呂に入って、新しい服に着替えると、食堂でお茶を飲みながら待った。やがて、スコットたちがやってきた。そして、みんなでジェッシーの家に行く。

しばらくすると、ジェッシーが民族衣装を着てマルタと一緒に家

から出てきた。その姿を見て、全員が目をまるくした。

「あ、あの…ジェッシーなのか？」

カイが思わず言った。ジェッシーがなんと化粧をしていた。別人だった。

「ほら。ジェッシー様、みんな驚いてらっしゃいますよ！」

マルタがうれしそうにジェッシーに言った。ジェッシーは恥ずかしそうにおずおずとしていた。

「いや、驚いたな。ジェッシー。以前から、かわいいとは思ってたけど。すごく綺麗だよ。」

ユージがそう言つと、ジェッシーが顔を赤らめた。

「…マルタに無理やりされたんです。」

すると、ユージはマルタを見て笑った。

「マルタ、ありがとう。さらに自慢の秘書になったよ。」

マルタは笑顔を見せた。

「じゃ、これから行ってくる。ジェッシーが戻ってくるまで、ロブレスさんの所で待っててね。」

ユージがそう言つと、マルタは軽く頭を下げた。

そのあと、ユージとカイは3人をひきつれて、王宮からすぐのところにある店へはいった。久し振りに、気の合う仲間で食事をするのはとても楽しく、当然の事ながら話しは盛り上がった。気がついたら、店主に閉店だといわれ、慌てて王宮にみんなで戻った。

24話 改革への光

次の日の朝、ジェッシーには少し早めに来てもらって、新しい軍の改革のこと、今日の訓練の話をした。やがて、ロブレスやジェッシーやスコットとネロもやってくると、準近衛隊の訓練にみんなで行った。ベームとシャーフは、ジェッシーを見て、

「こんな美人さんが1等兵になれるほど強く、さらに優秀な頭脳の持ち主とは信じられん。ユージにカイ、お前達はラッキーだな。」
と言ったので、ジェッシーはいつものように顔を赤らめてもじもじした。

ユージとカイは、以前下位のグループで、いまだに準近衛隊としての実力が足りないと感じていた24名を集めた。

「ここにいる者たちは、私とカイが以前、エルパ町で直接指導をした1等兵だ。」

すると、ユージは例の「あいつ」に向かって言った。

「おい。お前。最近はお心を入れかえてるように見せているつもりか知らんが、俺には貴様の腹の中は丸見えだ。自分は準近衛隊だ。選ばれた人間だと勘違いしているのがブンブンとおつてきてるぞ。」

ユージが久しぶりに、怖い顔をして睨む。「あいつ」は背筋をただし、

「そんな事はございません！ユージ特別兵補佐官殿。」

と無表情に言った。

「……とりあえずお前から、この者たちと剣術の対戦をしてもらおう。ジェッシー、君が相手してくれるかい？」

ユージはジェッシーに向き直ると急に笑顔を見せた。ジェッシーはユージのあまりの変わりように吹き出しそうになったが、なんとかこらえて前に出た。その瞬間、ジェッシーは「あいつ」が自分を見て、不服そうな顔をしたのを見逃さなかった。

…なるほど。女相手では不足というわけね。確かに、心構えがなつてないわ。

お互いがマスクをかぶり構える。

「よし。始める。」

ユージの合図とともに、「あいつ」がジェッシーにかかってきた。ジェッシーは素晴らしい反応を見せ、次から次へと交わし、あつという間に「あいつ」の首元へ剣をあてた。「あいつ」は凍りついた。ジェッシーが剣を下ろした。二人ともマスクを取る。

「さすがだね。ジェッシー。」

ユージが手を叩いて、微笑む。

すると、ジェッシーが、「あいつ」に向かって、おもいつきりバカにした目をして、

「このような軟弱な男が、準近衛隊だなんて信じられせんわ!」と言った。「あいつ」はまた一瞬ジェッシーを睨みつけた。

「…お前、今、ジェッシーを睨んだだろう。」

ユージが低い声で言う。

「いえ、そんな事はありません。」

「あいつ」がまたしらじらしく、背筋を正して言った。

「嘘つくな!」

ユージが久しぶりに大声を張り上げた。全員が凍りついて背筋を正す。

「俺も見ていたぞ。」

カイも冷ややかに言った。

「私も確かに見ました。最初対戦する時にも、女相手が不服なのか、不満そうな顔を見せておりました。」

「あいつ」の顔が真っ赤になり手が震えだす。

ユージはため息をついた。

「やっぱり、お前はダメだな。…たった今からお前にしばらくの休暇を命じる。」

「な、なんだと!近衛隊と同格の身分かしらんが、一兵士が勝手に

休暇なんかさせれるはずないだろう！だいたい、なんだ。その女。

1等兵なら俺の方が階級が上だ！なのに、その女は俺に向かって暴言を吐いたぞ！それは一体どうなんだ！えこひいきにもほどがあるぞ！」

「…お前、俺がお前の上司だって忘れてないか？」

ユージが恐ろしく低い声で言った。「あいつ」ははつとした顔をした。

「…そもそも、俺はこの軍の改革をザイル様より一任されたとも伝えていたはずだ。…つまり、俺は不適格者とみなした者に休暇を取らせることも、除隊させることもできる。」

「あいつ」はしまったという顔を見せた。

「それに、服がまだ用意できていないから、彼女は1等兵の軍服を着ているが、彼女は俺とカイの秘書になった。…階級的にはお前より上の扱いになる。」

あいつは、信じられないという顔をしてジェッシーを見た。

「とりあえず、お前にはしばらく休暇を与える。…第3日曜日の1時から、入隊試験の優秀者たちの式典があるからそれに参加しろ。終了後、宮殿の入口の前で俺を待つように。その時に、除隊するかどうか判断する。」

「あいつ」は悔しそうな顔を見せると、この場から走り去って行った。

周りの準近衛隊は静まり返っていた。

「すまない。騒がせた。お前たちは、あいつみたいに根性が腐っていないと分かっている。ただ、準近衛隊として腕前がまだまだ未熟だと感じている。この中で、準近衛隊の訓練以外に訓練をしているものはいるか？」

ユージが聞いたが、誰も何も言わなかった。

「どうしてしない？私は、朝食前に基礎体力の訓練をし、ここにきてお前たちと一緒に訓練をした後、昼から一般兵とも訓練し、その後も夕方、カイやロブレス特別兵とさらに訓練を重ねているぞ。他

の近衛隊も、ここにいる一等兵も似たようなものだ。暇さえあれば、訓練している。お前たちは、今の実力に満足しているのか？」

全員が首を振った。

「とりあえず、彼らと対戦してみるといい。おそらく誰一人として勝てまい。」

ユージがそう言つて、それぞれ順番に対戦をさせた。ユージの言うとおり、誰も勝てなかった。

「お前たちは、確かにこの準近衛隊の訓練では頑張っていると思うが、それだけでは到底足りんぞ。王宮内にはたくさん訓練をする場所があるだろう。お互いで鍛えあえばいいじゃないか。すまないが、このまま来年の夏まで、私の思う基準に満たない場合は、来年の夏に行われる試験で新しい準近衛隊と交代をさせ、1等兵に戻ってもらう。」

24名の準近衛隊たちが、目を見開く。

「……だが、しばらくの間、特別にお前達を面倒みるに事にする。しっかり私の指導することをたたき込んでくれたまえ。」

全員がほっとしたような顔をした。

「では、訓練の続きを行うか。」

ユージがそういうと、全員にゼッケンを手渡した。

「今日はこれをつけてくれ。ジェッシー、頼むよ。」

ユージがジェッシーを見ると、ジェッシーは頷き、すぐに自分のカバンから紙とペンを取り出した。

みんなゼッケンを受け取ると、それぞれ分かれて、ユージやカイとスコットとネロと戦う。そのうち、訓練が弓矢の方になり、スコットとネロは、他の準近衛隊の訓練の方へと移った。そして、11時をすぎたころ、弓矢の訓練を終えた。

「ジェッシー、どう？」

ジェッシーはにこやかに、持っていた紙をユージに渡した。

「さすがだね。完璧だ。」

ユージは番号を読み上げ、各自に配った。そこには、一人一人の

剣術と弓術の弱点やその克服方法までが書かれていた。それを見るなり全員が信じられないとばかりにジェッシーを見る。

「そのレポートは大切に保管しておくように。自主訓練する時は、これを参考にしてくれたまえ。」

すると、門番の1等兵がユージのところに来てきた。ユージはその兵に手をあげて合図をした。

「では、私は用事があるので失礼する。残りの時間は終わるまで、ランニングをしておくように。」

全員がレポート大事に胸にしまうと、ユージに敬礼をし、ランニングを始めた。

「じゃ、ジェッシー、俺とカイはキース達を迎えに行つて来るから、ロブレスさんに、シヨールさんを呼びに行つてもらうように言つておいてくれるかい？その後は、マルタと一緒にレノ様のお手伝いにつてくれ。」

ジェッシーは頷くとロブレスのところへと向かつて行つた。

ユージとカイが門に行くと、キース、マーフィ、ミンの3名がいた。すぐ家に向かい、会議室に入った。そして、シヨールとロブレスがやってきたので、昨日と同じように試験の報告をしはじめる。

キースが大量に1等兵を出し、表彰されると聞いて、マーフィとミンは驚き、悔しがった。キースが一人でガッツポーズをして喜ぶだが、シヨールがエルパ町での話をし、ジェッシーが特別講師栄誉賞を受賞し、スコットもキースと表彰されると伝えると、3人が口をあぐりと開けて固まった。そこでユージたち4人は大笑いした。

「まったく、昨日といい今日といい、彼らの反応には楽しまされるな。」

ロブレスが言った。

「昨日？」

キースが訪ねた。

「実は、ジェッシーはあまりの優秀さに、俺とカイの秘書になって

もらった。昨日から王宮で住んでもらってるよ。で、スコットやネロがジェッシーについてやってきてさ。あいつらもネーチェの大会に出るって。午前中、準近衛隊の訓練に参加させてたんだ。もうそろそろ、帰ってくると思う。」

ユージがそういう説明した。すると、
「準近衛隊と一緒に訓練??？」

3人は、あからさまに、あいつらずるい、という顔をした。

「明日、お前らも参加させてやるよ!」

カイが笑いながら言った。

「けど、お二人に秘書がつかなくて…スコットの手紙から、ユージ特別兵補佐官が王の子の候補だと聞いておりましたが、ひよつとすると、もう認められたのでしょうか?」

ミンが言った。ユージは軽く頷いた。

「今度、キースやジェッシー、スコットの表彰式の時に正式に王から発表されることになった。」

すると、3人が同時に立ちあがって、ユージとカイに忠誠のお辞儀をした後、

「おめでとうございます!我々はあるべく早く近衛隊になって、お二人を支えられる存在になれるよう、一層の努力をいたします!」
とキースが言った。

ユージとカイも立ちあがって、3人にありがとうと言いながら握手した。

「でも、十分、今も支えてくれてるよ。ジェッシーやスコットたちもだけど、君たちも大量に優秀な兵士を排出してくれているから。これから、その調子で頼むよ。」

ユージがにこやかに言う。3人はまたお辞儀をした。
すると、家の外が急に騒がしくなった。

「あいつら帰ってきたな。」

カイが言った。

「では、私たちはそろそろ失礼するよ。」

ショーとロブレスが席を立った。

「こいつらも全員連れて行くんだろう？」

ロブレスが言った。

「はい。彼らが希望すればですが……」

ユージがそう言つて3人を見た。

「昼からは、平日は毎日、俺とカイとロブレスさんとで、市内の隊の訓練を指導しに回つてるんだ。お前たちも来るか？」

3人は激しく頷いた。

「では、また後で会おう。」

ロブレスは笑つてそういうとショーと部屋を出ていった。

「けど、私達なんか連れて行つて大丈夫なのですか？」

キースが聞いた。

「もう、今は公の場じゃないから、今までと同じように話してくれ。大丈夫さ。今行われている軍の改革の一任は俺に任されているから。たいていの融通は効くんのだ。まあ、さすがに近衛隊だけはちょっと無理だけど。」

「そうなのか……！」

マーフィが言った。それに、カイが得意満面で答える。

「そうだ。だから、その実績が認められてユージは王の子になれる。ま、その改革のアイディアはほとんど俺が考えたんだけどな。」

3人が目を見開きながら、二人を交互に見た。

「いや……知らない間に、お前ら……凄いことになってたんだな。いや、今までも凄いとは思つてはいたけど……そんなやつらと一緒に訓練して表彰を受けただなんて、鼻がたかいや。」

ミンが言った。

ノックする音が聞こえた。レノだった。

「お食事、こちらに運ぶわよ。食堂にはみんな入れませんからね。」
そういつて、レノとこの家の女中、ジェッシーとマルタが入つてきて、サンディとお茶を持ってきた。その後ろから、スコットとネロが入ってきた。

全員が久しぶりに会って喜んだ。まっさきに試験の話と表彰の話になって、みんなで盛り上がった。お茶と食事が全員の分が運ばれると、ジェッシーがユージとカイの間の席に座わる。

すると、マーフィが言った。

「あの…そちらの方は？ユージがカイの恋人なのか？」

キースとミンも一体誰だろうという顔だった。

「何言ってるんだ、ジェッシーだよ。」

ユージが言った。3人はまたまた口をぽかーんと開けた。

「ま、お前たちの気持ちはわかるな。俺達も昨日あまりの変身ぶりに驚いたから。」

カイが苦笑しながら言った。ジェッシーはまた恥ずかしそうにもじもじしていた。

「さ、とにかく、さっさと食べようぜ。」

カイがそういうと、全員、がつがつ、サンディを食べ始めた。

食べながらの話題はやっぱり「あいつ」の話になった。キース達にカイがもう一度説明をしてから、今日あった事を話した。

「いや、本当、ジェッシーは有能だな。何も言っていなかったのに、よくあいつを挑発してくれたよ。」

ユージがにこにこ顔で言った。

「だって、私と向き合った時に見せた顔といたら！！！！思い返しても腹が立ちますっ！！！！」

ジェッシーは悔しそうな顔をしながら、バンッと両手でテーブルを思わず叩いた。

「…いつものジェッシーだな。よかった。安心した。」

とマーフィが言うと、全員が大笑いした。

食べ終わっても、話が尽きることはなかった。やがて、ロブレスがやってきたので、ジェッシーを残して、家を後にした。

金曜日だったので、デニスの率いるオウル隊のところだった。デ

二スに全員を紹介した後、まだ時間があつたので、ユージはキースとマーフィとミンの相手をした。やはり、ユージの圧勝だった。3人はユージの上達ぶりに信じられないという顔をする。

「ま、一応、今度のネーチェの大会、シヨーさん押さえて優勝するつもりでいるからな。」

「はあ??そ、そんな実力なのか?お前!」

マーフィがすつとんきような顔をする。

「とりあえず、近衛隊の隊長達よりは俺の方が上だ。」

3人は目が点になっていた。

「しかし、スコットとネロもだけど…お前らもいつでも準近衛隊に入れるくらい強いな。今日は、ここの1等兵の相手をみんなですてやってくれるか?」

そう言うつと、ユージはデニスの所へいつて、その旨を報告した。

そうしているうちに、兵が集まり、訓練が始まる。

ユージとカイは2等兵以下を指導しながら、スコットやキースたちをときどき見ていた。何度もオウル隊の1等兵たちが向っていくが、誰ひとりとしてみんなに勝つことが出来ない。やがて、ロブレスがスコットやキースたちと総当たり戦をはじめ、オウル隊の1等兵が回りを囲んだ。すると、2等兵以下の兵士がそちらを気にしだし、訓練にならなくなる。ユージが対戦を見ていいと許可すると全員があつというまに群がって見始めた。

しばらくすると、ロブレスが

「おい!ちよつと、交代してくれ!こいつら全員相手はさすがにキツイ!」

と、ユージとカイを見て言ったので、カイが代わりを務めた。全員の対戦が終わるとみんなしーんとしていた。スコットやキース達のあまりの腕前にショックを受けたのだ。

その後も訓練を続け、最後に恒例のロブレスとユージの対戦になる。ユージは左腕で対戦しているというのに、ロブレスと互角に戦っていた。

…ユージがショーと一騎打ちだと言ったのは本当の事なんだ。本気で優勝を狙っているんだ…

スコットにネロ、キース、ミン、マーフィの全員が思った。

ロブレスがやがて勝ち、訓練が終了する。

王宮に戻って来てからは、全員に軽く真剣での練習をさせた。はじめは、みんな恐る恐るやってきたが、すぐに慣れてスムーズにやるようになった。ユージは、5人の能力に感嘆するばかりだった。

訓練が終わり、王宮に戻って汗を流した後、カイの家の会議室でパーティとなった。机の上にどっさりと鳥やウサギの焼いたのが盛りされていた。

「これは、私が仕留めたものだ！ありがたくいただけ！！」

とユージが冗談っぽく言うと、全員がふざけて、はは〜とひざまついた。大爆笑の後、パーティが始まった。この日は昨日以上に盛り上がった。

しばらくするとユージがこっそりジェッシーに聞いてきた。

「なあ、スコットとネロがエルパ町からいなくなったら困るか？」

「まったく困りません。」

「そうか…では、キースのところはどう思う？あいつがいなくなっても大丈夫か？」

「恐らく問題ないと思います。マーフィ、ミンの所も同じでしょう。確かにこの人たちを、市内の隊に放り込めば、今日1日だけでかなりの効果があつたようですから、かなり期待できるでしょう。」

「俺が何を考えているか、わかったのか？」

ユージは驚いた。ジェッシーはニコッと笑った。

「そりゃ、秘書ですから。講師も彼らにやらせれば、相乗効果は抜群ですね。ただ、その場合の問題は、キース、マーフィ、ミンが来年の試験で準近衛隊に合格した場合です。」

「そつなんだ。途中で講師を辞めるわけにはいかないし。あいつら、軽く合格しちまうだろうからな。明日の会議は、その件もとりあげ

たいんだ。帰りに資料を渡すよ。」

「分かりました。」

二人が顔を寄せ合ってこそそ話をしているのに気がついて、スコットが言った。

「ジェッシー！お前、ユージとそんなに親しくしているとカイに誤解されちまうぞ！！！」

「どういうことだ？」

キースとマーフィとミンが口を揃えていった。

「いや！もう黙っててよ！！！」

ジェッシーが真っ赤になって叫んだ。だが、スコットとネロは三人に向かって、こそこそ自分たちの表彰式の時にジェッシーがカイに告白した話をした。ジェッシーはわざと、キヤー！と何度もさけび、みんなに聞こえないようにしていた。やがて3人がジェッシーを見て、「ほー！ー！ー！そうだったのか！」とニヤニヤして言う。

「それは、秘書になれて最高にうれしいな。さぞかし、頼りになる秘書になるだろう！」

ミンが冷やかして言った。カイは焦った。

：自分に話が振られたらどうしよう。一体なんて言ったらいいんだ？それで、ユージが機嫌を損ねたりしたらどうすんだ！

「そんなの関係なく、ジェッシーは頼りになるよ。本当、お前らの100倍は頼りになるな。カイ、ちょっとジェッシーが俺達にくれたレポート持ってきてくれよ。」

カイはあわてて部屋にいつて、レポートを持ってきくと、机にボンと置いた。みんながそれを手に取って広げてみたたん、

「うわ！！何だこれ！」

と言った。

「すごいだろう！だから、秘書になって欲しいと思ったんだ。今日だって、あつという間に俺の指導していた準近衛隊を分析してレポートにまとめ、彼らにそれを渡すことが出来た。本当に、素晴らしい秘書だ。」

ユージがジェッシーを見てにこやかに笑う。ジェッシーはまた恥ずかしそうにもじもじした。すると、スコットが少し困った顔をしていた。

「そうなんだよ。俺もジェッシーのそのレポートのおかげで、生徒の力を伸ばす事が出来たんだ。だから、俺は、講師栄誉賞もらう資格ないと思うんだ。」

「そんなことないわ！スコットの指導も素晴らしかったわよ！なかなか上達出来なくて、みんなが落ち込んでいる時なんか、本当にすごかったもの。スコットが一言褒めるだけで、急にみんな元気になって訓練をしてたじゃない！私はその手助けが出来るようになってあげただけだわ！」

「へえ、そうなのか？」

ユージが聞いた。

「はい！だから、私は彼にも特別講師栄誉賞が贈られるべきだと思います。」

「スコット。自慢の秘書がそういうんだから、その資格があるに違いない。ありがたく頂戴しろ！」

ユージが微笑みながら言った。

「…ジェッシー、ありがとう。そんな風に言ってくれて、俺、すごくうれしい。」

スコットが泣きだした。みんなしばらく黙っていたが、やがてキースが話を始めた。

「しかし、どうりで、エルパ隊に勝てなかったはずだ。一般兵もこうやって分析して訓練していたんだな？」

ジェッシーが頷いた。ミンとマーフィがきよとした。

「俺の町は、エルパ町とはわりと近いだろ？それで、ある日エルパ隊の有志でこっちに来るから、こっちの隊と紅白戦をしないかってジェッシーが言ってきたんだ。だから、土曜日にわざわざみんなで集まって対戦した。そしたらボロ負けさ。みんな大ショックだったよ。猛特訓して1か月後に、今度はこちらが乗り込んでいって紅白

戦したら、またボロ負けでさ。本当にショックだったな。それに、ユージとカイがいなくなつて、どうやってるんだろうと思つて、7月が始まつてすぐに手紙を出したんだ。そうしたら、その返事に授業が終わるたびに復習のためのミニテストをしたら、ものすごく効果があつたつて書いてあつたから、うちでも試してみたんだ。そしてたら効果てきめんでさ。最後の1か月は筆記を減らして実技を3時間に出来たんだ。だから、1等兵、2等兵を大量に出すことが出来た。…俺が講師栄誉賞をもらえるのもジェッシーのおかげだな。」

キースが苦笑する。

「ええ！筆記を減らして実技を増やすだと？そんな事が可能だったのか？」

ミンが目を丸くして聞いた。

「うちでは、10月からそれをやってたわ。おまけに時間が余つて騎乗での剣術や弓術の訓練も行つていたもの。だから、うちの生徒は全員、1等兵になつてもそんなに困ることはないわ。」

すると、ミン、マーフィ、キースがジェッシーの指導方法をさらに根掘り葉ほり聞きだし、こんな困つた事があつたんだ、など相談を持ちかけ始めた。するとジェッシーは、すらすらそれに答え始めた。これには、カイも驚きだった。

「…なんだか、ジェッシーに側近の地位を奪われてしまいそうだ。」

カイが青い顔をした。

「何言つてんだ。ジェッシーが近衛隊副長官になれるくらいめっちゃくちゃ強くなれたとしても、俺はお前以外選ばないから安心しとけ！」

すると、カイが珍しく、しおらしい返事をしたので、全員が気持ち悪いと言ひ出した。カイはいつも自信満々じゃないとカイじゃないと言つた。ユージもそれに同意すると、カイが怒りだしたので、それでこそカイだとみんな納得した。カイはなんだか腑に落ちなかったが、みんなが楽しそうだったので、まあいいか、と思つた。気がつけば、もう21時前だった。キースたちは今日着いたばかりだ

からという事で、お開きになった。

次の朝、キースたち5名は大張りきりで、ずいぶん早く家にやってきた。待ちきれないというので、ユージは少し考えた後、まだ、誰もいないだろうが、先に行って勝手に準備体操なりやっておけ、と言った。

ユージたちが後から、訓練場に行くとキース達だけでなく、他の準近衛隊全員もそれぞれランニングや準備体操をしていた。キースたちは、準近衛隊と剣術の対戦までしていた。

やがて、ベームとシャーフがやってくる。

「なんだ、もう始めておるのか？」

ベームが言った。

「私は何も言っておりません。ただ、キースたちが早く行きたいというので、先に行って勝手にやってると言っただけです。でも、おそらくこうなると思いました。1等兵が自主的に訓練を始めているのに、準近衛隊の自分たちがやらない訳にはいかないでしょう？」
「なるほどな。ユージの友人たちは本当に熱心だな。あいつらこそ準近衛隊に欲しい。」

シャーフが言った。ユージも笑って頷いた。

「けど、すぐ来ますよ。それまでに、あいつらにやって欲しいと思っっている事があるんです。今日の会議で取り上げようと思いますので、またその時にお話しいたします。」

その後、いつもどおり訓練を終えた。大会の前日は、参加者のために競技場が解放されているから、キースたちは昼からは、そっちで練習すると言って、昼ごはんをすますとさっさと競技場へと行ってしまった。

そして会議が始まった。

ユージがキースたちをこちらに呼びたいという考えを言うと全員

が賛成した。しかし、問題はやはり講師になった場合の対応だった。
「それなら、その場合はまた近衛隊の訓練を午前中に戻せばよいのではないか？ 準近衛隊の訓練が昼からにすれば、講師を続けることは可能だ。」

シヨールが言った。

「そうになると、私は準近衛隊、一般兵どちらの指導を行うか選ばなければなりません。私はできれば、準近衛隊の方を選びたい。そして、なるべく早く近衛隊を脅かす存在にさせたいんです。」

ユージが言う。

「それは、困るな。」

特別兵たちが口々に言った。だが、デニスだけは違った。

「いや、キース達が1等兵のリーダーとして来てくれるなら、大丈夫だと私は考える。いや、かえって同じ1等兵の方がうまくいくかもしれない。ユージは特別な存在すぎるし、週に1度しか見れん。それより、自分たちに近い存在である彼らと毎日一緒に訓練をする方が、やる気になるのではないかと思う。実際、昨日はそうだった。

だいたい、うちの隊の連中は、ネーチエの大会に出る気などないくせに、今日は競技場が解放されているから、そこで訓練しようと言っておったぞ。今まで、土日までに訓練をしようなんて発想はなかったのにな。キース、マーフィ、ミンにの3名が試験に合格してしまっても、いくらなんでも半年あればかなりのレベルになっておるだろうし、まだスコットとネロがいるからな。なんなら、順番にでも回ってもらえばいい。」

他の4名の特別兵がそれならば、と、キース、マーフィ、ミンの3名が来年準近衛隊に合格した際は、9月から近衛隊と準近衛隊の訓練の時間帯を変える事に合意した。

「ユージ。お前が準近衛隊を近衛隊の脅かす存在にさせようってのは、競争させて、さらにお互いを高めようと考えたろ？」

「そうだ。カイ。」

「なら、たまにさ、近衛隊と準近衛隊と合同で訓練をやるってのは

どうだ？近衛隊の下位の層と、準近衛隊の上位の層はそれほど腕は変わらない。それを肌で感じたら、近衛隊の下位の層は危機を感じるし、準近衛隊の上位の層は、努力次第で近衛隊に入れるかもしれないと、お互い頑張るだろう。」

「そうだな…みなさんどう思われます？」

全員がよい考えだと一致した。

「では、準近衛隊と一般兵も時々、合同でやることにするか？」

ベームが特別兵たちを見て言った。

「そうだな。対戦せずとも、お互い交流するだけでも刺激になっていいと思う。」

パウルが言った。他の特別兵も頷いた。

「では、月に1度くらい、そうやって合同の訓練をすることにしよう。その日程はジェッシー、君が考えてくれるかい？」

「はい。ユージ様。」

すると、ベームがユージにリストを見せてきた。

「そうそう、ユージ。お前に言われていた、準近衛隊の隊長、副隊長の候補者、考えておいたぞ。5隊に分けることが出来そうだ。」

「ありがとうございます。では、こちらから1月から隊にわけて、彼らを中心として訓練をさせるようにやっていきましょう。」

そうして会議は終了した。

…久し振りに充実した会議になったな…それもこれも、みんなのおかげだ。さらに改革が進みそうだ。

ユージは大満足だった。

最近、ミヨンには15時くらいに来てもらって指導を受けていた。だいたい、そのくらいには会議が終わるからだ。ユージとカイとロブレスは、キースたちが帰ってくるまでにミヨンの指導を終わろうと、さっさとロブレスの家の前に移動した。ジェッシーも、ミヨンが兵士でないと知り、驚いてはいたが、私も参加させてといいはったので、ジェッシーも一緒に見てもらうことになった。やがて、

ドレアが近衛隊の訓練を終えてやってきた。ドレアはミヨンが来てから、自分はもう必要ないだろうと、見ただけだった。

しばらくすると、キース達が帰って来たと、マルタが教えにきたので練習を終えた。

「今日の晩、ヨナ先生もこちらへやってこられます。明日は私と一緒に試合を見る予定です。楽しみにしていますよ。」

ミヨンがそう言って、ユージに握手すると、カイ、ロブレス、ジェッシーに挨拶をして帰って行った。

その夕食の席で、ユージはキース達、全員に1月からペネ市内に配属に変わると伝えた。全員大喜びだった。家に帰るのは面倒だから、必要な物だけ送ってもらって、このままこっちにいる事に全員決めた。ペネには兵士用の寮があると伝えたら、5人みんなで住めるような家を探してみてなかったら、寮に住む事になった。

25話 ネーチェ全国大会

いよいよ、ネーチェの全国大会の日となった。

競技場に全員で、朝8時に行くと、すでに参加者でこった返していた。あまりに人がいすぎて、あつというまにユージとカイは他のみんなとはぐれてしまった。

会場には、最初から防護服とマスクをしてやってきている者が沢山いた。

ユージとカイもすぐに防護服とマスクに着替えさせられた。それから、受付で名前を書いて、ゼッケンを手渡される。ユージは389番で、カイが390番だった。

「受付する前から、マスクするとは思わなかったな。」

ユージがそう言うと、

「ほとんどが兵士だからな。上司が部下に負けたりしたら、やつぱりメンツ、まるつぶれだろう？だから、そういう配慮さ。」

とカイが答えた。

「なるほど。確かに、そうじゃないと本気でやれないな。…でもさ、ペアでトーナメント組むんだろ？参加者が奇数になったらどうするんだ？」

「トーナメントの表で一番ハジになった奴が不戦敗だ。」

「そいつ、ラッキーだな！しかし、トーナメントはどうやって組むんだい？」

「今頃、大会の委員会たちが適当にくnderさ。近衛隊の副隊長以上は、なるべく予選ではお互いあたらないようにするらしい。でも、名前で判断するから、同姓同名がいたりでたまに番狂わせがあるんだ。」

「確か、本戦には16名が進むって言ってたよな。」

「ああ、そうになると、本人がくじを引いて、トーナメントを組み直すんだ。だから、いきなりお前がショーさんとあたってしまう事も

ありえる。そうになったら面白くないよな。絶対決勝で当たって欲しい！」

「そうだな。その方が俺も燃えるな。」

そう話をしている間に時間がやってきて、参加者たちは競技場内へ集められた。競技場内にはトーナメントの表があった。今回の参加者は1324名ということだった。

しばらくするとザイルが会場内に入ってきて、大会の開催を宣言した。会場中大歓声で包まれる。予選はペアになって全員で戦った。負けたものが、会場から出て行くというルールだった。1回戦、2回戦、3回戦とユージはあつという間に勝利し、次の駒を進めた。4回戦になると、人数が減ってきて、ユージと同じようにあつという間に勝利している人間に気がつく。ゼッケン番号、1259番だった。戦いぶりを見て、それがショードとすぐに気がついた。向こうもこつちを見ていた。

「やっぱりショーさんだ。あっちも俺に気がついたな。」

7回戦が終わったところで予選が終わり、昼の休憩となった。カイも本戦に残っていた。予選に残った選手は、それぞれ個室に通された。

「まさか個室で一人で昼を食べるとは思わなかった。本当に徹底して誰か分からないようにしてるんだな。ミヨンさんが誰かバレなかったはずだ。」

ユージはレノに作ってもらったサンディを食べ終わると、体温温存のために、部屋にあった簡易ベッドに横たわって呼ばれるのをじっと待った。しばらく眠っていたらしい。部屋をノックする音で起きた。ユージは返事をする、軽く柔軟体操をしてから部屋を出た。

会場に出ると、大歓声で迎えられる。

その場で、すぐ抽選が行われた。そして、その結果が発表される。……やった！ ショーさんとは決勝までいかないとあたらない！

そして、本戦の第1回戦が始まった。

さすがに、本戦出場者となると手ごたえがあり、ユージはすぐに勝つことはできなかった。しばらく組い合いをしていると、ユージはふと思った。

…あれ？これ、ゼナさんじゃないのかな？

そう思ったとたん、ユージに余裕が生まれ、感嘆に相手に炭をつける。すると、負けた相手が、こっそり話しかけてきた。

「やっぱり、負けたな。絶対、優勝しろよ。」

ゼナの声だった。ユージは小さな声で「はい」と返事した。

周りを見た。ショー以外はまだ戦っていた。カイはずいぶん検討していたが、どうも相手はカウスらしく、だんだん不利になっていた。そして棒を折られて負けた。

…これで、準決勝ではカウスさんとショーさんがやりあうことになるな…。

本戦の第2回戦が始まった。

ユージの相手はどうも第9班の近衛隊隊長らしかった。15分ほどかかったがユージが勝利した。ショーを見ると、もう勝っていた。

準決勝になると、ひと組ずつ組み合いが行われた。まず、ショーの方からだった。

組み合いが始まると、カウスがショーに向かって何度も挑んでいく。さすがのショーも苦勞してした。組み合いは25分ほど続いてショーが勝利した。ショーの息がずいぶんあがっていた。

そして、ユージの番になる。しばらく組み合いをして、今度は第2班の隊長だということがわかった。今度は10分ほどで勝てた。ユージには、まだまだ体力が残っていた。

…本当に優勝できるかもしれない。

ユージは体の奥から力がみなぎるのを感じた。

10分休憩が与えられた。

ユージはその間じつと立って、ミヨンさんに教えてもらった呼吸法を行い、リラックスするように努めた。シヨは柔軟体操をして時間が来るのを待つ。その間、会場内は静まり返ったままだった。

10分が経過した。審判に催促され二人は向かい合う。

審判が開始の合図を出したとたん、シヨがかかってきた。ユージはうまくかわす。やはりシヨの方が有利だった。ユージは、じりじりと後退しはじめた。

…あせるな。これでいいんだ。こうやって時間をかせぐんだ。

一方、シヨは攻めても攻めてもユージが身をひるがえしてしまふので、いらいらしていた。自分の方が有利に進んでいるというのに、どうしてもケリがつけなかった。

…さすがユージ。やるな。

そうしているうちに、30分が立ち、会場内がざわつきだした。

どうみても、背の高い方が勝つと思っていたら、背の低い方がなかなかしぶとく残っている。これは、どうなるか分からなくなったと、口ぐちに言いだす。

ユージはシヨの息がかなり上がっているのにふと気がついた。

ユージは突如シヨに向かっていき、直前で棒を左に持ち変える。シヨは今まで自分の方が仕掛けてばかりだったのに、ユージがいけない攻撃してきた上に、急に左に帰られて、驚いて思わずよろけた。ユージがその隙をつく。が、シヨはしぶとく自分の棒で受け止めた。ユージは右に左に棒を変えて、どんどんシヨに攻めていった。立場が急に変わり、シヨの方が後退し始める。だが、やはりシヨはシヨだった。うまくかわしすりぬける。

やがて、組み合いが始まってから、40分が経過し、二人の攻撃の合間がだんだん長くなっていく。さすがのユージも息が上がっていた。

…もう、これ以上は無理だ…

ユージはありったけの気力を振り絞りショーに向かった。ショーがそれをユージを受け止めようとする。が、後少しというところでユージはすつと身をかわした。ショーはそれに反応する事が出来ずにバランスを崩す。ユージはすかさず左手でショーの右腕を持ち手前に無理やりひっぱった。ショーが前のめりになりユージに背中を見せる。その瞬間、ユージはすばやく棒を振り上げた。

ショーの背中に炭がついた。

審判が手をあげて組み合いが終わった。場内は静まり返ったままだった。

審判がユージにマスクを取るように促した。

ユージがマスクを取る。

その瞬間会場内が大声援と大拍手につつまれた。会場の掲示板に勝利者の名前が現れる。会場内にユージの名前が沸き上がった。

ユージはショーを見たままだった。ショーもマスクをしたまま自分を見ていた。すると、ショーはおもむろに自分のマスクをとった。ユージは驚いた。いや、会場中の全員が驚いて一瞬静まり返った。ショーはにこやかにユージに笑いかけると握手をしてきた。ユージはショーの求めるままに握手をした。ショーはユージの左手をとると、自分の手と一緒に上と掲げた。会場内が爆発的な拍手につつまれる。

「ユージ。お前、もつと笑顔を振りまかんか！」

ユージはあわてて会場内のみんなに向かって笑顔を見せた。

やがて、ザイルがヤンネと試験委員会の人たちと一緒に会場内に入ってくる。

ユージに賞状がザイルより手渡された。

「いや、本当によくやった！鼻が高いぞ！」

ザイルがにこやかにユージに言った。

そして、ヤンネがトロフィーを渡そうとした時、

「ヤンネ様。私の方からユージに渡してもよろしいでしょうか？」

とショーが言った。すると、ヤンネが頷いてショーにトロフィーを手渡す。ショーはトロフィーを受け取ると、ユージに向かった。

「いや、本当に強くなった。これほど楽しかった組み合わせは久しぶりだ。ありがとう。礼を言うぞ。そして、おめでとう。」

ショーにそう言われて、ユージは我慢できなくなり目から涙を流す。

試験ネーチェ全国大会委員会の委員長のベームから報奨金が手渡された。

「おめでとう。まさか、ショーに勝つとは、お前には脱帽だ。」

ベームもにこやかに笑っていた。

そして、ユージはウイニングランをする。

みんなの拍手や声援にこたえられるように手を大きく振る。しばらくして、その中にミヨンとヨナがいるのを見つけた。2人も笑顔で手を振っていた。ユージは軽く頭を下げた。

1周し終わると、そのまま競技場の建物の中に入った。

すると、カイが泣きながら抱きついてきた。ゼナやカウスもやってきた。キースたちもいた。参加者とスタッフしか競技場内には入れないはずなのに、ロブレスまでがいた。ショーがニコニコ顔でユージのところへやってくる。

「おい。ユージ。いつもネーチェの大会で現役の近衛隊の人間が優勝したら、近衛隊いきつけの店を貸し切って祝をするんだ。お前も近衛隊みたいなもんだ。やるぞ！」

「はい！ショーさん。」

「言っておくが、お前のおごりだからな！報奨金で払うのが慣わしだ！」

ユージはがくつとした。

「もちろん、お前たちも来るといい！」

カイやキース達に向かってシヨーが言った。全員が嬉しそうに頷いた。

「では、いったん解散して18時に王宮の前に集合だ。カウス！その手配をしておけ！」

「もう、手配済みですよ。」

カウスは自慢げに答えた。

ユージたちが着替えると、表の入口はユージを一目見ようと凄いいことになっているから、裏口から帰るように言われ、シヨーや他の近衛隊達が、入口でみんなの目を引いているうちに、ユージたちはこっそり王宮に戻った。王宮に戻ると、ユージはキース達と一旦別れ、カイとロブレスと共に近衛隊舎監にいるドレアのところへまっすぐに向かった。

「そうか！！本当にやったのか！！」

ドレアが目を輝かせて喜んだ。

「はい。本当にありがとうございました。」

「いやいや、私は何もしておらんからな。それはミヨンに言ってくれ。さ、早く帰って汗を流して着替える。どうせ例の店で祝をするんだろう？」

「はい。」

ユージは苦笑しながら言った。

家に戻ると、家の中から、ジェッシーとマユとレノが飛び出て来た。

みんな、ザイルと一緒に特別席で見っていたといった。ジェッシーは泣いていた。

「さっきもキースたちに言ったが、絶対軍服なんか着てくるなよ。あと、ジェッシーは連れて来ない方がいい。飲み屋だからな。みんな

な、飲んだくれて大騒ぎするから何をされるか分からん。」

ロブレスが大笑いして家に帰って行った。

ジェッシーが泣くのをやめてきよとした。今日の晩はみんなで近衛隊いきつけの店で祝をすることになったと話した。すると、ジェッシーは自分もいきたいと悔しがった。すると、レノが、

「女性たちだけで祝をかってにやりましょう。マルタも呼んでね。もちろん、ロブレスさんの奥様とお子さんもよ。」

というと、ジェッシーもマユも大喜びした。

「…しかし、さすがにヘトヘトだ。…ここに帰ってくる途中、何度も気が遠くなりそうになったよ…。軽く食べておかないと、18時までとてもじゃないけど、持たない…」

風呂に入りながら、ユージが力ない声で言った。

「へえ。お前でもそんな風になるのか？」

「あつたりมาแล้ว。…つづけて近衛隊隊長と組み合いたうえに、とどめにシヨーさんとあの組み合いだろう？…エネルギー不足で、さつきから手足が震えてる。」

ユージは自分の両手をカイに見せた。指が震えていた。

「…そこまできつかったのか。」

「うん。…来年の夏は、右手だけで勝ちたいな。…なんだかドレアさんの気持ちが分かったよ。ここまでしないと勝てないなんて、やつぱりシヨーさんは凄いや・・・」

風呂から上がると、ユージはレノにサンデイを作ってもらって食べる、睡魔に襲われ部屋に寝に行った。

カイはその間、ジェッシーと二人で、キースたちの配属について会議室で話し合いをすることにした。さつそく明日の昼から、みんなを隊の訓練に放り込みたかったからだ。試行錯誤しながらなんとか、それぞれの配属先を決めた。念のため、明日の午前中、各学校の校長に確認をしに行こうということになった。

そのあとは、自然に二人でユージのネーチェの試合の話で盛り

上がる。

「あ、あの？何かついてます？」

ジェッシーは手で自分の顔を触った。気がつくとき、カイが黙ってジェッシーをじっと見ていたからだった。

「……い、いや、なんでもない。そろそろ、俺は図書室で勉強するよ。ジェッシーはどうする？」

「私は、マルタを呼びに行きます。そして、一緒にレノ様のお手伝いをします。」

「そうか。じゃ、またな。」

ジェッシーは頷いた。ジェッシーを見送った後、カイは図書室に入って本を手にとり座ると本を広げた。が、まったく頭に入ってこなかった。カイはぼんやりジェッシーの事を考えていた。そして急にはっとした。

「ダメだ。ダメだ。ジェッシーを好きになっちゃダメだ！もう二人だけで話をしないようにしよう。」

と思ったが、やっぱり気がつけば、ジェッシーの事を考えていた。カイはため息をついた。そして、さらに気がつくとき、知らない間に5時半になっていた。カイはあわててユージを起こしにいった。

やがて、ロブレスがやってきた。ユージとカイは目を疑った。

「な、なんですか！その格好！」

ユージが言った。ロブレスは派手な民族衣装に着ていた上に、真っ黒のもじやもじやカツラにメガネをかけていた。

「いや、俺も結構有名なだから、こうしないと。カイはまだ顔がそれほど割れてないから問題ない。だが、ユージは何か考えろ。」

「そんな事言われても……」

ユージがそういうと、台所から出てきたレノが

「お父様の変装グッズがあるわよ！」

と目を輝かせて言った。

「ええ？父上の？」

「そうよ。お父様もその昔、モテモテでどこへ行っても、女性に追
い回されて、ペネ市内に出かける時は変装をしてらしたのよ。すぐ
もってくるわね！」

レノは急いで、納戸へいくと、奥の方からほりまみれになった
大きな袋を取り出してもってきた。その中からレノがいろいろ取り
出す。かつらやら、メガネやら、ふかぶかとかぶれる帽子など、
たくさんあった。

「おお！これいいぞ！お前は黒い髪だからこれがいい！」

カイが喜んで長髪 of 金髪のかつらを取った。

「ええ？そんなの被るのかよ！」

ユージはのけぞった。

「おお！それに、この派手な民族衣装は何だ！！！！めちゃくちゃい
いぞ！お前これに着替えろ！」

「そ、そんなの着たらよけい目立つちゃうだろ！」

「いいや。それくらいしても目立たん。ショーはもちろん、他の近
衛隊にはもっと派手な服を着てくるやつがいる。」

ロプレスが目を輝かせて言った。

「そうなんですか！！じゃ、お前これにしる。おお！これいいじ
やないか！俺、これ着る！」

そういうと、別の派手な民族衣装をカイは意気込んで取り出した。
ユージは仕方なくカイの言うとおりの民族衣装に着替え、金髪のか
つらをかぶった。二人がそれを着て出ていくと、ロプレスが大喜び
した。そして、カイにはこれをかぶれ！と言って、青いかつらをか
ぶせた。

キース達がやってきた。ユージたちを見て仰天した。だが、すぐ
に変装グッズの奪い合いになる。結局、ネロとスコットが変装グッ
ズを取り損ね、普通の格好で行くことになりすねた。その騒ぎにジ
エッシーとマユが台所から出てきた。

「な、何ですか！！！！それ！」

ジェッシーが目を丸くして言った。

「ああ、みんな変装していくんだ。そうしないと、追いかけてまわされて大変だからな。特にユージなんか。」

ロブレスがうれしそうに言った。

「はあ…そうですか…。」

ジェッシーはレノを見ると、

「…男ってバカですね。」

とボソツと言った。するとレノが大笑いして、

「そうよ。大バカ者よ。」

と言ったので、ジェッシーもマユも思わず大笑いした。

「大バカ者たち！早くいかないともう18時になるわよ！」

レノが急に真面目な顔で言う。

「はい！では、これから大バカ者同士で楽しんでまいります。妻と子供たちをよろしくお願いいたします。」

ロブレスも真面目な顔になり、レノに敬礼をすると、みんなを連れて出発した。

門に行くと、20名ほどが揃っていた。なるほど、みんな変装していた。特に一番目立ったのがショーだった。銀色の長髪かつらをかぶり、ぶあついふちの赤と黒のしまもよつのメガネをしていた。そして、その民族衣装の派手な事と思ったら、目を疑うほどだった。

「おお！お前らもなかなか格好だな！だが、俺が一番だ！」

ショーが大笑いした。

「お前ら、馬はここにおいていけ。馬でいくと目立つからな。歩いて行くぞ！」

…馬でいなくても、こんな変な集団、目だつてしょうがないじゃないか

とユージもカイもキースたちも全員が思った。

店に向かいながら、ユージがショーに聞いた。

「ショーさん、そんな派手な民族衣装、どうやって手に入れたんですか？」

「これか？特注さ！他のみんなもそうさ。近衛隊のひいきの店があるんだ。しかし、お前もなかなか派手な民族衣装じゃないか。それ、どうしたんだ？」

「父上のです。」

カイが言った。

「ほう！ザイル様、さすがだな。センスがいい！」

ユージはショーたちの感覚についていけなかった。

10分も歩くと、ある店に人が群がっているのが見えた。ユージたちの姿を見つけると、黄色い声が飛び交った。近づいて行くと、それが全員女性だということが分かった。

「な、こうやって変装してないと、取り囲まれて大変な目にあう。」

とロブレスがユージとカイに言った。

店までやってくると、女性たちが目を輝かせながら道をつくった。ショーがその中をどうと歩いて行くと、何人もの女性から手紙を渡される。

…なんだ、やっぱりバレてるじゃないか。結局、変装したいだけかとユージは思った。

店にみんなが入ると、店長が店の奥から出てきた。

「やあやあ！ショーさん！いや、今日もなかなかですな！それで、ユージさんはどの方ですか？」

「こいつだ！」

ショーがユージをぐいつと前に押し出した。

「そうですか！本当に今日はおめでとうございます！主役の席はこちらですよ！」

そう言われて、店長が店のど真ん中の席に案内し、ユージを座らせた。すると、みんながユージを取り囲むようにして座り始めた。…なんだ？これは見世物じゃないのか？

とユージは思った。

「では、シヨールさん。飲み物はどうされます?」
すると、シヨールが大声で言った。

「明日、勤務のないやつで、20歳をすぎているやつ!」

3名の手があがった。

「じゃ、ビールを3つ。後は、ジュースやお茶を適当に配ってくれ
!」

「了解です。」

しばらくして全員に飲み物が配られた。

「では、今日のネーチェの大会の優勝者のユージから乾杯の合図を
してもらおう!」

シヨールにそう言われて、戸惑いながらユージは立ち上がりジュースを手にとった。

「え、えつと…み、みなさん、乾杯!」

ユージの声に続いて、みんなが口々に乾杯と言って、ぐいつと飲む。それから、どんどん料理が運ばれてきた。カウスがユージの隣にやってきた。

「いや。ほんと、よくシヨール近衛隊長官に勝ったね。」

「カウスさんのおかげですよ。シヨールさんとカウスさんが当たると分かった時、ラッキー、と思いましたから。」

カウスが大笑いした。それを聞いてシヨールもこっちへやってきた。
「そうだ!お前はラッキーで俺に勝ったんだ!」

「でも、運も実力のうちですから。」

ユージはさりとて言った。

「こいつ!」

シヨールは大笑いした。するとロブレスとカイがやってきた。

「シヨール。来年の試験は覚悟しておけよ!ユージがまた1位になるからな!」

「ロブレス、言うておくがそれは絶対譲らんからな。確かに、弓術では負けるだろうが、馬では絶対に勝つ自信がある。後は、剣術だ

な。これからはなり振り構っておれんな！」

「ユージ、さらに両手使いを訓練するんだぞ！」

ロブレスがユージを見て意気込んでいった。

「試験ではやらないつもりです。やっぱり、なんだか卑怯ですよ。」

「ほう。ロブレスの弟子とは思えん発言だな。」

「ドレアさんの弟子でもありますからね。」

カイが言った。

「そうだ。あいつは、そういうまっとうな人間だ。うん。その方が上に立つ者としてふさわしい。」

シヨーが納得して頷いた。

「なんだと！シヨー！」

「おお！やるか！」

「やるとも！！！」

二人がにらみ合って席を立ち、店の隅にいくと短剣投げを始めた。
「な、なんだ、やるって、短剣投げか。…ケンカでも始まるのかと思ったよ…」

ユージはほっとした。

カウスが笑って言った。

「二人はすぐあれで決着をつけようとするからな。でも、絶対にロブレスさんが勝つんだ。そのうち、シヨー近衛隊長官が怒りだすよ。見ててごらん。」

ユージとカイは二人をじっとみる。するとカウスの言ったようにやがてシヨーが怒りだした。全員がそれを見て大笑いした。

「ユージ！お前こい！」

シヨーが物凄く怖い顔をしていたのでユージは慌ててシヨーのところへ行った。

「お前、俺の代わりにロブレスとやれ！」

「で、でも、私は一度もやったことないです！」

「いいからやれ！勝たんと承知せんぞ！」

ユージはやれやれと思った。ロブレスが投げ始め、5本の短剣を

全部投げ終える。500点満点中470点だった。

ロブレスがニヤつとする。シヨールが壁を右手でドンと叩いて悔しかった。

そして、ユージが投げる。吸い込まれるように全ての短剣が100点に突き刺さった。ロブレスが目を向いて怒りだした。

「やめだ！やめだ！何が初めてだ！」

「あ、あの、本当に初めてなんですけど…」

シヨールが大笑いした。

「なんだ、棄権か？」

二人がまた言い合いを始めたので、ユージはあわててその場から逃げ自分の席に戻った。

「おつかれ。」

カイが笑って言った。

「はあ。ネーチェの大会より疲れた。まだ何にも食べてないから、これから食べるのに集中するぞ！」

そういうとユージはがつがつ食べ始めた。しばらくそのまま、食べながらカイやキースたちと話をしていると、店にどやどやと数名が入ってきた。今日の勤務を終えた近衛隊だった。全員が仮装していた。

「号外が出てたぞ！！！」

一人が何枚かの号外をばらまくと、号外の奪い合いになった。その様子をユージたちがぼかーんとしていると、ロブレスとシヨールが号外を持ってやってきた。

「ほれ！今日の主役殿。みるがいい！」

ユージは目を向いた。

新聞にでかかど

「今年のネーチェ全国大会の優勝者はユージ特別兵補佐官。」

と書かれていて、似顔絵までが描かれていた。ユージは目が点になった。

「なかなか男前に描かれているじゃないか？」

カイがからかうように言うと、新聞を読みだす。

「なにに？…今回の優勝者はなんと若干１７歳のユージ特別兵補佐官だった。去年、アイカ国軍入隊試験の際に、実技試験にて満点を叩き出し、歴代４位の成績を取り首席にて合格をし表彰を受けたあのユージである。入隊後はエルパ町の訓練学校の講師も兼任し、優秀な兵士を大量に排出。その成果が認められ講師栄誉賞も受賞している。」

しかし、今回、特筆べきなのは決勝戦にて彼が戦った相手が現職の近衛隊長官のショーだったという事だ。現在行われている軍の改革はユージ特別兵補佐官を中心としておこなれているという話だ。近衛隊長官だけでなく、王の子の候補者でもないかという噂も囁かれ始めた。いずれにしても、若きヒーローの今後の活躍には今後注目すべきである。

「うわー。べた褒めじゃないか！」

ユージは聞いていて恥ずかしかった。

「けど、なんでここまで情報が漏れてるんだ？いくらなんでも詳しくすぎる！おかしいぞ。」

カイが険しい顔をして言った。するとショーが大笑いした。

「それは、俺が記者に漏らしたんだ。王の子になるなんて言っただけがな。ま、ここまでお前が活躍すれば、そう推測するのは当然だな。」

「ええ？で、でも、自らこんな風に負けを宣伝してしまつて…良かったんですか？」

ユージは驚いてショーを見た。

「あのな、ユージ。今回、なにが素晴らしいかと言ったら、お前がショーを倒して優勝した事にあるんだ。あそこで、ショーがマスクを取るか取らないかで、お前の価値がまったく違うものになったんだ。ショーもなかなか宣伝上手だな。」

今度はロプレスが大笑いした。

「あたりまえだ！ロプレス。こんな絶好のチャンスを逃すわけないだろう！」

「じゃあ、あそこでマスクを取られたのは、俺のためだったんですか？」

「そうだ！」

ショーがはつきりと言った。ユージは目に涙をためた。

「おいおい！主役が泣くな！」

ロプレスがからかって言った。ショーは号外をバンと叩いた。

「とまあ、こういう訳でお前は超有名人になった。しばらくの間、町に出たらえらい目にあう。したがって当分の間、一般兵の訓練には顔を出すな。」

「ええ！！当分の間っていつまでです？」

ユージは驚いた。

「今度の日曜日にお前の発表が行われれば、また号外が出る。だから、その次の月曜日までだな。」

「どうしてその日までなんですか？」

カイが聞いた。

「発表を知ったら、おいそれとみんな声をかけなくなるからだ！」
なるほど…とユージは思った。

「でも、昼からの一般兵の訓練はどうなるんです？」

「そいつらに任せたらいいだろう。」

ショーがキースたちを顎でしゃくった。

「は、はい！私たちがユージ特別兵補佐官の代わりを努めます！」
全員が起立して言った。

「そうだな。ジェッシーと相談して、だいたいの配属も実は決めたんだ。また後で教えるよ。」

「カイ、ユージ。お前たち、土曜日まで休暇をとって見たらどうだ。今までほとんど休みなくやってきただろう？」

ロプレスが提案した。

「そうだな。そうしろ！」

シヨールが言った。

「でも…」

ユージはなんだか申し訳ない気がした。

「そうだな。そうしよう。ユージ。後は、ロブレスさんとシヨールさん、それにジェッシーに任せてゆくりしよう。ちよつと市内出でさ、そうだ。いい温泉宿があるんだ。そこへ行こうぜ。」

「…わかった。カイがそう言うなら、そうする事にする。…でも、王宮から出る時が大変じゃないのか？」

「早朝に出発すればいい。市外に出れば、誰もお前がユージだつて分らないだろうし。宿では念のため、偽名を使えばいい。まあ、明日の早朝はさすがにきついから、火曜日に出発することにしよう。」

「うん。わかった。」

まだユージが目には涙を溜めていたので、

「そろそろお開きにするか！涙がふつとぶものをみせてやろう！」
とシヨールは嬉しそうに言う、後ろを振り返った。そして、固まった。

「な、なんだ！この人数は！！！」

知らない間にさらに人数が倍に増えていた。シヨールが店長の元に行き、青い顔して勘定をもらってきた。

「おい。ユージ。報奨金いくらだ？」

ユージはあわてて報奨金の入った袋を出して数えた。それを見てシヨールはため息をついた。

「やっぱり、かなり足りないな。…仕方がない。足りない分は俺が払う。」

シヨールはユージの報奨金を受け取ると店長のところへ持って行き、自分の財布から足りない分を出す。シヨールの顔は対照的に店長はほくほく顔だった。

店を出ると、深夜近くなっていたので、女性の取り巻きどころか、道には人っ子一人いなかった。

26話 休暇

ネーチエの全国大会の次の日、ユージもカイも朝の訓練は行わず、レノに起こされるまでずっと寝ていた。

朝食の後は、そのまま食堂でいたら話をしていた。やがて、ジエッシーとロブレスがやってきた。本当はカイとジエッシーが行く予定だったが、カイも相当疲れていたので、ロブレスに交代してもらったのだ。軽く打ち合わせをすると、ジエッシーとロブレスは市内の訓練学校の校長と話をしに町へ出ていった。

ユージとカイはそのまま話を続けたが、毎日一緒にいるのだ。そう話が続く訳はなく、やがて、ぼーっとして、あくびを何度もするだけになる。

「…図書室行って、アイカ国歴史全書の続き読もうかな。」

「…俺は、数学でも久しぶりにやるか…。」

「あれ？数学は100点満点に変わって、試験では満点に間違いないから、勉強しないって言ってなかったか？」

「うーん。そうなんだけど、やっぱり俺、数学が好きだから、試験に関係なく難しい問題やるよ。」

カイが数学をやるといので、図書室ではなく、ユージは部屋に本を持って来て寝転がりながら読んだ。カイは机に向かってひたすら数学の問題を解く。気がつくと、ユージの寝息が聞こえてきた。ふとユージを見ると、本を手にしたままうつぶせになって寝ていた。

カイはそのままぼーっとユージの寝顔を見た。

カイは、最近、勉強が手につかなくなっていた。気がつけば、ジエッシーの事を考えてしまうからだ。それで、数学を試してみたのだ。そうしたら、久しぶりに熱中して勉強が出来た。

…しばらく数学に没頭するかあ…

カイはまた数学の問題の続きを始めた。

しばらくするとノックする音が聞こえた。

「シヨールさんがいらしてるわよ。」

レノだった。ユージはその声に気がついて起きた。急いでユージとカイは、応接室に行った。

「トロフィー持って来たぞ。レノ様が部屋じゃ邪魔だろうって言うから、そこに置いた。」

ザイルの残した賞状やトロフィーと一緒に飾られていた。

「お前ら、何やってたんだ？」

「数学やってました。」

「本読んでたら眠くなって寝てました。」

シヨールが大爆笑した。

「せつかくの休みだというのに何してんだ！」

「はあ…なんだか暇で。」

ユージが言った。

「じゃあ、ユージ。お前にいいものやる。勉強のほかにやる事が出来るぞ！」

するとシヨールはユージに大きな封筒を渡した。

「なんですか？これ。」

「まあ、中身を見てみる。」

ユージは中身を全部出した。手紙だった。宛名にユージ様へと書いてあるだけで、すべて差出人の名前がなかった。不思議そうな顔をして手紙を開けてみた。

「な、なんだこれ！」

ユージが大きな声で叫んだので、カイがユージの持っていた手紙をひったくって見た。

ユージ様。ネーチェの試合、素敵でした。すっかり大好きになつてしまいました。よかったらお返事ください。

そのあとに、差出人らしい女性の名前と住所が書いてあった。

「ラブレターじゃないか！」

「そうだ。昨日、俺がもらった手紙のうちの半分はユージ、お前あてだった。がつくりきたね。」

シヨーが冗談ぽくユージをにらんだ。

「やることって、ひよっとしてこれ全部に返事を書けって言っんですか？」

「いや、別に相手だって返事なんかもらえなくても気にしないさ。書く気がないなら、書かなくていい。」

「シヨーさんは書かれてるんですか？」

「ああ！俺は全部に返事を書いてるぞ。だって、かわいそうだろう。返事しないと。」

シヨーはうれしそうな顔をした。

「そうか……だから、女性のうわさが絶えないんですね。」

カイにそう言われてシヨーが大笑いした。

「そうなのか？俺は知らないぞ！」

ユージが以外な顔をする。

「別に俺は独身なんだからいいだろう。もつとも、近衛隊長官になつてからは、女性との付き合いは控えているがね。だから、ユージの耳には入ってこなかったんだろう。でも返事は、まあ、早い話人気取りかな。」

苦笑して言った。

「ふーん。じゃ、俺はジェッシーに頼んで書いてもらおう。」

手紙を封筒に戻しながらユージが言った。

「不誠実なヤツだな！」

「人気取りのために書いてるシヨーさんに言われたくないですね。」

ユージがシヨーを冷たい目で見て言った。

「ま、そう言われれば、確かにその通りだな。」

また、シヨーが大笑いした。

すると、応接室のドアをノックする音が聞こえた。ドアが開いてレノが言った。

「キースさんたちが見えてるわよ。どうする？ いったん、帰ってもらう？」

「いや。もう用事が済みましたので。」

シヨールはそういうと立ち上がってニヤニヤしながら部屋から出て行った。

シヨールと交代でキースたちが、どやどやと入ってきた。

「いい家が見つかったんだ！ ただ、これから改装をするから住めるのは1週間ほど先になるらしい。それまで、宮殿のあの部屋にいても大丈夫か？」

キースが言った。

「そりゃ、別に構わないに決まってるさ。ただ、メシだ。さすがにこう毎日毎日多人数の料理作るのは、オフクロも女中さんたちも大変だ。引越すまでは、朝と昼だけなんとかしてもらってから、晩メシはなんとかしろ。」

全員がうなずいた。

「ああ！ トロフィーがある！」

ネロが気がついてトロフィーの所へ行った。みんなもトロフィーを見にいった。

「すごいなあ… 本当に優勝したんだなあ… 俺もいつかこれを家に飾るぞ…！！！」

ミンがそういうと、全員が俺もだといって、雄たけびを上げた。

ユージは久しぶりに、みんなの雄たけびを聞いて大爆笑した。

… はじめて、その雄たけびを聞いた時、俺は一体どう反応したらいいんだろうつて、悩んだっけ。

「やっぱり、お前らもいるものすごく楽しいな。早く近衛隊になつて王宮に住めるようになってくれよ。」

みんなは雄たけびで答えた。

するとノックがして、ジェッシーとロブレスが応接室に入ってきた。

すぐにジェッシーとロブレスが今日、校長たちと話たことを伝えて、配属先と住所を書いた紙をみんなに渡した。ユージはロブレスに準近衛隊で特別に見ているメンバーの名前を書いた紙を渡した。

「確かに、了解した。ジェッシーと二人でしごいといてやるから安心しろ。」

ユージは頷いた。

「そうそう。ジェッシー。ちょっと頼まれてくれないか。」

「はい。何でしょうか。」

ユージはジェッシーにシヨーに渡された封筒を渡した。

「この中に手紙が入っているから、悪いが俺の代わりに返事を書いて出しておいてくれないか？」

「はい。わかりました。でも、なんと返事すればよいのでしょうか？」

ユージはバツの悪そうな顔をした後、机に置いてあった紙とペンを取り、返事の内容を書くジェッシーに渡した。それを見てジェッシーが目をパチクリと開けた。

「……ごめん。本当は自分で書く方がいいって分かっているんだけど。」
するとジェッシーはくすくす笑いながら、

「了解しました。」

と言った。

「なんだよー。」

とキースが不満そうな顔をした。

「ラブレターさ。ほら、昨日シヨーさんがいっぱい手紙もらってただろう？あの半分はユージ宛てだったんだってさ。」

カイがそう言うのと、みんなが、目を丸くした後、ニヤッと笑ってユージをからかい始めた。

「どんなことが書いてあったんだ？」

「どんなことって……一通しか見てないから何ともいえない。」

「1通だけって、どうしてだ？」

キースが驚いて言う。

「理由はない。」

「誰かと会ってみないのか？」

ネロが言った。

「なんで会うんだ？」

「俺だったら、字の綺麗な女性だったら会ってみたいな。」

スコットが言った。

「俺は興味ない。」

「見栄はるなよ！本当は誰か会ってみたいだろ？」

ミンが言った。ユージの顔つきが変わってきた。カイはこれはやばい！と焦り始めた。すると、

「お前ら、今のユージに女性と付き合ってる暇あるか！少しは考える！」

とロプレスが少し怒鳴りぎみに言った。みんなシユンとした。

「さ、もう昼だ。とつとと飯食って、隊をしごきに行くぞ！」

ロプレスにそう言われて、みんなすごすごと会議室へ移動した。

「ロプレスさん、すみません。」

ユージが言った。

「礼はいらんど。では、私も失礼するよ。」

ロプレスも出ていき応接室には、カイとジェシーとユージだけになった。

「…カイ。俺ちよつとリイに乗ってくる。昼メシ後で食べる。」

「あ、ああ。わかった。」

ユージが出ていった。ふと気がつくと、自分以外にはジェッシーがいるだけだった。カイは焦った。

ジェッシーとは二人きりになるまいと誓ったのに、二人きりになつてしまったじゃないか！！

「あの…ユージ様、どうかされたんでしょうか？」

ジェッシーがカイに心配そうな顔で聞いていた。そのジェッシー

の顔にカイはどきつとした。

「…そうだな。ジェッシーには少し話しておくか。ちょっと、そこ、座れよ。」

ジェッシーが座ったので、カイも座った。

「…あいつ、何でこの国にやってきたかって言うと、国外追放になったからんだ。」

ジェッシーは目を大きく開けた。

「何故？」

「身分の高い女性と恋に落ちたからだってさ。」

「そんな事でリート国は国外追放にするのですか？」

カイは頷いた。

「ネイル様がおっしゃるには、他の国も似たようなモンらしい。きっちり身分が決まっててさ、違う身分の人間は結婚なんかも出来ないらしい。それで、あいつは、もう二度と祖国の地を踏むことはできない。戻れば処刑されるってさ。…あいつは、まだその人のことを思っているんだ。」

ジェッシーの目から涙がこぼれた。

「俺は、たまに、その人がうらやましくなるよ。あんないい男にそこまで惚れられてさ。一体、どんな人なんだろって思うね。」

ジェッシーは涙をこぼしながら少し笑った。

「ユージの馬、実はその女性の名前からとってるんだ。あいつにとつて、今は、リイがその人の代わりなんだ。リート国のから一緒にやってきたからな。もし、これからあいつが、あの馬に話しかけて一人でいる所を見たら、見なかったことにしてやってくれるか？」

ジェッシーは頷いた。それで、ユージはリイのりにいったんだと思った。ジェッシーはユージが実はもうい面を持っているんだと感じた。

…だから、カイがつきつきりでユージについてるんだな…やっぱり、私に入る隙間なんかないんだな。こうして近くにいれるだけで幸せだと思わなくちゃな。

「じゃ、そろそろ、ジェツシーもメシ食いに家に戻れよ。」

ジェツシーは笑って頷く。カイはその笑顔に胸に痛みを感じた。

ジェツシーは席をたってカイに頭を下げると応接室を出て行った。カイはしばらくドアを見たまま棒立ちしていた。

…俺、やっぱりジェツシーのこと、惚れちまったな。

カイは一人で苦笑した。そして、ジェツシーのことを改めて考えた。

ジェツシーがスコットたちにかかわれた時の態度からすると、まだ自分の事を好きでいてくれるんだろうと思った。好きな相手を目の前にして、冷静でいるのがどれだけ苦しい事か、今のカイには痛いほど分かった。なのに、ジェツシーはそれをまったく顔に出さず、ひたすら俺やユージを支えようとしてくれている。なんて素晴らしい人なんだろう。改めてそう思った。

…ユージが俺を必要としなくなるまで、ずっと俺の事を好きでいてもらえるように、俺は努力しなくちゃな…

カイが会議室へ行くと、キースたちは一斉にカイを見た。みんな申し訳なさそうな顔をした。

「あの…ユージは？」

キースが聞いた。

「あいつは、馬にのりに行った。」

「俺、ちよつと悪ふざけしすぎた。反省してる。」

ミンが深刻な顔して言った。

「お前ら、今日から晚メシ外に食いに行け。そして、今日はもうこち来るな。朝はお前らが来るまでには出発しておく。次にユージに会ったら、何もなかったふりをしろ。普段通り話せ。わかったか。あいつもそれを望んでいるはずだ。」

みんな黙って頷いた。

「後、あいつに女の話は二度とするな。…もうそろそろ時間だ。行け。」

そう言われてみんな席を立つと、皿とお茶のカップを持って台所へ持っていくと、そのまま黙って家を出て行った。

ユージは2時前に戻ってきた。まだ暗い顔をしていた。一緒にサンドイを食べたが一言も話さなかった。

「……なあ、ユージ。どうせ、家にいても暇だし、もう出発するか？」
カイが切りだした。

「でも、明るいうちに町に出たら面倒な事になるんだろ？」

「一等兵の服でも着てメガネかけて深々と軍の帽子でもかぶつてれば、分かんないんじゃないかな。郊外の森で普通の服に着替えたらいいと思う。ま、ちよつと寒いだろうけどな。」

すると急にユージの顔が明るくなった。

「そうだな！カイの言うように、今から出発する！」

「じゃ、すぐ支度しよう。」

カイはレノに報告しにいった。そして、宿と偽名を紙に書いてレノに渡した。それを見て、レノが笑った。カイの偽名がロブレス、ユージの偽名がショーだったからだ。

二人は荷造りが終わると、以前着ていた1等兵の服に着替え、ザイルの変装グッズからめがねを取り出しかけた。そして帽子を深々とかぶった。お互いを見て、あまりの不恰好さにふいた。レノも二人を見て大笑いした。それなら、王宮の誰も二人に気づかないだろうと言った。

二人はさっそく出発した。王宮内で警備にあたっている近衛隊に何人もすれ違った。二人は敬礼を丁寧にしたが、誰も気づかないで頭を軽く下げて通り過ぎるだけだった。二人はおかしくてしょうがなかった。やがて、ショーを発見した。木陰で女性と一緒にいた。二人は何がつきあいを控えているだ！よし、おどかしてやれ！と思って、後ろからこっそり近づいて馬から降りると、突然、

「ショー近衛隊長官殿！お探しいたしました！お話があるのですが

！
」

と声をかけた。女性と今にもキスをかわそうとしていたシヨールがびっくりしてこちらを向いた。女性が恥ずかしそうに逃げていった。「お前ら！何だ！俺がこうやって女性といたら見ないふりをしろと言つてあるだろう！」

シヨールが怒鳴った。

「へえ…そんなんですか。知りませんでした。」

カイがバカにした口調で言った。

「何が女性とお付き合いを控えているですかね。聞いてあきれます。」

」

ユージが続いて言った。

シヨールの目がまんまるになった。

「お、お前ら、ユージにカイか？」

二人は帽子を脱いでメガネを取った。

「正解です！」

カイが勝ち誇った顔をした。

「…もう、まったく驚かすなよ。」

シヨールは急にがつくり肩を落とした。

「でもねえ…さっきあんな事、言つてたのにねえ…」

ユージがカイに言った。カイも、そうそうと大真面目な顔をして言った。

「言つておくが、彼女は本命だ！結婚を真剣に考えている！」

シヨールが真面目な顔で言った。

「そ、そうだったんですか！それはどうもすみませんでした。」

ユージとカイはあわてて、頭を下げた。すると急にシヨールが笑いだした。

「嘘だ。まだ私は誰とも結婚など考えておらん。」

ユージとカイはやられた！と思った。

「ま、いい女性がいたら結婚したいとは思つてるのだから。なかなか、そんな女性にめぐりあえんのだ。」

「へえ…そうやって、コロコロ女性を変える理由にしようってんですか。」

カイがぼそつと言った。

「ま、そうかもしれないな。」

シヨーが苦笑した。

「ジェツシーとマルタに気をつけろと言っておかない！」

ユージが言った。カイは思わず、ジェツシーは俺を好きなんだから大丈夫だろうと言いかけた。

「大丈夫だ！俺は大人の女性にしか興味ないからな。ま、彼女たちがもっと成長したらわからんがな。」

シヨーが大笑いした。

「絶対、近づかせませんから！！！」

ユージが怖い顔をして睨んだ。

「わかったよ。絶対、彼女たちには手を出さない。」

シヨーはニヤニヤしながら返事をした。すると、ユージが急に黙り込んだ。ほんの一瞬、沈黙が訪れ緊迫感が漂う。

「…本当か？」

恐ろしく低い声だった。シヨーは急に真面目な顔になり、背筋をただした。

「はい。」

「ならいい。これからは、遊びならば女性と王宮では会っな。兵の士気にも関わる。」

「分かりました。」

カイは驚いた。この瞬間、完全にユージがシヨーの上司になっていたからだった。

ユージがメガネと帽子をかぶった。

「俺達、ここにいる暇なので、もう出発することにしました。」

ユージはもう普段通りに戻っていた。カイもメガネと帽子をかぶった。

「それで、その格好か？なるほどな。」

「レノ様に宿の名前と住所を書いたメモを渡してます。…俺の方の偽名はキースに変更になったとレノ様に伝えてもらえますか？」

シヨールが不思議そうな顔をしたが頷いた。

「では、行つてきます。」

ユージが軽く頭を下げると、シヨールは少し膝を落として右腕を自分の胸にあて、頭を下げた。忠誠のお辞儀だった。カイは驚きながら自分も軽く頭を下げた。ユージがリイに乗って駆けだしたので、カイもそれに続く。

…そうか。ロブレスさんが階級は自分が上だが、実際はユージの方が位が上だとはこういう事だったんだ。シヨールさんが、最後にああやって忠誠のお辞儀をしたのは、本当に反省していることをユージに示すためだったんだ。

ユージはいつから、周りの人間が自分の部下だと見るようになったんだろう。そばで見えていても、まったくそれに気がつかなかった。

シヨールはすぐにカイの家に行つて、レノにユージに言われたことを伝えた。

「あら？ そうなの？ どうして変えたのかしらね？」

「誰の名前にしていたんですか？」

「シヨールさん、あなたよ。」

それを聞いてシヨールはやられた！ と思った。

シヨールはレノにジェッシーに必ずお伝えくださいと言うと、近衛隊舎監にある自分の部屋に一旦戻った。お湯を沸かし、お茶を入ると椅子に座り、それを飲んだ。

そして、ユージの怒った目を思い出す。

…あの時、足が震えるほどの恐怖を感じたな。

ユージがああ若さであの地位につき、王の子になれるのは、カイやロブレスの力はもちろんだが、自分の力によるものも大きいと自負していた。が、それが大きな勘違いだったことに気がついた。

…最初からあいつは王だったんだ。きっと俺が協力しなくても、あ

いつはのし上がってきたに違いない。：俺があいつに見放されんようにせんといかん。

ショーはお茶を飲み終わると席を立って、近衛隊の訓練に参加しに行った。今日は1日休みを取っていたが、そんな気分ではなかったからだった。

27話 休暇2

ユージとカイは宿屋に16時半につく。

「すみません。さきほど早馬で連絡をしたロブレスといいますが。」
宿屋の主人がニコニコして出てきた。

「希望していた部屋は空いておりましたか？」

「はい！ご用意させていただいてます！」

主人に連れられ、一旦建物から出て奥へと進むと、すぐに木々の間からもう一つ小さな家が見えた。その中には、広い部屋が一つと、寝室に大きなベッドが二つあった。とにかく、何から何までかなり豪華なつくりだった。ユージはあまりの豪華な部屋に目をまるくした。

部屋の窓から外に温泉が見えた。

「なんだ！ひよつとして専用の露天風呂か？」

「そうさ！」

「こんな所、高いんじゃないのか？」

「オヤジが金くれたから心配するな！」

「そ、そうなのか。帰ってお礼いわないと。」

カイが、服を脱ぎだした。

「いきなり入るのか？」

「ああ！何回入っても同じだしな！なら、たくさん入った方が得だ！」

ユージはそれを聞いて爆笑した。

「そうだな。」

ユージも服を脱ぎ、二人で外に出て、温泉に入った。

「あゝ、気持ちいいな！」

ユージが言った。

「さつき、なんであんなに笑ったんだ？」

「いや、たくさん入った方が得だなんて、王子様のセリフじゃない

な、と思つて。」

「悪かつたな！はつきり言っておくが、王子様はお前の方なんだからな！」

ユージはカイの顔をまじまじと見た。

「そうか、そうなるんだな。」

カイはずっこけた。

…さつき、シヨーさんをあれだけ威圧しておいて、このアンバラスさは一体なんだ？

今度はカイがまじまじとユージの顔をみる。ユージはとぼけた顔をしていた。

…ま、こういう所が、こいつの憎めない所かあ…

「今回のこのプレゼントは、もちろん昨日お前が大会で優勝したからだろうけど、それ以外にも理由がおそらくある。」

「何だ？」

「他に王の子がいないし、オヤジはお前以外に王の子にするつもりはない。つまり、お前はこの国の王位継承第1位の王子になるんだ。少しづつ、こういう贅沢な事にも慣れていかないと、他国の王や王子を前に怖気ついちまうだろ？前に、チェ・チェにネイル様が招待してくれたのも、そういう理由があつたんだと俺は思っている。」

そうだったのかと思つた。確かに、慣れておかないと、特に俺は怖気つくと思つた。

「けど、ここにしたのはさ、国民がほとんど来ないからなんだ。だいたい、他国からやつてくる旅人だ。金持ちの商人とか、貴族とかがお忍びでやつてくるらしい。その昔、母上と父上は二人でここに忍びで時々来ていたんだつてさ。」

「へえ…どうだったのか。」

二人が風呂からあがり、宿屋で用意されたアイカ国の民族衣装に着替えると、もう17時半だった。お茶を飲んで少しゆっくりしてから、本館へ移動した。夕食も個室へ通された。チェ・チェと同じまではいかないが、かなり豪華な食事が出た。

食後はすぐに部屋に戻り、カードゲームを二人でやりはじめたが、まだ、疲れが溜まっていたらしくすぐに眠気が襲ってきたので寝ることにした。

朝ごはんは、他の宿泊客と一緒にだった。ユージたちの隣の席は、やさしそうな年配の夫婦だった。

「おはようございます。」

二人は挨拶をした。あちらも挨拶をした。

「私たちは、カルデ国からやってまいりました。」

夫の方が言った。

「そうですか。私はこの国の者ですが、彼はリート国の者なのです。」

カイがそう夫婦に説明した。

「そうですか。それであなたが友達をご招待されたのですか？ 離れにお泊りのようでしたから。」

妻の方がいった。

「はい！大奮発しました！」

カイが胸に手を当てて自慢げにそう言うと、夫婦はくすくす笑った。

「これから、あなたたち、予定はおありかしら？」

妻が言った。二人はそろって首を振った。

「私たちは、午前中、この近くの紙工場へ見学に行くの。よろしかったらご一緒にしませんか？」

それを聞くやいなやユージが、

「俺、行きたい！」

と言った。

「そうか。じゃ、遠慮なく一緒にさせていただきます。」

「9時に馬車を呼んでおります。4人のりですから、一緒に乗っていきましよう。玄関で待ち合わせをしましょう。」

夫が言った。二人とも笑ってありがとうございます、と言った。

朝食を食べ終わり、一旦部屋に戻り用意をして玄関に向かう。夫婦はもう玄関にいた。やがて馬車が来てみんなで乗り込んだ。あたりは畑みたいだった。

「紙の材料にする草の畑さ。今は冬だから、何も生えてないけど、春になると沢山の新芽が出て来てさ。夏にはこらいたい緑の絨毯のようになるんだ。夏の終わりにそれを刈り取って干して保存するんだ。このバーサル―山脈のふもとは湧水や川が多いから、草を育てるのにも紙を作るのにも適してるそうさ。」

カイがそうユージに説明すると、夫婦も、カイの話を聞いてそうなのかとうなずいていた。

…そういえば、ナベル野営地へ行った時、途中、あたり一帯全部草が生えていたな。移動に集中しててまったく気にもとめなかったけど、この草だったのかな？

とユージは思った。

やがて40分ほどが経過して、すると馬車が止まった。

そこには一つの大きな屋敷があった。その屋敷にみんなで入ると一人の女性が出てきた。2人ほど増えたと夫が言うと、その女性にこやかに了解しましたとお辞儀をした。そして、みんなを案内し始める。敷地内には川が流れていた。近くの川の水を引いていると女性が説明した。屋敷は紙の工程順に部屋が分かれていた。女性がそれぞれどんな作業をしているのか丁寧に説明する。ユージはそれを見て、紙が何故あれほど高価な品物なのか分かった。沢山の工程と大変な作業を経てようやく作られていたからだ。しかも、この時期の水は物凄く冷たいからだろう、みんな手を赤くして作業をしていた。

最後に、休憩室に案内され、お茶とお菓子を出されて、みんな食べた。その部屋には、土産用の紙が大量に置いてあった。他で買うよりかなり安かった。

…そうか、こうやって工場見学を無料でしているのは、これを買ってくれて事なんだな。

そうユージは思った。夫婦はお茶とお菓子を食べると、席を立ち紙を見にいった。

「紙、ヨナさんやミヨンさんにあげたら喜ぶかな？」

「そりゃ、もちろん！明日、馬をぶっ飛ばして、これ持って礼に行くか？」

ユージは頷いた。ユージが大量の紙を手につと、会計場へと行く。さきほど案内してくれた女性がそれを油紙で包み大きな麻の袋にいれてくれた。

「おいくらですか？」

ユージが財布を取り出してお金を払おうとすると、女性がニコツと笑ってユージに顔を近づけて声をひそめていった。

「あなた、ネーチェの大会で優勝されたユージさんでしょう？私、特等席が抽選で当たってそこで見てたんです。まさか、その英雄をこうやって案内出来るなんて夢にも思いませんでした。代金はいりません。あなたがここにやってきたって宣伝させてもらいますから。」

ユージは驚いて目を見開いた。女性がニコニコして、机の上の紙を指さした。ペネ市内で配られていた号外だった。そして、それにサインをしてくれというそぶりを手で見せたので、ユージは少しためらったが、ペンをとり自分の似顔絵の下にサインをした。

「ありがとうございます！」

すると部屋の入口の外でもう一人の女性がこちらの様子を伺っているのが見えた。案内をしてくれた女性がその女性に向かって、笑って頷くと、目を輝かせて引っ込んでいった。

カイは席に座って、先に紙を買い会計を済ませていた夫婦と話をしていた。ユージは席に戻る。

「何を話していたんだ？」

「いや…ええと。…まけてもらってたんだ。」

苦し紛れに、そういうと夫婦が笑った。

「あなたみたいな素敵な若者に頼まれたら、どんな女性もまけてく

れそうね。」

見学を終え帰ろうとすると、中にいた人たちがぞろぞろ出て来た。そして、にこやかにユージたちを見送ってくれた。

「最後、あんなに大勢で見送ってくれるとは思いませんでしたね。」

夫が言った。

「そうですね。気持ちのいい所でしたね。帰ったらみんなに教えてあげましょう。」

妻が言った。

もうすぐ昼だったので、夫がこのあたりに、おいしいものが食べれそうな店はあるかと、馬車を操っている男に聞いた。すぐ近くに名物のサンディを出す店があると男は言った。夫婦がきょんとしていたので、カイはサンディの説明をすると、二人揃って、それは食べてみたいという事になり、その店へ行くことになった。

10分ほどで村のはずれにある店に着いた。部屋の中には大きな暖炉があつて、とても暖かだった。他にはまだ誰も客はいなかった。暖炉のそばの席に座ると、一番人気のあるものを注文した。

やがて、かなりな大きさのサンディが出てきた。それを前に、夫婦は目をパチクリさせた。

「まあ、想像していたより大きいわ。食べれるかしら？」

「そうだな……」

夫婦は目で机の上の何かを探していたので、

「そのまま手で食べるんですよ。その手拭で手を拭いてください。」とカイが教える。

夫婦はなるほど、と頷いて手を手拭きで吹くとサンディを手にとり、かぶりついた。

「なんと、これはうまい！」

夫が言った。

「ほんと、おいしいわ！」

ユージもカイも食べる。鳥のサンディだった。ソースが絶品で最

高においしかった。

「これの作り方、教えてもらえないかしらね。」
妻が言った。

「そりゃ、無理だろう。まあ、だいたいの作り方はわかるから、家に帰ったらいろいろ試してみよう。」

ユージとカイは夫婦のそんな話をなんとなく聞いていた。

「実は、私たちはカルデ国でレストランを経営してましてね。あまりにうまいので、これを店のメニューに載せれたらと思った次第でして。」

「そうですか…レシピは店の命ですからね。絶対教えてくれないでしょうね。」

カイがそう答えた

ユージはさきほどから店員の態度がおかしいのに気がついていて、みんなユージを見ていた。店の奥の厨房からも時々、ちらちら人がこちらを見ていた。

ユージはすべてサンディをたいらげると

「ちょっと失礼します。」

そう言って立ち上がり、店の奥の方に歩いて行った。店員全員が驚いて引き下がった。店の奥の机に例の号外がおいてあった。

「店長さんはどの方ですか？」

すると、奥から若い女性が出てきた。

「わ、私です。」

ユージはわざと号外の方とちらつとみた。店長もそれを見た。

「今日は内緒でここへやってきているので、誰にも言わないでいただけますか？」

店長は黙ってうなずいた。

「私と一緒にいるご夫婦は、実はカルデ国でレストランを経営しているそうなのです。さきほどいただいたサンディの作り方をぜひ教えていただきたいとおっしゃってます。店のメニューに追加したいそうなのですが…無理ですよね？」

ユージは残念そうな顔をわざとした。店長は激しく首を振った。
「いえ、そんな事ありません！ぜひ、教えさせていただきます！」
「本当ですか？」

ユージは努めてうれしそうな顔を見せた。

「もう店閉めて！」

店長は他の店員に言った。あわてて、店員が店の外に行って閉店の看板を立てにいった。

「そこまでしていただけるなんて！本当にありがとうございます。」
すると、店長がまたチラツと号外を見たので、ユージは近くにあったペンをとり号外にサインをした。店長の目が輝いた。他の店員も明らかに嬉しそうな顔をしていた。

「では、さっそくお教えいたしますから、ご夫婦を厨房にご案内してください！」

ユージは笑顔を店長に振りまいたあと、席に戻り夫婦に作り方を教えてもらえるそうですという、夫婦はものすごく喜び厨房の方へといった。

「なんだ？一体どうやったんだ？」

カイが怪訝そうに聞いた。

「みんな俺の事知ってた。店の店員が若い女性ばかりだったし、笑顔を振りまいてお願いしてみたら、即OKだった。それに、さっきの紙の工場で案内してくれたあの女の人、特別席で見てたんだって。会計のところ例の号外があつてさ。サインしてくれて言うからサインしたよ。土産の紙は、実はタダでもらった。…この店でもサインしてあげたら、店長さんえらく喜んでたな。」

カイは啞然とした。

「…お前もなかなかやるな。」

「シヨーさんのおかげかな？」

二人とも大爆笑した。ユージも作っている所を見たかったので、カイと厨房へいった。

夫婦が一通り教わると、店長は、最後にはソースのレシピを紙に

書いて夫婦に渡す。夫婦は大感激だった。夫婦の作ったサンディは丁寧に紙につつまれ二人に渡された。今は、冬だから2、3日は持つという、明日の昼にでもいただくと夫が言った。席に戻ると、夫婦は自分たちの店のチラシを数枚店長に渡した。店長も自分の店のチラシを渡した。夫婦はあちらにいたら、自分たちの店の自慢の料理のレシピを手紙で送ると言った。今度は店長が大喜びした。そして、お互いにお互いの店を宣伝し合うことを約束する。

やがてユージたちは店を後にした。店の店員が全員出て来て手を振って見送ってくれた。

もう2時半だったので宿屋に帰ることになった。

「ふふふ。私たち、どうやらとってもラッキーな若者と出会ったようね。」

「そうだな。」

夫婦で笑ってユージを見た。

「あなたはリート国からやってこられたっておっしゃってたけど、この国の方なのね。それでとっても有名な方なのね。だから、さっきの店の店長がソースのレシピまで教えてくれたのね。私たちの食べたサンディまでタダだったし。それで、紙工場でも最後にみなさんが見送ってくださったね。」

ユージは素直に笑って頷いた。妻はユージにも店のチラシを渡した。

「もし、カルデ国にいらっしゃる事があつたらぜひ、立ち寄ってくださいな。」

「わかりました。」

宿屋についた。夫婦はユージ達に丁寧に辞儀をすると部屋へ行った。ユージたちも部屋へ戻り温泉につかった。

次の日、夫婦が出発するの見送った後、二人は馬を飛ばしてナベル町へ向かった。昼前にヨナの家につく。

「すみません！」

カイが大声をあげると、ミヨンが出てきた。

「あれ？どうされたんですか？」

「休暇をもらってペネ郊外の宿屋に泊ってるんですが、どうしてもお礼を直接したくてやってきました。」

カイが言った。

「そうですか！遠慮なく入ってください。」

ミヨンが嬉しそうな顔で言う。二人は案内されて家の中に入った。ヨナが大喜び迎えてくれた。弟子たちは、まだ誰もユージが大会で優勝したとは知らないようだった。ヨナとミヨンは、二人を応接室に案内し、昼をこちそうしてくれた。ユージが土産を渡すとミヨンがこんなに沢山の紙、高かったでしょうということで、タダでもらえたいきさつを話した。ヨナもミヨンも大笑いだった。昼食を食べ終わると、二人は弓矢を作っているところを見せてもらった。邪魔にならないように、部屋の隅で見ていると、弟子の一人がユージが弓矢の達人と聞いていたらしく、腕前を見せてほしいと言ってきた。さっそく、ユージは家の中にある、的の試し場で披露した。すべて早技で中央に吸い込まれる矢に大歓声が沸いた。全員がユージに自分の弓矢を使ってもらえるように、早く師匠のような腕前になると口ぐちに言った。そうしているうちに、もう3時前になっていた。ヨナの家を失礼する事にした。するとヨナが二人にソイ・モイ国の上着をくれた。中がふわふわした白い動物の毛があって、めちゃくちゃ温かった。二人は丁寧にお礼をして帰った。

木曜日になった。その日の朝食を食べると、二人はひとまず温泉につかった。

「なあ、もう帰らないか？俺、訓練したくなってきたよ。」

ユージがぼつりと言った。

「そうだな。恋人同士や夫婦でなら楽しいかもしれないけど、男二人じゃ退屈だな。」

ぼんやり二人は空を眺めた。すると空から白いものが降ってくる。

「なんだ？これ？」

ユージが手に取ろうとしたがすぐ消えてしまう。

「雪だよ！」

「雪？これが？」

ユージは雪といえば、バーサル山脈に積っている白いものしか知らなかった。

「リート国は南国だもんな。それに、去年はエルパ町にいたからなあ。あそこも雪が降るのはめずらしいんだ。ペネより北にある町や村はたまに積もったりするんだぜ。」

「ふーん。じゃ、ナベルには今日いけばよかったな。積ってるかもしれない。」

「そうだな。」

しばらく雪は振っていたが、やがてやんだ。

二人は風呂からあがると、カイはすぐに宿屋の人に出発すると言いにいった。そして、荷造りをして宿屋の受付に行く。代金を支払い終わると、主人が申し訳なさそうに言うと、例の号外をユージの前に差し出す。

「すみません。お客様の秘密は完全に守り、何も聞いたりお願いしないのがうちのモットーなのですが…」

「全然大丈夫ですよ。」

ユージは笑いながらペンをとるとサインした。そんな様子をカイはニヤニヤしながら見る。

「本当に、ありがとうございました。」

主人がそう言って深々と頭を下げる。

「いえ、こちらこそありがとうございました。とても素敵な宿で大変くつろげましたよ。」

ユージは宿屋の他の従業員用の部屋から何人かが顔を出しているのに気がつき、笑顔で軽く会釈する。全員が一瞬驚いた顔を見せるが、すぐに笑顔で会釈を返してきた。

そして二人は主人に見送られ、宿屋を後にした。

二人は行きと同じ森で服を着替えた。雪がちらついただけあつて、行きより恐ろしく寒かった。だが、ヨナからもらった上着を着るとあつという間に暖かくなった。

二人は馬を思いきり走らせ、急いで王宮に向かった。

王宮の門の前にやってくると、警備の一等兵が不審な顔をして門の前に立ちはだかった。

「許可証は持っているのか？」

ユージとカイはすぐにメガネと帽子を取った。すると一等兵は目をまるくした。

「こ、これはユージ特別兵補佐官殿にカイ特別兵補佐官殿。失礼いたしました。」

一等兵は合わせて敬礼を二人にすると、いそいで門をあけた。

「ありがとうございます！」

二人はにこやかに言々と門をすぐった。

家に帰るとレノが驚いた。

「あら、ずいぶん早かったわね。」

「もう、暇ですることなくって。すぐ近衛隊の訓練に行ってきます！」

カイがそういうと、レノがクスクス笑った。

二人は荷物を部屋にどさつと置いてすぐに軍服に着替え、剣を腰にさすと、体をあたためるために猛スピードで訓練場まで走った。

訓練場につくと、真っ先にバームとシャーフに挨拶をして土産を渡す。そして、すぐにロブレスとジェッシーの所へ行った。

「あれ？もう帰ってきたのか？」

ロブレスが不思議そうに聞いた。

「男二人で宿屋にいても暇で。それに、しばらく何もしなかったら訓練がしてしくてたまたまなくなっていました！」

ユージがそういうとロブレスとジェッシーが大笑いした。

「では、私はあっちへ行くよ。」

ロブレスはベームとシャーフの方へと行った。

「みんな、今まで留守にして申し訳なかった。」

ユージが言うとなんが大喜びした。そして、口ぐちにネーチェの大会は素晴らしかった。そんな人に指導をもらっていることを、本当にうれしく思う、と言った。ユージは礼を言うと言った。カイトとジェッシーと一緒に指導を始めた。今までとは違う反応を感じた。恐ろしくみんな集中しているのが分かった。あつという間に昼になった。

土産を渡すために、ロブレスとジェッシーに家に寄ってもらった。キースたちも昼を食べにやってきていた。ベームとシャーフにもだったが、みんなにはアイカ国伝統衣装と同じ布で作られたタオルを選んでいた。宿屋で売っていたのだ。みんな大喜びした。この家の女中たちや、マルタにもロブレスの奥さんにも子供たちやロブレスの家の女中達にも買っていた。だが、カイトとユージはジェッシーだけはみんなと違う土産を選んでいた。宿屋で着ていた民族衣装だった。ジェッシーに渡すと、ジェッシーがうれしそうに胸に抱きしめた。

「ありがとうございます。」

「なんだ！えこひいきだぞ！なんでジェッシーだけそんな高級そうな土産なんだ！」

マーフィが言った。

「俺たちの特別な秘書なんだ！あたりまえだろう！」

カイトがそう大声で言った。

「そのうち、それ着せて見せてくれよ。」

ユージが言うとなんがジェッシーは涙を少しためて頷いた。

ジェッシーとロブレスは昼を食べに急いで家に帰り、ユージたちも家に入り昼を食べた。

「お前ら、午前中は何やってたんだ？」

ユージが聞いた。

「家の改装の手伝いやってたんだ。おかげで早く終わって、もう明日にでも住めるんだ。だから、明日引越すよ。と言っても、宮殿にある荷物を移動するだけだどさ。」

キースが答えた。

「もう、ベッドなんかも部屋においてさ。暖房器具も買った。家から必要なものも送ってもらったし、なんとか泊まれるようにはなった。これから足りないものを少しづつそろえていくよ。」

今度はマーフィが言った。

「それに、お隣の奥さんが俺達の家政婦をしてくれることになったんだ。朝ごはんだけは自分たちで何とかするけどな。」

スコットがうれしそうな顔で言う。

「そうか、それは安心だな！」

カイが笑って答えた。

「明日、午前中引越すから、ユージとカイには挨拶が出来ないけど。まあ、いつでも会えるしな。何かあったら、相談しにくるよ。とりあえず、日曜日だな。」

キースがそう言ったのでユージたちは頷いた。そしてみんなは、急いで訓練に向かった。

するとレノがお茶のお代わりを持ってきたので、カイがもそもそと封筒を渡した。

「あら？何かしら？」

「別の土産です。あの宿の近くで食べたサンディがおいしかったので、そのレシピです。」

するとレノが急いで封筒の中から紙を取り出した。中にはレシピの入った紙と店でもらったチラシが入っていた。

「まー！！！！この店のサンディは有名なのよ！私も昔よくいったわ！よくレシピなんか教えてもらえたわね！」

「はい。店の人が全員、俺がネーチェの大会で優勝したって知っていたんです。みんな若い女性だったので、ひよっとしたらと思って笑ってお願いしてみたら教えてもらえました。」

「まあまあ！！！！ユージったら！でも、うれしいわ！！！！ありがとう！！！！でも、店長さん代替わりしたのね。昔は年配の女性がやってらつしたのよ。これ、さつそく明日の昼に試すわ！お父様もお気に入りなのよ！」

「よかった。確か、そんな事を聞いた記憶があつて。でも、それがその店なのか分からなかったんですが。」

「本当にカイありがとう！！」

レノがカイを抱きしめたのでカイはものすごくイヤそうな顔をした。

「母上！お礼の言葉だけで十分ですって！」

次の日、さつそくレノがそのサンデイを出した。ザイルもマユも大喜びで食べた。二人はそんなみんなを見てうれしかった。

土曜日の晩になった。二人とも緊張してなかなか眠れなかった。

すると、ザイルがやってきた。

「ははは。やっぱり、緊張しとるか。これを飲むといい。」

と手渡されたのは、酒だった。

「父上、私たちまだ未成年ですよ！」

「これくらい構うもんか。飲んだら気持ちよくなってすぐ寝れるぞ！」

二人とも顔を見合せて悩んだが、ぐいっと飲んだ。おいしいとは思わなかった。だが、10分もすると顔がほてってきて、なんだかいい気分になってきた。二人はだんだん幸せそうな顔になった。

「ほれ！いい気分になってきただろう！そろそろ寝ろ！」

二人が頷くとザイルは笑って部屋から出ていった。ベッドに入ると、ふわふわした気分のまま眠りにつくことが出来た。

28話 王の子ユージ誕生

そして、日曜日が来た。

ユージは朝早く目が覚めてそれから眠れなかった。カイを起こさないように部屋を出ると、もうレノが起きていた。

「あら？ずい分早いわね。やっぱり緊張しておきちゃった？」

ユージは笑って頷いた。

「ちよつと、リイに乗ってあたりを散策してきます。」

ユージはリイの所に行く抱きしめる。

「リディア。いよいよ、俺は王の子になるよ。でも、まだ君の所へはいけない。この国をもつと強くしないと。そして、俺ももつと高い地位につかないと……でも、ようやくその一歩を踏み出すことが出来たよ。」

ユージはリイに乗ってあたりをどこへともなくうろつく。王宮内で早朝の見回りをしている近衛隊に何人か出会った。みんなもうユージが今日、王の子として発表されると知っていたので、彼らの方から先に頭を下げてきた。ユージは軽く会釈して通り過ぎる。

朝食時に合わせて帰ると、もうカイも起きていて食堂にいた。食欲は二人ともまったくなかった。だが、無理やり喉に押し込んだ。食後はすぐに部屋に戻った。式典用の軍服に着替えると、ユージはずつと窓際に立って外を見ていた。バーサルー山脈はこの間かなり雪が積もったらしく、まっ白になっていた。カイも椅子に座って、床の一点を見ていた。

やがてノックがした。

「ジェッシーさんとロブレスさんが来られたわよ。」

二人は黙って立ち上がり、下に降りていった。ジェッシーもロブレスも、二人と同じように緊張した顔だった。

「じゃ、行こうか。」

ユージのその声にみんな頷く。

王宮につくと、ジェッシーとロブレスとは分かれて、カイとユージは別室で待機した。やがて、ロブレスが二人を呼びに来た。ロブレスについて準備中の広間へ行く。すでに近衛隊が列を作っていた。ショーがいた。ショーに案内されて、その列の左の一番王座に近い「特別席」にユージ、右の「特別席」にカイ、その隣にロブレスが並ぶ。

「では、宮殿の門を開放するぞ。」

ショーがユージを見て言った。ユージは頷いた。

ショーが広間から出て行く。やがて開けっ放しになっている広間の入口から大勢の人がやってきて、次々と席についていった。そのうち広間が人で埋め尽くされた。他の特別兵達とレノとマユが来賓席につくと、ザイルがヤンネと共に現れ王座に座った。ヤンネがザイルのすぐ後ろに立つ。

やがて広間の扉が閉じられ、ファンファールを演奏する近衛隊が扉の近くに並ぶ。ファンファールが鳴った。そして扉が開く。盛大な拍手とともに、ショーが現れ、そのあとにジェッシーが続き、そして、その後ろにスコットとキース、さらに後ろに3名の1等兵が続いて入って来た。3名の1等兵は、以前ユージが上級コースで担当していた男たちだった。彼らがユージやカイの前を通り過ぎ、ザイルの前に整列する。

入隊試験の優秀者の名が呼ばれた。3人がザイルの表彰を受ける。スコット、キースに講師栄誉賞が贈られ、ジェッシーに特別講師栄誉賞が贈られた。ジェッシーにはひととき大きな拍手が沸き起きた。

ザイルが席を立ち、彼らにねぎらいの言葉をかけた。また拍手が起きる。

ザイルがその拍手を手をあげとめた。

ユージはカイを見た。カイも自分を見ていた。カイが頷いた。ユージも頷いた。

「これにて、表彰式を終了するが、続いて私から重大な発表を行う。」

ザイルのその言葉に会場中がしーんとなった。

ザイルがユージを見た。ユージは列から離れ、ジェッシーの横を通り過ぎザイルの元へ行くと、ヤンネが後ろに下がった。そこにユージが立ち、前に向き直る。

そのユージの行動に会場にいた全員が驚き一瞬ざわめいた。

「この者ユージは、1年前入隊試験にて、実技試験でアイカ国初の満点を出し、歴代4位の成績で1等兵となった。入隊後は、エルパ町講師となり、受験者全員を合格させるという快挙を達成し、講師栄誉賞を受賞した。そして、先ほど、受賞した者は全員、このユージのかつての生徒だった。すばらしい兵士を排出したばかりではなく、現在行われているアイカ国軍の改革では中心となり、みごとにその役割を果たしておる。…よって、私、アイカ国王ザイルは、このユージを王の子として、ここに認める。」

会場は静まりかえったままだった。

ヤンネがザイルに王の子の証である胸章を手渡した。ザイルがユージに向く。ユージはザイルに王に対するお辞儀をした。ユージが頭を上げると、ザイルがユージに胸章をつけると、二人とも前を向いた。割れんばかりの拍手が起きた。

しばらくそうやって立っていたが、ユージはザイルに再びお辞儀をすると、階段を降りそのまま出口に向かって歩く。ユージが通り過ぎるとすぐに、ジェッシーとシヨーがユージの後ろを歩きだす。ユージがカイの所までくると、すぐにカイはユージの隣に並び共に歩いた。そしてロブレスがジェッシーとシヨーに加わる。これで人々にカイがユージの側近、ジェッシーとシヨーとロブレスが王の足だと全員に宣言したことになった。ユージ達の姿が見えなくなると、キース達も会場から出て行く。キース達が出ていっても、しばらく

会場の拍手は鳴りやまなかった。

ユージとカイは、待機室に戻った。ジェッシーとシヨー、ロブレスも一緒だった。

ユージは椅子に腰掛けると、腕を組みしばらく目を閉じて黙っていた。深呼吸を何度かする。そして、ゆっくりと目を開け自分につけられた胸章を手にとり見る。

…本当に王の子になったんだ。

ユージは立ち上がるとみんなを見た。

「…今までありがとうございました。これからの道のりの方が長いですが、よろしく願います。」

全員がユージに忠誠のお辞儀をする。

「では、私とロブレスは片づけに回ります。」

シヨーがそう言って、ロブレスと共に部屋を出て行った

部屋にはユージとカイとジェッシーだけになる。

すると、突然ユージは、

「あゝ、疲れたーーーーー！！めちゃくちゃ緊張したーーーーー！！！！」

と叫ぶと、椅子に座って机に伏せた。

「…そうだな。立って見てるだけの俺でも、かなり緊張してたからな。」

「ユージ様が紹介される時の方が、自分の時より緊張しました。」

カイとジェッシーはお互いを見て笑った。

ユージは、ずいぶん長く机に伏せていた。

「…カイ。」

「なんだ？」

ユージが顔をあげた。涙で顔がぐちゃぐちゃになっていた。

「…ありがとう。」

「何いってんだ。礼を言うのはこっちの方だ。」

ユージは立ち上がるとカイに思いきり抱きついた。

「…本当にありがとう。」

「…ああ。」

カイはユージを強く抱きしめた。

「けど、まだまだこれからだな。ユージ。」

「うん。ずっと、ずっと俺の側にいてくれよ。」

「ああ。当たり前だ。」

ユージが手を緩めたので、カイは手を下ろしユージから離れる。

「お前、顔拭けよ。情けない顔してるぞ。」

カイがそういうと、ユージは泣きながら笑った。ジェツシーが持っていたハンカチを差し出す。ユージはそれを手にとり涙をふいた。

しばらくして、近衛隊の一人がやってきて、もう帰っても大丈夫だと伝えてきた。

ユージとカイとジェツシーは部屋を出て、廊下を歩き、宮殿の入口を出て階段を下りた。その階段の下に、例の「あいつ」がいた。

「あいつ」はユージを見るなり、忠誠のお辞儀をして下を向いたままだった。ユージは「あいつ」の前に来ると止まった。

「お前、今、何を考えている？」

「は、はい。…階級や年齢や、見かけだけで人を判断しバカにしていた自分がとても情けなく思っております。」

「あいつ」はびくびくしながら、しどろもどろに言った。

「顔をあげる。」

「あいつ」はユージを恐る恐るみた。

「お前は、なぜ、軍に入った。いや、何故準近衛隊になろうと思った？虚栄心のためか？」

「いえ！違います！自分もこの国を守りたいと思ったからです！」

「あいつ」が先ほどとは違い、目を向いて力強く答えた。

ユージはしばらく「あいつ」を静かにみた。「あいつ」はユージの視線に耐えられず、目をそらす。するとユージは笑いだした。

「…お前、自分の気持ちが顔に出やすい性格で得したな。明日から、準近衛隊の訓練に戻れ。この国を守りたいという気持ちは俺も同じだ。だから、お前に対してあれほどまでに厳しく接していたんだ。これからは、自らに厳しく行動しろ。わかったな。ロイ。」

ロイは驚いてユージを見た。ずっとお前呼ばわりされていたから、ユージが自分の名前を覚えているとは思っていなかったからだ。ユージが自分を見て優しく笑っていた。

「は、はい！ありがとうございます。明日から訓練、頑張つて励みます！」

ロイが忠誠のお辞儀をする。

「では、また明日。行ってよい。」

ロイはもう一度お辞儀をすると、嬉しそうに走っていった。

「…お前、すごいな。飴とムチの使い方がものすごく上手い。それに、あのタイミングで笑顔を見せられたら、女だけじゃなく、男でも惚れちゃうぜ。」

ジェッシーが思わず大笑いする。

「そう思うなら、お前も俺を見習え。」

「そ、そうだな。」

カイは頭をかいだ。

「カイ様はそのままでもいいと思います。」

そうジェッシーが言ったので、カイはどきつとした。

「その方がユージ様のすごさが際立ちますから。」

カイはがくつとした。今度は、ユージが大笑いした。

「さ、昼メシ食べに行こう。キースたちと一緒に昼を食べるのも最後だしな。」

3人は馬に乗り、急いで家に向かった。

昼からは、ユージとカイは家で次々を祝にやってくる人の対応に追われた。ようやく夕方になって人が途切れると、レノが、今日の

晩はジェッシーが二人にごちそうしたいから、19時になったら来てほしいそうよ、と教えてくれた。

時間になりジェッシーの家に行くと、ジェッシーがにこやかに二人を出迎えた。宿屋に行った時の土産にあげた民族衣装を着ていた。「ジェッシー。今日は招待ありがとう。その民族衣装とっても似合ってるよ。素敵だ。」

そうユージは言うつと、ジェッシーの手を取り、少し膝を落として手の甲にキスをした。

ジェッシーは一瞬驚いたが、すぐに嬉しそうな顔に変わる。それをそばで見ていたカイは言いようもない嫉妬心を感じた。

「お前、ほんと女の扱いがうまいな。シヨーさんも聞いてあきれれるぜ。」

思わず嫌味まじりに吐き捨てるように言ってしまう。

「だったら、お前も同じようにジェッシーに挨拶すればいいじゃないか。」

ユージはカイの嫌味に気づいていないかのように普通に返事した。「お、俺はそんな恥ずかしいマネできんぞー！だいたい、普通そんな挨拶するか？ジェッシーだって、こんな事されたの初めてだろう？」

ジェッシーが恥ずかしそうに頷いた。

「ふーん。でも、お前も王の側近になるなら、これくらい出来ないとダメだぞ。レディーにする正式な挨拶の方法だからな。他国の王妃や姫にはこうやって挨拶しないとダメなはずだ。」

「この国では、そんな事しないからいいよ！そ、それに、だいたい、もう見たから、やり方わかった！」

ユージはじつとカイを見た。カイはその目にたじろいだ。

「ま、それならいいけどさ。ジェッシー、早く家に入れてくれよ。」
「そうですね。どうぞ。」

ジェッシーに案内され、ユージは中に入っていく。カイは慌てて

二人について行った。中に入るとマルタがにこやかに立っていた。

「マルタ。今日はお邪魔するよ。」

ユージはとびきりの笑顔をマルタに見せた。マルタが顔を真っ赤にした。

「こいつ、リディアさんの以外の女なんか女じゃないみたいだな言ってるクセに何だ。宿屋やサンデイの店だけじゃなく、ここでもこんなに女に愛想ふりまきやがって。女がよってきたら面倒だとかいってるけど、自分で呼び寄せてるんじゃないか。」

ジェッシーの家の中はきちんと整理されていて、ところどころに置いてある置物が部屋に暖かさを演出していた。

二人は、食堂のテーブルの椅子に座った。

「では、しばらくお待ちくださいね。」

ジェッシーがそう言っていると、食堂から出ていった。そして、すぐに、マルタと共に次々と料理を運んできた。

「うわ！すごい！さすがジェッシーだ！ものすごく美味しそうだ。」

ユージが大喜びして言った。

「そうだな。本当にすごい。」

カイは少し白けていたので、ユージよりトーンが低くなったが、努めて笑顔を見せた。ジェッシーも席についた。マルタはお茶を入れると食堂を出ていこうとした。

「あれ？マルタは一緒に食べないのかい？」

ユージが言う。

「とんでもございません！それに、今日はロブレス様のところで私はいただく事になっておりますので。」

「そうか。残念だな。また機会があったら一緒に食べよう。」

マルタはうれしそうに頷くと食堂から出ていった。

「ユージ様、本当に今日はおめでとうございました。それにカイ様もお疲れ様でした。今日は私からのささやかな祝を、ぜひお楽しみください。」

ジェッシーがお茶のコップで乾杯をしようとしたので、ユージと

カイもコップを取り、乾杯した。

「では、さっそくいただきます。」

ユージは一口食べると笑顔になった。

「うわー。うまい！！最高だ！」

カイも食べた。本当にほっぺたが落ちるほどうまかった。

「…本当にうまい。店が出せるんじゃないか？」

「そうだな。ジェッシーは退役後には、レストランをやればいいよ！」

「お褒めの言葉、ありがとうございます。」

食事しながら、ユージとカイとで宿屋に泊まりに言った話をした。ジェッシーはユージのモテモテ話になると、クスクス笑って聞いた。食事が終わると、ジェッシーは皿を片づけ、ケーキを持ってきた。クリームがいつぱいの立派なケーキだった。トッピングにおいしそうな果物のシロップ漬けがのっていた。

「ええ？こんなもので、作ってくれたのか？」

カイがあまりの驚きに、先に大声で言った。

「ほんとだ。これも、とっても上手そうだ！」

ジェッシーは嬉しそうにしながら、ケーキを切り分け皿に盛ってくれた。

二人は同時に口の中にケーキを入れた。二人ともお互いを見ながら目をまるくした。

「ふまあい。」「ほおんとにあ」

口にケーキが入ったまま、二人は言ったので、言葉にならなかった。ジェッシーは思わず笑った。飲みこんでから、

「これは、キース達に内緒にしておかないと、絶対ひいきだとか言いだして、俺達にも食わせろというに違いない。ユージ。絶対に、今日ジェッシーに招待されたことは内緒にしておこう！」

「そうだな。あいつらに食わせるくらいなら、俺達でまた食べる方がいいな。」

ケーキも食べ終わり、お茶を飲みながら、3人はまだ今日の出来事の余韻に浸っていた。

「…お前さ、ひよつとして、ダンスなんかもできるのか？ほら…社交界でやるようなやつ。」

突然、カイがそんな事を言い出した。

「うん。踊れるよ。どうして？」

「いや、女性にあんな挨拶ができるんだったら、踊りも踊れるのかな？って思ったただけだ。」

「なんなら、見せてやろうか？ジェッシーちょっと相手してくれよ。」

「

「ええ？私、踊りなんか知りません。」

「大丈夫。俺に任せて。」

ユージは席を立ち、ジェッシーの手を取ると、ジェッシーと踊りだした。ユージはみごとにジェッシーをリードして、軽やかに踊って見せた。

カイはその見事な踊りに驚くばかりだった。

…本当にこいつは、由緒正しき王女様と付き合っていたんだな。だから、身分の高い女性に対するマナーを知っているし、ダンスやなんかも完璧に踊れるんだ。こいつは、この国の王だけじゃない、他の国の王にだってなれるだけの処世術も身につけているんだ。

ジェッシーは、はじめこそ戸惑っていたが、そのうちユージのリードに身を任せて優雅に踊りだした。なんだか、ジェッシーは自分より、ユージの方が好きになってしまったんじゃないかとカイは思った。二人が踊っているを見ているのが辛かった。

カイはため息をついた。

「…お前が、うまく踊れるのはわかったよ。けどさ、そうやって女性と踊ったり、さつきみたいに挨拶したりしない方がいいと思う。」

ユージは踊るのをやめてカイをみた。

「何でだ？」

「お前の笑顔見ただけでも、みんな浮かれてんのに、そんな事され

てみる！100パーセント、全員そろってお前に惚れちまうぞ。別にそれでもいいなら、じゃんじゃんやればいいけどさ。」

「…それは、面倒だ。」

「そういえばさ、お前、ラブレターの返事って、どんな風にしたんだ？」

「それは…」

ユージが言葉につまった。すると、ジェッシーが代わりに気取って言いだした。

「お手紙ありがとう。とても嬉しかったよ。けれども、私は今大変忙しく、女性とのお付き合いは考えられないんだ。気持ちだけうれしくもらっておくよ。」

「ジェ、ジェッシー……！」

ユージが慌ててジェッシーを止めようとしたが、ジェッシーは最後まで言った。

「なんだ、そんな返事なら、別に恥ずかしくないじゃないか。ま、それくらいなら夢を見るくらいで終わるからいいさ。けどさ、お前、その気ないんだし、本気にさせるような行動はやめとけよ。」

ユージはジェッシーを見た。

「そうですね。ただでさえ、ユージ様は素敵でいらっしやるから。その上、さきほどのような事をされたら、確かに、勘違いしてしまいそうです。」

そうジェッシーが笑って言ったので、カイは胸が痛くなった。

…ジェッシーもそうなのか？

「ジェッシーがそう言うなら、やめとく。」

「なんだよ。俺の言うことより、ジェッシーの言う事の方を信用するの？」

だんだん、カイは不機嫌になっていた。

「当たり前だろ。同じ女性なんだから。」

「へえ、へえ。ま、ジェッシーになら、別にいいんじゃないか？いくらお前にそんな事されたって、ジェッシーは俺の事が好…」

とカイは言いかけて途中でやめた。ユージが一瞬怖い顔をした。いったい、今、自分はどんな顔をしていたんだろうと思った。ジェッシーは真っ赤な顔をしてカイを見ていた。

「ジェッシーにも二度としないよ。そうしないと、きっとあつという間に俺に惚れちまうだろうから。」

ユージがそうおどけて言うのと、ジェッシーが笑った。カイはほっとした。

「じゃあ、時間も時間だし、そろそろ帰るか。カイ。」

時計を見るともう9時すぎだった。

「…そうだな。」

「ジェッシー、今日は本当にありがとう。本当にうれしかった。」

カイはユージの言った後に無理やり笑って頷くくらいしか出来なかった。

マルタを送り届け、家に戻ってから、ユージはずっと黙ったままだった。風呂に入って、着替えてベッドに入っても黙っていた。

「…怒ってるのか？」

「怒ってる。」

ユージがカイに背を向けたまま言う。

「…すまなかった。…俺、ジェッシーの事が好きだ。」

「俺は、もっと早くにそう言っただけだった。」

「…本当にごめん。…いつから気が付いていたんだ？」

「…いつって…俺は、初めからずっと、そうじゃないかって言っていたらどう？」

「…俺は自分では、ジェッシーがこっちに来てから、好きだって気がついたつもりだったけどな。…でも、そうだったのかな…。そう言われれば、そんな気もする。」

ユージは思わず振り向き、カイを信じられないという顔を見た。

「…間抜けなやつだな。…怒る気失せた。」

ユージは思わず笑った。カイはほっとした。

「ひよつとして、お前、わざとジェッシーにあんな風に挨拶したり、踊ったりしたのか？」

「当たり前だろう。こいつ、いつになったら俺に言うんだろうつて、ずっとイライラしてたからな。」

「それで、時々ちくりとジェッシーの事を言ってきたのか。：俺、なんてバカだったんだろう。：俺達は親友なんだ。どうして、ジェッシーが好きだと気がついた時にユージに言わなかったんだ。」

「ジェッシーは、俺の気持ちに気がついてるかな？」

「たぶん、気がついてはいないと思う。でも、ジェッシーの事だから、気が付いていても、お前が彼女に言わない限り、彼女も何も言わないんじゃないかな。」

「：お前、ジェッシーを秘書にしようつて言ったのは俺のためだったのか？」

「それは、違うよ。彼女が本当に優秀だから欲しいと思ったんだ。お前にも、ジェッシーにも辛い思いをさせてしまうと分かっていたのにな。：ごめんな。そして、お前たちが思い合っていると分かっているても、俺はお前を手放すことが出来ない。」

「いいさ、それは。俺も、今は付き合っている余裕はないからな。」

それに、もしお前がジェッシーかどちらかを選べと言われたら、俺は迷わずお前を選ぶ。彼女には、この先、恋人になりたいって言う男性は、山ほど出てくるだろうからな。」

「そうだな。本当にジェッシーは素晴らしい女性だな。俺もリディアがいなかったら、好きになってたかもしれない。」

それを聞いたカイがユージを凄いい目で見た。

「ごめん、ごめん。でも、俺にはリディアしかいんだから。」

「ほんとだよ。お前は、何だかんだいって、シヨーさんと同じように女に色目を使うのがうまいからな。」

「けど、それはある程度仕方がないと思ってる。王の子である以上、愛想は振りまかないといけないし。」

「：それはそうだな。：お前、リート国でもモテたのか？」

「俺と同じ身分の女性からだけだな。断るのが本当に面倒だった。」
「まあ、そうだなろうな。」

カイはそう言って笑った。そして、ふと時計を見た。
「そろそろ寝るか。もう、12時だ。」

「そうだな。寝よう。」

カイが灯りを消した。

ユージは、目を閉じて寝ようとした。だが、なかなか寝れなかった。自分が王の子として認められた事が、自分に重い責任となつてのしかかつてきた。

「…寝れないのか？」

カイが聞いてきた。

「うん。これからの事を考えると不安でしょうがない。」

「俺がいるんだから安心しろ。」

「…うん。」

「…俺さ、最近、なんだか自分がお前の母親になつたような気になつてきた。」

ユージは思わず笑った。

「さあさ、ユージや。安心してお眠り。」

カイが小さな赤ん坊をあやすように、ふざけて言う。その口調にユージはむっとした。

「そんなんじゃ、気持ち悪くて寝れないぞ!」

「悪かったな。じゃ、とつとと寝ろ!」

「それはもつと寝れないぞ!」

「もう、好きにしろ!」

カイはそのまま黙りこくった。

「…ごめん。…でも、今のバカらしいやりとりで不安なのがどっかいった。」

カイがクスリと笑う声が聞こえた。

「そうか。よかったな。じゃ、おやすみ。」

「ああ。おやすみ。」

ユージは、ようやく長い一日を終えた。

29話 ドレア

毎日午前中は準近衛隊、昼から近衛隊の訓練に明け暮れる日々が続いた。

1月からは、準近衛隊は班ごとに訓練をするようになる。あの口イは驚くべき成長を遂げ、特別に見てやっていた24名の中のリーダーをやるようになり、1月が終わる頃には、彼らに特別訓練はいらなくなった。一般兵の隊同士の交流もうまくいっていた。

とにかく、何事もなく、順調に進んでいた。一つの事を除いては。

事の始まりは、1月の最初の土曜日の夕方の事だった。ユージたちがミヨンの指導を受けていると、ふらっとシヨーが現れた。久しぶりに対戦をしようとドレアに持ちかけてきたのだ。だが、ドレアはそれに応じようとしなかった。

「どうしてお前、俺と対戦しようとしなんだ！もうここ2年くらいずっと避けているじゃないか！前はあれほど毎日のように一緒に訓練していたのに！俺がいやなのか？」

「そうではない。ただ、ずっと体の調子が悪いんだ。他の近衛隊なるともなく、すまんが、お前とはとてもじゃないが、きつ過ぎて対戦出来ん。だから、近衛隊副長官の話が来た時に始めは断ったんだ。でも、お前に懇願されたから仕方なく引き受けた。…近衛隊試験なんか、どれだけきつかったか。」

「そんな風にはとても見えなかったけどな。軽やかにこなして1位になっていたじゃないか。」

シヨーは疑いの眼差しでドレアを見る。

「それは、立场上そうしなければならないから無理をしていたんだ。次の日、俺は休みをもらっただろう？その日は、ずっと寝ていたんだ。」

「では、どうしてこうやってユージたちの指導はできているんだ！」

ユージは慌てて二人の間に入った。

「はじめこそ、少しでも私とカイの指導はしてくださいましたが、すぐに口での指導に変わりました。ドレアさんは私たちを見ていただけです。ロブレスさんとは最初からまったく対戦されておりません。」

ユージはドレアがミョンを呼んだのは、ユージたちのためでもあるが、自分の体調が悪かったからもあったのだとこの時初めて知った。

「…そんな指導で、お前がそこまで伸びたと俺が信じると思っているのか？」

「でも、本当のことです！」

ユージは必死で言ったがシヨーは聞く耳を持たなかった。見るにみかねてミョンが口を開いて、自分の事を説明したが、シヨーは話がうますぎると信用しなかった。それなら、一度自分とネーチエで組み合いをしてみてください、そうしたらわかるはずと言ったが、シヨーは首を振ってその場を去っていった。

「…すまないな。まさか、あいつがそこまで頑固だとは…」

ドレアが沈んだ顔で言った。

「本当に、体の調子がお悪いんですか？」

ユージが聞くと、ドレアは頷いた。

「医者にもかかっているのだがな。一向に良くならないんだ。だから、本当は今すぐにでも、近衛隊副長官をロブレスに変わって欲しいが…まだ、お前はやることがあるだろう…？」

ドレアがロブレスを見て言った。そのとおりだったので、ロブレスは何も言えなかった。

「とにかく、シヨーには暇さえあれば説明するようにする。何なら、医者の方から説明してもらおう。」

「そうですね。…でも、どうしてシヨーさんは、あそこまで私たちの話を聞こうとしないんでしょうか？」

ユージが言った。ロブレスが苦虫をつぶしたような顔をした。

「きっと、今度の試験でどうしても1位になるために、俺達が内緒で何かをやっているに違いないと思ったんだろうな。ま、それは、そのとおりだ。だから、あいつを責める事はできんな。だが、ミヨンさんの事まで信用してもらえないとなると……こいつはちよっと難しいかもしれん。」

「本当にすまない。とにかく、ショーに説明し続ける。」
ドレアはさらに疲れた表情を見せて帰って行った。

その後、ずっとショーはドレアとユージたちを避けるようになった。カウスとゼナが心配してユージに聞いてきたが、事情を説明するわけにいかず、とにかく二人がショーを支えてくれと頼むしかできなかった。カウスとゼナはユージの言うとおり、ショーにつきつきりでいてくれた。それが唯一の救いだった。ユージはミヨンの指導を受けづらくなり、残念だったが断ることにした。その後は、ドレアがユージたちを、本当に口だけで指導をするようになった。

5月になっても、ドレアとショーの中は復旧しないままだった。その日、近衛隊で紅白試合が行われていた。ショーとドレアはお互い紅白試合のリーダーとしてみんなに号令していた。ユージとカイはドレアの赤に、ロブレスはショーの白に参加していた。

この日、ユージもカイもドレアの顔色がとても悪いことに気が付いていた。

「あの……大丈夫でしょうか？」
カイが聞いた。

「……実は、朝からかなりきつくてね。だが、今日は休むわけにはいかんからな。なんとか、紅白試合が終わるまで頑張るさ。」

ドレアが無理やり笑って見せる。ユージとカイは、なるべく試合が早く終われるように必死で戦った。だが、二人がいくら頑張ったところで、そうそう勝てるはずもなかった。時間はどんどんすぎ、普段の訓練よりも長びいていった。

突然、ユージの後ろにいた紅チームの数名が叫び声をあげた。

「ドレア近衛隊副隊長！」

ユージはあわてて振りかえる。ドレアが真っ白な顔をして倒れていた。

「ドレアさん！」

ユージとカイは急いでドレアのそばに駆けつけた。意識がない。

「すぐにセバー医院のアルバ医師を呼べ！」

王宮内にも常勤の医者はいたが、ドレアはペネの一番大きな病院の院長に内緒で見てもらっていた。ユージの横にやってきたゼナが頷いて走って行った。

「誰か担架を持ってこい！」

カウスが走った。ユージはすぐにドレアの軍服のボタンをはずし、ズボンのベルトを緩めた。

気がつくと、ロブレスとショーがそばで立っていた。ショーは真っ青な顔をしていた。担架が運ばれ、ユージとロブレスでドレアを担架に乗せた。

ユージは立ち上がり近衛隊の全員に向かって言う。

「今日の訓練はここまでとする！ドレア近衛隊副長官の様子は追って、各隊長よりみなへ連絡をする！各自、このあとの予定に従って行動しろ！カウス、しばしの間お前に近衛隊を預けるぞ。」

全員が心配そうな顔をしながらもユージの命令に、それぞれの持ち場へと散っていった。

ロブレスとカイが担架を持ちあげ、ユージ、ジェッシー、ショーで囲むように近衛隊舎監の中にある救急室へとドレアを運ぶ。

救急室へ着くと、ドレアの意識が戻った。

「ドレアさん、俺が分かりますか？」

「…ああ。ユージ。」

ドレアは当たりを見回した。

「…俺は…倒れたのか？」

ユージは小さく頷いた。

シヨウが泣きながらユージの隣にやってきた。

「ドレア、すまん。どうして俺はお前の言うことを信じなかったんだ！なんて俺はバカだったんだ！俺は、俺は…お前たちがそろって俺を今度の試験で負けせようと嘘をついているとしたか思えなかったんだ。」

「…それは、そのとおりだから、お前の責任ではない。言っただろう。あのミヨンという男はネーチェでは俺たちよりも遥かに強いと。あいつにユージを指導させれば、ユージがお前に勝てるかもしれないと思ったんだ。実際、ユージはネーチェの全国大会では、彼のおかげでお前を押さえて優勝した。」

ドレアは弱々しく言った。

「…実は俺は、小さい頃から、医者に無理をすると命の危険にかかわると言われていたんだ。…心臓が弱いらしい。でも、どうしても兵士になりたかった。医者には大反対されたが、俺の意思は固かった。そこで、それならばと、医師はある武術師を俺に紹介してくれた。おかげで、あまり体力を消耗せず実力をあげることができ、順調に近衛隊になることが出来た。時々、体がだるいことはあったが、なんとかこなっていた。…だから、これからもなんとかするだと思っていたんだ。俺は、いつかお前と一緒に近衛隊長官、副長官になりたいと考えるようになった。…そして、できるなら一緒に王と側近になりたいと思った。」

しかし、2年前の4月、俺は倒れた。ちょうど、ミヨンのところへ遊びに行っていた時だったから、誰も知らない。医者には、次、倒れたらどうなるかからんと言われた。即、近衛隊はやめると言われた。だが、せめて無事に最後まで任期を勤めたかった。だから、なるべくお前や腕の立つ者とは対戦するのを控えるようになった。

…ベーム様とシャーフ様がその期限りでやめると言い出した時、俺は悔しかった。もし、俺が元気ならばお前と一緒に近衛隊長官、副長官になれるのに。どうして俺はこんな体に生まれたんだろうと思った。だが、お前にはロブレスがいるじゃないかとも思った。ロブレスなら、お前を十分支えていけるに違いないと思った。…だが、そのロブレスの方が先にやめると言い出した。ロブレスの話を聞いたら、引きとめることも出来なかった。お前にどうしても近衛隊副長官になってくれと懇願された時、俺は悩んだ。引き受けたとして、俺はいつまで近衛隊副隊長をやる事が出来るんだろう。途中で倒れたりはしないかと思った。軍のトップの人間が倒れたりしたら、軍の士気にかかわる。絶対に無理だと思った。

…そんな思いを抱えたまま、近衛隊副長官になった。当然だが、俺はもうお前と一緒に上の夢を目指す事はできなかった。お前はそれを感じ取って残念そうにしていたよな。俺は本当にお前にすまないと思った。お前は、本当なら王の子になれるはずなのに。どれだけお前が齒がゆい思いをしていたんだろうと思うと辛かった。

やがてお前が、将来、近衛隊長官になりそうなやつを見つけたと言いだした。そのうち、お前がいつをいつか王にして、その友人を側近にさせると意気込んで俺に話をしだした。本当なら自分がそれになりたいはずなのに、他のやつを応援するなんて、お前は一体どういう気持ちでいるんだろう。そのたびに俺はお前にすまないと思った。

だが、俺は、お前が自分が王の子になれない悲しみのはけ口を見つけたんだと思った。だから、お前がそこまで肩入れするやつは、一体どんなやつなんだろうとずっと思っていた。

やがて、そいつがロブレスと一緒に、こっちにやってくると聞いた。

…俺はそいつがこつちへ来るよりロブレスがこつちへ来てくれる事が何よりも嬉しかった。これで俺はいつでも安心して辞めることが出来ると思った。だが、ロブレスがそいつと一緒にやってきたのは、そいつと共に軍の改革をするためだった。俺は正直がっかりした。これでは、ロブレスは俺の代わりなど出来ないと思った。…そいつは、確かに腕は素晴らしかった。しかし、お前が言うほどの才能を持ったやつなのかと実は半信半疑だった。

やがて、そいつが俺の指導を受けたいと申し出てきた。そいつを指導し始めて俺はなるほどと思った。みるみるうちに、腕が伸びた。こんなやつは初めてだった。だから、ミヨンと呼んだ。俺ではそいつの相手は無理だと思ったからだ。

王の足達にかみついた話を聞いた時には、こいつは俺たちとは比べ物にならないほどの才能も度胸も持ったやつだと思った。そいつの友人もかなり優秀だった上に、みごとにそいつを支えていた。そいつが王に軍の改革を一任され、王の子として正式にはないが王から認められたと聞いた。その側近にはその友人が決まったようなものだ。俺はあれほど自分もお前の側近になりたいと思っていたのに、まったく悔しくはなかった。いや、そいつらを知れば知るほど、俺達に足りないものが何だったのかが分かったからだ。王はこういうやつらを望んでいたのかと思った。

そうか、お前もこういう気持ちなんだと思った。だから、俺もお前と一緒にそいつらを支えよう、とそう思った。だから、そいつがお前を押さえてネーチェの大会で優勝した時は、本当に嬉しかった。お前もそいつに王の子として箔がついたと本当に喜んでいたな。俺も同じだった。できるだけ長くそいつを面倒みたかった。

…だが、ここまでだったな。すまん。シヨ―。」

シヨーは大声で泣いた。ユージも泣いていた。この二人はそんな思いで俺を支えてくれていたのかと思った。カイもジェッシーも泣いていた。

ゼナが医者と看護婦を連れてやってきた。医者が慌ててドレアを診察しようとする、ドレアがそれを拒否し、話しの続きをしようとした。

「もう、しゃべってはいかん。体の負担が大きすぎる。こうやって無事だっただけでも奇跡的なのだ！」

「後少しで終わりますから。」

「ドレア！もういい。黙って診察をうけてくれ！」

シヨーは泣きながら言った。だが、ドレアは続きを話し始めた。ロブレスを見た。

「…ロブレス。俺の代わりを頼んだぞ。準近衛隊は、もうユージたちだけに任せても大丈夫だろう？」

「だが、俺は試験を受けなおさなければ、その資格はない。」

「私が認めます。すぐにザイル様に報告します。だいたい、今は資格うんぬんと言っている場合じゃない。それに、ロブレスさん以外にドレアさんの代わりが出来る人など思い浮かびません。」

ユージが力強くそういうとドレアは嬉しそうにした。だが、ロブレスは困惑の表情だった。

すると、シヨーが突然土下座した。

「頼む！！ロブレス、ドレアの代わりをやってくれ！ドレア以外に俺が後ろを任せられるやつはお前しかない！」

ロブレスはシヨーをしばらく見ていたが、やがて決心する。

「…わかった。引き受ける。」

「本当か！」

「ああ。」

シヨーは声をあげて泣いた。

「ユージ様。ありがとうございます。これで私はようやく安心でき

ます。」

ドレアは弱々しく右手を自分の胸に当て頭を下げる代わりに目を伏せた。ユージは頷いた。

「先生、もう終わりました。見ていただけますか？」

医者は急いでドレアを診察しはじめた。

「…倒れたと聞いた時はもうダメかと思ったが…大丈夫そうだ。だが、もちろんこのままではいかん。しばらくこのままここで安静にし、少し落ち着いたらうちに来て入院してもらう。」

ドレアは頷いた。医者はドレアに薬を渡し飲ませた。

ユージはみんなを向いて言った。

「私たちが、このままここにいても邪魔なだけです。ひとまず、帰りましょう。ゼナさん。すみませんが隣の部屋で待機してもらえますか。先生たちから何かご要望があれば、すぐに対応してください。そして、何かあれば私に報告に来てください。」

ゼナは頷いた。

「先生、ではドレアの事をよろしくお願いいたします。もし、このままここにお泊りされることになって、必要なものが出てきたら、このゼナに遠慮なく申してください。」

「承知しました。」

救急室から出ると外には数名の近衛隊たちがいた。一斉に心配そうにこちらを見た。

「ひとまず、命には別状ないそうだ。だが、ドレア近衛隊副長官は体調が安定し次第、入院される。近衛隊副長官の職は今日をもって降りられる事となった。」

ユージがそう言うのと全員の顔つきが一瞬変わる。

「ドレア近衛隊副長官の後任には、ロブレス特別兵があたる事になる。明日、正式に発表するから、みなに伝えてもらえるか。」

近衛隊たちはユージにお辞儀をすると、足早にその場を去った。

「…ユージ、ロブレス。本当にすまん。お前たちの話をまったく信じようとしなかった。俺は、本当にあいつに悪いことをした。」

「いいえ。事情があったとはいえ、シヨーさんに隠れて訓練していた私たちの方が悪かったです。とにかく、ドレアさんの事で、近衛隊いや軍全体に不安が広がるでしょう。ロブレスさん、明日から大変だと思いますが、よろしく願います。」

「そうだな、ユージ。心してかかるよ。私はすぐに家に帰って妻に報告をする。…また、彼女にはしんどい思いをさせてしまうな…。」

「その点に関しては、最大の協力をさせていただきます。さらに女中がいるようでしたら、申し出てください。奥様には、後ほど私の方からも直接お願いにあがります。とにかく、私もすぐにザイル様に報告をして、明日の近衛隊の訓練の初めに認定式を行ってもらうようにお願いをしなくては。」

シヨーとは別れ、ユージとカイ、ジェッシー、ロブレスはそれぞれ自分の家へと戻った。

ユージとカイが家につくと、ザイルはすでにドレアの知らせを聞いていて、ヤンネと共に二人の帰り待っていた。ユージはすぐにザイルにドレアの病状を説明した。後任にはロブレスになってもらい、明日にでも認定式を行いたいと言うと、ザイルもヤンネもそれが最良の選択だと同意した。ロブレスにはこのままドレアの任期を引き継いでもらい、来年に更新試験を受けてもらおうということになった。本来なら、近衛隊は家族と離れ近衛隊舎監に住まねばならないが、ロブレスは特別にこのままここに住んで勤務してもらう事にした。その分、夜に何かがあれば、シヨー一人で対応する事になり、シヨーの負担が増えるので、そのサポートにはカウスとゼナに担わせる事にした。

ザイルとの離しが終わると、すぐにロブレスの家へと二人は向かった。ロブレスがすでにおおまかな話をしていたので、ユージは

ただお願いするだけだった。ローザはロブレスが近衛隊副隊長になることを喜んでくれた。ユージはその笑顔に少し救われた。ロブレスが家からの勤務でいいのなら、ローザは今の一人とマルタだけで十分だと言った。

次の日、準近衛隊の訓練が行われる前に、緊急に会議が行われた。まだ、事情を詳しくしなない特別兵達への報告だった。

そして、準近衛隊の訓練が始まる。

すでにドレアが倒れたと聞いて不安がっていたが、後任がロブレスになったと聞いて安堵した。だが、訓練になると集中できないヤツがかなりいた。これはしょうがないかとユージは思った。訓練の途中で、カウスがやってきて、ドレアの状態が安定したから、病院に移動することになり、自分とゼナがついて病院に行くと言った。ユージは病院から帰り次第、また報告してくれと頼んだ。

準近衛隊の訓練が終わり、家で昼食を食べていると、カウスとゼナがやってきた。検査を詳しくしてみたが、大事にはいたらないらしいが、これからは日常生活をするのがやっとで軍に戻ることは不可能だと医者に言われたとカウスは言った。ユージは心が痛んだ。

近衛隊の訓練の時間がやってきた。ザイルとヤンネがやって来て、シヨールの方から全員に報告を行なった後、ロブレスの近衛隊副長官の認定式が行われた。ロブレスは真紅の近衛隊の軍服を数年ぶりに身に着けていた。腕には近衛隊副長官である印、3本の白線がもちろん入っていた。ユージは王の子として、ザイルとヤンネの横に立ち、ロブレスがザイルから認定状を受け取るのを間近で見る。ロブレスが緊張した面持ちで認定賞を受け取ると、みんなに向き直り、挨拶を述べた。全員が静まりかえって聞いた。

認定式が終わると、ザイルとヤンネは帰って行き、すぐに訓練が行われた。全員、普段とまったく同じだった。一人も集中できな

いやツはいなかった。

…やっぱり近衛隊だな。

ユージは一安心した。

訓練が終わった後、シヨールとユージとでドレアの見舞に行くことにした。カイやジェツシーやロブレスも行きしたが、迷惑になるだろうから、二人だけで行くことにした。

病室につくと、ドレアの顔色はずいぶん良くなっていて、二人ともほっとした。ドレアに無事、ロブレスが近衛隊副隊長になったと伝えていると、別の人間が部屋に入ってきた。ミヨンだった。ミヨンは一瞬、二人を見て驚いたが、丁寧にシヨールとユージに挨拶をした。

ミヨンはドレアに話しかけた。

「大丈夫なのか？ユージ様から知らせをもらった時は、こっちの心臓が止まるかと思ったぞ！…先生もものすごく心配しておられた。」
「大丈夫らしい。このまま無理をしなければ、無事に年寄りにもなれるらしい。」

ドレアが苦笑していった。

「バカ野郎！だから、早く近衛隊なんかやめろと言ったんだ。」

ミヨンは泣いた。

「ま、こうして生きているんだから許してくれよ。」

シヨールはそんな二人のやりとりを聞いて心が痛くなった。自分が無理やり近衛隊副長官を頼んだりしたからこうなったのだ。そんなシヨールの表情に気がついてドレアが笑って言った。

「シヨール、そんな顔するな。俺はお前の助けがしたかったんだから。」

シヨールが目には涙をためた。

「なあ、ミヨン。また、こっちに来てユージを指導してやってくれないか？それに、シヨールにも指導してやってくれないか？お前は自分が武道の達人だと知られくないというが、やはりそれは間違っ

ていると思う。その腕前を誰かに引き継ぐべきだと思う。その二人はそれにふさわしい人物だ。

「お前に言っておくが、今、この国が攻められたら、100パーセントこの国は陥落する。それほどまでに、この国の兵士は弱いのだ。兵士でないお前にほとんどが勝てないのだから当然だな。だから、そうならないために、ユージはこの国の人間ではないのに、必死でこの国のために兵力をあげようと、毎日格闘しているんだ。俺はその手助けをしたかったが、もう出来ない。だから、俺の代わりにその二人を鍛えて、二人の助けをしてくれないか。」

ミヨンはしばらく黙っていたが、やがて頷きながら返事をした。

「…分かった。」

「ミヨンさん。そういうことでしたら、特別講師となつて近衛隊の全員に指導していただませんか？ええ、もちろん兵士になる必要はございません。それには、こちらへ引越していただかなければなりません、その際の費用は一切こちらで持たせていただきます。講師としての御礼も十分いたします。ぜひ、考えていただけませんか？」

ユージはかねてからそうして欲しいと思っていた。

「…先生と相談してみなければ分かりませんが…おそらく了解していただけるでしょう。」

そういうとミヨンはユージに頭を下げた。

「ユージ様、ぜひ私を特別講師としてお雇いください。ご期待に添えて見せます。」

「ありがとうございます。これほど心強い講師はいません。なるべく早く来てください。こちらはすぐにでもミヨンを向かい入れる事が出来るように手配しておきます。また追って連絡いたします。」

ユージはミヨンの手を取った。ミヨンが力強い目でユージを見た。
「ミヨン、ありがとう。お前が講師をしてくれたら、本当に心強い。」

ドレアはまた笑って言う。するとショーが気まずそうにミヨンに頭を下げた。

「…あの時は本当に失礼した。」

「よしてください！誤解だったのですから。気になどしておりません。」

部屋をノックする音が聞こえた。看護婦だった。そろそろ面会の時間が終わるので帰って欲しいということだった。みんなでドレアに挨拶をして部屋を出た。

ミヨンは、今日はペネに泊まるとの事だった。病院の前で、ユージたちはミヨンと別れる王宮へと戻った。家に戻ると、ザイルやレノ、マユはもちろん、ヤンネやロブレス、ジェッシーもいた。ドレアの状態と、ミヨンをみんなに話をすと全員が喜んだ。ザイルがそんなすごいやつが講師になるとは、これほど喜ばしいことはないと言った。

ミヨンは3日後の昼には自分の荷物を持ってペネにやってきた。なので、カイの家にミヨンを招待して昼食を食べながら話をした。するとミヨンは驚くことをいった。

「先生は、私の講師の話をよろこんでくださいました。すぐにでもペネに行けとおっしゃってくださいだったので、急いでやってきました。あの…先生は、なんでも、できれば後から先生も弟子たちと一緒にこちらへやって来たいとおっしゃってまして…」

「本当ですか？」

ユージが驚いた顔をする。

「はい。先生は、こちらに来た方が儲かるだろうと。まったく先生らしい。」

ユージとカイも思わず笑ってしまった。

「ただ、あれだけの人数が住める場所が果たしてあるんでしょうか。それだけがネックなんです。なければ、先生は諦めるとおっしゃってました。」

「ペネ郊外でよかつたら、適当な家がありますよ。郊外と言っても、馬で20分ほどですから、ここに通うのにまったく問題ないでしょう。母方の祖母と祖父が昔、住んでいた家なのですが、かなりの敷地があります。二人は以前そこで、将来有望な若者を集めて指導したり、訓練の場所を提供しておりました。今は、年をとったからとペネ市内の小さな家で暮らしております。ですから、誰もそこを使つてはおりません。ですが、近くに住んでいる人間に管理を任せており、いつも掃除されて綺麗ですし、すぐにでもみなさん揃つて住むことができます。ご希望されるなら、祖母と祖父に連絡しておきます。おそらく無料で貸してくれると思いますよ。」

「それは本当ですか！すぐに先生にお知らせします。…あの、その家はどんな感じなのですか？私たちの家のように離れのような場所がありますか？」

「はい。いくつがありますよ。何せ、元宿屋ですからね。温泉なんかもあつて、最高です。」

「そうですね！では、ドレアがよくなつたら、そこに恋人と住んでもらいます！そうしたら、あいつの念願通り、若者達を集めて指導する事が出来る。まあ、直接指導する事はできないだろうけど、人を雇えばいいんですからね。それでもあいつは満足するはずですよ。」

「ドレアさんに恋人がいらしんですか？」

ユージは驚いて聞いた。

「はい。まあ、あいつは内緒にしてくれつて言つてましたからね。恋人はナベルにいるんです。私の幼さなじみなんですけどね。もうずっと手紙だけのやりとりだけで、ずいぶん、寂しがっていました。もう彼女はこちらにきて、ドレアの看病をしているはずですよ。」

「そうか…なら、心配ないですね。忙しくてなかなか見舞に行けないので気にしていませんが…。」

カイが言つた。

「はい。大丈夫です。どちらかというと、行かない方が親切だと思います。」

それを聞いてユージとカイは笑った。

「では、とりあえず、ドレアさんの部屋をお使いいただけますか？
ぜひ、使ってくれていいということでしたから。」

ユージはそう言つて、ドレアの近衛隊舎監にある部屋に案内した。
「こちらにいらっしゃる間は、うちにご飯を食べに来てください。」
カイが言つた。

「いえいえ。近衛隊の方と一緒に、ここの食堂でいただきますよ。
その手配だけしておいていただけますか？どちらかというと、なる
べくここにいたいのです。…近衛隊の方の弓の手入れなんかもした
いとおもいますからね。」

ミヨンがニヤッと笑つて言つた。ユージとカイは大笑いした。

「さすがに、ヨナさんの弟子ですね。」

ユージが言つた。

「当たり前です。講師としても、弓矢の職人としても、がっちり稼
がせてもらいます。」

また二人は笑つた。その後、まだ時間があつたのでユージとカイ
はジェットシーを呼びに行き、近衛隊の訓練に途中から参加した。訓
練が終わるとユージはロブレスとシヨーに明日からミヨンに指導し
てもらえると報告をした。すると、それをそばで聞いていた近衛隊
の隊長や副隊長が目を輝かせて集まつてきた。伝説の男に明日から
指導してもらえるのか！と大喜びした。

ドレアが倒れて、沈んで暗かつた隊に光が差し込んだように、み
なの表情が明るくなった。ユージは本当にミヨンが来てくれてよか
つたと思つた。

10日ほどするとヨナたちが弟子を連れてペネに移つてきた。ミ
ヨンもそちらへ移つて行つた。すると、ミヨンを追いかけて、近衛
隊が自分たちの弓矢を作つて欲しい、調整をしてほしいと殺到し、
ヨナが思つた通りと、ほくほく顔で弟子も増やさないとダメだと言
つているとミヨンが教えてくれた。

ドレアは2週間ほどで退院し、ヨナのところへ恋人と一緒に住み始めた。やがて、身内だけのささやかな結婚式が行われ、シヨとユージが招待された。ドレアは幸せそうだった。そんなドレアを見て、ユージはこれで良かったんだなと心底思えた。

30話 試験

ミヨンが近衛隊の特別講師になった事は、近衛隊に劇的な変化をもたらした。真剣を使いだした時かなりの向上があったが、それ以上だった。ユージ自身、毎日ミヨンの指導を受けるにつれ自分がみるみるうちに上達していくのを感じた。そこで、あまりにも、近衛隊と準近衛隊のレベルが違うとまずいので、ユージとカイは準近衛隊でもソイ・モイの武術を取り入れた訓練を行うことにした。こちら、全員がものすごい勢いでレベルが上がって行った。

この頃になると、カイは無事に騎乗で弓術の方も他の近衛隊となんら遜色のないレベルになり、普通に訓練するだけでは物足りないと言いだした。

「弓の先を丸くして布でもくくりつけ、それに染料でも色を染め、お互いを狙って戦うというのはどうだ？ネーチェの白い服を着て、それに色がつけば負けにするんだ！面白そうだろ？」

即、その案は採用され、その特別の弓をヨナの所で注文する事になり、またまたヨナがほくほく顔になった。この訓練は全員に好評で、準近衛隊の訓練でも採用されることになった。ロブレスは初めから近衛隊副長官だったかのように、その任務をそつなくこなした。

7月になった。今回の近衛隊・準近衛隊の試験は、前代未聞の受験者数になりそうだということが分かり、ペネ以外に6か所で臨時に試験会場を設け、実技試験の1週間前に行うことになった。ジェッシーは試験委員会のメンバーになったため、会議に参加したり、事務局をまとめたりと、朝から夕方まで毎日忙しそうに働いた。

7月の半ばになると、ユージとカイが、午前中も午後も訓練に参加し、一向に勉強していない様子だったので、ロブレスが少しは勉強しなくてもいいのかと聞いてきた。

「ああ、大丈夫ですよ。きちんと夜には少しづつやってましたから。もつとも、試験の勉強ではなく普通に本を読んだだけでですけどね。でも、数学以外は満点がとれると思います。いくらなんでも俺が数学が苦手でも0点ということはないですからね。余裕ですよ」

ユージが言った。

「俺は1年前に以前の試験で420点をとってましたからね。去年の問題を見てみたら、全教科満点確実でした。最近、数学は学者にでもなれるんじゃないかというくらい極めているので、なんで数学を100点満点に変えてしまったんだろうと思ってるくらいです。」

カイがそう言った。二人があればほどの激務の中で、きちんと勉強していたのを知り、ロブレスは目を丸くした。

そして、8月に入り、だんだん、近衛隊全体がぴりぴりとした雰囲気につつまれた。そんなころ、ユージはネーチェでとうとうミヨンに勝った。なんだか、本当にショーに勝てそうな気がしてきた。

そうして、いよいよ筆記試験の日となった。ユージとカイは、無事に合格した。カイはやはり満点の400点で、ユージも338点取ったということだった。ユージは数学以外、やはり満点だった。つまり数学が38点だったという事だ。ちょっとがっかりしたが、こんなもんかと思った。キースとマーフィとミンも合格しているとジェッシーが教えてくれた。現職の近衛隊も全員合格した。

あつという間に、実技試験の日が来た。ユージとショーが出るということで、席を取るために前日から行列ができるという事態になり、前代未聞の朝の4時に開場となった。

今期で近衛隊を去るのは、24名だった。今回、近衛隊のレベルがあがりすぎていたので、今回の試験を受ける現役の近衛隊全員が

近衛隊に再び合格するのは間違いがなかった。つまり、新たに近衛隊に入れる枠はこの人数という訳だった。このなかにいきなり一般兵が入っても、あまりの差にやっていけないはずがない事は目にみえていた。今回に限り、去年の試験で準近衛隊に落ちてしまった元近衛隊16名と準近衛隊で優秀だった5名を特別に筆記試験なしで実技試験に参加させ、ユージとカイとともに、その枠に当てることになった。

ユージは念のため一等兵に変装して競技場に入ることにした。これだけの人がいると、ひよっとしたらユージを目当てにやってくる女性がいるかもしれないと思ったからだ。

ショーが競技場の入口で女性につかまっていた。

ユージはやっぱり変装してよかったと思った。ショーは、うれしそうに握手をして、手紙を受け取っていた。そんなショーを白けた目で見ながら、ユージとカイは競技場の中にはいった。

9時になり、全員がグラウンドに整列し、ザイルルの宣言がなされた。

ユージとカイは馬術の順番をまった。最初に馬術をやったのは、ゼッケン1番のショーだった。かるやかにこなしていく。やはり、段違いにうまかった。場内が大歓声につつまれる。そんなショーをユージは睨みつけて見ていた。先にカイの番になった。カイもなかなかの腕前を見せ、場内から大きな拍手をもらう。

そして、ユージになる。ユージがスタートに立つと、場内が静けさにつつまれた。みんなユージの馬術に注目だった。ユージはショーと同じように段違いの技術を見せつけてゴールした。大歓声になった。受験者の列に入ると、ショーが自分を睨んでいるのを見つけた。ユージもショーを睨み返した。

弓術になる。やはり、ユージの独壇場だった。ユージ一人が、通常の弓矢でも騎乗の弓矢でもすべての矢を中央を射抜き、場内が驚

きで静まりかえった。

休憩になった。ユージとカイは控え室に行くまでに、順位を見に行った。弓術はまだ発表されていなかったが、ユージが1位に決まっているので、馬術の順位を見に行ったのだ。すると、ショーが1位だった。技術点では二人と同じ最高得点だったが、ショーの方がわずかに1秒早くゴールしてただけだった。それを見て、ユージはあまりの悔しさに、思いきり順位がはってあった掲示板を右手の拳で叩いた。まわりの受験者が驚いてユージを振り返って見る。

ユージはショーが嬉しそうに笑う姿が想像できた。

「くそお！！！」

今度は、足で思い切りけり飛ばした。

「ユージ。落ち着けて。みんなビビってるぞ。とりあえず、控え室行ってメシ食おう」

ユージはカイにそう言われて、控え室に行った。ユージとカイは近衛隊と同じ控え室だったが、ショーがいると思うと、ユージは、はらわたが煮えくりかえるので、一般兵の控え室に行った。キースとマーフィとミンを見つけて、一緒に席について食べた。ユージはずっと怖い顔をしていた。食べ終わると、カイが袋から何やら出してきた。おいしそうなケーキだった。

「これ、食後にどうぞって、ジェッシーがくれた。もちろん、お前らの分もあるぜ」

カイは4人に手渡した。みんなではおぼった。

「めっちゃくちゃ上手い！！！」

キースが叫んだ。マーフィとミンもベタ褒めした。ユージのケーキだけ名前が書いてあった。そのケーキをユージが取り出そうとすると、何やら一緒に紙が出てきた。そこには、

絶対、ユージ様が1位になれますよ。

と、一言だけ書いてあった。ユージはそれを見てジーンときた。

ユージはそれをカイに見せた。

「本当、ジェッシーって、こういう気配りもバツグンだよな。本当にいい秘書がいて幸せだな」

ユージはさつきまで、シヨ一の事が悔しくてイライラしていた気持ちに静まり、穏やかな気持ちになっていた。

「そうだな。俺達ラッキーだな。なあ、ジェッシーも試験委員で頑張ってるしさ、今度は俺たちがジェッシーを招待してごちそうしなにか？」

カイが言った。

「うん。そうだ！今日の晩メシ、どこかの店に連れて行こう！」

「でも、お前、総合2位だったらすんだよ。ふてくされたお前とメシ食うのいやだぞ！」

「別に2位でもいいさ。だいたい、相手は近衛隊長官なんだ。負けても全然恥ずかしくない」

「じゃあ、何でさつき、あんなに怒って掲示板に八つ当たりしてたんだよ！1位になったら連れて行くことにしろ！」

「う、うん。そうだな。わかった」

二人のやりとりを聞いていたキースが言った。

「なんだよ。俺たちは連れて行ってくれないのかよ。俺達だって、一般兵の訓練のリーダーとして今まで頑張ってきたんだぞ！」

「そ、そうだな……じゃ、お前らも連れてく。もし、1位になったら、一旦王宮に戻った後、家に迎えに行くよ」

ユージは本当はカイとジェッシーとだけで行きたかったが、そう言われては断れなかった。確かに、この3人も頑張っていたからだ。カイは手紙を書いて、警備に当たっている1等兵に渡した。ザイルと共に見ているはずのレノに宛てたものだった。ユージが1位になったら、みんなで夕食を食べにいきます。その時は、すみませんが、適当な店を6名で予約をお願いできますか。書いていた。

「でも、ユージ、本当に1位なんて取れるのか？」

ミンが聞いてきた。

「弓術では俺が絶対1位だから、予定では馬術で1位とって、さつさと総合1位を決めてしまうつもりだったんだ。シヨールさんに剣術で勝たないといけなくなったから、可能性がかなり低くなってしまうた」

ユージはため息をついた。

「でも、ネーチェの試合では勝ったじゃないか」

キースが言った。

「そうだけど、今度は、ネーチェの時みたいに両手を交互に使ってはやらないって決めてるんだ。まあ、それをやれば勝てるだろうけど、あの時、そこまでしないと勝てなかった事がものすごく悔しかったんだ」

それを聞いて、キースたちが目を丸くした。

「勝ったのに、悔しいと思ってるとはさすがだな。俺だったら、超自慢してるぜ。」

ミンが言った。

「右手だけで戦ってたら、絶対負けだったんだから。だから、俺の方がやっぱり負けだと思ったよ」

「ふーん。じゃ、1位は難しいか」

マーフィが言った。

「そうだな。でも、まだ可能性がないわけじゃない。一応、秘策はあるんだ」

「なんだよ！それ、俺にも言っていないじゃないか！」

カイが怒って言った。

「これは、誰にも内緒さ」

ユージは不敵な笑みを見せた。

「そっか。じゃ、それが見れるかどうか楽しみにしておくぜ！」

カイが言った。

「ああ。ま、たぶん使うことになると思うよ」

そうしている間に、休憩が終わった。防護服とマスクに身を包み、手に剣を持って次々を受験者がグラウンドに現れると、会場中大歓声になった。いよいよ、メインの剣術で大興奮の渦となった。

ユージはどんどん勝ち進み、やはり最後はシヨーとユージの一騎打ちとなった。すでに、ユージの番号が分かっていた観客が大歓声を上げる。

マスク越しにユージはシヨーの殺気を感じた。ユージもマスクの中からシヨーを睨む。

審判の合図が出た。ユージは迷わずシヨーにかかっていく。

二人の対戦は、ネーチェの時とまったく同じ展開になっていった。シヨーがユージを押し、ユージがじりじりと後退する。やはり、シヨーの方が一枚上だった。しかし、身の軽さではユージの方が上だった。ユージは何度も危ない場面をその身の軽さで回避した。

40分が経過したとき、ユージはほんの少しバランスを崩した隙をつかれ、シヨーに負けた。ユージを応援していた観客のがっくりしたどよめきが渦巻いた。

…やっぱり負けたか…

もう腕も足も疲労でガクガクだった。

シヨーがマスクを取り、シヨーを応援していた観客の歓声があがるのを聞きながら、ユージはリイのところへと向かう。すでに、他の受験者は馬と共にグラウンドの隅で待機していたので、リイとシヨーの馬だけ残っていた。

ユージはリイをなげると、リイにくくりつけてある小さな袋を取り、中身を取り出し食べた。ジェッシーからもらったお菓子だった。

シヨーが馬を取りにやってきた。勝ち誇った顔をしていた。ユージは無表情でシヨーの横を通り過ぎる。グラウンドの入口でお茶をがぶ飲みし、頭から水をかけるとリイにのってグラウンドの待機場所へ

向かった。

最後の競技、騎乗での剣術が始まった。

こちらでもユージはどんどん勝ち進み、最後はやはりシヨーとの一騎打ちになる。観客が大喜びして、大歓声を上げ、シヨーコールと、ユージコールがまき上がる。

審判が位置につくように指示した。シヨーとユージがそれに従い位置につく。すると、ユージは剣を右手ではなく、左手に持ち替えた。

会場内がざわつく。

…なんだ？あいつ、両手は使わんと言ってたのに、俺に負けるとわかって両手をつかつてくるつもりか？だが、馬にのっていれば、必ずどちらかの手で手綱をもっていなければなるまい。

シヨーはユージの行動をいぶかしがりながら剣を構えた。

審判が合図した。ユージがシヨーに向かっていく。少し対戦してシヨーはユージの左腕が右腕とまったく変わらない腕前だと気づいた。

…さすがドレアの弟子だな。しかし、俺の方が上だ！

さきほどと同じようにシヨーがユージを押していく。ユージは右に持ち変えようとはまったくしなかった。

…左だけでやるつもりか？

やがて5分10分と時間が経過していく。そして、20分が過ぎたところ、シヨーは右腕が疲れて徐々に感覚がなくなってくる。

…そうか！あいつも右だけでやれば同じような状態になったはずだ。くそ！俺は左ではあつという間にユージに負けてしまう。このまま右でやるしかないが…

ユージの攻撃はまったく衰えず、シヨーを攻めてきた。

シヨーは自分の負けを予感した。

やがて右手のまったく感覚がなくなり、シヨーはユージの剣で自分の剣を飛ばされた。

その瞬間、ユージは勢いよくマスクを取り、拳を天に突き上げる。大歓声が上がった。

シヨーはそんなユージを見ながら、その場を離れ他の受験者のところへ向かった。そこにカイを見つけた。マスクを取ると、カイと握手をした。

「俺はもう2年後の試験は受けない」

カイが驚いて目を丸くする。回りの兵士も驚いてシヨーを見た。2年後にシヨーが近衛隊から引退することを意味していたからだ。「だから、お前も後2年間で近衛隊副長官に相応しい実力を身につけるよ。明日からさらに鍛えてやる」

カイは目を潤ませ頷いた。やがて、ユージがやってきた。すると受験者たちから拍手が沸き上がった。ユージは笑顔でみんなに会釈する。ユージはシヨーのところへ行き、頭を下げた。

「素晴らしい対戦、ありがとうございました」

「こちらもだ。…本当に成長したな。完敗だ」

二人はしばらくお互いを見つめた。

「馬を戻しに行くか」

シヨーがそう答え、ユージはまだ馬を戻していなかったカイや、数名の近衛隊と一緒にリイを戻しにいった。そしてまたグラウンドに戻ろうとすると、ジェッシーがやってきた。

「すみません。ユージ様。少し来ていただけますか？カイ様とシヨー近衛隊長官もお願いいたします」

そう言われ、3人はジェッシーの後をついて、事務局が置かれている部屋へ向かった。3人が部屋に入ると、審査員たちがそろって立ちあがった。

「これが今日の結果です」

ジェッシーが3人に集計表を見せた。それを見て3人ともが驚いた。上位はやはり近衛隊でその下に予定していた準近衛隊だった。だが、なんと、キースとマーフィとミンの3名がそろって予定して

いた準近衛隊と肉薄する成績を出していたのだ。キース達の次の順位の兵とはかなりの得点差があった。

「この3名を近衛隊に入れるか入れないかでもめまして…それでみなさんの意見を聞こうと思いました」

ジェッシーがそう言った。

「じゃ、3人も入れよう」

カイが言った。シヨもそれに同意した。

「…いや。近衛隊には予定していたメンバーだけにする」

「ユージ、どうしてだ？」

カイが言った。

「敢えてこいつらには、遠回りをしてもらおう。その方がこいつらのためになるはずだ。こいつらは、ネイル様の所でもそうだったが、1等兵になってからもずっとリーダーとして、みんなを引っ張ってきた。それに、この成績だしな。すぐに準近衛隊でトップになり、リーダーシップを発揮するに違いない。3か月なり半年なり様子を見て、こいつらを準近衛隊長官と副長官にする」

全員が驚いた。

「いつまでも、ベーム様やシャーフ様に甘えてはいられない。なるべく早く、準近衛隊だけで独立してやっていく必要がある。もちろん、指導者はいる。だが、準がつくとはいえ、近衛隊なんだ。横で見ていて何かあれば口を出す程度でいいはずだ」

「…確かにその通りだな」

シヨーがつぶやくように言う。ユージは審査員たちを見た。全員が拍手で同意した。

「あと、予定は去年の同じ200名でしたが、今回はかなり優秀な者がそろっているので、倍の400名を取ろうと思っていますが、それもいかがでしょう」

ジェッシーが言った。

「それは、委員の方の判断にお任せする」

ユージがそう言うとジェッシーは他の委員を見た。全員頷いた。

「では、400名を取ります」

「わかった。では私は失礼する」

ユージはショーとカイと一緒にグラウンドに戻った。

ザイルが出てきた。近衛隊の合格者の発表が始まる1位のユージが呼ばれると、大歓声がおこり、ユージは手を振って笑顔で聴衆に答えた。2位のショーにも大声援がおこった。そして、準近衛隊の発表となる。1位のキース、2位のミン、3位のマーフィが順に呼ばれた。自分たちが上位だと知り、3人ともが誇らしげに手を振る。ユージはその笑顔を少し複雑な気持ちで見ていた。本当ならば近衛隊にも入れる実力だったのに、準近衛隊に自分が落としてしまった。

…本当にこれでよかったんだろうか。

最終発表では詳しい得点は発表されない。彼らは、自分たちがそこまで好成绩を出していたと知らずに準近衛隊となる。

…あいつらには、全部、正直に話そう。そして謝ろう。

発表が終わり、解散が言い渡された。

ユージとカイは着替えると、事務局の部屋へ行った。ジェッシーに今日の夕食をキースたちも一緒にごちそうするからと伝え、二人は先に王宮に戻った。二人は、まっさきにロブレスの家に行って、ユージが1位を取ったと報告した。ロブレスが泣いて喜んだ。ローザも、マルタも同じように泣いて喜んでくれた。家に帰るとレノとマユが大感激で出迎えてくれた。レノがすぐカイにメモを渡し、この店を19時から予約してあるから、といった。風呂に入って、民族衣装に着替えお茶を飲んでジェッシーを待っていると18時前にジェッシーがやってきた。ユージとカイがあげたあの民族衣装を着ていた。

「ジェッシー、またそれを着てくれたんだね。うれしいよ。今日はお疲れさま」

ユージがジェッシーの手をとりキスをした。カイがぎよつとした。
…なんだ、こいつ！もう二度としないって言ってたくせに！！！！

カイも負けじと、ジェッシーに、

「お疲れ様。本当にそれ、似合ってるよ」

と言うと、ジェッシーの手を取りキスをした。ジェッシーの顔が
真っ赤になる。

ユージの時はなんともなかったのに、自分の時にジェッシーが顔を
赤らめたのを見て、カイは勝ったと思い、ユージを見て、ほれみ
ろ！という顔をした。すると、ユージが苦笑していた。

…な、なんだ。あいつ、俺の反応見て楽しんだのか！！！！

カイはくそおー！ーと思った。

「じゃあ、とりあえずキースたちの家に行こうか」

ユージが笑いながら言った。

ユージは変装用の金髪のかつらをかぶり、メガネをし、帽子をか
ぶった。カイも念のため、メガネと帽子をかぶった。

その後、カイはずっとふてくされた顔をしていた。すると、ジェ
ッシーがユージにこっそり聞いてきた。

「あの…カイ様はどうして不機嫌なんでしょうか？」

それを聞いたユージは吹き出しそうになったが、ぐっところえて
「さあ。でも、ほつといたらいいよ。そのうちすぐ機嫌よくなると
思う。もし、このまま不機嫌だったら、ジェッシー、なんでもいい
から、あいつを褒めてやってくれるか？」

と小声で言った。

「はい。わかりました」

ジェッシーは心配そうな顔をして言った。二人がこそこそ話して
いるのを見て、カイはさらに不機嫌になった。

キースの家には１８時２０分ごろについた。いったん中に入れて
もらう。キース達が全員、大興奮してユージを取り囲む。カイは一

人その輪の外でぶすつとしていた。

「あ、あの…」

ジェッシーだった。

「な、何？」

気がついたらジェッシーがすぐ隣にいてカイは慌てた。ジェッシーはかばんの中から、2つ箱を取り出してカイに渡した。

「…11日の誕生日パーティの時、プレゼント、渡しそびれてしまつて…その後もお忙しそうでしたので…」

ジェッシーは目を伏せて真つ赤な顔をしていた。

カイはためらいながら受け取った。みんなに見つかると、ひやかされるに違いないから、すぐに自分のカバンにしまった。

「…何で2つなんだ？」

「…今年の分と、去年の分です」

「きよ、去年も用意してくれたのかい？」

「…はい」

ジェッシーはますます赤い顔をした。

「…ありがとう。…うれしいよ」

ジェッシーがうれしそうな顔でカイを見上げてまた顔を伏せる。カイはそんなジェッシーのしぐさがたまらなく可愛く思えて仕方がなかった。

「…ジェッシーは誕生日いつだっけ？11月だったとは覚えてるんだけど」

「…11月3日です」

ジェッシーは恥ずかしそうにしながら答えた。

「じゃ、ジェッシーの誕生日には、俺も何か用意するよ」

ジェッシーがぱつと明るい顔をしてカイの顔を見た。

「…どうして俺なんだい？ユージじゃなくて」

思わず、カイはずっと思っていた事を口に出した。

「…それは…私にも分かりません。ユージ様は確かに素敵な方だと思えますけど…それだけです。あ、あの、迷惑でしょうか？」

ジェッシーが心配そうな顔でカイの顔を覗き込んだ。

「いや。そんなわけないだろう。君みたいに素敵な女性に好かれて嫌な男がいるもんか。」

ジェッシーの顔がまた真っ赤になった。

「とにかく、君が俺たちの秘書になってくれて本当によかったよ。今日の差し入れ、ユージ、すごく喜んでいたよ。ショーさんに馬術で負けて、めちゃくちゃ荒れてたからな。それがジェッシーの手紙を読んで、急に穏やかな顔つきに変わった。あのまま荒れた状態で昼から挑んでいたら、負けていたかもしれない。…ジェッシーは魔法をかけるのが上手だな」

二人で話をしているのに気がついたキースが声をかけてきた。

「なんだ、なんだ？怪しいな！二人で何話してんだよ！」

ジェッシーがさらに真っ赤な顔をした。

「今日の差し入れがうまくいったって話をしてたんだよ！」

カイがそういうとキースだけでなく、マーフィやミンがジェッシーの所にやってきた。

「そうだ！本当にあれ、うまかった！！あれのおかげで、ものすごく元気が出てさ！だから俺たちきつといい成績だせたんだ！」

マーフィが言った。

「そうだ！そうだ！本当にありがとう！」

「たぶん、俺がショーさんに勝てたのも、あのケーキのおかげだな」ユージがそういうとみんなユージを一斉に見た。

「ほら、カイ。俺、昼にあれ食べてなかっただろ？」

「そっぴや、そうだな」

「実は、あの後、袋に入れてリイにくくりつけてたんだ。ショーさんと剣術でやりあった後、絶対エネルギー不足になるのが分かっていたからな。剣術で負けた後、やっぱり手足がガクガクでさ。それで、リイを取りに行った時にこっそり食べたんだ。しばらくしたら手足の震えが止まってさ。最後まで戦うことが出来た。逆にショーさんの方がエネルギー不足になってたみたいだな。それに、あっち

はずつと右手だったし、疲労もそうとうだったはずだ。実は、俺、今も両方の手の感覚があんまりないんだ。激しくやりあいすぎて」「だから、お前、左でやったのか!」

「そうさ。前のネーチェの大会で、これは続けて剣術をしたらとてもじゃないけど、腕の方がもたないって思ったんだ。けど、途中でエネルギー補給する事まで考えてなかった。あれをもらった時、急に思いついてさ。ジェッシー、本当にありがとう」

ユージがそういうと、ジェッシーが涙顔になった。

そうこうしている間に、いい時間になっていたので慌ててみんなで店へと向かった。

レノは気を利かせて個室のある店を予約してくれていた。落ち着いた店で料理もおいしかった。食事最後のデザートになった。するとユージが重い口を開いた。

「キース、マーフィ、ミン。実は、俺、お前たちに謝らないといけないんだ」

「なんだ?」

キースが言った。

「今日の試験、実は最初から近衛隊になれるメンバーは決まっていたんだ。準近衛隊から数名、放りこんだのはそのためだったんだ」

「うん。たぶん、そうだろうと思った。でも、それは近衛隊と一般兵じゃ差がありすぎるからだろ?俺たちに謝る事もないと思うけど」

マーフィが言った。

「...お前たち、実はその準近衛隊とほとんど変わらない成績をあげていたんだ。あのメンバーのうち、16名は去年の試験で落ちてしまった元近衛隊だった。つまり、お前たちも十分近衛隊に入れる実力があつたんだ。準近衛隊の4位以下ともかなりの差もあつた。...お前たちを近衛隊に入れるか入れないかでもめたんだ」

それを聞いて、3人とも驚いて、デザートのカキを食べていた手をとめた。

「だが、俺の一存で、準近衛隊にした。いずれ、準近衛隊もその中から長官、副長官を選ぶつもりだ。今日のお前たちの結果を見て、どうしてもお前たちに任せたくなっただ。もちろんすぐってわけじゃないけど。…本当にすまん」

ユージは3人に向かって頭を下げた。3人はしばらく黙ってユージを見ていたが、キースが切りだした。

「ユージはきつとその方が俺たちのためになると思って、そうしてくれただろ？今までだってそうだった。だから、ユージのやることに不満なんかない。それに、無理して近衛隊になるより、準近衛隊で長官や副長官やる方がなんだか気持ちいいし、やりがいもありそうだ」

「そうだな。もう誰が長官やるとか決まってるのか？」

ミンが言った。

「いや、それはこれからのお前たちの様子で決める」

「わかった。なるべく早くなって、ユージの負担が軽くなるようにするよ」

マーフィが言った。3人がそんな風に言ってくれてユージは嬉しくで涙をためた。

「すぐくえらくなっただっていうのに、泣き虫なところは変わってないんだな」

キースが笑って言った。

「そうだ。今も、しょっちゅう泣いてるぞ。これが王の子だなんて信じられないぜ」

カイがからかった口調で言った。

「悪かったな！」

ユージがふてくされた。

「ユージ様。その方が親しみやすくいいと思いますよ」

「そうか？そうかもな。やっぱり、ジェッシーは最高だ！」

急に嬉しそうな顔になったユージに、ジェッシーがクスリと笑った。

ケーキを食べ終わると、もう9時を回っていたので、ユージとカイの二人で会計をすませて店を出た。キースたちと別れ、ジェシーを家まで送り届けた。

家に帰って部屋に入るなり、ユージがカイを見てニヤニヤ笑った。

「な、なんだよ！」

「お前、ジェッシーに何かもらってただろ！何もらったか見せろ！」

「な、なんだ！お前、見たのか！」

「当たり前だ！俺を誰だと思ってるんだ！」

カイはユージにも内緒にしておこうと思ったのに、知られていては仕方ないと、カバンの中からジェッシーにもらった箱を取り出した。

「で、何でこれもらったんだ？」

「誕生日プレゼントだってさ」

「誕生日プレゼントって…パーティーやった時になんで渡さなかったんだろう」

「うん。なんか、渡しづらかったって言うてた」

「そうか…確かに、みんなですつと一緒にわいわいやってたら渡しにくいかな。というより、俺がいたからかな？俺、だから、昨日お前が一人でいたところを見計らって渡したのかな？だとしたら、ずつと持ち歩いてたのかもしれないな」

「…そうだな」

「けど、なんで二つあるんだ？」

「去年の分と、今年の分だってさ」

ユージが口笛をふいた。

「やるな。ジェッシー。早く開けろよ！」

カイがしぶしぶ箱を開けた。ひとつは、ペンで、もう一つぶんちんだった。両方ともとても上品で落ち着いたデザインだった。

「…ジェッシーって、こういうものを選ぶ目も最高にあるな。いずれ、俺たちが王や側近になっても使えそうだな」

「そうだな…こんなにいいものだとは思わなかった」

カイが手にとつてまじまじと見た。

「ジェツシーの誕生日は11月だったよな？」

「あ、ああ。11月3日だ」

「ちゃんと、お返ししろよ」

「そのつもりだ。…俺一人でやるからな！お前やるなよ！」

「分かつてるさ。ジェツシーが俺から欲しかったら、俺の誕生日にプレゼントくれたはずだろう？俺、もらってないしな」

ユージがニヤニヤしていった。

「…それで俺うれしくなつてさ…思わず、どうして俺がいいんだ、つて聞いちまったんだ」

ユージが目を丸くした。

「お前、いつの間にそんな事も聞けるようになったんだ！」

「…い、勢いで聞いちまった」

「それで？」

「…ジェツシーは分からないって言つてたけど…」

「ふーん。ま、そんなもんかもな。俺だって、リディアのどこがいって聞かれても、全部としか答えようがない」

「俺は言えるぞ！あんなに美人で有能な女性は他にはいない！」

ユージは、クスクス笑った。

「な、なんだよ！」

「いや、前とくらべたらずいぶん進歩したと思つてさ。自分の気持ちにずいぶん正直じゃないか」

カイが真つ赤な顔をした。

「けど、リディアの方が美人だからな。これだけは譲れん！」

「絶対ジェツシーの方が美人だ！」

「なんだよ。お前、リディアの事、見もしてないんだから分かるわけないだろ！」

「見なくたって分かるさ！」

二人はしばらく睨み合つていたが、バカらしくなつて大笑いした。

自分の好きな女が一番に決まっていた。

「ま、でも、お前、ちょっと気をつけないと、周りの連中にばれちゃうぞ」

「な、なんだよ！お前が二度としないって言ってたくせにジェッシーの手にキスなんかするからだろ！」

「別にいいだろ！おかげでお前はジェッシーの手にキス出来たんだから！」

「…そ、それはそうだけど…でも、お前でもジェッシーに触られるのはイヤだ！」

「じゃ、今度から俺がやる前に、先にしろ！」

ユージは大笑いした。カイは悔しくて言葉にならなかった。

「…けど、ユージ。女性にプレゼントって、何をやってたらいいんだ？お前は何あげてたんだ？」

「俺は貧乏だったから、何ひとつあげてない」

「うそだろ！絶対、何かやってたはずだ。おい、正直に言え！」

ユージはじつとカイを見た。

「…お前には、絶対無理なプレゼントだから参考にならないよ」

カイはちよつとムツとした。何だかバカにされた気がした。

「なんでそんな事言いきれんだよ！」

「…彼女の頬にキスするのがプレゼントだった。お前、出来るか？無理だろ？」

カイは目をまんまるにすると、真っ赤になって黙りこくった。

…た、確かに俺はそんな事出来ない…

「とにかく、俺も一体何をやってたら女性が喜ぶのな分らない。」

…ロブレスさんにでも聞いたらどうだ？」

「…そうだな。そうする。ロブレスさんになら、ジェッシーの事話したって、別に大丈夫だしな…いや、それより、ローザさんに聞こう！」

「ああ、そうだな。その方がいいだろうな。…おいおい！もう11時回ってるじゃないか！…俺はヘトヘトだ…もう寝る…」

ユージはあくびをすると寝間着に着替えてベッドに入った。カイも着替えて明かりを消しベッドに入った。

ユージは目を閉じた。今日の出来事が浮かんできた。

…本当に俺はショーさんに勝てたんだなあ…

ユージはあつという間に眠りについた。カイはユージが寝たとわかるとユージの顔を見た。笑っていた。その顔を見てカイはほっとした。カイも笑顔のまま眠りについた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8283v/>

真紅の王冠

2011年12月17日21時53分発行